

佐久市

J I K E

地家遺跡

K A B U T O Y A M A

兜山遺跡

K A B U T O Y A M A K O F U N

兜山古墳

O S A W A Y A S H I K I

大沢屋敷遺跡

M A E N O K U B O

前の久保遺跡

S A N M A I B I R A

三枚平B遺跡

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8
—佐久市内8—

2020.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



地家遺跡 SK31 出土 四耳壺 (美濃須衛)



地家遺跡 SK32 出土 四耳壺 (美濃須衛)



地家道跡 板碑

例 言

- 1 本書は、長野県佐久市に所在する以下の6遺跡にかかわる発掘調査報告書である。

地家遺跡	長野県佐久市大沢字地家 665-4 ほか
兜山遺跡	長野県佐久市大沢字兜山 768-1 ほか
兜山古墳	長野県佐久市大沢字兜山 765-1 ほか
大沢屋敷遺跡	長野県佐久市大沢字屋敷 1032-1 ほか
前の久保遺跡	長野県佐久市大沢字前の久保 1629-4 ほか
三枚平B遺跡	長野県佐久市大沢字三枚平 1377-1 ほか
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 調査の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』25～35ほかで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくはご指導を得た。（敬称略）
 - 業務委託

樹種同定	バリノ・サーヴェイ株式会社（2017年度：地家遺跡）
種実同定	バリノ・サーヴェイ株式会社（2017年度：地家遺跡）
年代測定	株式会社加速器分析研究所（2009年度：地家遺跡、2010年度：地家遺跡、2011年度：大沢屋敷遺跡、2012年度：兜山古墳、2014年度：地家遺跡）
保存処理	株式会社文化財ユニオン（2012年度：兜山古墳、2014年度：地家遺跡）
遺物写真撮影	信毎書籍印刷株式会社（2018年度：地家遺跡、兜山古墳、2019年度：地家遺跡、兜山古墳、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡）
 - 調査指導（所属・役職は当時）

中世遺物調査指導	藤澤良祐 愛知学院大学教授（2009年度：地家遺跡）
中世遺物調査指導	山田昌久 首都大学東京教授（2010年度：地家遺跡）
中世遺物・遺構調査指導	狭川真一 元興寺文化財研究所研究部長（2010年度：地家遺跡）
中世遺構調査指導	宮本長二郎 別府大学客員教授（2010年度：地家遺跡）
地質・岩石調査指導	寺尾真純 長野県小海高等学校教諭（2011年度：地家遺跡・兜山古墳、2012年度：兜山古墳）

中世遺物・遺構調査指導	時枝 務 立正大学教授 (2016年度：地家遺跡)
人骨・動物骨調査指導	茂原信生 京都大学名誉教授
	本郷一美 総合研究大学院大学准教授
	櫻井秀雄 獨協医科大学技術職員
	(2009・2010・2014・2016～2019年度：地家遺跡、2012・2016年度：兜山古墳)
弥生・古墳時代遺物指導	小山岳夫 佐久考古学会員 (2019年度：地家遺跡・前の久保遺跡)

- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、以下の方々・機関にご指導、ご協力いただいた。氏名を記して感謝の意を表する。(敬称略)

石川日出志 井原今朝男 小野正敏 富沢一明 平川 南 百瀬長秀 山本智子
 佐久市教育委員会 佐久考古学会 大沢地区文化財保存会 長野県立歴史館
 長野県遺跡調査指導委員会
 (戸沢充則・会田 進・小野 昭・桐原 健・工業普通・笹澤 浩・高橋龍三郎・丸山敏一郎)
 長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会
 (会田 進・市澤英利・小野 昭・笹澤 浩・高橋龍三郎)

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第1節4に記載した。

- 9 本書全体の編集は若林卓が行い、綿田弘実・岡村秀雄が校閲し、平林彰が総括した。

執筆分担は下記のとおりである。

平林 彰：第1章

岡村秀雄：第2章、第4章第5節

費田 明：第4章第2節3(1)(2)

水澤教子：第4章第3節3(6)

綿田弘実：第6章第2節2(1)(2)、第9章

若林 卓：上記以外

なお、第4章第4節は茂原信生氏、櫻井秀雄氏、本郷一美氏、第5章第3節は茂原信生氏より玉稿を賜った。

- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を取録した。

自然科学分析報告書、遺物観察表、その他。

凡 例

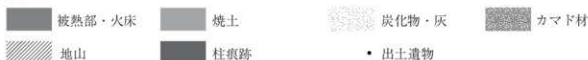
- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘作業で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 遺物番号は、主に材質に基づく分類による遺物種ごと、図版ごとに付番してある。遺物番号は、本報告の本文・図表・写真に共通する。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図

竪穴建物跡、掘立柱建物跡	1 : 80	土坑、被熱部	1 : 40、1 : 60
溝跡	1 : 40、1 : 80	遺構内部施設・遺物微細	1 : 40
 - (2) 遺物実測図

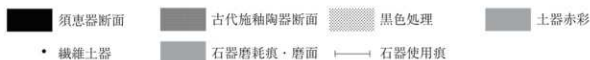
土器・土器拓影・陶磁器	1 : 3、1 : 4、1 : 6	土製品	2 : 3、1 : 4
石鏃等小形石器・装身具	2 : 3	石斧・磨石・敲石・凹石・砥石など	1 : 3
石皿	1 : 4、1 : 6	金属製品	2 : 3、1 : 2
木製品	1 : 2、1 : 3、1 : 4	石造物	1 : 6、1 : 8
 - (3) 遺物写真

原則として遺物実測図と概ね共通であるが、任意縮尺にしているものがある。
- 4 遺物の器種名については細分せず、長野県埋蔵文化財センターが発行した過去の報告書を参考にして一般的な名称を用いた。
- 5 遺物観察表の法量は、() が残存値、〈 〉 が復元値、括弧なしが完存値を示している。
- 6 基本層序および遺構埋土の色調は「新版 標準土色帖 2007 年度版 (農林水産省農林水産技術会議事務局監修)」による。
- 7 実測図中のアマカケ等の凡例は以下のとおりである。これら以外の場合は図中に例示した。

(1) 遺構図



(2) 遺物図



目 次

口 絵
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
挿表目次
写真目次

第1章 発掘調査の経過	1 ~ 19	
第1節 調査に至る経過	1 ~ 12	
1 事業計画の概要	2 分布・試掘調査と保護措置の調整	
3 行政手続の経過	4 発掘作業と整理等作業の体制	
第2節 発掘調査の経過	12 ~ 19	
1 発掘作業	2 整理等作業	
3 普及啓発活動	4 作業日誌抄録	
第2章 遺跡の位置と環境	20 ~ 26	
第1節 地理的環境	20	
第2節 歴史的環境	20 ~ 26	
第3章 発掘調査の方法	27 ~ 32	
第1節 発掘作業	27 ~ 30	
1 遺跡名称と遺跡記号	2 遺構名称と遺構記号	
3 調査グリッドの設定と呼称	4 表土掘削と遺構の検出	
5 遺構の発掘	6 記録作成	
7 自然科学分析		
第2節 整理等作業	31 ~ 32	
1 遺物の整理	2 記録類の整理	3 報告書作成と資料収納
第4章 地家遺跡	33 ~ 186	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	33 ~ 49	
1 遺跡の概観	2 調査の経過	3 基本層序
第2節 縄文～弥生時代の遺構と遺物	50 ~ 63	
1 概観	2 遺構	3 遺物
第3節 古代～中世および時期不明の遺構と遺物	64 ~ 169	
1 概観	2 遺構	3 遺物
第4節 地家遺跡出土の人骨と動物骨	170 ~ 181	
第5節 自然科学分析	182 ~ 184	
1 放射性炭素年代測定	2 樹種同定	3 種実同定
第6節 小結	185 ~ 186	

第5章 兜山遺跡 兜山古墳	187 ~ 207
第1節 遺跡の概観と調査の概要	187 ~ 191
1 遺跡の概観	2 調査の経過
3 兜山遺跡の調査概要	
第2節 兜山古墳	192 ~ 203
1 概観	2 発掘の方法
3 石室	
4 遺物	5 年代
第3節 兜山古墳出土の人骨	204 ~ 205
第4節 自然科学分析	206
第5節 小結	206 ~ 207
第6章 大沢屋敷遺跡	208 ~ 234
第1節 遺跡の概観と調査の概要	208 ~ 212
1 遺跡の概観	2 調査の経過
3 基本層序	
第2節 遺構と遺物	212 ~ 233
1 遺構	2 遺物
第3節 自然科学分析	233 ~ 234
第4節 小結	234
第7章 前の久保遺跡	235 ~ 246
第1節 遺跡の概観と調査の概要	235 ~ 239
1 遺跡の概観	2 調査の経過
3 基本層序	
第2節 遺構と遺物	240 ~ 246
1 概観	2 遺構
3 遺物	
第3節 小結	246
第8章 三枚平B遺跡	247 ~ 251
第1節 遺跡の概観と調査の概要	247 ~ 251
第2節 小結	251
第9章 総括	252

写真図版
抄録

挿図目次

- 第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡
第2図 地家遺跡北側の試掘トレンチと遺跡の範囲
第3図 大沢屋敷遺跡南側の試掘トレンチと遺跡の範囲
第4図 中部横断自動車道と本書所収遺跡
第5図 周辺遺跡分布図(1)
第6図 周辺遺跡分布図(2)
第7図 周辺遺跡分布図(3)
第8図 調査グリッドの設定と呼称
- 地家遺跡**
第9図 遺跡範囲・調査区位置図
第10図 年度別調査範囲図
第11図 トレンチ・調査区配置図
第12図 土層柱状図
第13図 遺構分布全体図
第14図 遺構分布部分拡大図(1)
第15図 遺構分布部分拡大図(2)
第16図 遺構分布部分拡大図(3)
第17図 遺構分布部分拡大図(4)
第18図 遺構分布部分拡大図(5)
第19図 遺構分布部分拡大図(6)
第20図 遺構分布部分拡大図(7)
第21図 遺構分布部分拡大図(8)
第22図 遺構分布部分拡大図(9)
第23図 遺構分布部分拡大図(10)
第24図 S B 03、S K 21・25・38 遺構図
第25図 S M 01 遺構図
第26図 縄文土器(1)、弥生前期土器(1)
第27図 縄文土器(2)、弥生前期土器(2)
第28図 縄文土器(3)、弥生前期土器(3)
第29図 弥生前期土器(4)
第30図 弥生前期土器(5)、縄文~弥生前期の石器(1)
第31図 縄文~弥生前期の石器(2)
第32図 S M 01 出土土器
第33図 S B 02・04 遺構図
第34図 S B 05~07 遺構図
第35図 S B 08~10 遺構図
第36図 S B 12・19・13・14 遺構図
第37図 S B 16・20・21 遺構図
第38図 S B 11、段切2 遺構図(1)
第39図 S B 11、段切2 遺構図(2)
第40図 S T 04、S K 05・06 遺構図
第41図 段切4・5(S T 01・02、S D 11・12・13) 遺構図(1)
第42図 段切4・5(S T 01・02、S D 11・12・13) 遺構図(2)
第43図 S T 01、段切4 遺構図
第44図 S T 02 遺構図(1)
第45図 S T 02 遺構図(2)、S T 03 遺構図
第46図 S K 09・20・23・33・34・35・42・90 遺構図
第47図 S K 99・101・102・219・224 遺構図
第48図 S K 220・221・225・383・436・543 遺構図
第49図 S K 02~04・08・16・81・83 遺構図
第50図 S K 19・85・110・111・124 遺構図
第51図 S K 17・31・32 遺構図
第52図 S K 07・40・80・89・106・138 遺構図
第53図 S K 36・103・189 遺構図
第54図 テラス1・5 遺構図(1)
第55図 テラス1・5 遺構図(2)
第56図 テラス2・3 遺構図
第57図 テラス4・6 遺構図
第58図 テラス7 遺構図(1)
第59図 テラス7 遺構図(2)
第60図 テラス7 遺構図(3)
第61図 テラス8 遺構図
第62図 南尾根北斜面部火葬骨埋納ビット・火葬墓
第63図 南尾根北斜面部火葬骨出土箇所
第64図 S F 01・02・04・11・12、S E 01 遺構図
第65図 N R 01・02 全体図

- 第66図 NR 01・02 部分拡大図(1)
- 第67図 NR 01・02 部分拡大図(2)
- 第68図 NR 01・02 部分拡大図(3)
- 第69図 NR 01 断面図(1)、NR 02 断面図
- 第70図 NR 01 断面図(2)、杭列 遺構図
- 第71図 五輪塔計測凡例
- 第72図 古代土器(1)
- 第73図 古代土器(2)
- 第74図 古代土器(3)、陶器
- 第75図 中世陶磁器・土器(1)
- 第76図 中世陶磁器・土器(2)
- 第77図 中世陶磁器・土器(3)
- 第78図 中世陶磁器・土器(4)、土製品
- 第79図 石器・石製品(1)
- 第80図 石器・石製品(2)、ガラス小玉、羽口
- 第81図 金属製品(1)
- 第82図 金属製品(2)
- 第83図 木製品(1)
- 第84図 木製品(2)
- 第85図 木製品(3)
- 第86図 木製品(4)
- 第87図 木製品(5)
- 第88図 木製品(6)
- 第89図 木製品(7)
- 第90図 木製品(8)
- 第91図 木製品(9)
- 第92図 木製品(10)
- 第93図 木製品(11)
- 第94図 木製品(12)
- 第95図 板碑(1)
- 第96図 板碑(2)
- 第97図 板碑(3)
- 第98図 板碑(4)
- 第99図 宝篋印塔、五輪塔(1)
- 第100図 五輪塔(2)
- 第101図 五輪塔(3)
- 第102図 五輪塔(4)
- 第103図 地家遺跡 出土人骨(1)
- 第104図 地家遺跡 出土人骨(2)
- 第105図 地家遺跡 出土人骨(3)
- 第106図 地家遺跡 出土人骨(4)
- 兜山遺跡 兜山古墳**
- 第107図 遺跡範囲・調査区位置図
- 第108図 トレンチ配置図
- 第109図 兜山古墳 石室検出状況
- 第110図 兜山遺跡 出土遺物
- 第111図 兜山古墳 任意グリッド設定状況
- 第112図 兜山古墳 石室平面図(玄室床上部)
- 第113図 兜山古墳 石室平面図(玄室床下部)
- 第114図 兜山古墳 石室断面図(1)
- 第115図 兜山古墳 石室断面図(2)
- 第116図 兜山古墳 石室立面図
- 第117図 兜山古墳 石室遺物出土状況
- 第118図 兜山古墳 出土遺物
- 第119図 兜山古墳 出土人骨
- 大沢屋敷遺跡**
- 第120図 遺跡範囲・調査区位置図
- 第121図 トレンチ・調査区配置図
- 第122図 土層柱状図
- 第123図 遺構分布全体図
- 第124図 1区 遺構分布図
- 第125図 3区 遺構分布図
- 第126図 S T 01 遺構図
- 第127図 土坑 遺構図(1)
- 第128図 土坑 遺構図(2)
- 第129図 土坑 遺構図(3)
- 第130図 土坑 遺構図(4)
- 第131図 縄文土器(1)
- 第132図 縄文土器(2)
- 第133図 縄文土器(3)
- 第134図 縄文土器(4)
- 第135図 縄文土器(5)
- 第136図 縄文土器(6)
- 第137図 石器(1)
- 第138図 石器(2)
- 第139図 石器(3)、古代土器、中世磁器、銭貨
- 前の久保遺跡**
- 第140図 遺跡範囲・調査区位置図
- 第141図 トレンチ・調査区配置図

- 第 142 図 土層柱状図
 第 143 図 遺構全体図
 第 144 図 S B 01 遺構図
 第 145 図 S D 01、S K 01～07 遺構図
 第 146 図 S K 08～14・16、S F 01 遺構図
 第 147 図 土器

- 第 148 図 石器
 三枚平 B 遺跡
 第 149 図 遺跡範囲・調査区位置図
 第 150 図 トレンチ・調査区配置図
 第 151 図 土層柱状図
 第 152 図 出土遺物

挿表目次

- 第 1 表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 94 条関係）
 第 2 表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）
 第 3 表 埋藏物の発見にかかわる行政手続き（文化財保護法第 102・105・108 条関係）
 第 4 表 受委託契約等の経過
 第 5 表 周辺遺跡一覧
 地家遺跡
 第 6 表 木製品器種組成
 第 7 表 墨書・墨痕木製品一覧

- 兜山遺跡 兜山古墳
 第 8 表 兜山古墳 放射性炭素年代測定結果
 大沢屋敷遺跡
 第 9 表 放射性炭素年代測定結果
 前の久保遺跡
 第 10 表 土坑一覧表
 地家遺跡 兜山古墳
 第 11 表 地家遺跡 出土人骨一覧表
 第 12 表 地家遺跡 出土人骨の歯の計測表
 第 13 表 兜山古墳 出土人骨一覧表

写真目次

- P L 1 地家遺跡
 P L 2 地家遺跡
 P L 3 地家遺跡
 P L 4 地家遺跡
 P L 5 地家遺跡
 P L 6 地家遺跡
 P L 7 地家遺跡
 P L 8 地家遺跡
 P L 9 地家遺跡
 P L 10 地家遺跡
 P L 11 地家遺跡
 P L 12 地家遺跡
 P L 13 地家遺跡
 P L 14 地家遺跡

- P L 15 地家遺跡
 P L 16 地家遺跡
 P L 17 地家遺跡
 P L 18 地家遺跡
 P L 19 地家遺跡
 P L 20 地家遺跡
 P L 21 兜山遺跡・兜山古墳
 P L 22 兜山古墳
 P L 23 兜山古墳
 P L 24 大沢屋敷遺跡
 P L 25 大沢屋敷遺跡
 P L 26 大沢屋敷遺跡
 P L 27 前の久保遺跡
 P L 28 前の久保遺跡・三枚平 B 遺跡

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

中部横断自動車道（以下「中部横断道」という。）は、静岡県清水市の新東名道新清水ジャンクション（以下「JCT」という。）を起点に、山梨県甲斐市の双葉JCTと北杜市の長坂JCTの間で中央自動車道に合流し、長坂JCTより分岐北上したのち小諸市で上信越道佐久小諸JCTに連絡する、総延長約132kmの高規格幹線道路である。

この道路は、太平洋側と日本海側を結ぶ広域的な高速ネットワークを形成するとともに、佐久地域においては国道141号を補完して地域間交流や地域開発を促進させ、救急医療体制への支援や物流の効率化を図る目的で、1991（平成3）年に佐久小諸JCTと八千穂高原インターチェンジ（以下「IC」という。）間を基本計画路線として決定した。1998年4月、日本道路公団に施工命令が下され、佐久小諸JCTと佐久南IC間の工事を進めてきたが、2003年12月には、中部横断道佐久南ICと八千穂高原ICの延長14.6km区間について国土交通省の新直轄方式による事業化が決定し、佐久白田トンネルの掘削を皮切りに本体工事が本格化した。その後、本線脇13箇所に調整地の設置、佐久白田ICと佐久穂ICの設置等が追加され、2018年4月28日に供用を開始した。

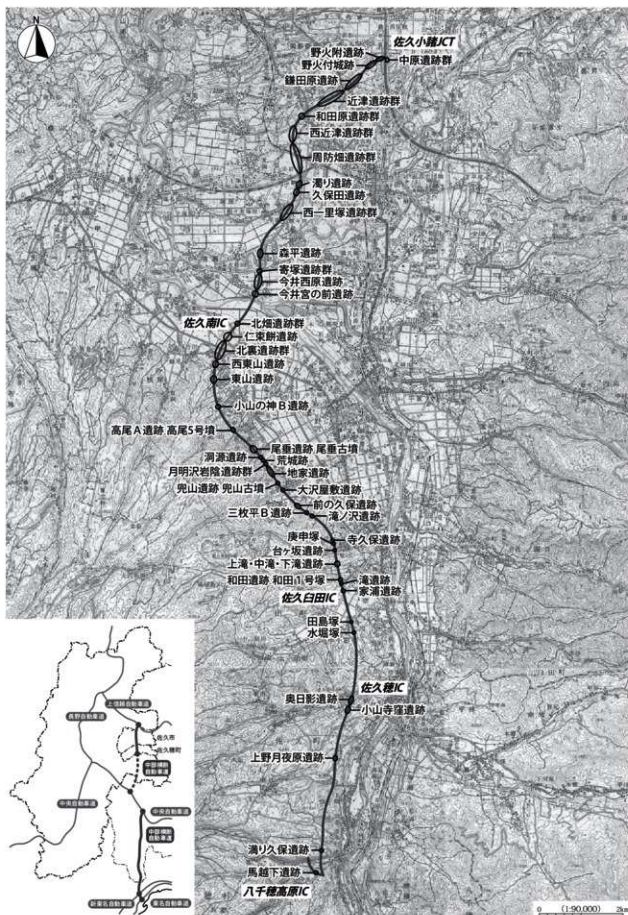
2 分布・試掘調査と保護措置の調整

1991（平成3）年の基本計画路線決定を受けて、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）は、当該区間の南北予想ルートの幅1kmに所在する埋蔵文化財包蔵地の存否等を確認するため、1994年度に地元教育委員会の協力を得て踏査を実施した（県教委1997）。その後、事業計画が進行し、佐久南ICと八千穂高原IC間のルートがほぼ確定したことを受けて、1998～2000年度に分布調査を実施し、保護措置を講ずべき埋蔵文化財包蔵地や試掘調査の対象とすべき箇所を選定を行った（県教委2000・2003）。佐久南IC以南については、2004年度に改めて対象地の現況調査を実施するとともに、2012年度にかけて順次試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容の確認を行った（県教委2007・2010・2013）。

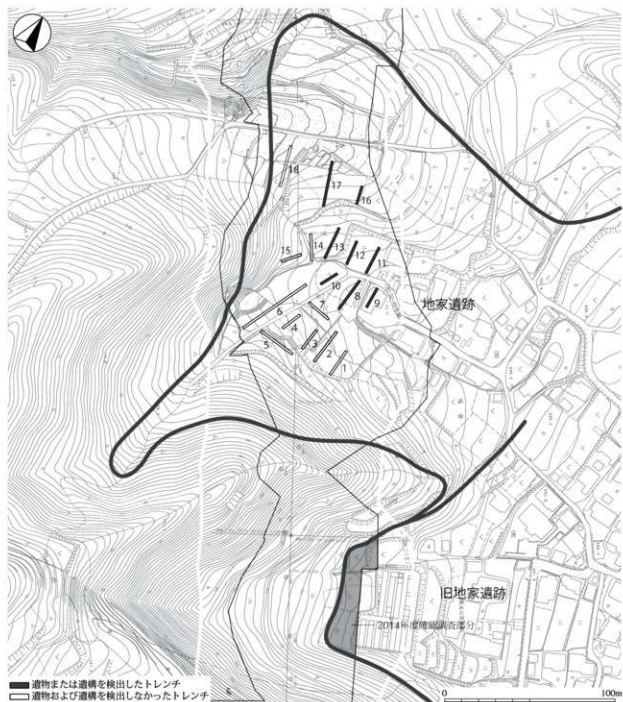
本報告書にかかわる佐久市大沢地区の本線ルート上は、1998年度の分布調査と2006年度の現況調査で兜山遺跡、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡、三枚平B遺跡の4か所を確認し、地家遺跡隣接地、兜山遺跡隣接地、大沢屋敷遺跡と前の久保遺跡の間および前の久保遺跡と三枚平B遺跡間は、試掘調査による遺跡の存否無確認が必要になった。

2008年11月県教委は、第2図のとおり地家遺跡と尾根を挟んで東側に開口する谷とその北側斜面を対象に18本のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、以下に示す結果を得たため佐久市教育委員会（以下「市教委」という。）と協議し、弥生時代から中世の集落跡「地家B遺跡」として登録した¹。

1 2009年度に埋文センターが地家遺跡の発掘調査を実施したところ、「地家B遺跡」の範囲が拡大することが判明した。県教委は市教委と協議し、範囲を拡大した上で「地家遺跡」と統合することにした。「周知の埋蔵文化財包蔵地等の変更について」（平成21年12月17日付け21教文第456号）。



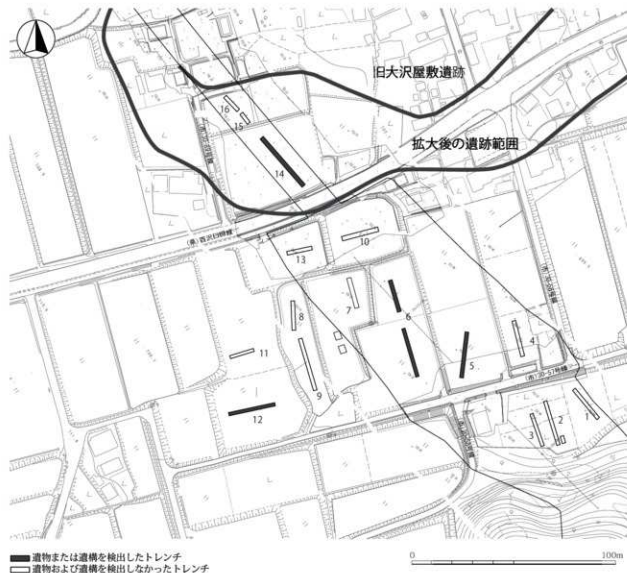
第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡



第2図 地家遺跡北側の試掘トレンチと遺跡の範囲

- ① T 8～10・14で検出した自然流路から、黒曜石、古墳時代の須恵器、中世の青磁・白磁が出土
- ② 自然流路に並行する人為的な可能性のある幅1m、深さ20cmの溝状遺構を検出
- ③ T 11・13で焼土跡を検出し、周辺から弥生土器が出土
- ④ T 9～13から黒曜石、弥生土器および古代の須恵器のほか、時代を特定できない素焼きの土器が出土

2009年11月には、第3図のとおり大沢屋敷遺跡の南に隣接する水田に16本のトレンチを設定して試掘調査を実施したところ、T 14から土坑4基、流路跡3本を検出し、縄文～弥生時代と考えられる土器等が出土した。当該試掘箇所は、大沢屋敷遺跡に隣接して地形面も同じであるため、市教委と協議し、県道百沢白田線まで遺跡範囲を広げることにした。また、兜山遺跡内の石積みを精査した上で、古墳の石室と認定し、市教委と協議の上、「兜山古墳」として新たに登録した。

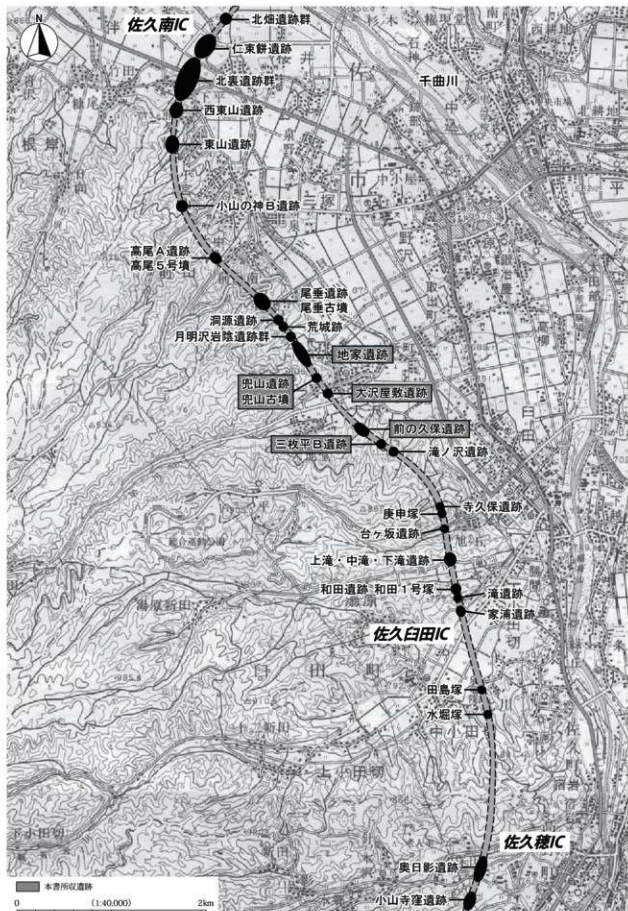


第3図 大沢風敷遺跡南側の試掘トレンチと遺跡の範囲

そのほか県教委は、2011～2012年度にかけて、地家遺跡隣接地、大沢風敷遺跡隣接地、前の久保遺跡隣接地および三枚平B遺跡隣接地の試掘調査を実施したが、いずれも遺構・遺物はなかった。

以上の状況を受けて、県教委は、新直轄方式により2004年度から新たな事業主体となった国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）や市教委と調整会議を重ね、地家B遺跡、地家遺跡、兜山遺跡、大沢風敷遺跡、前の久保遺跡および三枚平B遺跡について、本線または付帯設備の工事等によって破壊される恐れがあるため、本発掘調査による記録保存を図ることを決定した。ただし、地家遺跡（第2図の網掛け部分）については、2014年度に盛土工法から橋脚工法に設計変更されたため、県教委が橋脚部分の確認調査を行った結果、遺構・遺物がなく、記録保存調査の対象外となった。また、2008年度には、兜山遺跡内での調査で古墳の石室を確認したため、新たに兜山古墳を登録している。

今回の開発事業は、広域の市町村にまたがりかつ大規模であるため、佐久小諸JCTと佐久南IC間に引き続き、国土交通省関東地方整備局（以下「関東地整」という。）が県教委および長野県文化振興事業団と埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結した上で、関東地整が長野県文化振興事業団に本発掘調査を委託し、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が実施する旨の合意を得た。



第4図 中部横断自動車道と本書所収遺跡

3 行政手続の経過

本報告書掲載遺跡の発掘調査にかかわる行政手続については第1表から第3表のとおりである。

第1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備考
2006. 4. 5	18 長国調第14号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	地家・兜山・大沢屋敷・前の久保遺跡での土木工事を通知
2006. 6. 8	18 教文第18-33号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2009. 2.16	20 長国調第99号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	地家B遺跡での土木工事を通知
2009. 2.17	20 教文第8-281号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2012. 8.27	24 国間整長国工第92号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	前の久保遺跡での付帯工事を通知
2012. 9.10	24 教文第8-121号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡で工事立会を行うよう通知
2012.12.19	24 長埋第119号	埋文センター	工事立会終了報告	県教委	遺構・遺物なく本調査不要と報告
2012. 8.27	24 国間整長国工第93号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	三枚平B遺跡での付帯工事を通知
2012. 9.10	24 教文第8-122号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡で工事立会を行うよう通知
2012.12.19	24 長埋第118号	埋文センター	工事立会終了報告	県教委	遺物包含層の残りが悪く、かつ、遺構が存在する可能性もないため、本調査不要と報告
2013.10.31	25 国間整長国工第108号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	本線外に広がる大沢屋敷遺跡650㎡で工事用道路建設を通知
2014. 2.12	25 教文第8-317号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡で工事立会を行うよう通知
2013.10.31	25 国間整長国工第158号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	本線外に広がる大沢屋敷遺跡1,560㎡で工事用道路建設を通知
2014. 2.12	25 教文第8-318号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知

第2-1表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備考
2008.10.20	20 長埋第1-7号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	兜山遺跡
2008.10.23	20 教文第6-10号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.12.17	20 長埋第4-14号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	兜山遺跡 4,000㎡
2008.10.20	20 長埋第1-8号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	前の久保遺跡

第2-2表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2008.10.23	20 教文第6-11号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.12.17	20 長理第4-15号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	前の久保遺跡 3,000㎡
2009.3.2	20 長理第1-15号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	地家B遺跡
2009.3.5	20 教文第6-20号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009.12.22	21 長理第4-12号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	地家B遺跡 6,300㎡
2009.4.22	21 長理第1-1号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	三枚平B遺跡
2009.5.12	21 教文第6-2号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009.8.12	21 長理第4-5号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	三枚平B遺跡 900㎡
2010.2.26	21 長理第1-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	地家遺跡
2010.3.10	21 教文第6-20号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011.1.5	22 長理第4-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	地家遺跡 10,472㎡
2011.2.28	22 長理第1-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	前の久保遺跡
2011.3.22	22 教文第6-17号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011.7.27	23 長理第6-3号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	前の久保遺跡 5,380㎡
2011.3.1	22 長理第1-10号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	三枚平B遺跡
2011.3.22	22 教文第6-16号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.2.16	23 長理第6-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	三枚平B遺跡 900㎡
2011.6.14	23 長理第3-4号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	大沢屋敷遺跡
2011.6.27	23 教文第6-6号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.2.16	23 長理第6-11号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	大沢屋敷遺跡 1,880㎡
2011.6.14	23 長理第3-5号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	兜山遺跡
2011.6.27	23 教文第6-7号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011.12.21	23 長理第6-17号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	兜山遺跡 340㎡
2011.10.3	23 長理第3-11号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	地家遺跡
2011.10.20	23 教文第6-18号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.2.16	23 長理第6-18号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	地家遺跡 28㎡
2012.4.6	24 長理第1-1号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	兜山遺跡

第2-3表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備考
2012. 5. 7	24 教文第 6-2 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 8.28	24 長理第 4-3 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	兜山道跡 30㎡
2012. 6. 8	24 長理第 1-3 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	大沢屋敷道跡
2012. 6.28	24 教文第 6-5 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 9.25	24 長理第 4-4 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	大沢屋敷道跡 582㎡
2012. 9.21	24 長理第 1-8 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	前の久保道跡
2012.10.19	24 教文第 6-14 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.12.11	24 長理第 4-11 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	前の久保道跡 530㎡
2013. 8.23	25 長理第 1-6 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	地家道跡
2013. 9. 4	25 教文第 6-9 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.12.27	25 長理第 4-15 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	地家道跡 170㎡
2013. 8.26	25 長理第 1-8 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	大沢屋敷道跡
2013. 9. 4	25 教文第 6-11 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.12.27	25 長理第 4-17 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	大沢屋敷道跡 100㎡
2014. 3.10	25 長理第 3-14 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	大沢屋敷道跡
2014. 3.24	25 教文第 6-15 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014. 6.11	26 長理第 17-3 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	大沢屋敷道跡 740㎡
2014. 5. 8	26 長理第 14-4 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	地家道跡
2014. 5.23	26 教文第 6-4 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014. 7.31	26 長理第 17-7 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	地家道跡 80㎡
2014. 9. 3	26 長理第 14-8 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	大沢屋敷道跡
2014. 9.18	26 教文第 6-10 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014.11.25	26 長理第 17-12 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	大沢屋敷道跡 1,478㎡

第3-1表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備考
2008.12.17	20 長理第 2-11 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	兜山道跡 土器・石器 1箱
2009. 1.22	20 教文第 26-125 号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	兜山道跡
2008.12.17	20 長理第 2-12 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	前の久保道跡 土器・石器 1箱

第3-2表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2009. 1. 5	20教文第26-117号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	前の久保遺跡
2009. 8.12	21長理第2-5号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	三枚平B遺跡 土器1箱
2009. 8.28	21教文第20-61号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	三枚平B遺跡
2009.12.22	21長理第2-12号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	地家B遺跡 土器54箱、石器8箱ほか
2010. 1. 7	21教文第20-111号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	地家B遺跡
2010.12.24	22長理第2-7号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	地家遺跡 土器30箱、石器6箱ほか
2011. 1.14	22教文第20-127号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	地家遺跡
2011. 7.27	23長理第4-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	前の久保遺跡 土器・石器3箱
2011. 8.11	23教文第20-63号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	前の久保遺跡
2011.11.28	23長理第4-11号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	大沢屋敷遺跡 土器・石器12箱
2011.12. 7	23教文第20-110号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	大沢屋敷遺跡
2011.12.21	23長理第4-16号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	兜山遺跡 土器・石器3点
2012. 1. 6	23教文第20-122号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	兜山遺跡
2012. 8.28	24長理第2-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	兜山遺跡 土器・石器3箱ほか
2012. 9. 7	24教文第20-44号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	兜山遺跡
2012. 9.25	24長理第2-4号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	大沢屋敷遺跡 土器・石器1箱
2012.10. 5	24教文第20-52号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	大沢屋敷遺跡
2013.11.27	25長理第2-6号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	大沢屋敷遺跡 土器・石器1箱
2013.12. 6	25教文第20-80号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	大沢屋敷遺跡
2014. 6.11	26長理第15-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	大沢屋敷遺跡 土器・石器16箱
2014. 6.25	26教文第20-31号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	大沢屋敷遺跡
2014. 7.31	26長理第15-6号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	地家遺跡 土器・石器1箱
2014. 8.19	26教文第20-51号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	地家遺跡
2014.11.25	26長理第15-11号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	大沢屋敷遺跡 土器・石器1箱
2014.12.15	26教文第20-81号	県教委	埋蔵物の文化財認定および出土品の帰属通知	埋文センター	大沢屋敷遺跡

中部横断道の建設に伴う発掘調査は、複数の市町村にまたがる大規模な開発事業である。したがって、調査が複数年度にまたがるとともに調査経費も相当要することから、事業を円滑に推進するため、県教委は関東地整および長野県文化振興事業団と協定書を締結することとした。なお、協定書は、発掘調査事業の進捗よくに伴って、2010年3月、2016年2月、2018年4月、2019年1月の都合4回変更を行っている。

長野県文化振興事業団は、協定書の第7条第1項の規定により、年度毎に関東地整と契約を締結し、年度末には第8条第2項の規定により、業務実績報告書を提出してきた。本報告書に掲載した遺跡にかかわる各年度の受委託契約は第4表のとおりである²。

第4表 受委託契約等の経過

年度	予 算	遺 跡	備 考
2008	346,738,405 円	兜山遺跡、前の久保遺跡他 12 遺跡	発掘作業 48,410㎡
2009	381,700,120 円	地家 B 遺跡、三枚平 B 遺跡他 17 遺跡	発掘作業 63,800㎡ 整理作業(佐久南 I C 以北)
2010	408,924,000 円	地家遺跡他 17 遺跡	発掘作業 62,947㎡ 整理作業(佐久南 I C 以北)
2011	367,330,000 円	地家遺跡、兜山遺跡、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡、三枚平 B 遺跡他 12 遺跡	発掘作業 25,688㎡ 整理作業(佐久南 I C 以北)
2012	327,803,000 円	兜山遺跡、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡他 15 遺跡	発掘作業 12,022㎡ 整理作業(佐久南 I C 以北)
2013	233,268,000 円	地家遺跡、大沢屋敷遺跡他 19 遺跡	発掘作業 33,870㎡ 整理作業(佐久南 I C 以北)
2014	175,530,000 円	地家遺跡、大沢屋敷遺跡他 19 遺跡	発掘作業 11,751㎡ 整理作業(佐久南 I C 以北)
2015	112,850,000 円	地家遺跡他 13 遺跡	発掘作業 6,565㎡ 整理作業
2016	77,110,000 円	地家遺跡他 30 遺跡	整理作業
2017	38,964,000 円	地家遺跡他 30 遺跡	整理作業
2018	126,991,800 円	地家遺跡他 30 遺跡	整理作業
	うち 51,977,000 円を 2019 年度に繰越		

4 発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2008 年度 発掘作業（兜山遺跡、前の久保遺跡）

所 長： 仁科松男 副 所 長： 丑山修一 調査部長： 平林 彰 担当課長： 寺内隆夫
調査担当： 櫻井秀雄
作 業 員： 井出製栄美 桜井重治 清水正人 伴野武夫 細井蔵次郎

2009 年度 発掘作業（地家遺跡、三枚平 B 遺跡）

所 長： 仁科松男 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 平林 彰 担当課長： 大竹憲昭
調査担当： 若林 卓 中野亮一 賛田 明 藤松慎一郎 古賀弘一 内堀 団（地家遺跡）
藤原直人 中野亮一（三枚平 B 遺跡）
作 業 員： 赤尾香苗 浅沼君子 井澤政子 市川あつ子 市川 渚 稲垣 豊 上原美千代
上原勇三郎 植松和則 奥平 潔 小倉栄子 柏木貞夫 金井ちとせ 木内一夫
木内節雄 神津良太郎 小宮山登志幸 桜井マキ子 佐々木記代 佐藤春美 篠原宗之
清水末子 鈴木春彦 高橋徹雄 田中章雄 田原和之 土屋由美子 丸山好子
宮崎未枝子 柳澤敏春 山浦恵子 山根知子

2 協定書および協定締結の経過は埋文センター発掘調査報告 121 の第 1 章に掲載した。

2010年度 発掘作業（地家遺跡）

所 長：	窪田久雄	副 所 長：	阿部精一	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	中野光一	内堀 団	大沢泰智			
作業員：	青木 昭	赤尾香苗	浅沼君子	稲垣 豊	上原美千代	上原勇三郎	奥平 潔
	小倉栄子	木内一夫	木内節雄	神津良太郎	小宮山登志幸	坂本和江	櫻井マキ子
	佐々木きよえ	篠原宗次	清水末子	須田杉男	須田政澄	大工原 明	高岡義敏
	高岡清子	田中章雄	田原和之	土屋由美子	丸山好子	宮崎未枝子	柳澤敏春
	山浦豊子	山根知子	渡辺稔秋				

2011年度 発掘作業（地家遺跡、兜山遺跡、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡、三枚平B遺跡）

所 長：	窪田久雄	副 所 長：	阿部精一	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	谷 和隆	（地家遺跡）				
	谷 和隆	宮村誠二	（兜山遺跡）				
	若林 卓	伊藤友久	宮村誠二	（大沢屋敷遺跡）			
	藤原直人	長谷川桂子	曳地隆元	（前の久保遺跡）			
	黒岩 隆	内堀 団	（三枚平B遺跡）				
作業員：	上原美千代	小倉栄子	木内伸子	熊谷大輔	清水正人	高岡清子	高岡義敏
	徳富信義	秦 正信	日向武夫	丸山好子	山浦豊子	横山道子	依田純子

2012年度 発掘作業（兜山遺跡、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡）

所 長：	窪田久雄	副 所 長：	会津敏男	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	宮村誠二	（兜山遺跡）				
	鶴田典昭	長谷川桂子	（大沢屋敷遺跡）				
	藤原直人	伊藤友久	栗林幸治	曳地隆元	（前の久保遺跡）		
作業員：	植松和則	熊谷大輔	佐藤明美	日向武夫	宮崎未枝子	山口茂弥	渡辺稔秋

2013年度 発掘・整理等作業（地家遺跡、大沢屋敷遺跡）

所 長：	窪田久雄	副 所 長：	会津敏男	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	伊藤友久	栗林幸治	（発掘作業）			
	上田 真	（整理作業）					
作業員：	塚田晴美	西島典子	松本眞行	宮下正治	（整理作業）		

2014年度 発掘・整理等作業（地家遺跡、大沢屋敷遺跡）

所 長：	会津敏男	副 所 長：	多城 哲	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	藤原直人	上田 真	栗林幸治	（地家遺跡）			
	若林 卓	藤原直人	上田 真	栗林幸治	（大沢屋敷遺跡）		
	若林 卓	高津希望	（整理作業）				
作業員：	植松和則	小倉栄子	川上淳子	熊谷大輔	佐藤明美	鈴木佳明	高岡清子
	高岡義敏	日向武夫	緑川うめ子	宮崎未枝子	山口茂弥	渡辺稔秋	（発掘作業）
	松本眞行	（整理作業）					

2015年度 整理等作業（地家遺跡他4遺跡）

所 長：	会津敏男	副 所 長：	多城 哲	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	伊藤友久					
作業員：	赤尾香苗	植松和則	小倉栄子	川上淳子	熊谷大輔	佐藤明美	鈴木春彦

鈴木佳明	高岡清子	高岡義敏	高橋弓子	日向武夫	緑川うめ子	宮崎未枝子
山口茂弥	(発掘作業)					
猪股万里子	柄澤登紀子	窪田 順	窪田 翔	塩野入奈菜美	鳥田由美	清水栄子
清水玲子	高橋康子	日向富美子	待井 聖	松本眞行	柳原澄子	(整理作業)

2016年度 整理等作業（地家遺跡他4遺跡）

所 長：	会津敏男	副 所 長：	竹内 誠	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	上田 真	水澤教子	伊藤友久			
作 業 員：	伊藤由美	猪股万里子	岩原英治	柄澤登紀子	窪田 順	清水栄子	祖山克彦
	高松美法	中島裕子	待井 聖	柳原澄子			

2017年度 整理等作業（地家遺跡他4遺跡）

所 長：	会津敏男	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	水澤教子		伊藤友久			
作 業 員：	赤川雅俊	阿部高子	荒井君江	石田和子	猪股万里子	岩原英治	大澤正明
	窪田 順	塩野入奈菜美	祖山克彦	田中富子	中村恵美	西村はるみ	平林昌子
	堀内慎一	待井 聖	柳原澄子				

2018年度 整理等作業（地家遺跡他4遺跡）

所 長：	会津敏男	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	上田 真	藤原直人	賛田 明			
作 業 員：	赤川雅俊	荒井君江	石田和子	岩原英治	大澤正明	窪田 順	小池美香
	清水秋子	清水栄子	清水正夫	祖山克彦	田中富子	西村はるみ	平林昌子
	堀内慎一	吉田 稔					

2019年度 整理等作業（地家遺跡他4遺跡）

所 長：	原田秀一	副 所 長：	関崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	綿田弘実	(課長補佐)	若林 卓	上田 真	賛田 明		
作 業 員：	石田和子	西村はるみ					

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業

(1) 地家遺跡

地家遺跡は、2008（平成20）年に県教委が行った試掘調査によって、焼土跡や中世陶磁器が新たに発見され、当初は、試掘対象地の一つ南側の谷間にある地家遺跡と区別するため、市教委により地家B遺跡と命名された。試掘調査の結果は前節2に示したとおりであるが、試掘調査以前に県教委が行った分布調査で五輪塔が採集されていること、隣接地に二王堂があり一帯が「長命寺」の伝承地であること、二王堂内に應永二十二年（1415）銘の石柱があること、発掘作業直前に埋文センターが行った踏査で五輪塔空風輪や打製石斧を採集したことなどから、縄文時代から古代にかけての集落跡の存在を予想するとともに、中世の寺院関連遺構や墓域を想定して発掘作業を進めることになった。

2009年度は、北側屋根頂部から南向き斜面部にかけて6,300㎡を対象に、中世の墓群を確認し、板碑や

多数の五輪塔も出土した。その他、縄文時代および平安時代の堅穴建物跡や弥生時代の方形周溝墓も見つかった。また、調査範囲の中央にある谷部からは、中世の堅穴状遺構や礎石建物跡のほか、西から東に流れる幅8～10mの流路跡が見つかり、埋土中から中世陶磁器や木製品が出土した。さらに、調査範囲の南側にある北向き斜面部からも五輪塔などの遺物が見つかったため、次年度以降調査を行うこととした。調査範囲の最北部にあたる北向き斜面部では土坑を検出した。

2010年度は、①南側の北向き斜面部、②西側の東向き斜面北部、③谷部の自然流路跡、④谷部自然流路跡の北岸部、⑤同じく南岸部の5箇所を対象に10,472㎡の調査を実施した。①では、斜面を掘削したテラス状平坦部を複数検出し、テラスとその周辺で火葬骨を納めたピットを確認したほか、広い範囲で火葬骨片や五輪塔各部が出土した。②でも同様なテラス状平坦部が見つかり、板碑の破片が集中する場所もあった。③からは、13～14世紀の国産土器・陶器や輸入陶磁器とともに木簡や木製印を含む多量の木製品が出土した。④では中世の建物群を、⑤では柱穴様の小土坑群や平安時代の堅穴建物跡を検出した。

2011年度以降の発掘作業は、前年度までに完了することができなかった278㎡を対象に行った。いずれも目立った遺構・遺物がなく終了した。

(2) 兜山遺跡・兜山古墳

兜山遺跡は、市教委の分布調査により、縄文時代および古墳時代から古代の散布地として周知されていた。発掘調査歴がなく遺跡の性格や遺構密度等が不明なため、2008年度は確認調査を実施したが、対象範囲の大半にあたる4,000㎡については、遺構はなく、目立った遺物もなかった。

一方、対象範囲の西側から範囲（高速道路用地）外にかけて、直径1～1.5mほどの巨石が数個並び積まれており、横穴式石室の奥壁や側壁と思われる巨石が埋め込まれている状況が確認できたため、市教委はこれを兜山古墳と命名した。この古墳について県教委と長野国道は、道路施工範囲から除外して現状保存するかどうか検討することになった。2011年度は、現状保存にあたり、その範囲を確定するため340㎡を対象に発掘作業を行ったところ、側壁や天井石等は原位置を留めていない部分が多く保存活用が見込めないこと、高速道路の設計上、古墳の範囲を用地から除外することが困難なことから、2012年度に横穴式石室を中心に30㎡の記録保存調査を実施した。

(3) 大沢屋敷遺跡

大沢屋敷遺跡は、市教委により、縄文時代および古墳時代の遺物散布地として周知されてきた。

2009年度、県教委は試掘調査によって自然流路跡と土坑を検出した。土坑の時期は不明確であるが、自然流路跡から縄文～弥生時代と考えられる土器片が出土した。そのほか、陶磁器片も出土した。この結果、縄文～弥生時代の集落跡の一部が中部横断道用地内に及ぶ可能性と、中世以降の遺構が存在する可能性を想定し、県道百沢白田線と北側を流れる大沢川の間を対象に本発掘調査を行うことになった。

発掘作業は、工事用道路の仮設や用地取得の状況に合わせて、範囲を小刻みに分割して行うことになったが、2011年度は1,880㎡の面調査を行い、縄文時代後期前半の遺物包含層を確認したほか、土坑数基を検出した。なかには、堅穴建物跡あるいは円形柱穴列の柱掘方の可能性がある直径5～6mの円形土坑列もあった。2012・13年度は682㎡を対象とし、土坑群を検出した範囲の西側でも土坑を検出した。2014年度は、本線の残存部分と工事用仮設道路等の建設部分2,218㎡が対象となったが、前年度までと同様に縄文時代後期の土坑群が広がるとともに、南東側の自然流路から古代の土器が出土した。

(4) 前の久保遺跡

前の久保遺跡は、市教委により、古墳時代から古代に至る遺物散布地として周知されていた。

2008年度は、調査対象範囲のうち未取得地を除いた3,000㎡の確認調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期とみられる堅穴建物跡や縄文時代中期土器などを確認した。

2011年度は、これらの遺構および落込みが広がる5,910m²の範囲を調査対象として発掘作業を行ったところ、主に調査範囲の北側で古墳時代前期の堅穴建物跡・溝跡、土坑を検出した。2012年度は、対象範囲の中央を東西に横切る市道部分530m²の発掘を行ったが、遺構はなく、目立った遺物もなかった。

(5) 三枚平B遺跡

三枚平遺跡は、市教委により、弥生時代から古代に至る遺物散布地として周知されてきた。しかし、2009年度と2011年度に1,800m²を対象にして行った確認調査で遺構は見つからず、表土層から縄文時代と平安時代の土器が少量出土した程度であったため、面的調査は行わずに終了した。

(6) 基礎整理作業

基礎整理作業は、発掘作業を行った遺跡を対象にして主として12月から3月の冬期間に実施した。

記録類には、調査時に記述した所見をはじめ、図面、写真等が含まれる。基礎整理作業では、まずこれらの汚染や脱漏を点検・修正し、次に記録相互の点検と矛盾点の解消を行った。図面については、平面図と断面図や部分図等との照合点検を行い、原因コピーに朱書訂正を行って、第二原因図の下図とした。ネガ写真は、撮影順にアルバムへ収納し、撮影記録簿との照合点検を行い、ポジ写真は、撮影内容別に整理して後の本格整理に備えた。また、現場で記載した所見は、図面や写真等と照合しながら、所見整理カードにまとめた。

遺物類は、脆弱遺物を選別したのち、土器・石器類は洗浄・注記を行い遺物台帳を作成した。脆弱遺物は性質ごとに台帳を作成し、金属類はシリカゲルを封入して保管、木質や種実類は水漬けて保管、骨類は土砂を除去して乾燥保管した。応急保存処理が必要な脆弱遺物については保存処理カードを作成している。その他、必要に応じて、出土品の科学分析や鑑定等を実施した。

2 整理等作業

佐久南ICから八千穂高原IC間の発掘調査遺跡31箇所を5地区に区分し、佐久市大沢地区は、地家遺跡、兜山遺跡と兜山古墳、大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡、三枚平B遺跡の5遺跡1古墳をまとめて報告書1冊に掲載する方針を固めた。

大沢地区の本格整理作業は、地家遺跡を対象として2013(平成25)年度に着手し、多量に出土した五輪塔の洗浄、注記、写真撮影、重量測定を行うとともに、木製品の基礎的な分類を実施した。2014年度は引続き地家遺跡の本格整理作業を行った。図面類は多種多量なため、効率的に検察・閲覧できるように分類し、台帳を整備した。遺構台帳は、各遺構の概要を把握できるように時期や特徴、図面の情報等を整備した。出土遺物については、遺物収納台帳と実際のテンバコや収納袋との照合を行った上で土器の注記に着手した。金属製品は、劣化状況等を点検しながら、一部の遺物について応急保存処理を委託した。出土人骨は、茂原信生氏の指導を得ながらクリーニングを行った。また、墨書土器については平川南氏の鑑定指導を得た。さらに、堅穴建物跡等から出土した炭化物の年代測定を委託した。2015年度も地家遺跡を中心に、遺構については昨年度に引き続き遺構台帳を整備し、図面類は修正図をもとにトレースに着手した。遺物については、小型石器の注記を行い、報告書に掲載する遺物の抽出、登録、土器接合を行った。続く2016年度は、引続き遺構図のトレースなどを行って、報告書に掲載する個別遺構図、遺構全体図、土層柱状図、周辺遺跡分布図等の作成を進めた。遺物については、土器接合から復元へと進み、順次、実測作業も行った。また、地家遺跡の出土骨類鑑定や金属製品の応急保存処理も実施した。2017年度は、報告書刊行を2018年度末に設定し、報告書に掲載する個別遺構図等の仮版組を行うとともに、土器の接合・復元を進めて写真撮影も行った。さらに、調査成果の総合的な検討を行い、一部原稿の作成に取り掛かっている。2018年は、長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会から地家遺跡の重要性を指摘されると

ともに、調査成果の総合的な検討を行いながら慎重に整理等作業を進めるよう指導されたことを受け、遺構や遺物の位置づけや遺構・遺物相互の関係を再確認した。最後に、編集会議で報告書作成にかかる統一的な方針を固めて、2019年度にかけて遺物の実測・トレース、図面や写真の仮版組を行い、原稿や遺物観察表等の作成を行った。

3 普及啓発活動

(1) 遺跡説明会および発掘体験等

2009. 7.26	地家遺跡現地説明会	131名
2010. 9.19	地家遺跡現地説明会	119名
2012. 7.14	兜山遺跡現地説明会	122名

(2) 展示会および講演会等

2010. 3.13～5. 9	地家遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2010」	長野県立歴史館	7,853名
2010. 3.14	報告会「地家遺跡」	長野県立歴史館	98名
2010. 5.15	報告会「地家遺跡について」	佐久市大沢地区社会体育館	
2010. 7. 6～8. 1	地家遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2010」	長野県伊那文化会館	1,329名
2010. 7.11	報告会「地家遺跡」	長野県立歴史館	60名
2011. 3.12～5.15	地家遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2011」	長野県立歴史館	10,138名
2011. 3.19	報告会「地家遺跡」	長野県立歴史館	62名
2011. 5.15	長野県考古学会遺跡報告会「地家遺跡」	長野県立歴史館	
2011. 7. 1	佐久穂町の遺跡と出土品	佐久穂町生涯学習館	
2011. 7. 7～7.31	地家遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2011」	長野県伊那文化会館	872名
2011. 9. 4	上田市民講座「中世寺院跡 佐久市地家遺跡の調査成果」	上田市立信濃国分寺資料館	
2012. 3.17～5.13	地家遺跡 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2012」	長野県立歴史館	10,659名
2012. 5.12	大沢地区遺跡報告会	佐久市大沢地区社会体育館	
2012. 7.26～8.19	地家遺跡 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2012」	長野県伊那文化会館	1,438名
2013. 3.21～6. 1	兜山遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2013」	長野県立歴史館	15,237名
2013. 7.13～8. 4	兜山遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘2013」	長野県伊那文化会館	1,255名

(3) 調査情報誌等の発行

2010. 3.26	「発掘調査の概要 地家遺跡」[年報] 26
2011. 3.31	「発掘調査の概要 地家遺跡」[年報] 27
2012. 3.31	「発掘調査の概要 兜山遺跡 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 三枚平B遺跡」[年報] 28
2013. 3.31	「発掘調査の概要 兜山遺跡 大沢屋敷遺跡」[年報] 29
2014. 3.31	「発掘調査の概要 大沢屋敷遺跡」[年報] 30
2015. 3.31	「発掘作業の概要 地家遺跡 大沢屋敷遺跡」「整理作業の概要 地家遺跡」[年報] 31
2016. 3.18	「整理作業の概要 地家遺跡ほか」[年報] 32
2017. 3.24	「整理作業の概要 地家遺跡ほか」[年報] 33
2018. 2. 2	「珍しきもの 木製印(花菱紋)佐久市地家遺跡出土」[信州の遺跡] 第12号

2018. 3.23 「整理作業の概要 地家遺跡ほか」〔年報〕34

2019. 3.22 「整理作業の概要 地家遺跡ほか」〔年報〕35

(4) その他

理文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 作業日誌抄録

2008 (平成 20) 年度

11月10日	兜山	確認調査開始	12月1日	兜山	古墳の写真測量を業者委託
11月14日	兜山	清掃作業で古墳らしき巨石を確認	12月4日	前の久保	縄文中期土器を確認
11月20日	兜山	市教委富沢一明氏と協議の上で古墳と確定	12月16日	兜山、前の久保	確認調査終了
11月21日	兜山	古墳の全景写真撮影	2月2日	前の久保	基礎整理作業開始
11月25日	前の久保	確認調査開始	2月20日	前の久保	基礎整理作業終了
11月26日	兜山	古墳周辺の地形測量	3月2日	兜山	基礎整理作業開始
	前の久保	壑穴建物跡を検出	3月31日	兜山	基礎整理作業終了

2009年度

4月13日	地家	表土剥ぎ開始	1月15日	地家	放射性年代測定契約締結
4月22日	地家	測量委託契約締結	2月17日	地家	茂原信生氏、本郷一美氏による出土骨の鑑定指導
4月23日	地家	墓坑内より蔵管器出土			
4月28日	地家	板碑が出土	3月8日	地家	藤澤良祐氏による中世陶磁器の鑑定指導
7月26日	地家	現地説明会を開催	3月12日	地家	測量委託成果納品
9月7日	地家	谷部の自然流路跡から木製品が出土	3月19日	地家	放射性炭素年代測定成果納品
11月13日	地家	遺跡全景写真撮影	3月31日		基礎整理作業終了
12月21日	地家	発掘作業終了 基礎整理作業開始			

2010年度

4月16日	地家	表土掘削開始	10月20日	地家	宮本長二郎氏による建物跡にかかわる指導
4月27日	地家	測量委託契約締結	11月24日	地家	空中写真撮影実施
5月12日	地家	南側の北向斜面部で人骨・五輪塔出土 墓域と判明	11月29日	地家	伏川真一氏による中世墓域や石造物にかかわる指導
5月18日	地家	南側の北向斜面部でテラス状墓地区画を確認 梵字を刻んだ大型五輪塔(地輪)出土	12月24日	地家	谷部で北底付の総柱建物跡確認
7月27日	地家	谷部の自然流路跡から木製品出土	12月27日	地家	発掘作業終了
8月25日	地家	谷部の自然流路跡から木簡出土	1月24日	地家	基礎整理作業開始
9月15日	地家	空中写真撮影実施	3月11日	地家	放射性炭素年代測定契約締結
9月19日	地家	現地説明会開催	3月17日	地家	測量委託成果納品
10月18日	地家	谷部の中世建物群の構築面は上下2面あることが判明。	3月31日	地家	放射性炭素年代測定成果納品
				地家	基礎整理作業終了

2011年度

4月13日	前の久保	表土掘削開始	11月2日	兜山	県教委・市教委と古墳の保護措置について協議
4月22日	前の久保	測量委託契約締結	11月7日	兜山	古墳の石室とサブトレンチの養生をして一旦埋戻し
4月25日	前の久保	壑穴建物跡を検出			
5月16日	前の久保	溝跡を検出	11月11日	地家	発掘作業開始
7月12日	三枚平B	確認調査開始	11月16日	地家	遺構・遺物なく発掘作業終了
7月21日	前の久保	発掘作業完了	11月17日	大沢屋敷	2区遺構・遺物なく発掘作業終了
7月27日	三枚平B	測量委託契約締結	11月21日	大沢屋敷	1 - 3区発掘作業終了
8月26日	三枚平B	確認調査終了		兜山	発掘作業終了
9月14日	大沢屋敷	表土掘削開始	12月19日	地家	大沢屋敷 基礎整理作業開始
9月16日	大沢屋敷	1区ではほら東西に走る自然流路跡検出	12月21日	大沢屋敷	放射性炭素年代測定委託契約締結
9月26日	大沢屋敷	3区で建物群を構成する土坑群検出	12月22日	前の久保	基礎整理作業開始
9月29日	大沢屋敷	1区で自然流路跡を掘削	1月10日	兜山	三枚平B 基礎整理作業開始
10月6日	兜山	表土掘削開始	2月21日	兜山	寺尾真純氏による石室表込め石の同定指導
10月7日	兜山	古墳の石室内清掃	3月9日	大沢屋敷	放射性炭素年代測定委託成果納品
10月12日	大沢屋敷、兜山	測量委託契約締結	3月16日	兜山、大沢屋敷、前の久保、三枚平	測量委託成果納品
10月14日	大沢屋敷	3区の上土精査			
10月21日	兜山	古墳の石室内表込石。サブトレンチ断面の記録作成終了	3月31日		基礎整理作業終了

2012年度

5月15日	兜山	古墳および周囲の清掃開始	8月28日	兜山	発掘作業終了
5月18日	兜山	古墳石室内の調査開始	8月29日	大沢屋敷	発掘作業開始
6月6日	兜山	測量委託契約締結	8月30日	兜山	基礎整理作業開始
6月13日	兜山	小礫を数き詰めた古墳玄室床面を確認	兜山	図面・写真の整理・収納および各種台帳の作成	
6月21日	兜山	放射性炭素年代測定委託契約	9月10日	兜山	金属製品の整理
6月26日	兜山	古墳玄室から人骨及び平安時代の土器が出土	9月11日	兜山	骨類のクリーニングを実施
6月28日	兜山	古墳玄室床面から鉄鏝が出土	9月14日	大沢屋敷	遺構・遺物の検出、掘下げ、記録作成
6月29日	兜山	古墳玄室床面は大ぶりの礫敷き(礫床下部)上に、小礫を敷き詰めた(礫床上部)の二重構造をもつことが判明	9月19日	兜山	遺物注記
7月5日	兜山	古墳石室の平面測量	9月21日	大沢屋敷	発掘作業終了
7月10日	兜山	古墳横道礫床の残存部を確認	10月1日	兜山	土壌からの遺物抽出作業
7月12日	兜山	放射性炭素年代測定成果納品	11月1日	前の久保	表土剥ぎ開始
7月14日	兜山	現地説明会開催	11月6日	前の久保	遺構・遺物なく発掘作業終了
7月17日	兜山	古墳石室の掘方調査	11月9日	兜山	金属製品の応急保存処理委託契約締結
7月20日	兜山	古墳玄室礫床上部の記録と取外し	11月19日	前の久保	基礎整理作業開始
8月2日	兜山	古墳玄室礫床下部の記録と取外し。横道床下調査	兜山	茂原信生氏らによる出土骨類の鑑定指導	
8月7日	兜山	古墳玄室床下調査	12月11日	兜山	遺物接合
8月9日	兜山	古墳石室壁体の記録と取外し	1月7日	大沢屋敷	基礎整理作業開始
8月10日	兜山	寺尾真純氏による石室石材の採取地指導	1月11日	大沢屋敷	基礎整理作業終了
8月23日	兜山	古墳完掘状況写真撮影	2月12日	兜山	遺物実測
			3月14日	兜山	金属製品の応急保存処理委託成果納品
			3月16日	兜山	測量委託成果納品
			3月29日	兜山	前の久保 基礎整理作業終了

2013年度

4月1日	地家	本格整理作業開始	11月20日	地家	残件170mについて精査したが遺構・遺物ともなく調査終了
6月17日	地家	五輪塔洗浄	12月20日	地家	大沢屋敷 基礎整理作業開始
7月22日	地家	木製品分別、収納、台帳作成	1月7日	地家	五輪塔仮収納
8月20日	地家	五輪塔注記、分別、台帳作成	3月31日	地家	大沢屋敷 基礎整理作業終了
11月7日	大沢屋敷	表土剥ぎ、遺構検出開始	地家	本格整理作業終了	
11月8日	大沢屋敷	縄文後期土器を伴う土坑検出			
11月15日	大沢屋敷	土坑の精査、記録作成を行い発掘作業終了			

2014年度

4月1日	地家	本格整理作業開始	10月15日	地家	遺構台帳の整備を順次実施
4月10日	大沢屋敷	表土掘削開始	10月16日	大沢屋敷	発掘作業再開
4月16日	大沢屋敷	包含層から縄文土器や黒曜石出土	10月28日	地家	人骨クリーニング開始
5月7日	大沢屋敷	検出した土坑の精査・記録作成	11月21日	大沢屋敷	発掘作業終了
5月16日	大沢屋敷	袋状土坑を確認	11月26日	地家	金属製品応急保存処理委託契約締結
5月28日	大沢屋敷	平安時代の須器器坏を伴う自然流路跡を検出	12月15日	大沢屋敷	基礎整理作業開始
6月10日	大沢屋敷	発掘作業一時中断	12月16日	地家	茂原信生氏による人骨整理指導
6月11日	地家	出土遺物点検、分別、台帳整備を順次実施	12月18日	地家	人骨クリーニング終了
7月3日	地家	平川南氏による墨書土器の鑑定指導	1月16日	地家	放射性年代測定委託契約締結
7月7日	地家	表土剥ぎ開始	1月19日	地家	土器注記開始
7月11日	地家	溝跡掘下げ	2月2日	地家	土器注記終了
7月16日	地家	茂原信生氏による人骨整理指導	3月11日	地家	応急保存処理した金属製品納品
7月17日	地家	図面類の点検、分別、台帳整備を順次実施	3月13日	地家	放射性年代測定、応急保存処理委託成果納品
7月23日	地家	土坑を精査、記録作成	大沢屋敷	測量委託成果納品	
7月25日	大沢屋敷	測量委託契約締結	3月31日	大沢屋敷	基礎整理作業終了
7月31日	地家	発掘作業終了	地家	本格整理作業終了	
9月9日	地家	金属製品の点検、台帳整備を順次実施			

2015年度

4月1日	本格整理作業開始	10月22日	大沢屋敷 土層図作成終了
4月7日	前の久保 図面、写真ファイル、台帳の確認開始	兜山 土層図作成開始	
4月14日	前の久保 図面、写真ファイル、台帳の確認終了	10月23日	大沢屋敷 石器注記と整理終了
4月15日	三枚平B 図面、台帳の確認開始	10月27日	長野市立川中高等学校職場体験
4月16日	長野市立通明小整理作業見学（4月20日も）	10月28日	地家 石器注記と整理終了
4月24日	三枚平B 図面、台帳の確認終了	兜山 土層図作成終了	
5月12日	兜山 台帳の整理	前の久保 土層図作成開始	
5月13日	大沢屋敷 台帳の整理開始	11月9日	前の久保 土層図作成終了
5月15日	大沢屋敷 台帳の整理終了	12月2日	地家 写真アルバムと台帳整理
5月27日	須坂市教育委員会整理作業見学	12月4日	兜山、大沢屋敷 写真アルバムと台帳整理
5月28日	兜山、大沢屋敷、前の久保 遺物整理	12月7日	前の久保、三枚平B 写真アルバムと台帳整理
6月2日	兜山 土壌サンプル整理	1月15日	大沢屋敷、前の久保 遺構風性データ計測開始
	長野市立広徳中学校職場体験	大沢屋敷、前の久保 遺構風性データ計測終了	
6月8日	地家 遺物整理開始	地家 遺構風性データ計測開始	
6月15日	地家 遺物整理終了	地家 遺構風性データ計測終了	
6月19日	大沢屋敷 遺物整理	1月28日	地家 遺構風性データ計測終了
6月25日	前の久保 写真ファイルの確認	2月1日	前の久保 土器分類と接合、掲載遺物抽出開始
7月3日	長野市理成文化財センター整理作業見学	2月4日	前の久保 土器分類と接合、掲載遺物抽出終了
7月7日	前の久保 台帳の確認開始	2月5日	前の久保 石器、金属器の整理開始
	長野市立篠ノ井西中学校職場体験	2月8日	兜山 土器分類と接合開始
7月14日	長野市立飯綱中学校職場体験	2月10日	前の久保 石器、金属器の整理終了
7月21日	前の久保 遺構図面と台帳の確認終了	2月15日	兜山 土器分類と接合開始
7月23日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験	前の久保 調査範囲・トレンチ配置・土層図のトレース開始	
7月27日	長野高専インターシップ（8月5日も）	2月18日	地家 遺物整理と記録開始
9月11日	中部横断関連遺跡分布図作成開始	2月24日	地家 遺物整理と記録終了
9月14日	三枚平B 図面整理	2月25日	前の久保 調査範囲・トレンチ配置・土層図のトレース終了
9月15日	兜山、前の久保 石器注記と台帳整理	前の久保 遺構測量データの整理開始	
9月16日	地家、大沢屋敷 石器注記と台帳整理開始	前の久保 遺構測量データの整理終了	
9月17日	中部横断関連遺跡分布図作成終了	3月7日	前の久保 遺構図のトレース開始
10月5日	三枚平B トレンチ設定図、土層図作成開始	3月8日	前の久保 遺構の土層記録整理開始
10月14日	三枚平B トレンチ設定図、土層図作成終了	3月10日	地家 遺構の土層記録整理開始
10月15日	大沢屋敷 土層図作成開始	3月16日	前の久保 遺構図のトレース終了
10月19日	長野市立犀原中学校職場体験	3月18日	地家 遺構の土層記録整理終了
10月20日	長野市立松代中学校職場体験	3月31日	本格整理作業終了

2016年度

4月1日	本格整理作業開始	9月6日	大沢屋敷 土器の接合・復元開始
4月12日	兜山、前の久保 土器接合・復元開始	9月8日	茂原信生氏らによる出土骨鑑定指導（9日も）
4月14日	前の久保 土層整理・検討開始	9月26日	地家 土器の接合・復元開始
4月15日	兜山 土器接合・復元終了	9月27日	地家 木製品点検・分類、掲載個体選別終了
4月25日	前の久保 土器接合・復元終了	10月5日	地家 木製品の赤外線観察（6日も）
4月27日	前の久保 土層整理終了	地家 遺構の検討開始	
4月28日	大沢屋敷 土層整理・検討開始	大沢屋敷 遺構の検討開始	
5月20日	地家 木製品を赤外線観察	地家 木製品点検・分類、掲載個体選別開始	
5月31日	長野市立広徳中学校職場体験	10月11日	大沢屋敷 遺構図のトレース開始
6月27日	大沢屋敷 土器接合開始	地家 木製品の観察表・管理カード整備開始	
6月28日	地家 木製品点検・分類、掲載個体選別中断	地家 火葬骨の仕分け開始	
6月29日	地家 時枝藤氏による木製品の改訂指導（～30日）	長野市立犀原中学校職場体験	
7月1日	地家 木製品再分類開始	10月12日	長野市立松代中学校職場体験
7月5日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験	10月13日	大沢屋敷 遺構図のトレース終了
7月7日	長野市立三陽中学校職場体験	10月24日	兜山 遺構図のトレース開始
	地家 木製品細分類終了	11月1日	地家 火葬骨の仕分け終了
	兜山他 出土骨のクリーニング開始	11月2日	大沢屋敷 遺構の検討終了
7月13日	茂原信生氏らによる出土骨鑑定指導	地家 木製品の観察表・管理カード整備終了	
7月15日	兜山他 出土骨のクリーニング終了	11月10日	兜山 遺物実測開始
7月25日	長野市立川中高等学校職場体験	11月11日	前の久保 遺物実測開始
7月26日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験	11月25日	大沢屋敷 土器接合終了
7月27日	地家 木製品点検・分類、掲載個体選別再開	11月28日	兜山 遺構図のトレース終了
8月1日	地家 土器接合開始	11月30日	兜山 遺物実測終了
9月5日	長野高専インターシップ（7日まで）	12月5日	三枚平B 遺物実測開始

12月19日	櫻井秀雄氏による出土骨鑑定指導（21日まで）	2月28日	地家 土器の接着・復元終了
12月27日	三枚平B 遺物実測終了	3月1日	茂原信生氏らによる出土骨鑑定指導（3日まで）
1月5日	地家 遺物実測開始	3月3日	大沢屋敷 遺物実測終了
1月10日	大沢屋敷 遺物実測開始	3月16日	地家 土器接合終了
	前の久保 遺物実測終了	3月28日	地家 遺物の検討終了
2月13日	地家 遺物実測終了	3月31日	本格整理作業終了

2017年度

4月1日	本格整理作業開始	10月23日	地家 中世土器分類開始
4月5日	地家 遺物実測、遺構図トレース開始	11月7日	地家 土坑・骨出土地点一覧表作成開始
4月11日	大沢屋敷 土器接着・復元開始	11月10日	地家 中世土器分類中断
4月26日	大沢屋敷 遺物実測開始	12月4日	地家 遺物図版版組開始
5月17日	地家 遺物実測中断	12月8日	地家 遺構図トレース中断
5月24日	地家 土器接合開始	12月12日	地家 土坑・骨出土地点一覧表作成終了
6月19日	地家他 茂原信生氏らによる出土骨の鑑定指導（21日まで）	12月13日	地家 銭貨クリーニング（～15日） 茂原信生氏らによる出土骨の鑑定指導
7月4日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験	12月14日	地家 銭貨観察表作成（～15日）
7月7日	長野市立三郷中学校職場体験	12月15日	地家 樹種・種実同定1委託契約締結
7月14日	地家 土器接着・復元開始	12月20日	大沢屋敷 土坑一覧表作成（～21日）
7月20日	地家 土器接着・復元中断	1月9日	大沢屋敷 石器分類開始
	長野市立広徳中学校職場体験	1月16日	地家 樹種同定2委託契約締結
7月21日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験	1月31日	地家 遺物図版版組終了 大沢屋敷 石器分類終了
8月29日	長野高専インターンシップ（～30日）	2月1日	地家 遺物図トレース開始
8月31日	地家 遺物実測再開		地家 石器分類開始
9月8日	地家 板碑クリーニング開始	2月5日	地家 五輪塔計測開始
9月15日	地家 板碑クリーニング終了	2月16日	時枝務氏による木製品の鑑定指導
9月21日	大沢屋敷 遺物実測終了	3月9日	地家 樹種・種実同定1委託成果納品
9月25日	地家 土器接着・復元再開	3月16日	地家 石器分類、五輪塔計測、遺物図トレース中 断 樹種同定2委託成果納品
10月2日	地家 板碑整理開始	3月30日	本格整理作業終了
10月17日	地家 土器接着・復元中断		
10月20日	地家 土器接合終了		
	地家 板碑整理終了		

2018年度

4月1日	本格整理作業開始	6月12日	地家 土器・中世陶磁器分類・選別終了
4月4日	地家 五輪塔計測再開		地家 土器接着・復元再開
5月14日	地家 土器・中世陶磁器分類・選別再開	7月5日	地家 石器観察表作成開始
7月6日	地家 土器接着・復元終了	9月28日	地家、大沢屋敷 実測1委託成果品納品
7月18日	長野市立三郷中学校職場体験	10月10日	地家、大沢屋敷 実測2委託契約締結
7月19日	長野市立広徳中学校職場体験	12月20日	地家 五輪塔計測中断
7月20日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験	12月25日	地家 遺物図トレース再開
7月24日	地家、大沢屋敷 実測1委託契約締結	1月31日	地家、大沢屋敷 実測2委託成果品納品
8月3日	大沢屋敷 石器観察表作成開始	3月13日	地家 遺物図トレース終了
8月17日	地家 石器観察表作成終了	3月26日	編集会議
8月24日	大沢屋敷 石器観察表作成終了	3月29日	本格整理作業終了

2019年度

4月1日	本格整理作業開始	12月24日	発掘調査報告書印刷・製本契約
5月30日	編集会議	3月19日	発掘調査報告書刊行

引用・参考文献

- 県教委 1997 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—」
 県教委 2000 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書2—」
 県教委 2003 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書3—」
 県教委 2007 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書4—」
 県教委 2010 「県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査5—」
 県教委 2013 「県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査6—」

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

佐久盆地は長野県の東に位置し、東と南を秩父山地、西を八ヶ岳連峰、北を浅間連山に囲まれている。盆地の中央には秩父山地の甲武信ヶ岳を源流とする千曲川が北流し、左（西）岸域は八ヶ岳連峰から下る小河川が開析谷や扇状地を形成し、河岸段丘や氾濫原を分断して千曲川に注ぐ。

中部横断道は、八千穂高原I Cから佐久南I Cまでの間、八ヶ岳連峰から東ないし北東方向に延びる開析谷と尾根とを南北方向に横切るため、今回調査した遺跡の多くは、尾根の頂部や斜面部、麓の小河川に面した平坦部に立地している。したがって、規模は小さいが、地理的な環境を活かした個性的な遺跡がある。例えば、尾根の頂部に築かれた田島塚・水堀塚、和田1号塚、傾斜面を利用した奥日影遺跡の窯跡、三方を尾根によって閉ざされた空間に中世寺院・墓地を営んだ地家遺跡のごとくである。また、佐久南I C周辺は千曲川の段丘と低湿地からなり、段丘上には比較的規模の大きな北裏遺跡群が形成され、低湿地には北畑遺跡群や仁東餅遺跡のように水田域が広がる。

第2節 歴史的環境

今回調査した遺跡では、旧石器時代から中・近世の遺構と遺物を発見した。本節では、各遺跡の所在する佐久市から佐久穂町における周辺の遺跡を、時代別に紹介する。

旧石器時代

遺跡数は少なく、今回調査した佐久市高尾A遺跡（No.410）、佐久穂町満り久保遺跡（No.B54）、満り久保東遺跡（No.B57）がある。とくに高尾A遺跡で発見した石器群は、佐久市立科F遺跡、八風山遺跡群八風山II遺跡、香坂山遺跡と同様の古い段階と考えている。

縄文時代

調査例は少ないが、遺物は採取されている。今回取上げた遺跡の半分弱が縄文時代の遺跡である。

草創期は、佐久市井上遺跡（No.691）、佐久穂町崎田原遺跡（No.B1）で神子柴型石斧が採取されている。早期は、片貝川周辺の佐久市堂浦遺跡（No.640）、大門地遺跡（No.641）で押型文・貝殻条痕文系土器、佐久穂町反り峯遺跡（No.B36）で当該期の土器が採取されているが、いずれも遺構は確認されていない。なお、千曲川右岸の佐久穂町後平遺跡では早期後半の堅穴建物跡3軒が調査されている。前期は、佐久穂町上ノ原遺跡（No.A19）、清水上遺跡（No.A59）などで前葉、佐久市後澤遺跡（No.400）で中葉の集落跡が調査されている。佐久市井上遺跡（No.691）では、遺構外から羽状縄文系土器が出土している。また、佐久穂町細久保遺跡（No.B10）、千ヶ日向遺跡（No.B11）で後葉の土器が採取されている。中期は各所で遺物が採取され、遺跡数も多い。佐久穂町佐久西小学校裏遺跡（No.A10）、崎田原遺跡（No.B1）で集落跡を調査している。

後・晩期の遺跡数は少ない。佐久穂町宮の本遺跡（No.A29）では敷石住居跡が調査され、佐久穂町竹の

下遺跡 (No.B 6) では浮線文系土器が見つかっている。今回の調査で、佐久市小山の神B遺跡 (No.402) や高尾A遺跡 (No.410)、上滝・中滝・下滝遺跡 (No.620) で前期の竪穴建物跡を、佐久市北裏遺跡群 (No.318) や地家遺跡 (No.480) ほかで早期から後期の資料を報告した。

弥生時代

大規模な遺跡は、佐久盆地北部の千曲川沿いにある自然堤防や段丘、比較的平坦な丘陵台地にあり、山間部にはほとんどない。前期から中期前半は、佐久穂町中原遺跡 (No.A18)、佐久市井上遺跡 (No.691)、丸山遺跡 (No.610) で遺物が採取されている。中期後半から後期は、片貝川流域で佐久市勝間原遺跡 (No.611)、丸山遺跡 (No.610) で竪穴建物跡が調査され、一帯となって大規模な集落跡になり、佐久市域における該期の集落跡の南限と推測されている。段丘や丘陵上では、佐久市北裏遺跡群 (No.318)、西裏遺跡群 (No.317)、後澤遺跡 (No.400) などが拠点集落とされる。一方、佐久穂町では宮の本遺跡 (No.A29) で土器の出土例があるが、この地域の遺跡は少ない。今回、佐久市北裏遺跡群 (No.318)、西東山遺跡 (No.319)、和田遺跡 (No.616) などで集落跡を、佐久地域の山間部にある岩陰遺跡として月明沢岩陰遺跡群 (No.1162) を調査した。

古墳時代

佐久地域では前期の集落は小規模化・分散化するとされる。中期以降、集落数は増加してくる。周辺には、中期の佐久市離山遺跡 (No.658) や中期から後期の井上遺跡 (No.691) などの集落遺跡がある。一方、古墳は6世紀後半以降に築造された佐久市三河田大塚古墳 (No.244) を除いて、周辺は7世紀から8世紀に築造された後期から終末期の古墳で占められる。7世紀以降の古墳は左岸には少なく、佐久穂町塚畑古墳 (No.A1) が南限と考えられている。今回、佐久市上滝・中滝・下滝遺跡 (No.620)、和田遺跡 (No.616)、滝遺跡 (No.615) で前期から中期の小規模な集落跡を調査した。また、新発見の古墳として、兜山古墳 (No.1163)、尾垂古墳 (No.1164)、高尾5号墳 (No.566) を報告した。

古代

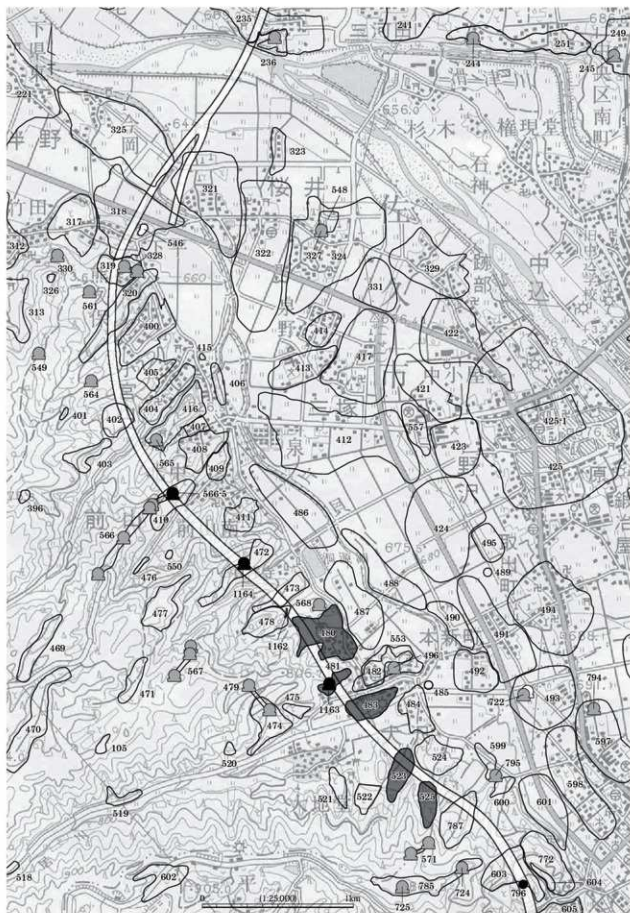
千曲川左岸では、佐久市勝間原遺跡 (No.611)・丸山遺跡 (No.610)・美里在家遺跡 (No.598)・蛇塚遺跡 (No.597) などがある。佐久穂町では佐久西小学校裏遺跡 (No.A10) で集落が調査され、勝見沢遺跡 (No.B13) では八稜鏡が出土している。今回、佐久市小山の神B遺跡 (No.402)、上滝・中滝・下滝遺跡 (No.620)、地家遺跡 (No.480)、寺久保遺跡 (No.603)、佐久穂町小山寺窪遺跡 (No.A30)、馬越下遺跡 (No.B56) などで集落跡を調査した。こうした古代の集落跡は、水田耕作には不向きな山間(麓)部に分布が広がる。その近隣の佐久市洞源遺跡 (No.473) では製鉄炉を、佐久穂町奥日影遺跡 (No.A60) では須恵器の窯跡を発見しており、山間(麓)部に暮らす人々の生活基盤(生業)を検討するうえで、貴重な調査例となった。

中世以降

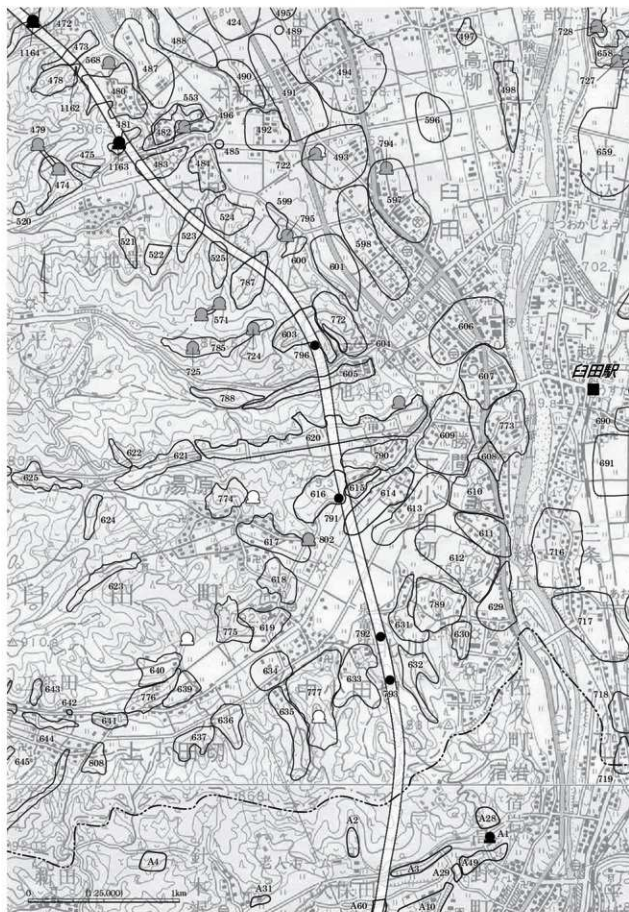
周辺遺跡のうちほぼ半数が城跡・砦・狼火台で、今回調査した荒城跡 (No.478) もその一つである。一方、佐久市地家遺跡 (No.480)・尾垂遺跡 (No.472) は寺院関連遺跡、佐久市北裏遺跡群 (No.318)・佐久穂町奥日影遺跡 (No.A60)・小山寺窪遺跡 (No.A30) などは集落遺跡として報告した。尾根の頂部に築かれた佐久市和田1号塚 (No.791) などは地域史を考える上で、新たな発見といえる。

引用・参考文献

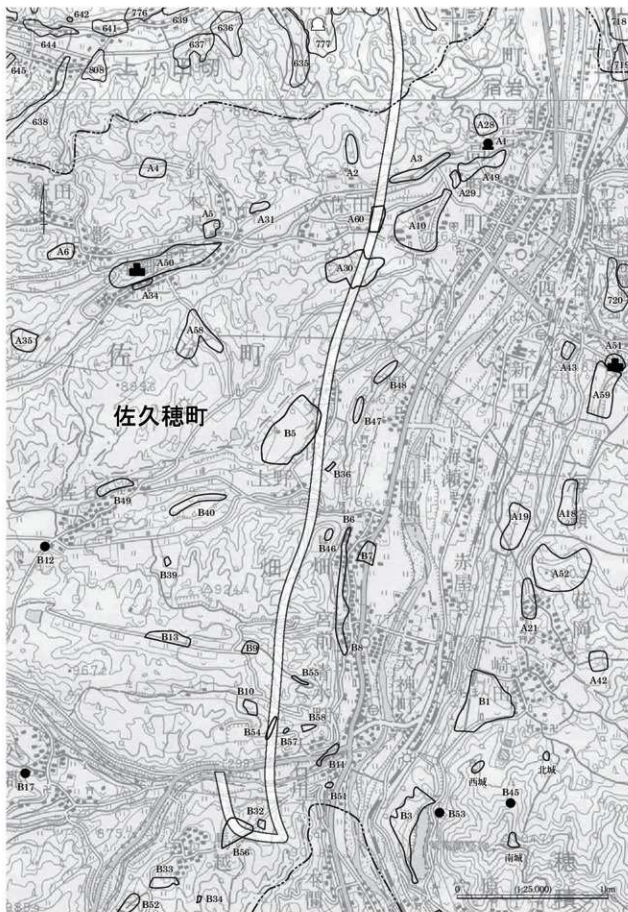
- 佐久市 1995『佐久市志』歴史編(一) 原始古代
 佐久市・白田町誌刊行会 2007『白田町誌』第三巻 考古古代・中世編
 佐久町誌刊行会 2004『佐久町誌』歴史編一 原始・古代・中世
 八千穂村誌刊行会 2003『八千穂村誌』第四巻 歴史編



第5図 周辺遺跡分布図(1)



第6図 周辺遺跡分布図(2)



第7図 周辺遺跡分布図(3)

第5表 周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	古墳	奈良	中世	近世
105	上野B遺跡							
221	下原屋敷遺跡群	伴野	○	○	○			
235	今井宮の前遺跡	今井					○	
236	今井城跡	今井					○	
241	中原遺跡群	今井					○	
244	三河田大塚古墳	三河田			○			
245	蟹ヶ沢古墳	中込						○
249	大塚遺跡群	中込	○		○			
251	梨の木遺跡1	中込						○
312	西村中遺跡	根岸	○	○	○			
313	水楢遺跡群	根岸						○
317	西裏遺跡群	伴野	○	○	○			
318	北裏遺跡群	伴野	○	○	○			
319	西東山遺跡	伴野	○	○	○			
320	東山遺跡	伴野	○	○	○			
321	北畑遺跡群	板井	○	○	○			
322	宮浦遺跡群	板井	○	○	○			
323	上北谷遺跡群	板井	○	○	○			
324	平馬塚遺跡群	板井	○	○	○			
325	仁東館遺跡	伴野	○					
326	虚空蔵山猿火台	根岸					○	
327	平馬塚古墳	板井			○			
328	西東山古墳群	伴野			○			
328	1号墳	伴野						
328	2号墳	伴野						
329	跡部備田遺跡群	跡部			○			
330	高日影古墳	根岸						
331	町田遺跡群	三塚	○	○	○	○		
396	遊石遺跡	小高山						
400	後澤遺跡	小高山	○	○	○			
401	小山の神A遺跡	小高山						
402	小山の神B遺跡	小高山	○	○	○			
403	長ヶ窪遺跡	小高山	○	○	○			
404	西の強遺跡	小高山						
405	上の山遺跡	小高山						
406	町後遺跡	前山					○	
407	居原敷遺跡	前山						
408	瀧の下遺跡	前山	○	○				
409	象ヶ岡遺跡	前山	○	○				
410	高尾A遺跡	前山	○	○	○			
411	倉澤遺跡	前山						
412	中道遺跡群	前山			○			
413	壺町田遺跡	三塚						
414	三塚鶴田遺跡	三塚					○	
415	小高山砦	小高山						
416	前山城跡	小高山					○	
417	三ノ東遺跡群	三塚	○	○	○			
421	長明塚遺跡	野沢	○	○	○			
422	金山遺跡	跡部	○	○	○			
423	東五里田遺跡	野沢	○	○	○			
424	備田遺跡	野沢	○	○	○			
425	野沢城跡	野沢	○	○	○			
469	梶原遺跡	小高山						
470	免ヶづ原遺跡	前山	○	○	○			
471	上野遺跡	前山	○	○	○			
472	尾垂遺跡	前山	○	○	○			
473	洞源遺跡	前山	○	○	○			
474	一丁田遺跡	大沢						
475	大棚遺跡	大沢	○	○	○			
476	高尾B遺跡	前山						
477	前山古墳跡	前山					○	
478	荒城跡	前山						○
479	一丁田古墳群	大沢			○			

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	古墳	奈良	中世	近世
479	1号墳	大沢					○	
479	2号墳	大沢					○	
480	地家遺跡	大沢		○	○			○
481	兜山遺跡	大沢		○	○			○
482	城山遺跡	大沢		○	○			○
483	大沢屋敷遺跡	大沢		○	○			○
484	大中沢遺跡	大沢					○	
485	蔵下遺跡	大沢					○	
486	大門下遺跡	前山					○	
487	大堀遺跡	前山		○	○			
488	御嶽遺跡	大沢						○
489	高畑遺跡	本新町						
490	大沢前田遺跡	本新町						
491	西裏遺跡群	本新町						
492	下町屋遺跡	大沢						○
493	原遺跡	大沢						○
494	白拍子遺跡群	取手					○	
495	伊勢道遺跡	取手					○	
496	城山古墳	大沢					○	
497	向畑遺跡	鏡泊屋						○
498	前堀遺跡	高柳						
518	日向小敷遺跡	大沢					○	
519	日向崩谷遺跡	大沢					○	
520	山田遺跡	大沢						
521	金山久保A遺跡	大沢						
522	金山久保B遺跡	大沢						
523	前の久保遺跡	大沢					○	
524	三枚平A遺跡	大沢					○	
525	三枚平B遺跡	大沢					○	
546	宝生寺山砦	伴野						○
548	泉屋敷跡	板井						○
549	水楢古墳	根岸					○	
550	川越石家址	前山						○
553	荒山城跡	大沢						
557	藪澤遺跡	野沢						○
561	山の神古墳	伴野						
564	清来寺古墳	小高山						
565	鱗浜古墳	前山						
566	高尾古墳群	前山						
566	1号墳							
566	2号墳							
566	3号墳							
566	4号墳							
566	5号墳							
567	洞源古墳群	前山						
567	1号墳							
567	2号墳							
567	3号墳							
568	鷺林古墳	前山						
571	三枚平古墳群	大沢						
571	1号墳							
571	2号墳							
596	原田遺跡	白田					○	
597	蛇塚遺跡	白田			○	○		
598	美里在家遺跡	白田			○	○		
599	滝ノ沢入口遺跡	白田					○	
600	荒谷遺跡	白田						
601	七曲り下遺跡	白田					○	
602	平遺跡	白田					○	
603	寺久保遺跡	白田					○	
604	下ノ城遺跡	白田					○	
605	台ヶ坂遺跡	白田					○	
606	反田遺跡	白田					○	

第2章 遺跡の位置と環境

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	古	中	近	
607	城下遺跡	白田	○					
608	城山遺跡	白田						
609	小山崎遺跡群	白田	○	○	○	○		
610	丸山遺跡	下小田切	○	○	○	○		
611	勝間原遺跡	下小田切	○	○	○	○		
612	栗ノ木遺跡	下小田切	○	○	○	○		
613	日影遺跡	下小田切			○	○		
614	家浦遺跡	下小田切	○				○	○
615	滝遺跡	湯原			○	○		
616	和田遺跡	湯原			○	○		
617	北側遺跡	湯原	○	○				
618	中島遺跡	湯原			○	○		
619	向城遺跡	中小田切	○	○				
620	上流・中流・下流遺跡	湯原			○	○		
621	兎玉・大平遺跡	湯原			○	○		
622	ジンジロ遺跡	湯原			○	○		
623	山の神遺跡	湯原	○	○				
624	梨子久保遺跡	湯原	○	○				
625	五里久保遺跡	湯原	○	○				
629	北川勝間遺跡	北川			○	○		
630	千曲台田遺跡	北川			○	○		
631	広沢遺跡	北川	○	○				
632	田島久保遺跡	北川			○	○		
633	城影遺跡	中小田切	○	○				
634	札幌宮遺跡	中小田切	○	○				
635	南久保・居村遺跡	中小田切	○	○				
636	前久保遺跡	上小田切	○	○				
637	広久保・株の久保遺跡	上小田切	○	○				
639	家裏遺跡	上小田切	○	○				
640	堂浦遺跡	上小田切	○	○				
641	大門地遺跡	十二新田			○	○		
642	岩下洞窟遺跡	十二新田			○	○		
643	日向遺跡	十二新田	○	○				
644	岩下遺跡	十二新田			○	○		
645	十二新田寺久保遺跡	十二新田	○	○	○	○		
658	藤山遺跡	上中込			○	○		
659	中反田遺跡群	大奈良	○	○	○	○		
690	戸井口遺跡	三分			○	○		
691	井上遺跡	三分			○	○		
716	観正田遺跡	三条			○	○		
717	南裏遺跡	三条			○	○		
718	東原谷遺跡	十日町	○	○				
719	十日町遺跡	十日町			○	○		
720	磨松A遺跡	岩水	○	○				
722	境塚古墳	白田			○	○		
724	滝ノ沢古墳	白田			○	○		
725	滝ノ沢群塚古墳	白田			○	○		
727	難山2号古墳	上中込			○	○		
728	難山3号古墳	上中込			○	○		
772	医王寺城跡	白田					○	
773	稲荷山城跡	白田					○	
774	湯原城跡	湯原			○	○		
775	向城跡	中小田切			○	○		
776	上小田切城跡	上小田切			○	○		
777	鷹峰城跡	中小田切			○	○		
785	上ノ城跡	白田			○	○		
787	滝ノ沢遺跡	白田	○	○	○	○		
788	山神久保遺跡	白田	○	○	○	○		
789	田島遺跡	白田	○	○	○	○		
790	下流遺跡	白田			○	○		
791	和田1号塚	湯原					○	
792	田島塚	北川					○	
793	水堀塚	小田切					○	

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代					
			旧石器	縄文	古	中	近	
794	法印塚古墳	法印塚						
795	荒谷古墳	荒谷						
796	庚申塚	庚申						○
802	北側1号墳	北側						
808	冷久保遺跡	冷久保						
1162	月明沢岩陰遺跡群	前山						
1163	兜山古墳	大沢						
1164	尾垂古墳	前山			○	○		
A1	塚塚古墳	高野町			○	○		
A2	雁田遺跡	高野町			○	○		
A3	北沢遺跡	高野町			○	○		
A4	たつま久保遺跡	上			○	○		
A5	下影遺跡	上			○	○		
A6	影遺跡	上			○	○		
A10	佐久西小学校裏遺跡	高野町			○	○		
A18	中原遺跡	海潮			○	○		
A19	上ノ原遺跡	海潮			○	○		
A21	中山遺跡	海潮			○	○		
A28	粟窪遺跡	高野町			○	○		
A29	宮の本遺跡	高野町			○	○		
A30	小山寺窪遺跡	高野町			○	○		
A31	施願魂塚遺跡	上			○	○		
A34	本郷遺跡	上			○	○		
A35	寺久保遺跡	上			○	○		
A42	家山遺跡	海潮			○	○		
A43	下原遺跡	海潮			○	○		
A49	高野城跡	高野町			○	○		
A50	福田城跡	上			○	○		
A51	海潮城跡	海潮			○	○		
A52	花園城跡	海潮			○	○		
A58	舟ノ窪遺跡	上			○	○		
A59	清水上遺跡	海潮			○	○		
A60	奥日影遺跡	高野町			○	○		
B1	崎田原遺跡	穂積			○	○		
B3	関谷遺跡	穂積			○	○		
B5	上野月夜原遺跡	畑			○	○		
B6	竹の下遺跡	畑			○	○		
B7	封地遺跡	畑			○	○		
B8	ムジナ沢遺跡	畑			○	○		
B9	宮の入遺跡	畑			○	○		
B10	細久保遺跡	畑			○	○		
B11	千ヶ日向遺跡	畑			○	○		
B12	佐口遺跡	畑			○	○		
B13	勝見沢遺跡	畑			○	○		
B32	中原遺跡	千代里			○	○		
B33	古原敷遺跡	千代里			○	○		
B34	向窪遺跡	千代里			○	○		
B36	反り峯遺跡	畑			○	○		
B39	南平遺跡	畑			○	○		
B40	馬込遺跡	畑			○	○		
B45	蟻城跡	穂積			○	○		
B46	権現山砦跡	畑			○	○		
B47	下畑遺跡	畑			○	○		
B48	下畑下の城跡	畑			○	○		
B49	佐口城跡	畑			○	○		
B51	大石川烽火台跡	千代里			○	○		
B52	馬越城跡	千代里			○	○		
B53	関谷東遺跡	穂積			○	○		
B54	満り久保遺跡	畑			○	○		
B55	畑寺久保遺跡	畑			○	○		
B56	馬越下遺跡	千代里			○	○		
B57	満り久保東遺跡	畑			○	○		
B58	千ヶ日向田地上遺跡	畑			○	○		

第3章 発掘調査の方法

第1節 発掘作業

埋文センターでは、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して発掘調査を実施している。

1 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺跡記号は調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表した記号である。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、北佐久郡・南佐久郡・小諸市・佐久市を示す「D」、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記から2文字を選択したものである。各種記録類や遺物注記に遺跡記号を利用している。

地家遺跡 (J I K E)	: DDK
兜山遺跡 (K A B U T O Y A M A)	: DKA
兜山古墳 (K A B U T O Y A M A K O F U N)	: DKF
大沢屋敷遺跡 (O S A W A Y A S H I K I)	: DOY
前の久保遺跡 (M A E N O K U B O)	: DMN
三枚平B遺跡 (S A N M A I B I R A B)	: DSR

2 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、主に遺構の形状や特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付したものは原則として変更していない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては、整理段階で新たに付与した。

今回の調査で用いた遺跡記号には、以下の種類がある。

S B : 概ね一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘込み【竪穴建物跡、竪穴状遺構】

S K : 単独もしくは他の掘込みとの関係がないS Bよりも小さな掘込み【土坑、井戸】

S T : S Bよりも小さな掘込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配置しているもの【掘立柱建物跡、平地式建物跡】

S D : 溝状の掘込み【溝跡、自然流路跡】

S F : 単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるものおよび炭化物の集中範囲

S M : 方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛上がり【古墳、墳墓、周溝墓、土坑墓、木棺墓もここに含める】

S Q : 遺物が集中する箇所

S X : その他、性格不明遺構

なお、SB内の柱穴・貯蔵穴などや、STを構成する個々の掘込みにはビット（記述・図を問わず個別に番号を付す場合「P」）を付した。また、自然流路跡に「NR」を付した場合がある。

3 調査グリッドの設定と呼称

地家遺跡・大沢屋敷遺跡・前の久保遺跡では、以下の方法で調査グリッドを設定した。兜山遺跡・三枚平B遺跡では調査グリッドの設定を行わず、兜山古墳では独自の任意グリッドを設定した。

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（ $X = 0.0000$, $Y = 0.0000$ ）を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した（第8図）。

大々地区は、 200×200 mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を 40×40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を 8×8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字番号を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、中地区を 2×2 mの16区画に分割したもので、北西から南東へ01～16の算用数字番号を与えた。中地区番号との間にはハイフンを挿入した。

グリッド名の実際の表記においては、読取りやすさを考え、大々～中地区番号の間にも適宜ハイフンを挿入することがあり、本書の図中でもそうした表記になっている場合がある。グリッド杭の設定は、表土掘削が終了し、遺構検出をほぼ終えた段階で業務委託により実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

なお、上記の調査グリッドとは別に、地形や土地区画の状況、調査の進ちょく状況に合わせて調査範囲を任意に分割し、「1区、2区……」等と呼称した遺跡がある。

4 表土掘削と遺構の検出

兜山古墳を除く5遺跡では、本格的調査に入る前段階に、遺跡の性格を把握するための確認調査として、重機を使用したトレンチ調査を実施した。トレンチ調査の所見に基づき、面的調査の有無、範囲、遺構検出面などを決定した。面的調査を実施した大沢屋敷遺跡、前の久保遺跡の遺構検出面は1面、地家遺跡の遺構検出面は2面である。表土を含む遺構検出面（第1面）までの堆積層は重機により掘削し、表土掘削が終了した部分から、手作業で掘削面の清掃を行い、遺構を検出した。遺物は上記の地区・グリッド名、出土層位、遺構に関連するものは帰属遺構名をポリ袋に記入して取上げた。

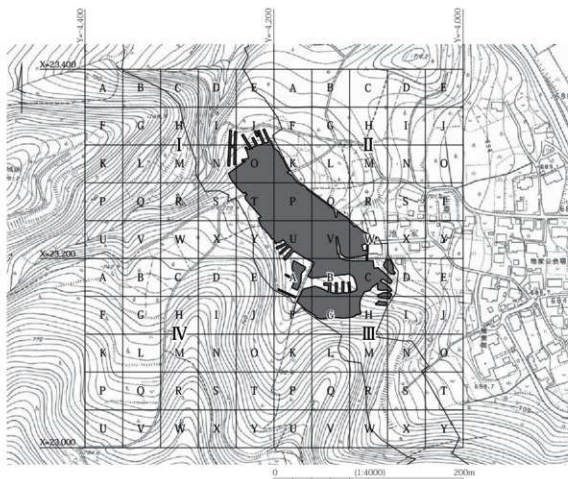
兜山古墳は未周知の古墳で、兜山遺跡のトレンチ調査の際に、横穴式石室の可能性のある石積みとして検出した。手作業で石積みの清掃を行って、横穴式石室の壁体石を確認し、古墳であることが確定した。

兜山遺跡と三枚平B遺跡は、本格的調査に入る前段階の確認調査で本調査不要と判断した。

5 遺構の発掘

竪穴建物跡は、埋土観察用のベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、埋土の堆積状況を把握・記録して、層位ごとに埋土を床面まで掘り下げ、柱穴、炉、カマド、周溝などの建物内施設の精査・記録を行った。ベルト部分の掘り下げと建物内施設の発掘は、多くの場合、併行して進めた。建物内施設を完掘した後は、完掘状態を記録し、その後に床面下（掘方）の状況を確認した。

基準線と地区(グリッド)の設定



大々地区(200×200mグリッド)：Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ ■ 他家遺跡 調査対象地

例：ⅡP08-13グリッドの座標位置

A	B	C	D	E	200m
F	G	H	I	J	
K	L	M	N	O	
P	Q	R	S	T	
U	V	W	X	Y	
					40m

大地区(40×40mグリッド)：ⅡA…ⅡY

ⅡP08-01	ⅡP08-02	ⅡP08-03	ⅡP08-04	8m
ⅡP08-05	ⅡP08-06	ⅡP08-07	ⅡP08-08	
ⅡP08-09	ⅡP08-10	ⅡP08-11	ⅡP08-12	
ⅡP08-13	ⅡP08-14	ⅡP08-15	ⅡP08-16	
				2m

小地区(2×2mグリッド)：
ⅡP08-01…ⅡP08-13…ⅡP08-16

01	02	03	04	05	40m
06	07	08	09	10	
11	12	13	14	15	
16	17	18	19	20	
21	22	23	24	25	
					8m

中地区(8×8mグリッド)：ⅡP01・ⅡP02…ⅡP08…ⅡP25

第8図 調査グリッドの設定と呼称

土坑は埋土を半載し、埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。埋土から出土する遺物の状況によっては、埋土上位を全体に掘り下げ、遺物出土状況を記録してから埋土下位の掘り下げへと進んだ。

掘立柱建物跡の柱穴は、掘方全体を若干掘り下げて柱痕跡を確認し、柱痕跡が断面にかかるように埋土を半載した。以後、土坑と同様な方法で調査を進めた。

溝跡および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、延長方向に直交するベルトを複数か所設定し、それぞれの埋土堆積状況を観察・記録しながら掘り下げた。

出土遺物については、出土状況に特徴のあるものなどは、付番して出土状況図の作成、写真撮影を行って取上げた。

兜山古墳については、出土遺物の記録・取上げを行いつつ石室内埋土を掘り下げ、併行して石室裏込め・掘方の調査を進めた。最終的には石室の解体調査を行った。

6 記録作成

遺構図・土層図はセンター職員およびその指導のもとに発掘作業員が作成した。測量基準杭を基準とする簡易遺方測量を基本としたが、遺構実測支援システム（ソフトウェア遺構くんCubic）を用いた測量も一部実施した。遺構図は中地区（8m×8m）単位に区切った割付図や、建物跡などの個別図を作成した。縮尺は1：20を基本とし、必要に応じて1：10図、1：40図を作成した。調査区・トレンチ配置図、地形図の作成は、業務委託を基本としたが、一部、遺構実測支援システムを用いてセンター職員および発掘作業員が行った。

写真撮影は、6×7フィルムカメラ（マミヤRB/ペンタックス）、35mmフィルムカメラ（ニコンFM2）または35mm相当の一眼レフデジタルカメラ（ペンタックスK-7）を併用して行った。フィルムはモノクロネガフィルム（フジネオパン100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム100）を使用した。撮影はすべてセンター職員が行い、現像と焼付けは業務委託とした。地家遺跡、兜山遺跡・兜山古墳、前の久保遺跡では、業務委託により遺跡全景の空中撮影を実施した。

7 自然科学分析

業務委託により樹種同定、炭化種実同定、放射性炭素年代測定を実施した。

樹種同定は、地家遺跡において、出土した木製品の利用木材の種類を同定することを目的に実施した。炭化種実同定は、地家遺跡において、出土した粒状炭化物の種類を同定することを目的に実施した。

放射性炭素年代測定は地家遺跡、大沢屋敷遺跡、兜山古墳において、遺構のより明確な年代推定を行うための資料を得ることを目的として実施した。地家遺跡・大沢屋敷遺跡は遺構出土の炭化物、兜山古墳は石室出土の人骨を測定試料とした。

第2節 整理等作業

1 遺物の整理

遺物は取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、主に材質別に土器・土製品・陶磁器、石器・石製品、金属製品、木製品、石造物に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品・陶磁器は接合を行いながら、観察と分類、破片数と重量の計測を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書への掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器・石製品は観察・分類を行いつつ、大きさと重量の計測を行い、報告書掲載遺物を抽出した。金属製品、木製品、石造物は観察・計測を行って、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は遺跡ごと、大別ごとに管理番号を付して遺物管理台帳に登録した。

実測は手実測により、1：1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器や須恵器、銭貨・石造物は拓本を行った。トレースは、製図ペンを用いた手トレースを行ったものと、描画ソフトIllustratorを用いたデジタルトレースを行ったものがある。後者については埋文センターで行った場合と、業務委託により実施したことがある。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustratorを用いてデジタル図版データを作成した。

2 記録類の整理

(1) 遺構図類の整理

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、堅穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための第二原図を作成した。修正原図や第二原図をもとに、Illustratorを用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、土層図、遺構分布図（全体図）などのデジタル図版データを作成した。

(2) 写真記録の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、遺跡別に写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。フィルム写真は遺跡ごと、撮影順にアルバムに収納した。モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムは、35mmはマウント仕様、6×7はスリーブ仕様で収納した。デジタル写真はJPEGおよびRAWデータを遺跡ごと、撮影順にハードディスクに記録した。

遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラを使用した。

3 報告書作成と資料収納

(1) 報告書作成

報告書の本格的な編集作業は、2017（平成29）年度に着手した。第1章から第3章に6遺跡全体を通じた調査経緯、地理的・歴史的環境、基本的調査方法についてまとめ、第4章から第8章で各遺跡の報告を行い、第9章に総括を掲載した。第4章から第8章は、遺跡の特徴を理解しやすい工夫し、章末に小結を設けた。第5章の兜山遺跡と兜山古墳については、近接する地点において一連の工程で行った調査であるため、2遺跡を同一章にまとめて報告した。

報告書作成にあたり、2019年3月26日、翌年度5月30日の2回、編集会議を行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

(2) 資料の収納

遺物は遺跡ごと、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・グリッド等の地点別にテンパコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図類は手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号(図面番号)を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分け、写真収納台帳に登録し、アルバム(ファイル)に収納した。

デジタルデータについては、センターで作成したデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは納入時点でCDないしDVDに記録済みである。

第4章 地家遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観 (第9図、PL1)

地家遺跡は佐久市大沢地籍に所在する。八ヶ岳連峰北麓から北東に延びる丘陵先端部の東向き斜面から裾部に立地し、遺跡範囲は東西約400m、南北約350m、標高は680～740mを測る。遺跡範囲の中央～東部には現地家集落が重なり、その東側は佐久盆地の南西縁を北流する片貝川沿いの低地部となる。縄文時代から中世の遺物散布地であるが、これまで、発掘調査が行われた経歴はない。

遺跡一帯は旧長命寺の比定地である。『佐久市志』(佐久市1993)によれば、長命寺は寛平五年(893)に開創された。天正十年(1582)に兵火により焼失し、その後、元禄十年(1697)に南東約1kmの現在地に再建された、という。遺跡内には旧長命寺の仁王門跡地に建立したと伝えられる二王堂があり、堂中には應永二十二年(1415)の銘がある石柱(佐久市有形文化財)が納められている。また、板碑が多く出土しており、『佐久市志』の集計では、佐久市に現存する板碑32点中18点を占める。

近隣遺跡の状況は、東側に広がる片貝川沿いの低地部には、縄文時代の遺物散布地である大堀遺跡や古墳時代の遺物散布地である御嶽遺跡がある。北方では、約100m離れた尾根上に鷺林古墳、月明沢を挟んだ対岸の尾根南斜面には平安時代の製鉄炉跡が確認された洞源遺跡(埋文センター2019)がある。ひとつ南側の丘陵には兜山古墳および縄文時代・古墳時代～古代の遺物散布地である兜山遺跡が存在する(本書第5章)。中世では、東南方に荒山城、月明沢を挟んだ北西の尾根上に荒城、西方1kmに前山古城、北西1.7kmに前山城の四城跡が、城砦跡として周知されている。一方、中世の集落跡は明確になっていない。さらに、4.5km北西に位置する榛名平遺跡では、約52,000㎡という広大な面積の発掘調査がなされ、旧石器時代から中・近世に至る多量かつ多彩な内容の遺物や遺構群が明らかになった(市教委2001)。

2 調査の経過 (第10・11・13～23図、PL1・2)

中部横断道用地は遺跡範囲の西部を南北に横断する。調査対象地内の地形は、中央に東に開ける谷があり、その南および西～北を尾根が囲む。北尾根の北側斜面は月明沢に向かって下っている。調査前の地目は畑地、宅地、荒地および山林であり、尾根部を主体にその造成区画が幾段にもわたっていた。

中部横断道用地は旧来の地家遺跡のほぼ範囲外であった。2008年、県教委が遺跡隣接地として試掘調査を行ったところ、谷部で自然流路跡および人為的掘削の可能性のある溝状落ち込みを確認したほか、焼土跡や、黒曜石剥片、弥生時代～古代の土器、中世の陶磁器を検出した。市教委との協議の結果、弥生～中世の集落跡「地家B遺跡」として新たに登録することとなった。長野国道と県教委の協議により、地家B遺跡の保護措置は記録保存のための発掘調査とすること、発掘調査を埋文センターに委託することが決定した。記録保存のための発掘調査は2009・2010・2011・2013・2014年度に実施した。

2009年の発掘調査にあたって、段造成により区切られた畑地・宅地等の土地区画に任意の区番号を付け、発掘調査の単位とした。区番号は、北尾根頂部を東西に通る市道30-41号線の南側に1～8・11～12区南までを、30-41号線より北側に9・10区を付した。その後、2010年度に、対象地全体を大きく三分



第9図 遺跡範囲・調査区位置図

割し、北からA区・B区・C区と呼称することとした。A区は30-41号線より北側の部分、B区は30-41号線から後述の仮設道路部分まで、C区はそれより南側の部分である。大区分内の小区分は2009年の区を踏襲した。したがってA区はA9区・A10区のみとなる。B区は2010・2011・2013・2014年度にそれぞれB13・14区、B15区、B16区、B17区を加えた。C区は2010年にC1区～C9区を設定した。

2009年度の調査は、北・西尾根部～谷部について行った（A区、B1～8・11～12区南）。北尾根の北側斜面では、まずトレンチ調査を行った。トレンチ掘削範囲の北半部では遺構、遺物はなかったが、南半部で土坑、遺物を検出したため、面的調査を行った（A10区）。北尾根の頂部～南斜面にかけては、県教委の試掘調査結果に基づいて当初から面的調査を進め、美濃須衛四耳壺を蔵骨器に用いた墓2基を含む中世の墓群を確認し、板碑や多数の五輪塔各部が出土した。谷部についても当初から面的調査を行い、中世の礎石建物跡や竪穴建物跡を検出した。谷最低部では、中世以降に埋没した自然流路跡から土器・陶磁器や多数の木製品が出土した（B1～8・11～12区南）。自然流路跡は東方遺跡範囲外へも続き、また、同じく遺跡範囲外の南尾根斜面部でも五輪塔各部を確認した。西尾根東斜面では、その南半部でトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物はなかった。他の時代では、北尾根頂部付近で縄文時代中期の竪穴建物跡、弥生時代前期の土坑、弥生時代後期の方形周溝墓、北尾根頂部から谷低部付近で奈良・平安時代の竪穴建物跡を確認した。調査面積は6,300㎡、期間は4月13日～12月21日である。

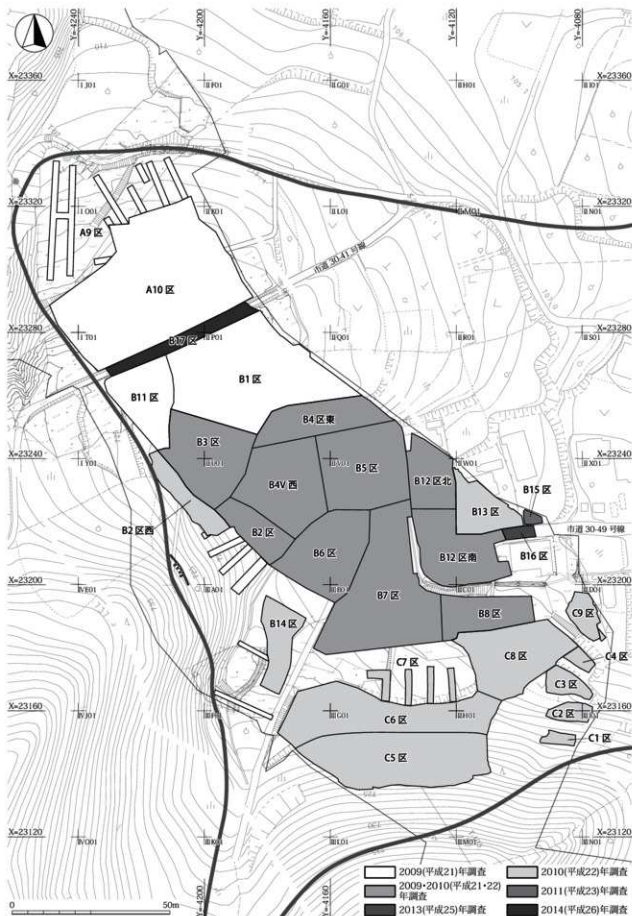
2009年度の調査により、「地区B遺跡」の範囲が拡大することが明らかになったため、市教委と県教委は協議を行い、遺跡範囲を拡大したうえで地家遺跡と統合し、新たな「地家遺跡」となった。

2010年度は、①南尾根北斜面部、②西尾根東斜面部、③谷最低部の自然流路跡、④谷部自然流路跡北岸部、⑤同じく南岸部の5箇所を対象に調査を実施した（B2区西～B13区、C区）。①では、斜面を掘削したテラス状平坦部を9箇所検出し、テラスとその周辺で火葬骨を納めたビットを確認したほか、広い範囲で火葬骨片や五輪塔各部が出土した。特に、中央のテラス7は、平坦部の石敷内に区画石列をもち、区画内部に梵字を刻んだ大型五輪塔が並ぶ状況を捉えた（C5区）。②でも、人骨や礫、原位置を保つ石造物はないものの、同様な形状のテラス状平坦部2箇所が見つかった。また、板碑破片が量的にも大形破片も集中していた（B2区西）。③からは、中世の国産土器・陶器や輸入陶磁器とともに多量の木製品が出土した。木製品は、建築部材や端材、椀・箸・下駄などの生活用具に加え、仏典に登場する語を連ねた木簡、塔婆、形代など、仏教関連あるいは呪的性質をもつ品々がある。また、木製印も出土した（B2区西～B6～7区・B12区南・B14区）。④では、中世の建物群を調査した。倉庫と推測し得る竪穴建物、仏堂と考えられる掘立柱建物跡・礎石建物跡などがある（B5区・B12区北・B13区）。⑤では、まずトレンチ調査を行った。トレンチ掘削範囲の西半部では遺構、遺物はなかったが、東半部で土坑、遺物を検出したため面的調査を行い、柱穴様の小土坑群や平安時代の竪穴建物跡を検出した（C8・9区）。調査面積は10,472㎡、期間は4月5日～12月24日である。なお、B6区・B7区・B12区南には市道30-49号線が通っていた。この道路下部分については、所定の手続をとり、B7・8区南端部に仮設道路を切り回したうえで、調査を行った。

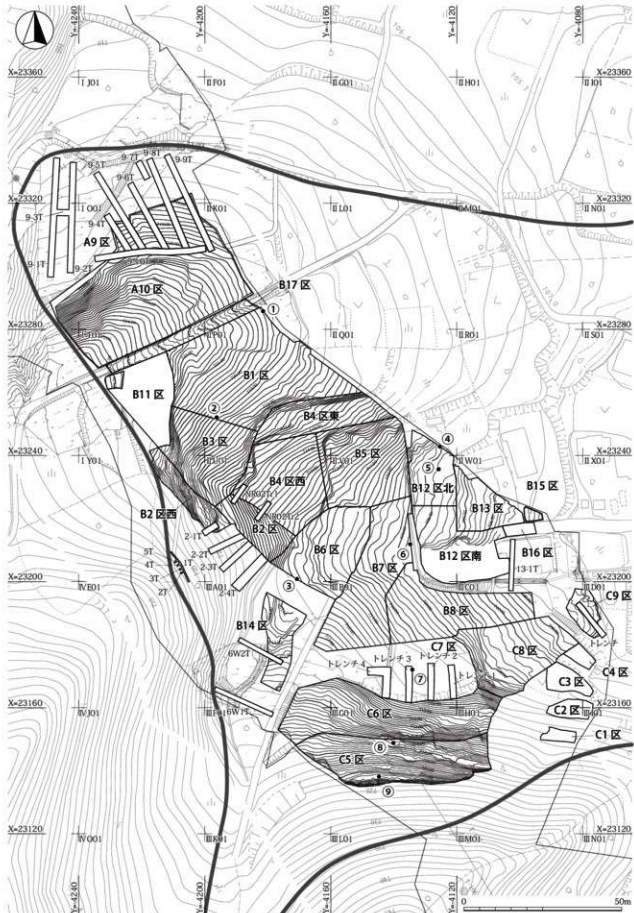
2011年度の調査対象は、B13区の東側に隣接する小範囲である（B15区）。谷部自然流路跡北岸部にあたり、B13区の遺構群が続く状況を予想したが、遺構・遺物とも存在しなかった。調査面積は28㎡、期間は11月7日～11月22日である。

2013年度の調査対象は、市道30-49号線下部分で、B13・15区の南側に隣接する（B16区）。B13区の遺構群が続く状況を予想したが、遺構・遺物はなかった。調査面積は170㎡、期間は11月20日である。

2014年度の調査対象は、北尾根頂部に位置する市道30-41号線下部分である（B17区）。隣接部分で確認した古代や中世の遺構が存在することを予想したが、道路造成のかく乱が著しく、検出した遺構は古

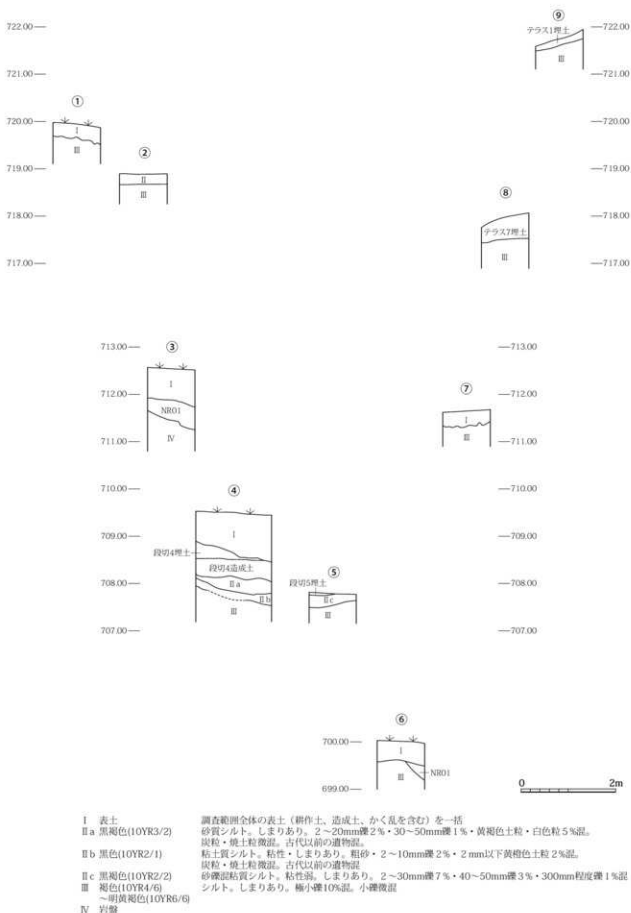


第10図 年度別調査範囲図



第11図 トレンチ・調査区配置図

第4章 地家遺跡



第12図 土層柱状図

代の土坑1基のみである。調査面積は80㎡、期間は7月7日～7月31日である。

なお、上記のように、発掘調査期間中に「地家B遺跡」から「地家遺跡」へと遺跡名の変更があった。このため、遺跡記号は、2009年度は「DDB」、2010年度以降は「DDK」を用いた。出土遺物の注記にも2009年度は「DDB」、2010年度以降は「DDK」を記している。

3 基本層序 (第11・12区)

調査対象地内の地形は、中央に東に開ける谷があり、その南および西～北を尾根が囲む。北尾根の北側斜面は月明沢に向かって下る。発掘範囲を上記の地形により6区分し、中央低地部、南尾根北斜面部、西尾根東斜面部、北尾根南斜面部、北尾根頂部、北尾根北斜面部と呼ぶこととする。中央低地部の最底部には埋没した自然流路跡が存在する。主流路は南西から北東に下り、B6区で屈曲してほぼ真東に延びる。屈曲部に北西から小規模な支流路が合流する。主流路をNR 01、支流路をNR 02と呼称した。

基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる。第Ⅰ層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査範囲全体の表土を一括する。第Ⅱ層は北尾根南斜面から中央低地部に堆積する黒色土である。B1区南西部からB3区、B4区西、B5区、B6区、B7区北部～B13区北部にかけて、NR 01・02の北岸部に帯状に分布する。主にB12区の調査状況によりⅡa・Ⅱb・Ⅱcに細分した。Ⅱa・Ⅱbは古代以前の遺物を包含し、中世以降の遺物を含まない。Ⅱcは遺物の包含を確認していない。Ⅱ層分布の西部にあたるB1区南西部からB6区にかけては、古代以降の遺物を包含するが、Ⅱa・Ⅱbのどちらに相当するのかわけがなかった。第Ⅲ層は遺跡全体の基盤を成す褐色～明黄褐色土である。Ⅱ層分布範囲および南尾根北斜面部では最上部は褐色(10YR4/6)を呈し、また、南斜面のテラス下に灰黄褐色を呈する部分(10YR4/2)を確認した。土壌化の進行による変化部分と推測する。第Ⅳ層は砂岩質の岩盤で、西尾根東斜面部のB2区西(テラス11・12)や中央低地部のB6・7区(NR 01層～底部)等で確認した。

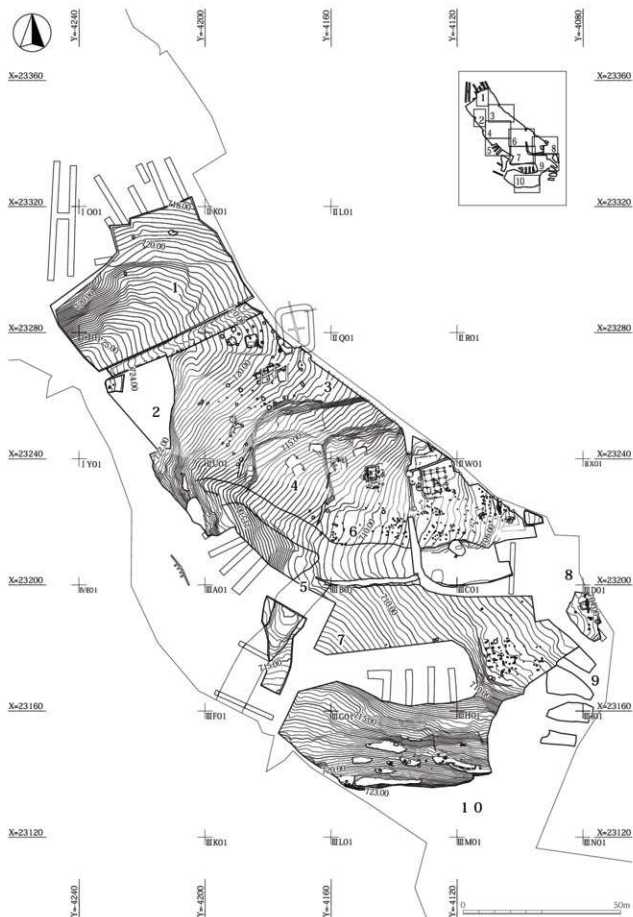
遺構および自然流路跡NR 01・02は第Ⅲ層上面で検出した。ただし、一部の中世遺構については、Ⅱ層より層位的に上位にあたる中世造成土上面で検出した例がある。

引用・参考文献

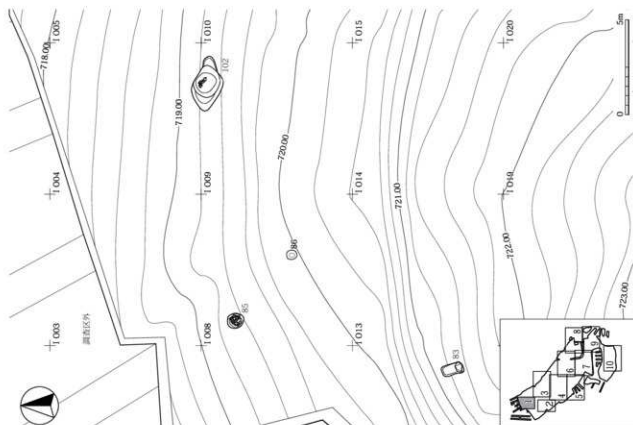
佐久市 1993『佐久市志』歴史編(二) 中世

市教委 2001『榛名平遺跡』

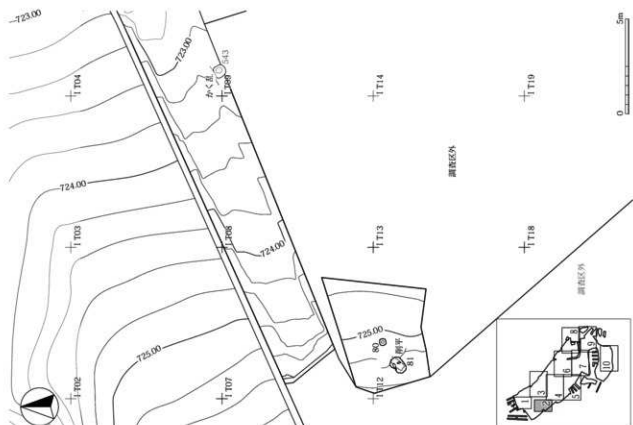
埋文センター 2019『小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡 尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢岩除遺跡群』



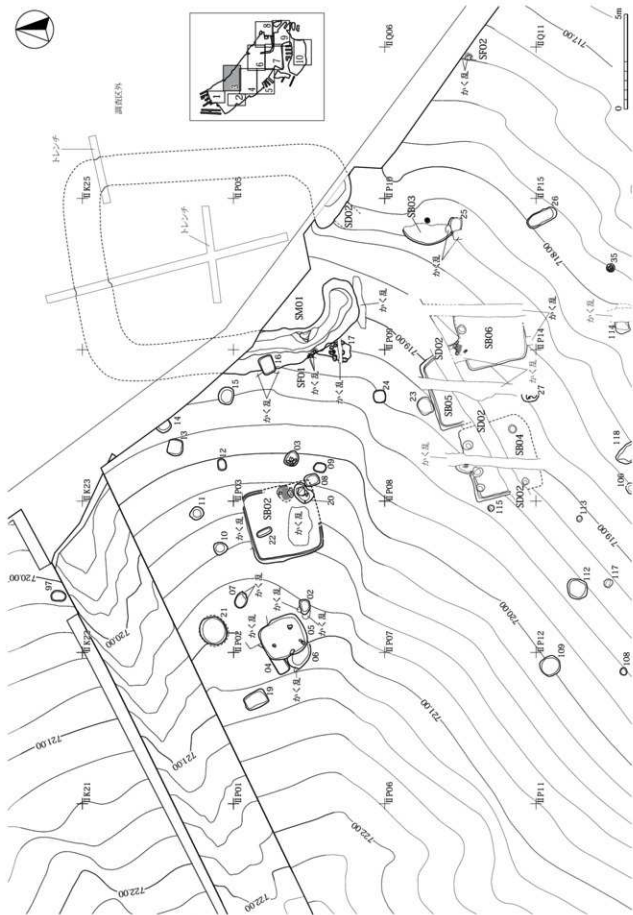
第13图 遺構分布全体图



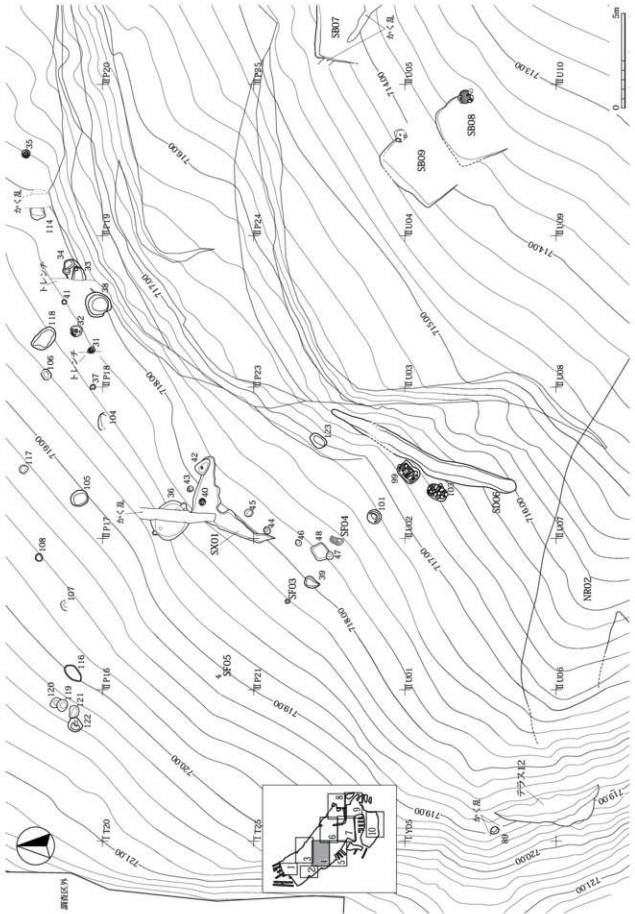
第14図 遺構分布部分拡大図(1)



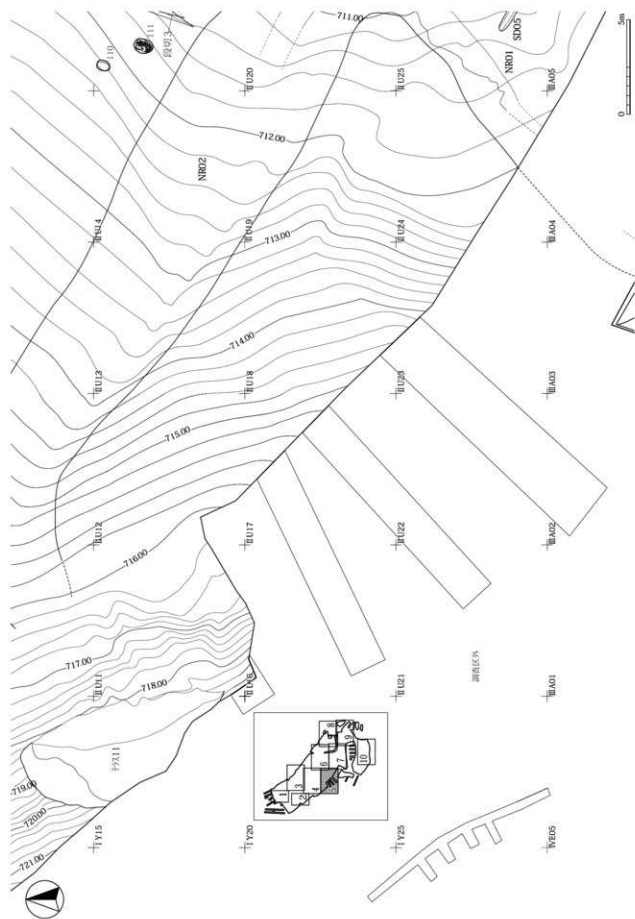
第15図 遺構分布部分拡大図(2)



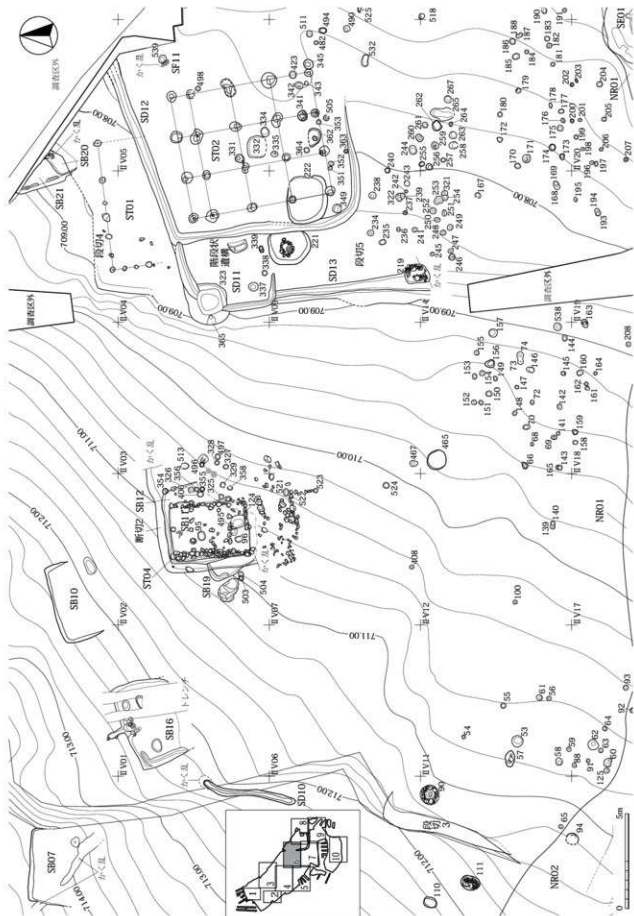
第16図 遺構分布部分拡大図(3)



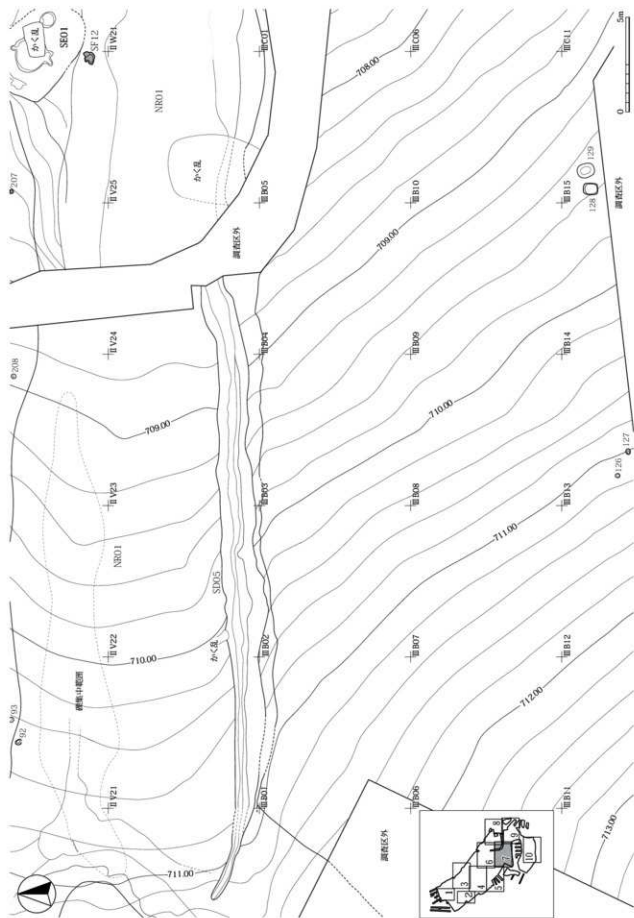
第17図 遺構分布部分拡大図(4)



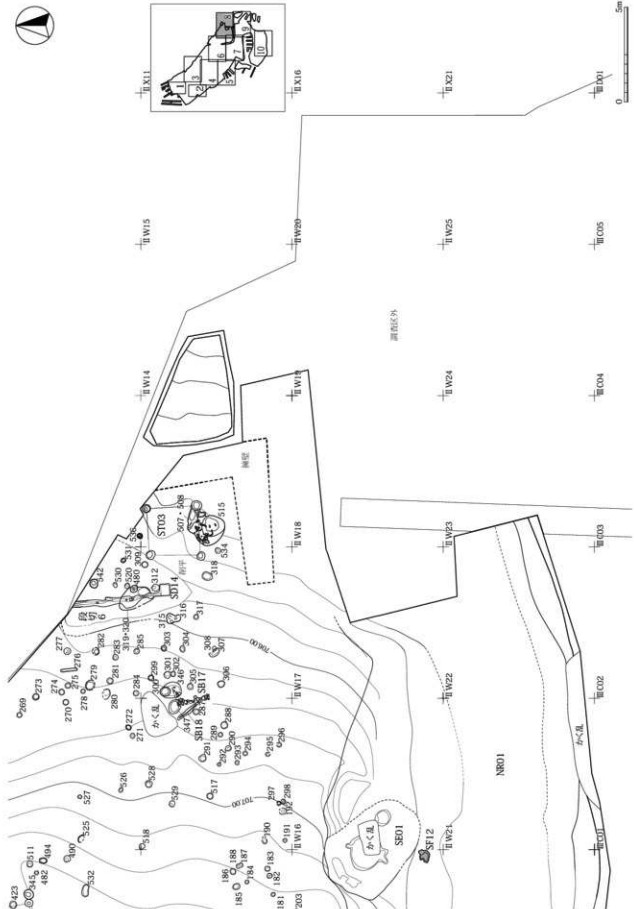
第18図 遺構分布部分拡大図(5)



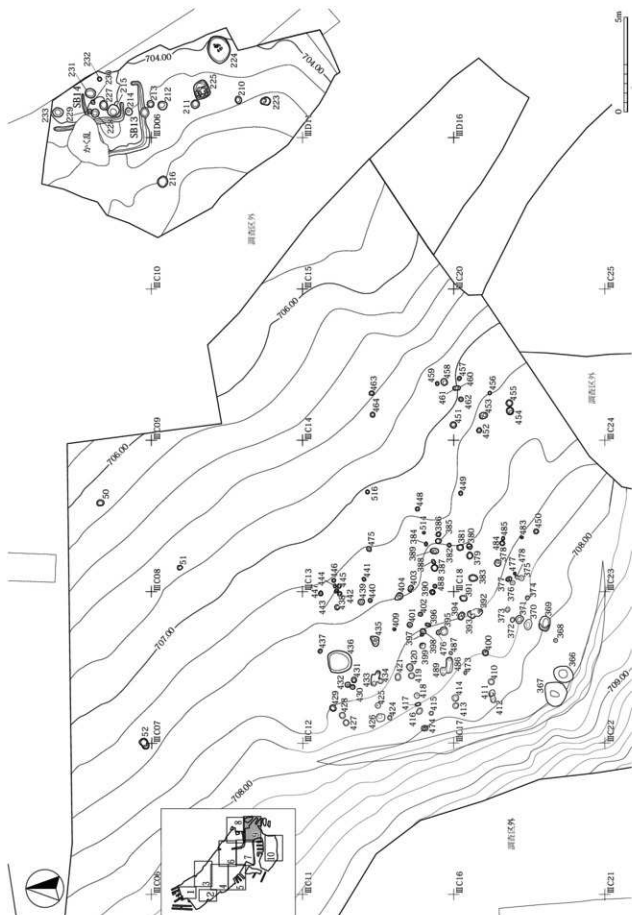
第19図 遺構分布部分拡大図(6)



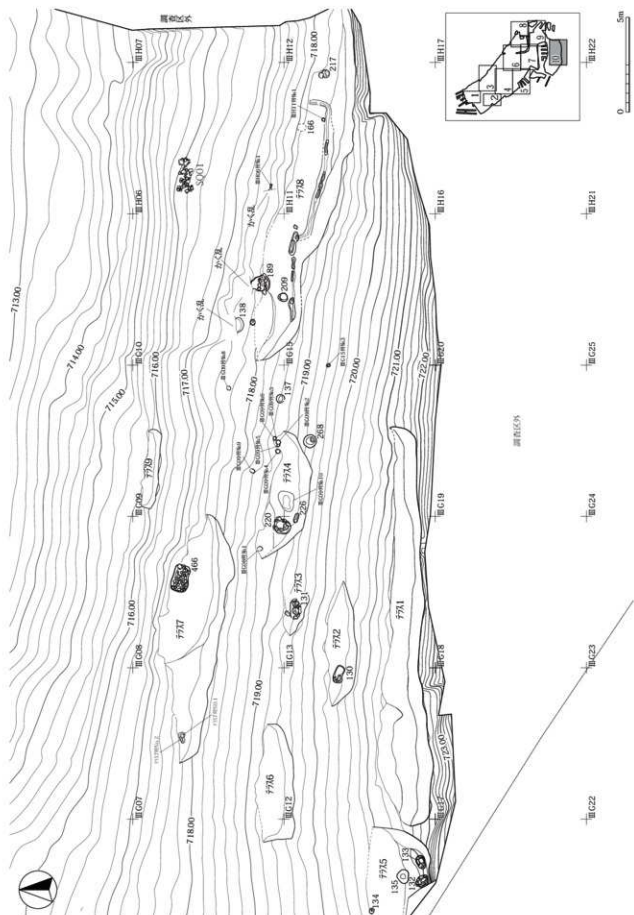
第20図 遺構分布部分拡大図（7）



第21図 遺構分布部分拡大図(8)



第22図 遺構分布部分拡大図(9)



第23図 遺構分布部分拡大図(10)

第2節 縄文～弥生時代の遺構と遺物

1 概観

北尾根頂部から南斜面上部にあたるB1区で、縄文時代中期前葉の竪穴建物跡1軒、弥生時代前期の土坑3基、弥生時代後期の方形周溝墓1基を検出した(第13・16・17図)。今回の調査で検出した土坑はおよそ500基を数えるが、時期不明確なものが相当数あり、そのなかに縄文～弥生時代の土坑を含む可能性はある。しかし、遺物の内容や出土状況から、該期に属すると判断できたのは3基である。

遺物は、遺構と同じ時期の土器のほか、遺構外から縄文時代早期末葉・前期初頭・中期初頭・後期初頭～末葉、弥生時代前期および後期の土器が出土した。縄文早期～後期と弥生時代後期土器の出土数は少ないが、弥生時代前期の土器は、北尾根頂部から谷部にかけての広い範囲からかなりの量が出土している。石器は石鎌・石鎌未製品、石錐、スクレイパー、横刃形石器、打製石斧、石鉞、磨製石斧がある。石器の主体は弥生時代前期と思われるが、出土した縄文土器と同じ時期に属するものを含む可能性は高い。

2 遺構

(1) 竪穴建物跡

SB 03 (第24図、P.L2)

位置：B1区、II P 09 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。削平のため西部の床と壁のみ残存する。重複関係：SK 25 に切られる。埋土：にぶい黄褐色シルトの単層である。形状・規模：平面形は円形ないし楕円形と考える。残存規模は南北方向2.6m、東西方向1.4mを測る。床・壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認できなかった。壁は残存部の最大が10cmで、斜めに立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：なし。炉：西壁から1.3m内側に位置する土器埋設炉で、長径28cm、短径24cm、深さ17cmの掘方内に、底部を切取った深鉢を設置している。炉体土器上端は床面からやや突出する。割れた口縁部片が炉体内に落込んでいた。炉体土器は北側で掘方壁に接し、その外側部分の床は被熱赤変している。炉底は赤変していない。遺物：埋土から縄文時代中期前葉土器と黒曜石砕片が出土した。時期：炉体土器と埋土出土土器(第26図I・2)の時期をもって、縄文時代中期前葉と考える。

(2) 土坑

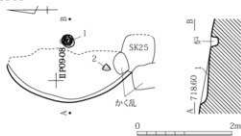
SK 21 (第24図)

位置：B1区、II K 22 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：レンズ状堆積を示す1～4層が埋積する。形状・規模：平面形は長径158cm、短径138cmの楕円形を呈する。断面形は底部がやや広がる袋状を呈し、深さ30cmを測る。底面は中央から壁に向かって緩やかにせりあがっている。遺物：3層を主体に、弥生時代前期土器(第26図3～11)、黒曜石石鎌未製品・両極石器・剥片・砕片が出土した。時期：埋土出土土器の時期をもって、弥生時代前期と推測する。

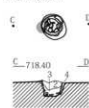
SK 25 (第24図、P.L2)

位置：B1区、II P 09 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SB 03 を切る。埋土：暗褐色土の単層である。形状・規模：北西部と南西部をかく乱されているが、平面形は東西80cm、南北70cmの隅丸方形を呈する。断面形は逆台形を呈し、平坦な底面から壁が斜めに立ち上がる。深さは最大10cmを測る。遺物：南壁際の東寄り底面直上から浅鉢(第26図13)と小形鉢(第26図12)各1個体が並んで出土した。浅鉢は正位の状態、小形鉢はその西脇に横に倒れた状態であった。両者とも完形ない

SB03



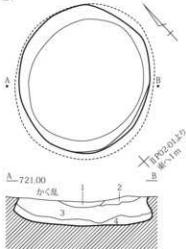
土器埋設炉図



- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3) しまりなし。黄褐色小ブロック微混。海泡状性状
- 2 暗褐色(10YR3/2) しまりなし。やや黒色帯びる。1層に類似
- 3 黒色(10YR2/1) しまりなし
- 4 黒褐色(10YR3/2) しまりなし

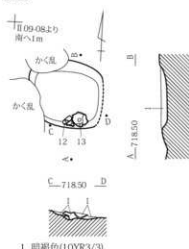
0 1m

SK21



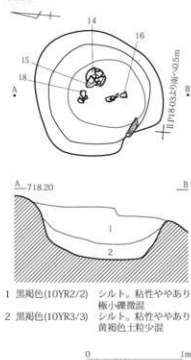
- 1 暗褐色(10YR3/3) しまりなし。黄褐色土極小ブロック混
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/4) しまりややあり。地山土主体
- 3 黒褐色～暗褐色(10YR2/3～3/3) しまりなし。黒褐色土・暗褐色土混在 にぶい黄褐色土混。中心部は黒色・隙間は黄色帯びる
- 4 暗褐色(10YR3/3) しまりなし。黒褐色土・暗褐色土混在 にぶい黄褐色土やや混在。3層に類似

SK25



- 1 暗褐色(10YR3/3) しまりなし 灰黄褐色粒質土小ブロック微混 黒色帯びる

SK38



- 1 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性ややあり 極小礫微混
- 2 黒褐色(10YR3/3) シルト。粘性ややあり 黄褐色土粒少混

0 1m

第24図 SB03、SK21・25・38 遺構図

しほぼ正形に復元できた。時期：上記の浅鉢と小形鉢の時期をもって、弥生時代前期と推測する。本遺構については、2個体の土器を土坑へ埋納したことを推測し得るため、墓である可能性を想定する。

SK 38 (第24図、P L 2)

位置：B 1区、II P 13・18グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：レンズ状堆積を示す1～2層が埋積する。形状・規模：平面形は直径約140cmのやや不正な円形を呈する。断面形は逆台形に近いU字状を呈し、深さは55cmを測る。遺物：底面から略完全形の浅鉢1個体(第27図14)が正位の状態で出土したほか、埋土から弥生時代前期土器、黒曜石石核・石鎌未製品・両極石器・剥片・砕片、緑色片岩片が出土した。時期：出土土器の時期をもって、弥生時代前期と推測する。

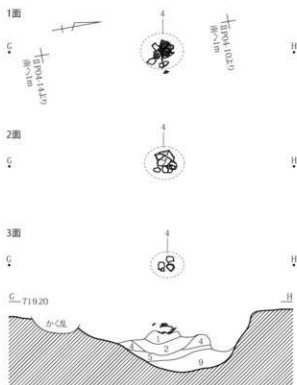
(3) 方形周溝墓

SM 01 (第25図、P L 2)

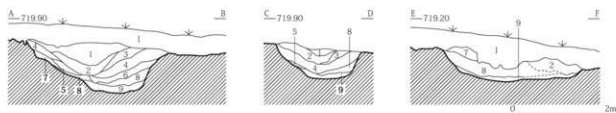
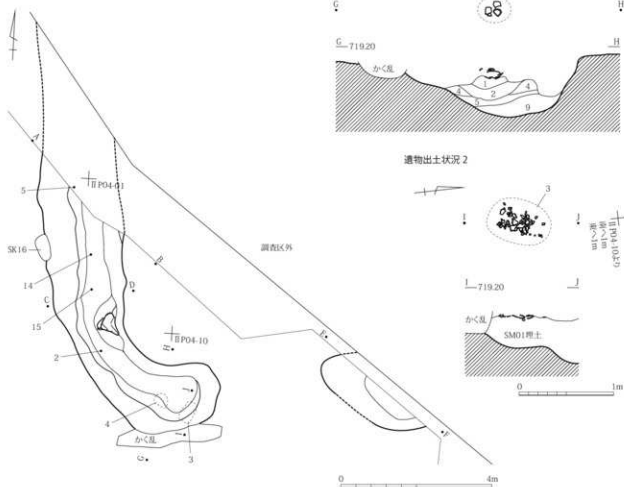
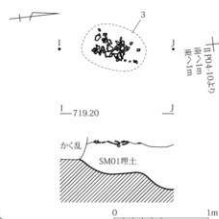
位置：B 1区、II K 23、II P 03～05グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。大部分が北東調査区外となり、発掘したのは周溝西辺部から南辺部にかけての一部である。ただし、土地所有者の承諾を得て、北東隣接地に掘削した手掘りトレンチで、周溝の北辺および東辺を確認できたため、およその規模が判明した。重複関係：SK 16に切られる。埋土：断面レンズ状あるいは三角形状堆積を示す1～9層が埋積する。1・2層は黒褐色シルト、3層以下は褐色シルトが基調であり、上層と下層に2大別する

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 表土 | シルト。しまりなし |
| 1 黒褐色(10YR2/2~3) | 黒褐色シルト・黒色シルト塊に混 |
| 2 黒褐色(10YR3/2) | シルト。しまりなし |
| 3 褐色(10YR4/4) | 黒褐色・黒土・にぶい黄褐色シルト塊 |
| 4 褐色(10YR4/4) | に混。黄褐色土ブロック少混 |
| 5 暗褐色(10YR3/3) | シルト。ややしまりあり |
| 6 暗褐色~にぶい黄褐色(10YR3/3~4/3) | 暗褐色シルト塊に微混 |
| 7 褐色(10YR4/4) | シルト。しまりなし |
| 8 にぶい黄褐色(10YR4/3) | 黒褐色シルト塊に微混 |
| 9 にぶい黄褐色~褐色(10YR4/3~4/4) | シルト。しまりなし |
| | シルト。しまりなし |
| | 8 粘土基調 |
| | 暗褐色・黒褐色シルト塊に少混 |
| | 黄褐色シルトブロック微混 |
| | シルト。しまりなし |
| | シルト。しまりなし |
| | シルト。しまりなし |
| | にぶい黄褐色シルト・5~20mm褐色 |
| | 粘質土ブロック混。黄褐色土ブロック混 |

遺物出土状況 1



遺物出土状況 2



第25図 SM01 遺構図

ことも可能であろう。3層以下は内側（墳丘側）から多く流れ込んだような様相を呈し、調査区内には残存しないが、周溝に囲まれた内部に墳丘が存在したことを示唆する。構造：墳丘部分の規模は東西8.3m前後、南北11mほどである。周溝は南辺に間隔3m前後の途切れ部を有する。途切れ部は想定される南北中軸よりやや西に寄る。周溝は上面幅1.5～2m、深さ0.7～1.1mを測り、断面形は逆台形を呈するが、壁の立ち上がりの角度は、墳丘側が急で、外側は緩やかである。遺物：遺物は周溝埋土から弥生時代後期末の土器が出土した。器種は壺・甕・小型甕・台付甕・高坏・鉢・小型無頸壺・ミニチュア土器がある（第32図1～15）。南辺途切れ部脇では、甕1個体が潰れたような状態で出土し、ほぼ完形に復元できた（第32図4）。土器のほとんどは1・2層から出土しており、周溝がある程度埋没した後に、墳丘から転落してきたことを推測する。時期：出土土器の時期をもって、弥生時代後期末と推測する。

3 遺物

(1) 縄文～弥生時代前期の土器

S B 03（第26図1・2、P L 8）

縄文時代中期前葉の甕内式が出土した。1は炬体土器に使用された深鉢で（第2節2参照）、胴下部を欠く。口唇部から口縁部にかけて突起が付き、口縁部の1か所を穿孔する。胴部は隆帯による三角形形状の区画文と抽象文を組み合わせて文様を構成し、隆帯の脇には幅広の押引文と三角押文を施文する。2は深鉢の口縁部で、隆帯による三角形形状の区画文を交互に組み合わせて文様を構成し、隆帯脇には幅広の押し引き文と三角押文を施文する。

S K 21（第26図3～11、P L 8）

弥生時代前期の水Ⅱ式と推測する土器が出土した。3～8・10は条痕を施す甕である。3は胴部が膨らみ頸部が括れ、口縁部が外反する器形を呈する。口唇部には、刻みを入れた双頭状の三角形突起が付き、外面は口唇部直下から頸部にかけて斜位方向、胴部以下は縦位方向の粗い条痕を施す。内面は器面が摩耗し不明瞭だが、口唇部直下から頸部までは横位方向のケズリ後ナデ調整、胴部は斜位方向のケズリ後ナデ調整を施す。4は口縁部で、口唇部直下から斜位方向の条痕を施す。内面は、横位方向の粗いミガキもしくはナデ調整である。5～8は胴部で、5は斜格子目状、6・7は横位～斜位方向、8は羽状構成の粗い条痕を施す。7は右下がりの条痕を、左右両側の左下がりの条痕が切る。内面は、5が斜位方向のケズリ後粗いミガキ、6・7が横位方向のナデ調整、8がケズリもしくはナデ調整で、6・8には擦痕が残る。9は無文の甕で、頸部が弱く括れる。口唇部は斜め上方からのナデ調整により、雑ではあるが面取りを行う。外面は器面状態が悪く不明瞭だが、口唇部直下から頸部までは横位方向、胴部は縦位方向のナデ調整を施し、内面は全体的に横位方向のナデ調整となる。10は底部で、外面は縦位方向の条痕、内面は横位方向のナデ調整を施す。11は浅鉢の可能性が高い胴部破片で、外面は2条以上の沈線により曲線などの文様を描き、内面には斜位方向のミガキもしくはナデ調整を施す。

S K 25（第26図12・13、P L 8）

弥生時代前期の水Ⅱ式と推測する土器が出土した。12・13は、墓と推測するS K 25の底面直上から並んで出土したものである（第2節2参照）。12は小形の鉢で、外開きの器形を呈する。底面の約1/2範囲が凹んで段状を呈し、平置きすると不安定である。口唇部には、刻みを入れた双頭状の三角形突起が少なくとも4か所に付くが、間隔は不揃いである。外面は、口唇部直下から底部にかけて縦位～斜位方向のナデ調整を施すほか、非常に不明瞭だが、条痕の可能性のある極めて浅い擦痕が付く部分も認められる（実測図中の拓本）。内面は、口縁部までは横位方向のケズリもしくはナデ調整で、擦痕が残り、胴部以下はナデ調整となる。13は浅鉢で、7単位の波状口縁を呈する。外面は無節縄文を施文し、口唇部直下には波

頂部をつなぐように、1条の沈線が反時計回りに巡る。また、波頂部下の1か所を穿孔する。内面は器面が磨滅し不明瞭だが、ナデ調整であろう。

SK 38 (第27図14～24, PL 8)

弥生時代前期の水Ⅱ式と推測する土器が出土した。14は浅鉢で、口縁部が短く外反し、底面は上げ底状に浅く窪む。口唇部には三角形突起が付き、胴上部は沈線でレンズ状の文様を描く。レンズ状の文様は、下部は弧状だが上部は直線的で、2条の沈線により連結する。胴下部は横位方向のミガキを施す。内面は摩耗し不明瞭だが、ミガキもしくはナデ調整であろう。外面全体が赤色塗彩され、文様を構成する沈線間にも赤色部分が残る。また、種実圧痕の可能性がある直径2mm前後の粒状の圧痕が器面内外に複数観察できる。15～22は甕である。15～17は口縁部で、15は直立気味に移行し、16は外反する。17は内傾するものとする。15は口唇部に、斜め上方からのナデ調整による面取りを行い、わずかだがナデ調整の間が瘤状に盛れる。無文で、器面内外にナデ調整後、横位方向の粗いミガキを施す。また、わずかだが外面に炭化物が付着する。16・17は口唇部を刻むが、16の刻みは絡条体による。口唇部以下は無文で、器面内外にナデ調整を施す。18～22は胴部で、18は斜位方向、19・21は縦位方向、20は横位方向、22は横位～斜位方向の条痕を施す。内面は全てナデ調整である。23・24は浅鉢である。23は口縁部がわずかに外反し、口唇部には不明瞭だが三角形突起のような部分が見られる。胴部は沈線により14と類似する文様を描く。24は胴部で、横位沈線を描く。内面はいずれも摩耗のため不明瞭だが、ミガキもしくはナデ調整であろう。

遺構外 (第27～30図25～105, PL 9)

縄文時代早期末葉～弥生時代前期にかけての土器が出土した。以下、時期ごとに概観する。

25～30は早期末葉で、胎土に繊維を含む。25～29は燃糸文を施文し、内面にはナデ調整を施す。30は器面状態が悪く一部不明瞭だが、単節による横位羽状構成の縄文を施文しており、内面には粗い横位方向の条痕を施す。

31～33は前期初頭で、胎土に繊維を含む。31は中道式の口縁部であり、肥厚口縁を呈する。単節による横位羽状構成の縄文を施文し、肥厚口縁直下には結節が認められる。32は胴部で、器面が摩耗し不明瞭だが、燃りの方向が異なる2本揃いの燃糸文と考える。33は無文土器の口縁部で、器面内外にナデ調整を施すが、指頭圧痕と推測する凹凸が器面に残る。また、外面の口唇部直下には、種実圧痕の可能性がある長さ1.0cm、幅0.8cmの楕円形状を呈する窪みが観察できる。34・35は前期後葉の諸磯a式である。口縁部もしくは胴部で、爪形文により文様を構成する。

36・37は中期初頭で、36は半隆起線により口縁部を区画し、斜格子目文を描く。37は口縁部もしくは胴部で、半隆起線により斜格子目文を描く。38・39は中期中葉で、38は口縁部に横位方向の単沈線を描き、単節による縦条の縄文を施文する。39は胴部で、縦位区画内部を沈線・刻みなどで埋める。40は中期後葉で、胴部の沈線間に単節縄文を縦位施文する。

41は後期初頭と推測するもので、連続して押圧する横位隆帯を貼付する。42・43・46・48・49は、後期前葉の堀之内式である。42は強く外反する鉢の口縁部で、口唇部が内屈する。口唇部は、内外面に沈線と円形刺突を施文し、口縁部外面には刻みをもつ細い縦位隆帯を貼付する。43は胴部で単節縄文を地文とし、刻みをもつ横位隆帯、沈線、円形刺突で文様を構成する。46は胴部が膨らむ器形を呈する。頸部付近に円形の小突起を貼付し、渦巻き状・縦位・X字状などの沈線を組み合わせて文様を構成する。48は鉢の胴下部と推測する。単沈線で文様を描き、沈線間に単節縄文を施文する。49は鉢で、胴部が若干膨らみ、口縁部が強く外反する器形を呈し、口唇部には密接する刻みを施す。外面は、口縁部が無文で横位方向の粗いミガキを施し、胴部は単沈線で文様を描く。内面は、口唇部直下に円形刺突を行い、刺突間

に2条の横位沈線を描く。底面は上げ底状に浅く窪み、網代痕がわずかに残る。44は後期中葉で、沈線により文様を描く。沈線間の幅が狭い部分には単節縄文が残り、広い部分は磨り消している。加曾利B式併行の土器であろう。45は後期末葉と推測する口縁部で、単節縄文の地文上に沈線で文様を描く。瘤状の突起が付き、突起を縦位沈線で2個に分ける。47は注口土器の注口部で、後期と考えるが詳細は不明である。50は後期後葉から晩期前半と推測するもので上げ底状を呈し、外面に3条の横位沈線を描く。

51～105は弥生前期の水Ⅱ式を主体とし、水Ⅰ式直後段階（宇佐美1998）およびそれに併行する土器を含むと推測する。器種は甕・壺・浅鉢に分類したが、小破片のため不明確な部分もある。51～82は甕で、口縁部が無文となりナデ調整もしくは粗いミガキを施すもの、口唇部直下から縦位・斜位方向の条痕を施すもの、口縁部もしくは胴部に縄文・捺糸文を施すものが存在する。51～61は、口縁部が無文の甕である。51は頸部が括れ、胴部が膨らむ器形を呈する。口唇部は斜め上方からのナデ調整により面取りを行い、小波状を呈する。胴部は横位方向の条痕を施し、下部付近から斜位方向の条痕が混じる。52～61は口縁部で、口唇部を斜め上方からのナデ調整により面取りするものが多く、54・56はその部分に沈線が認められる。53・55～61には瘤状の突起や三角形突起、刻みを入れた双頭状の三角形突起が付く。53は口唇部直下に、1条の幅広凹線を施す。62～68は、口唇部直下から縦位・斜位方向の条痕を施す甕で、無文と同様に口唇部を斜め上方からのナデ調整により面取りを行うものが多い。同一個体の62・63は、その部分が沈線状に窪み、64は縄文原体、66は絡糸体で刻む。63・67・68には、三角形突起や刻みを入れた双頭状の三角形突起が付く。69～72は頸部付近である。69は無文で、全体に横位方向の粗いミガキを施す。70～72は口縁部側が無文で、胴部側には横位方向の粗い条痕を施す。73～80は胴部あるいは底部で、縦位方向や斜位方向の条痕を施す。口縁部が無文の甕と、口唇部直下から条痕を施す甕の、両者の破片を含むと推測する。81・82は、口縁部もしくは胴部に、縄文・捺糸文を施文する甕である。81は口唇部に単節縄文を施文し、口縁部は単節縄文の地文上に4条の横位沈線を描く。頸部には、単節縄文をナデ調整により消した痕跡が認められる。内面は、横位方向のナデ調整で接痕が残る。新潟県豊栄市鳥屋遺跡から出土した土器に、類似資料が存在する（豊栄市史編纂委員会ほか1988）。82は頸部から胴上部と考える破片で、頸部は無文となり、胴部は縦位方向の密接した捺糸文を施文する。83～86は、壺および甕と推測する土器である。83は口唇部が短く内屈する。2条の突帯を貼付し、突帯下位には縦位方向の条痕を施す。内面は、ケズりに近いナデ調整の後、横位方向の粗いミガキを施す。84は胴部で、刻みをもつ1条の細い突帯を貼付する。内面は不明瞭だが、ミガキもしくはナデ調整と推測する。85・86は口縁部で、口唇部に1条の突帯を貼付する。85は、突帯の下位に幅広の粗い条痕を施す。内面はミガキで、器面が平滑である。86は器面が荒れ、調整などの詳細は不明である。87～105は、浅鉢と推測する破片である。87は器面内外が摩耗し不明瞭だが、外面は沈線で変形工字文を描き、内面は横位～斜位方向のミガキを施すようである。88は口唇部に刻みを入れた双頭状の三角形突起が付き、口唇部直下から胴部にかけては斜位方向の条痕を施す。内面は、ミガキもしくはナデ調整である。89・90は浅鉢としたが、小破片のため不明確である。同一個体で、口唇部直下に2条の横位沈線を描き、口唇部を含めて外面には赤色塗彩を施す。内面は、横位方向のナデ調整である。91・92は頸部が括れ、胴部が膨らむ器形を呈する。92は、胴部の膨らみが弱い。口唇部は斜め上方からのナデ調整による面取りを行い、91はその部分が沈線状に窪み、刻みを入れた双頭状の三角形突起が付く。胴部は、91が3条の横位沈線と4条の沈線による変形工字文を描き、文様の空白部にミガキを施す。内面は、横位方向のミガキである。92は、3～4条の横位沈線を2段に描く。内面は摩耗し不明瞭だが、ミガキであろう。93は小波状を呈する口縁部で、波頂部が欠損する。口唇部に沿う1条の沈線を描き、内面にはナデ調整を施す。器形と文様が、SK 25出土の第26図13と類似するが、縄文は施文されていない。94～102は胴部である。94は4条の沈線により、

91のような変形工字文を描く可能性が高い。文様の下位や空白部、内面にミガキを施す。95は、平行沈線の下位に円状もしくは弧状の沈線を重ねて描き、中央部分が窪む。内面はミガキであろう。96～100は、複数の沈線でレンズ状、三角形などの文様を描いており、内面はミガキを施す。96は、内面が摩耗し不明瞭である。101は横位方向の極めて細い沈線を描き、外面全体を赤色塗彩する。内面は、摩耗し不明瞭である。102は胴下部で、横位方向の沈線下位に密接した矢羽状の沈線を描く。内面は、摩耗し不明瞭である。103～105は縄文もしくは捺糸文を施文する。103は口縁部で、口唇部直下に1条の沈線を描き、沈線下位には密接した縦位方向の捺糸文を施文する。口唇部直下の無文部や内面にはミガキを施す。104・105は胴部で、複数の横位沈線を描く。104は捺糸文を地文とし、105は縄文地文と推測するが、器面状態が悪く不明瞭である。

(2) 石器

石鏃・石鏃未製品 (第30図1～14, P L 10)

1～6は凹基無茎鏃で、基部を挟り込む深度と側縁部の形状に違いがある。2は基部の挟りが浅く、平基無茎鏃に近い。5・6は大形で長さ3.0cm以上を測り、6は脚部が外開きになる特徴をもつ。7・8は、基部が丸味を帯びる凹基鏃である。9～13は凹基有茎鏃で、平面形状は長さと同幅の計測値に近い三角形の9と、長さが幅よりも長い二等辺三角形の10～13が存在する。12は側縁部が鋸歯縁を呈する。14は加工剥離が粗く、先端部や基部の作りが完全ではないことから未製品と考える。石材は1・3・5・7～14が黒曜石、2・4がチャート、6が下呂石である。

石錐 (第30図15～17, P L 10)

15～17は明確なつまみ部をもたず棒状を呈する石錐で、15は上下両端に、16・17は下端に使用痕の可能性が高い摩耗痕が残る。石材は全て黒曜石である。

スクレイパー (第30図18～22, P L 10)

18・19・22は素材剥片の表裏両面、20・21は主に片面に対して加工剥離を施す。18は、両側の縁辺部に微細な剥離が連続して残る。20は、削器的な角度の刃部を作出するが粗い。21・22は、比較的急角度で掻器的な刃部を作出する。石材は全て黒曜石である。

横刃形石器 (第31図23～26, P L 10)

23～26は横長剥片を素材とし、長軸に対して平行方向の縁辺部に、使用痕の可能性が高い微細な剥離が連続して残る。また、縁辺部と逆の打点側は、主として片面に加工剥離を施す。23は、打点側に摩耗痕が認められる。23・26は片面が自然面となり、25は打点側に自然面を残す。石材は全て黒色安山岩である。

打製石斧 (第31図27～30, P L 10)

27～30は大形剥片を素材とし、縁辺部に階段状の剥離を連続的に施す。27・29は横長剥片が素材で、片面に自然面が残る。平面形は27～29が短冊形で、30は撥形を呈する。28・30には、使用痕の可能性が高い摩耗痕(実測図トーン部分)が観察できる。石材は全て黒色安山岩である。

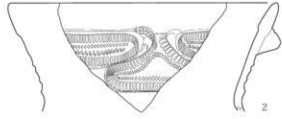
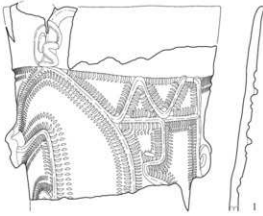
石鏃 (第31図31, P L 10)

31は板状の鏃が素材となり、側縁部へ打製石斧と同様の階段状剥離を連続して施すが、打製石斧よりも大形で長さが20.0cm以上に達する。表裏両面と右側の側縁部には自然面が残る。また、表裏両面の刃部付近と上端部には使用痕の可能性が高い摩耗痕が観察できる。石材は黒色安山岩である。

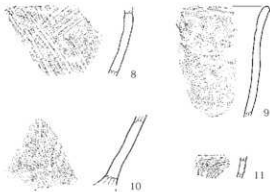
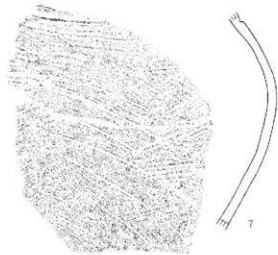
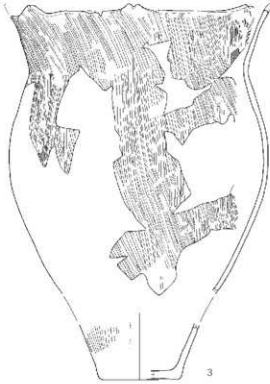
磨製石斧 (第31図32・33, P L 10)

32は刃部で、剥片剥離の部分が広く残る。石材は緑色岩である。33は断面形が扁平であり、全体に研磨調整を施し仕上げている。石材は蛇紋岩である。

SB03



SK21



SK25

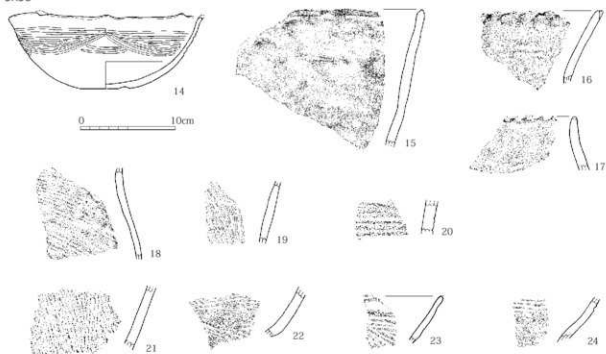


0 4~11 5cm

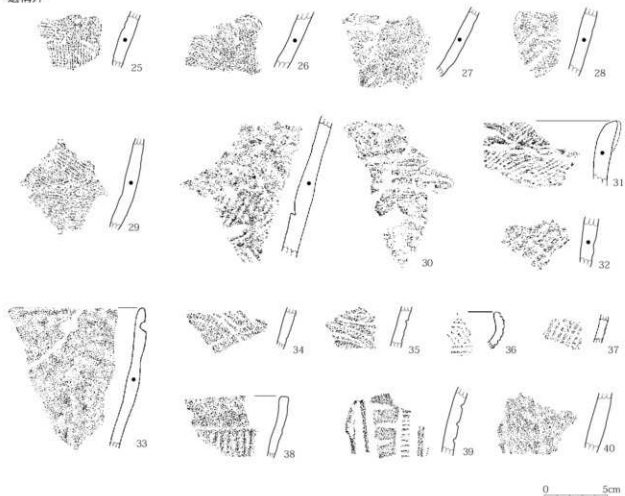
0 10cm

第26図 縄文土器(1)、弥生前期土器(1)

SK38



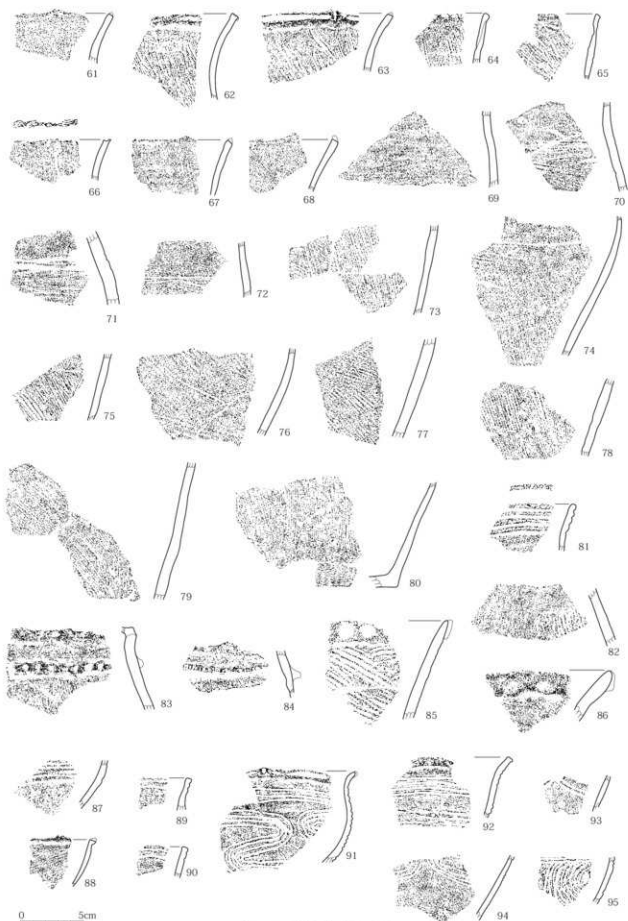
遺構外



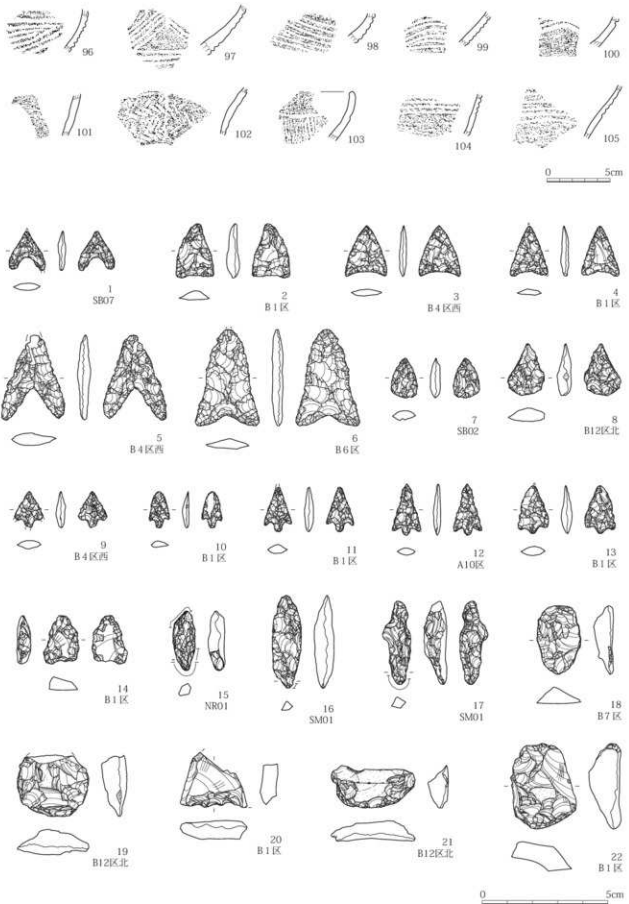
第27圖 縄文土器(2)、弥生前期土器(2)



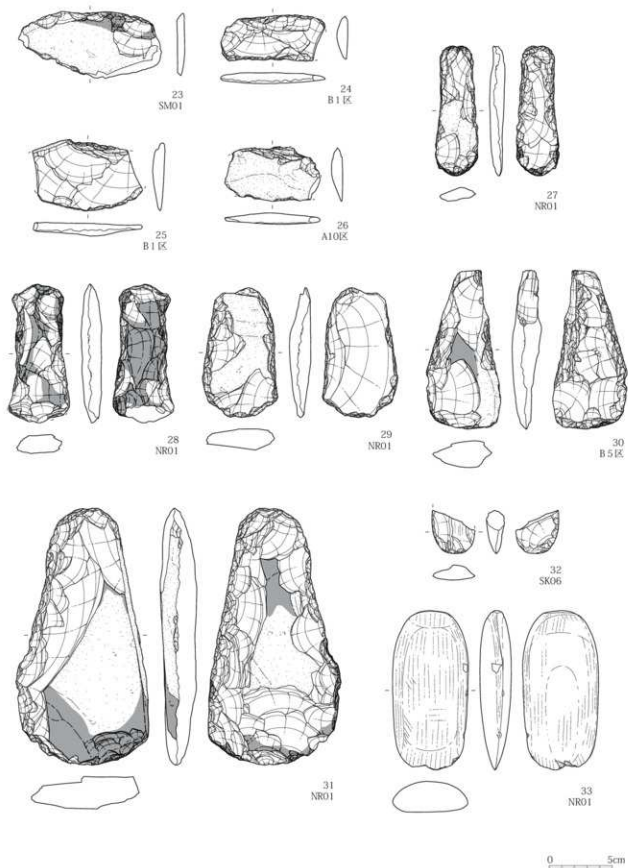
第28図 縄文土器(3)、弥生前期土器(3)



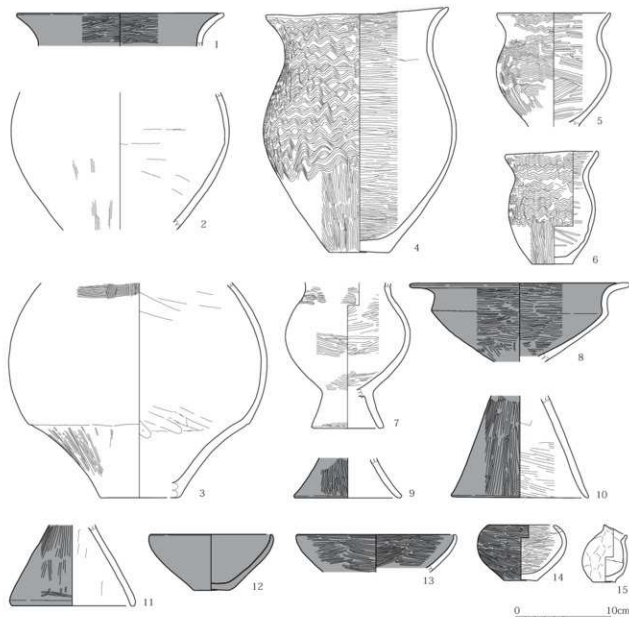
第29圖 弥生前期土器（4）



第30図 弥生前期土器（5）、縄文～弥生前期の石器（1）



第31図 縄文~弥生前期の石器(2)



第32図 SM01 出土土器

(3) 弥生時代後期の土器

SM 01 (第32図1～15, P. L 10)

1は壺の口縁部と判断した。2・3は壺胴部で、3は球形を呈する胴部の下部が稜を成して屈曲し、底部に向けてすぼまる。4は甕、5・6は小型甕、7は台付甕で、4～5は口縁～胴部に櫛描波状文を施し、7は頸部に櫛描横走文を施す。8～11は高環で、8は中位が屈曲する環部、9～11は脚部である。12・13は塊状の鉢、14は小型無頸壺、15はミニチュア土器である。1・8～11は赤彩を施している。これらの土器は、壺・甕に球胴化が進行したものとさほど進行していないものがあること、環部中位が屈曲する高環があること、無彩の高環・鉢がないことから、弥生時代後期末に位置づくと考えられる。

参考・引用文献

- 宇佐美哲也 1998「水式土器群の変遷—水Ⅰ式土器から水Ⅱ式土器への型式変遷に関する予察—」〔長野県小諸市水遺跡発掘調査資料図譜 永峯光一編〕水遺跡発掘調査資料図譜刊行会
 豊栄市史編纂委員会ほか 1988「鳥屋遺跡Ⅰ・Ⅱ」

第3節 古代～中世および時期不明の遺構と遺物

1 概観

古代～中世の遺構は、北尾根北・南斜面および頂部、西尾根東斜面部から中央低地部、南尾根北斜面部の広い範囲で検出した。主要な遺構として古代の竪穴建物跡、中世の段切遺構・竪穴建物跡・礎石建物跡・掘立柱建物跡・墓跡・テラス状遺構がある。中央低地部の最低部では自然流路跡を検出した。

古代の竪穴建物跡は、8世紀から10世紀の所産と判断する。8世紀から9世紀初頭の竪穴建物は北尾根南斜面裾部に集中して営まれるが、9世紀後半になると、北尾根頂部、中央低地部の自然流路跡南岸部にも構築され、居住域が拡大・分散化する状況を示す。

中世は、中央低地部に竪穴建物跡、礎石建物跡、掘立柱建物跡が存在する。時期の特定が難しい遺構が多いが、13世紀後半から15世紀に営まれた建物群と考える。段切遺構はこれらの建物の構築に伴う造成区画であり、中央低地部は中世の建物建造域として把握し得る。北尾根頂部から斜面部、西尾根東斜面部、南尾根北斜面部では、土葬墓や火葬墓を検出し、板碑や多数の五輪塔が出土した。南尾根北斜面部には五輪塔を伴うテラス状遺構が存在する。テラスおよび周辺で墓跡を確認し、五輪塔も多数出土した。中央低地部の中世建物群を取り巻くように、北～西・南に墓域が展開する。

遺物は、古代では土器類、石器、金属製品、鍛冶関連遺物を確認した。中世では輸入陶磁器、国産陶磁器・土器、石器、石製品、金属製品、木製品、板碑、宝篋印塔、五輪塔を確認した。古代の遺物は遺構から出土したものも多いが、中世は遺構外からの出土が多く、中世遺物の出土量の大部分は自然流路跡NR 01からの出土である。木製品のほとんどはNR 01から出土している。

2 遺構

(1) 古代の竪穴建物跡

SB 02 (第33図、P L 2)

位置: B 1区、II P 02・03グリッド。**検出:** 基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係: SK 20・22に切られる。**埋土:** 壁際に暗褐色～褐色シルト質土の4～2層が断面三角形に堆積し、その上を暗褐色シルト質土の1層が埋積する。**形状・規模:** 南東・北壁の大部分を欠くが、平面形は方形を呈する。規模は南北方向3.8m、東西方向3.9mを測る。床・壁: 床は竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ34cmを測り、外傾する。**柱穴:** 確認できなかった。**周溝:** 残存部では、幅20cm程度、深さ8cm前後の周溝が全周する。**カマド:** 東壁中央やや南寄りに位置する。火床被熱部の両側に袖石の抜取り痕がある。**遺物:** 須恵器杯、黒色土器杯・碗・鉢、土師器甕、灰釉陶器碗(第72図1～9)などのほか、鈎状鉄製品(第81図25)が出土した。**時期:** 出土した土器の時期をもって、10世紀前半と推測する。

SB 04 (第33図、P L 2)

位置: B 1区、II P 08・13グリッド。**検出:** 基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係: なし。**埋土:** 黒褐色シルト質土の単層である。**形状・規模:** 北東隅から東・北壁の大部分を欠くが、壁と埋土の残存部から、平面形は方形とみてよい。規模は南北方向3.6m、東西方向4mほどと推測する。床・壁: 床は竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ30cmを測り、外傾する。**柱穴:** 床下調査で検出したP 1～4を主柱穴と考える。方形配置で、北側のP 1・2は北壁脇にある。ピットは円形を呈し、長径38～50cm、深さ38～40cmである。**周溝:** 残存部では、カマド左側から西壁北半にかけて幅15～20cm、

深さ7cm前後の周溝が延びる。カマド：北壁中央に位置し、燃焼部が堅穴壁外に張り出す形態である。わずかに残存する左袖部の前に落ち込みがあり、袖石抜き痕の可能性があらう。遺物：須恵器環蓋・坏、黒色土器坏・埴、土師器坏（第72図10～16）など土器類のほか、鉄滓が出土した。時期：出土土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

SB 05（第34図）

位置：B1区、II P 08・09グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SB 06を切る。SK 23に切られる。埋土：暗褐色シルト質土の単層である。形状・規模：北部のみ残存するが、残存部の状況から平面形は方形とみてよい。残存部の規模は南北方向1.4m、東西方向4.0mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ30cmを測り、外傾する。柱穴：確認できなかった。周溝：残存部では、東壁北部から西壁北部にかけて幅15cm、深さ5cmほどの周溝がめぐる。カマド：東壁延長ラインの西側（内側）、北壁から南に2.2～3.2m離れた箇所に焼土粒の分布があり、カマド痕跡の可能性があらう。東壁南寄りに設置されていたことを推測する。遺物：須恵器坏・四耳壺、黒色土器坏、土師器小型壺、灰釉陶器碗（第72図17～23）などが出土した。なお、「石井寺」の墨書がある黒色土器坏（第72図20）が、北東隅の床面から若干浮いて出土している。時期：出土土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

SB 06（第34図）

位置：B1区、II P 08・09グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SB 05に切られる。埋土：壁際に褐色シルト質土の2層が断面三角形に堆積し、その上を暗褐色シルト質土の1層が埋積する。形状・規模：北東隅から南壁東半を欠くが、残存部の状況から平面形は方形とみてよい。残存部の規模は南北方向3.4m、東西方向3.0mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ10cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：なし。カマド：北壁西寄りに位置する。燃焼部が堅穴壁外に張り出す形態である。袖石および支脚の抜き痕が残る。その他の施設：北壁際、カマド右脇に長径48cm、深さ18cmの円形ピット（P1）がある。遺物：黒色土器坏・埴、土師器壺・小型壺・鉢（第72図24～30）などが出土した。時期：出土土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

SB 07（第34図）

位置：B4区西、II P 25グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：黒褐色土の単層である。形状・規模：南部を欠くが、残存部の状況から平面形は方形とみてよい。残存部の規模は南北方向2.0m、東西方向3.9mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ25cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：なし。カマド：確認できなかった。その他の施設：東壁延長ラインの西側、北壁から2.2m南に被熱赤変部がある（P1）。長径56cm、短径45cmの、やや不整な楕円形の掘り込み内を埋積する黒褐色～暗褐色土の上部が被熱赤変している。こうした構造や、周囲にカマド構築材の痕跡がないことから、カマド跡ではなく、何らかの用途をもつ跡と推測しておきたい。遺物：須恵器坏・高台坏（第72図31・32）などの土器類のほか、砥石（第79図7）が出土した。時期：出土土器の時期をもって、8世紀後半と推測する。

SB 08（第35図、P L 2）

位置：B4区西、II U 04グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：黒褐色シルト質土の単層である。形状・規模：南東部を欠くが、残存部の状況からみて、平面形は隅丸方形に近い形状と推測する。残存部の規模は北西～南東方向3.2m、北東～南西方向3.6mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ50cmを測り、外傾する。柱穴：確認できなかった。

た。周溝：なし。カマド：北東壁に付設され、ほぼ中央に位置すると推測する。袖石が火床被熱部の左側に2石、右側に1石および抜取り痕1箇所が残る。支脚石は右側に偏っており、2個掛けのカマドであろうか。カマド右手前には土師器甕片の集中があり、ほぼ完形に復元できた(第73図40)。遺物：須恵器坏蓋・坏・甕・横瓶、土師器甕・小型甕(第73図33～41)などの土器類のほか、刀子(第81図1)、火打金(第81図3)が出土した。時期：出土土器の時期をもって、8世紀後半～9世紀初頭と推測する。

SB 09 (第35図)

位置：B4区西、II P 24・U 04グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：黒褐色シルト質土の単層である。形状・規模：南東部を欠くが、残存部の状況から平面形は方形とみてよい。残存部の規模は北西-南東方向3.0m、北東-南西方向4.0mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。床面は硬化している。壁は最大で高さ40cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：なし。カマド：北東壁に付設されており、中央やや左寄りに位置すると推測する。燃焼部が堅穴壁外に張り出す形態である。袖石が燃焼部左壁の手に1石残り、対向する位置に抜取り痕1箇所がある。両者の間に石が1個あった。右袖石を抜き取って燃焼部手前に置くという、廃絶にあたっての儀礼行為を示す可能性がある。左袖石の脇には完形の須恵器坏蓋1個体(第73図42)が逆位の状態で位置していた。遺物：須恵器坏蓋などが出土した。時期：出土土器の時期をもって、8世紀代と推測する。埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代(1σ)で、8世紀前半～9世紀後半頃に相当する測定値を得た(第5節参照。以下の放射性炭素年代測定についての記述も同様)。考古学的年代観に整合する。なお、試料とした炭化物は、P1出土として採取したが、P1は床面中央部に位置する広く浅いもので、床面の窪みと判断した。

SB 10 (第35図)

位置：B5区、II Q 21・22グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：床面上に黒褐色粘質シルトの3層が薄く堆積した後、壁際ににぶい黄褐色粘質シルトの2層が断面三角形に堆積し、その上をにぶい黄褐色粘質シルトの1層が埋積する。形状・規模：南部を欠くが、残存部の状況から平面形は方形とみてよい。残存部の規模は南北方向2.2m、東西方向4.3mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ32cmを測り、外傾する。柱穴：確認できなかった。周溝：なし。カマド：東壁延長ラインの西脇、北壁から南に1.6mほど離れた箇所に被熱赤変部があり、その上に焼土が堆積していた。カマド跡と考える。東壁中央やや左寄りに位置すると推測する。その他の施設：カマド右前に長径95cm、深さ12cmの楕円形ピット(P1)があり、焼土が埋積していた。遺物：北壁中央部脇の床面に須恵器坏4個体と土師器鉢1個体(第73図43～46・51)がままとっていた。須恵器坏は、逆位の2個重ねが2対並んでいた。このほか、須恵器高台坏、土師器甕などが出土した。時期：出土土器の時期をもって、8世紀後半～9世紀初頭と推測する。

SB 12 (第36図)

位置：B5区、II V 02グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SB 19を切る。段切2、SB 11、SK 95・96・124に切られる。埋土：黒褐色シルトの単層である。形状・規模：南東部を欠くが、平面形は南北にやや長い方形を呈する。規模は南北方向4.9m、東西方向4.4mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ25cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：方形配置をとるP1～4を支柱穴と考える。ピットは円形ないし楕円形で、長径26～42cm、深さ22～36cmである。周溝：なし。カマド：東壁延長ラインの東側(外側)、北壁から3mほど南に被熱赤変部がある。位置は東壁中央やや南寄りにある。カマドの痕跡であり、燃焼部が堅穴壁外に張り出す形態を推測する。遺物：須恵器坏・高台坏、黒色土器坏、土師器坏・甕(第73図52～59)が出土した。時期：出土した土

器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

SB 13 (第36図)

位置：C 9区、Ⅲ C 05・D 01 グリッド。検出：C 9区北端部の基本層序第Ⅲ層上面で、黒褐色土の落ち込みとしてSB 13を検出した。北壁沿いに先行トレンチを入れたところ、2軒が切り合っていることがわかり、新しい方をSB 14とした。調査区を北に拡張し、本格的な掘り下げを開始した。重複関係：SB 14に切られる。SK 214・228～231とは不明である。埋土：黒褐色土の単層である。形状・規模：壁と埋土の大部分を失っているが、残存部の状況から、平面形は方形とみてよい。規模は南北3.2m、東西3.6mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は、最大で高さ10cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：北壁東部、西壁南部から南東隅にかけて、幅15～35cm、深さ4～9cmの周溝がめぐる。カマド：確認できなかった。その他の施設：南壁中央部に位置する円形ピットP 1は外側に張り出すが、その位置から、SB 13の付属施設と判断した。遺物：須恵器坏、黒色土器碗、土師器坏・甕(第73図60～64)などが出土した。時期：出土した土器の時期をもって、9世紀後半～10世紀前半と推測する。

SB 14 (第36図)

位置：C 9区、Ⅲ D 01 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。検出経過は上記のとおりである。重複関係：SB 13、SK 215・227を切る。SK 228～233とは不明である。埋土：壁際に黒褐色土の2層が断面三角形に堆積し、その上を黒褐色シルトの1層が埋積する。形状・規模：壁と埋土の大部分を失っているが、残存部の状況から平面形は方形とみてよい。残存部の規模は南北方向3.8m、東西方向1.3mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で4cmを測る。柱穴：確認できなかった。周溝：西壁～南壁西部に幅15～30cm、深さ3～4cmの周溝がL字状に残る。カマド：確認できなかった。遺物：黒色土器坏(第73図65)などが出土した。時期：出土した土器の時期をもって、9世紀後半～10世紀前半と推測する。

SB 16 (第37図、P L 2)

位置：B 5区、Ⅱ Q 21・V 01 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：壁際に黒褐色シルトの2層が断面三角形に堆積し、その上を黒褐色土シルトの1層が埋積する。形状・規模：南部を欠くが、残存部の状況からみて、平面形は方形とみてよい。東壁がやや弧状を呈する。残存部の規模は南北方向3.1m、東西方向4.7mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ38cmを測り、外傾する。柱穴：浅い形状であるが、位置からみて、P 1・2は主柱穴の可能性があろう。長径70cm、深さ8cmの楕円形を呈する。周溝：北壁西部～西壁部に幅25～30cm、深さ3～13cmの周溝がL字状に残る。北壁部分では壁下端から5cmほど離れた位置から掘り込んでいる。カマド：北壁中央に付設されている。深さ5～10cmの掘方を、焼土粒・炭化物粒が混じるにぶい黄褐色土で埋め戻した上に構築している。掘方内に30cmほどの礫を埋めた箇所がある。袖部構築材には暗赤褐色土を用いている。右袖の前端に凹みがあるが、左袖の対応する位置に同様な凹みがないため、袖石採取り痕かどうか判断しかねる。長さ90cm、幅30cm、深さ15～20cmの煙道が堅穴壁外に延びる。その他の施設：東壁とカマドの中間に、長径110cm、深さ20cmの楕円形ピット(P 3)がある。遺物：須恵器高台坏・甕ないし壺、土師器坏・甕、土師器(内黒)鉢(第74図66～70)などの土器類のほか、耳環(第81図28)が出土した。時期：出土土器の時期をもって、8世紀後半と推測する。

SB 19 (第36図)

位置：B 5区、Ⅱ V 02 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SB 12、段切2、SB 11、SK 95・96・124に切られる。埋土：黒褐色土の単層である。形状・規模：北西部のみ残存す

るが、残存部の状況から、平面形は方形とみてよいだらう。残存部の規模は北西-南東方向2.4 m、北東-南西方向1.1 mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ25cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：北西隅部から北西壁に幅20cm、深さ5cmほどの周溝がめぐる。カマド：確認できなかった。遺物：須恵器環・高台環、黒色土器皿（第74図73～78）などが出土した。時期：出土した土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

SB 20（第37図）

位置：B 12区北、II Q 24・25 グリッド。検出：B 12区北東壁際の基本層序第Ⅲ層上面で、黒褐色土の落ち込みを検出し、SB 20とした。床面まで掘り下げた段階で、南側に一段深い部分があることが判明した。断面を検討したところ、深い部分が浅い部分を切ることがわかった。2軒の切り合いと判断し、深く新しい方をSB 20、浅く古い方をSB 21とした。重複関係：SB 21を切る。SK 451（断面のみの検出）、段切4に切られる。埋土：黒褐色シルトの1層と黒色シルトの5層の上下二層に分かれるが、1層と5層の間に炉1が介在する。なお、層番号はSB 20・21共通である。形状・規模：大部分が調査区外であり、北西隅部のみ残存するが、残存部の状況から、平面形は方形と推測する。残存部の規模は南北方向1.2 m、東西方向1.7 mを測る。床・壁：床面は2面ある。下床面はSB 21の埋土を掘り込み、平坦に整えている。その上に存在する厚さ5～10cmの5層上面が上床面となる。壁は下床面からの高さが最大で35cmを測り、垂直に近く立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：確認できなかった。カマド：確認できなかった。その他の施設：北壁寄りに位置する炉1は、5層上面を掘り窪め、粘土を貼って炉床を作っている。炉床面の中央は還元して灰色を呈し、下位に向かって明黄褐色～明赤褐色・暗赤褐色へと変化する。炉内埋土は炭化物粒を多く含む。炉内埋土から鍛造剥片を検出したこと、堅穴埋土から羽口（第80図1）、鉄滓、鉄塊系遺物が出土したことにより、炉1を鍛冶炉と判断する。下床面の堅穴建物が廃絶して一定期間を経た後に、鍛冶作業場として再利用したことを推測する。炉1の直下に下床面が被熱変化した部分があり、炉2とした。下床面に帰属する施設の痕跡と考えるが、性格は明らかでない。遺物：鍛冶関連遺物のほか、黒色土器鉢、土師器環（第74図79・80）などの土器類、帯状の薄い鉄板を十字に合わせた用途不明の鉄製品（第81図27）が出土した。時期：出土した土器の時期をもって、10世紀代と推測する。

SB 21（第37図）

位置：B 12区北、II Q 24・25 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。検出経過は上記のとおりである。重複関係：SB 20、SK 451（断面のみの検出）、段切4に切られる。埋土：壁際～中央に向かって断面三角形に黒褐色シルトの8層が堆積し、その上を黒褐色シルトの7層が埋積する。形状・規模：大部分が調査区外であり、北西部のみ残存するが、残存部の状況から、平面形は方形と推測する。残存部の規模は南北方向3.0 m、東西方向1.4 mを測る。床・壁：黒褐色シルトと黄褐色土の混合土を用いた貼床を有する。壁は最大で高さ56cmを測り、垂直に近く立ち上がる。柱穴：確認できなかった。周溝：西壁部に幅15cm、深さ6～7cmの周溝が延びる。残存部中ほどが途切れている。カマド：確認できなかった。遺物：黒色土器・土師器の坏または碗片、薄手で外面へラケズリの土師器甕胴部片がわずかに出土した。小細片のため詳細時期の特定は難しい。時期：SB 20に切られるため、10世紀以前の古代と推測する。

（2）中世の段切遺構・堅穴建物跡・礎石建物跡・掘立柱建物跡・堅穴状遺構

段切遺構は北尾根南斜面下部から中央低地部で検出した。斜面を段状に切り開いて平坦部を造成している。6箇所検出し、段切1～6とした。そのうち、段切1は近現代の造成であることがわかった。段切3（B 4区西、II U 10・15）については、残存部が少なく、時期や関連する遺構は明確にならなかった。段切2・4～6は中央低地部に位置し、造成した平坦部に中世の建物が構築されている。段切2はST 04とSB 11、段切4はST 01、段切5はST 02、段切6はST 03の構築に深く関連すると考える。以下、遺構の

種類は前後するが、それぞれ関連する段切遺構、建物跡を続けて記載する。

段切2 (第38～40図、P L 3)

位置：B 5区、ⅡV 02・03グリッド。検出：基本層序第Ⅱ・Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SB 12・19を切る。構造：斜面を断面L字状に切り開いて、基底面となる平坦部を造成している。東と南が開放する形状で、北壁から直角に屈折して西壁が延びる。残存部の規模は北壁長5.6m、西壁長5.0mを測る。壁は北壁西部で最大の50cmを測り、斜めに立ち上がる。西南部で基底面直上に施した敷土層を確認した(SB 11断面図の8層)。廃絶後、暗褐色土が埋積する。主要関連遺構：SB 11、ST 04。時期：詳細は不明確だが、構築はSB 11より古い。13世紀前半～14世紀後葉を想定しておきたい。

SB 11 (第38・39図、P L 3)

位置：B 5区、ⅡV 02・03グリッド。検出：北部は段切2の基底面、南部は敷土層(8層)を掘り込んでいる。重複関係：SB 12・19、ST 04を切る。SK 95・96・124に切られる。埋土：焼土粒・塊、炭化材を多く含む2～6層が埋積する。多量の焼土・炭化材の存在から、焼失した建物であることを推測する。形状・規模：平面形は長方形を呈する。規模は南北方向4.2m、東西方向3.1mを測る。構造：掘方底に最大厚20cmの敷土を施している。壁は最大で高さ15cmを測り、外傾する。柱穴は確認できなかった。壁際および内部に配石をもつ。石は15～30cm大の垂角礫が主体で、敷土中に埋め込まれており、敷土と配石の施工が一連の過程で行われたことを示す。壁際の配石は、北壁、南壁西部、東壁南北端には残存していない。配石がない部分は、建物構造に関わる可能性もあろう。残存部では石は隙間なく並べられており、西壁では2列を成す部分もある。内部の配石は、東西方向の石の並びが3列存在する。石列間の間隔は約1mとはほぼ等しい。壁際の配石と異なり、各石は20～40cm程度の間隔をあけて並べられている。内部の配石は、石列間の間隔が狭く、区画施設とは考えにくい。石列の上に根太を渡し、さらに板を張った床構造を想定しておきたい。関連遺構：竪穴外南側に東西方向の石の並びを2列検出したが、本遺構との関係を捉えることはできなかった。遺物：陶磁器・土器、鉄製品、炭化種実が出土した。陶磁器・土器は、青磁蓮弁文碗(第75図19)、東濃製品の山茶碗小皿(第77図88)、かわらけ(第78図130)が出土した。鉄製品は鉄釘多数のほか、環状鉄製品(第81図26)、銭貨(第82図1・2)が出土した。釘はほぼ同サイズ・同形状である(第81図4～11)。こうした規格的な釘多数が錆びて塊状に固着した状態で、底面直上から出土した。釘の総数は計上できないが、500本は下らないと推測する。炭化種実は底面直上3箇所に集中して出土した。種実同定：出土した炭化種実の種実同定分析を実施した。その結果、集中部1にはアワの穎・胚乳、集中部2および3にはアズキ類の種子が集中することがわかった。また、アズキ類に「野生型」、「中間型」、「栽培型」が確認された。分析の詳細は第5節に記載した。時期ほか：底面直上出土の炭化材および集中部3の炭化アズキ類種子について放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代(1σ)で、前者が11世紀後半から13世紀初頭頃、後者が13世紀末～14世紀後葉頃に相当する測定値を得た。出土遺物と放射性炭素年代測定結果から、SB 11の時期は13世紀後半～14世紀後葉と推測する。出土した炭化種実は種類ごとに集中し、アワには穎が遺存する。建物内に貯蔵された食糧あるいは次期の栽培に備えた「タネ」であることは間違いないだろう。多数の同規格の鉄釘がまとまって出土したことを考え併せ、この建物が倉庫として利用されていたことを想定し得る。

ST 04 (第40図)

位置：B 5区、ⅡV 02・03グリッド。検出：SB 11の掘方底で検出した。柱穴は、当初、単独の土坑としてSK番号を振ったが、建物跡と認識した段階で、改めてピット番号を付した。重複関係：構築はSB 11の下位である。構造：掘立柱建物と考える。P 1がSB 11の北西隅、P 5が南西隅に位置し、その間のP 2・P 3・P 4とともにSB 11の西壁に重なるように直線的に並ぶ。また、P 7・P 6は、それぞ

れS B 11の南東隅・東壁中央に位置し、P 6はP 3と、P 7はP 5と対向する位置にある。規模は、柱穴心々で南北方向のP 1・P 5間が4 m、東西方向のP 5・P 7間が2.7 mを測る。柱穴は平面円形を呈し、長径30～50cm、深さ25～55cmである。P 1には礎板と柱材下端部、P 5には礎板が残っていた。本建物跡は段切2の造成に伴う可能性が高いと考える。また、S B 11は段切2の敷土層（S B 11断面図の8層）を掘り込んで構築している。このことから、段切2の間掘に伴って、まず本建物が構築され、その廃絶後、段切2の再整備（敷土等）を行って、ほぼ同位置・同規模のS B 11を構築したことを推測する。時期ほか：詳細時期は明確ではないが、S B 11よりは古い。13世紀前半を想定しておきたい。S B 11に引き継がれる性格として、本建物跡も倉庫であることを推測する。東側の小土坑群については、S K 354・326・356・355・329の5基およびS K 513・496・328の3基が本建物跡の南北柱列と平行するようにみえる。しかし、東西方向に柱筋が通るものを指摘し難い。建物跡である可能性があるものの、本建物の一部なのか、別の建物なのかの判断は難しい。

段切4（第41・42図）

位置：B 12区北、II Q 24・25・V 04・05グリッド。検出：基本層序第Ⅱ・Ⅲ層上面で検出した。重複関係：S B 20・21、S K 541を切る。段切5の上位に造成されている。構造：斜面を断面L字状に切り開き、段切5埋土（11層）の上に黄褐色土（10層）を盛り、基底面となる平坦部を造成している。平面形は東と南が開放する形状である。南北方向の西壁から直角に屈折して北壁となる。北壁は4 mほど伸びたところで北に屈曲してやや開き、調査区外へ続く。残存部の規模は西壁長2.8 m、北壁長約8 mを測る。壁は斜めに立ち上がり、基底面からの高さは北壁西端で最大の50cmを測る。なお、段切5埋土（11層）も段切4の造成土である可能性はあるが、明確にし得なかった。廃絶後、暗褐色～黒褐色土が埋積する。主要関連遺構：S T 01。遺物：造成土（10層）から、13世紀と推測する青磁蓮弁文碗・画花文碗・皿（第75図24・38・43）、非口ロ成形成かわりかけ片が出土した。このほか、羽口（第80図2・3）、ガラス小玉（第80図17）が出土したが、羽口はS B 20に伴う可能性が高く、ガラス小玉も古代以前に属するものと考えられる。時期：上記の遺物が出土したが、下位のS T 02のP 20から14世紀前半の青白磁梅敷（第75図12）が出土しており、それ以降となろう。遺跡全体の中世陶磁器・土器の様相からみて16世紀に下ることはないと考える。後述するS T 02の廃絶後に構築されていることから、14世紀後半～15世紀と推測する。

S T 01（第43図、P L 3）

位置：B 12区北、II Q 24・25・V 04・05グリッド。検出：基本層序第Ⅱ層上面および段切4造成土（10層）上面で検出した。重複関係：構築は段切5の上位である。構造：礎石建物跡である。側列の西辺4石（P 1～4）、北辺7石（P 4～10）がL字状に残存するのみで、全体形状は明らかでない。残存部の規模は、礎石心々で西辺1.9 m、北辺6.7 mを測る。礎石間の距離は、P 1・P 4間、P 7・P 9間、P 9・P 10間がほぼ等しく1.9 mである。配置と礎石の大きさから、P 1・4・7・9・10を主要柱の礎石と推測する。P 4・7間はやや広いが、間に2石を等間隔に配している。西辺のP 1・P 4間も2石を等間隔に配しており、建物の西部が他部分とは違う構造となる可能性があろう。礎石は、最大長26～53cm、厚さ7～15cmの扁平な亜角礫・円礫を用い、掘方をもたず、第Ⅱ層および段切4造成土（10層）にめり込むように据えている。礎石P 4・9・10には十字線刻があり、線方向は礎石の並びに一致する。礎石および柱配置に関わるものと考えられる。遺物：本遺構に明確に伴う遺物はない。時期ほか：S T 01の時期は段切4と同時期と推測する。本建物跡を覆う8層には焼土粒や炭化物が多く含まれている。また、本建物跡の基底面と8層との間には壁際を主体に薄い9層が存在する。9層は本建物の存続期間中の堆積と推測するが、その上面には部分的に被熱部が形成されている。本建物が火災に遭って焼失したことを推測しておきたい。また、本建物の軸線は下位のS T 02にはほぼ一致する。S T 02の廃絶後、跡地の再整備を行って、

S T 02 の性格を引き継ぐ建物を構築したことを推測する。

段切5 (第41・42図)

位置：B 12 区北、Ⅱ Q 25・V 04・05・09・10 グリッド。検出：基本層序第Ⅱ・Ⅲ層上面で検出した。重複関係：S K 221・222 に切られる。構造：斜面を断面 L 字状に切り開いて、黒褐色土 (17 層) を敷いて、基底面となる平坦部を造成している。平面形は東と南が開放する形状である。西壁から屈折してやや北に開く北壁が延びるが、東端部では高さを失う。残存部の規模は西壁長 13 m、北壁長 14 m を測る。壁は斜めに立ち上がり、高さは北壁西端で最大の 60 cm を測る。壁下に溝 S D 11～13 を伴う。S D 12 は北壁に沿って延び、西壁から東に約 4 m の位置で南に屈折して約 10 m 延びた後、東に屈曲し、4 m ほど延びて消失する。S D 11 は北西隅部分に沿う。北壁沿い部分の東端は S D 12 に、西端は S K 323 に接続する。西壁沿い部分は S K 323 から 2.5 m ほど延びた後に屈曲し、1.5 m ほど延びて消失する。S D 13 は西壁に沿い、S D 11 から南へ約 8 m の延長が残存する。溝は、S D 13 南端部が幅広になっているが、その他の部分では、幅 40～70 cm、深さ 10～20 cm を測る。段切 5 は、S D 12 に囲まれる部分と、その西側部分に大きく区画され、前者の部分は後者に比べて一段低くなっており、掘立柱建物跡 S T 02 構築の基底面を成す。S D 11～12 は壁下や S T 02 周囲に掘り込まれ、地形が低い方向に延びていることから、排水に関わる機能をもつことを推測する。廃絶後、暗褐色～黒褐色土 (11 層) が埋積する。11 層はその直上の 10 層とともに段切 4 の造成土である可能性もあるが、明確にし得なかった。付属施設：溝の他の施設として、北西隅に S K 323 が存在する。隅丸方形に近い形状を呈し、深さ 40 cm を測る。また、北西隅部で階段状に掘り込んだ部分を検出した。主要関連遺構：S T 02。遺物：埋土 (11 層) から、白磁皿、青白磁梅瓶・水注 (第 75 図 8・16)、青磁碗・蓮弁文碗・画花文碗・小皿 (第 75 図 23・25・26・37・44)、東濃製品の山茶碗・皿 (第 77 図 90)、尾張・中津川製品の片口鉢 (第 77 図 95・100)、かわらけ、火打石と推測する玉髄片 (第 79 図 13) が出土した。時期：出土遺物の時期をもって、13 世紀前半～14 世紀前半と推測する。なお、S D 11 埋土出土の炭化物の放射炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代 (1 σ) で、12 世紀後半～13 世紀前葉に相当する測定値を得た。考古学的年代観よりわずかに古い、概ね整合すると考える。

S T 02 (第 44・45 図、P L 3)

位置：B 12 区北、Ⅱ V 04・05・09・10 グリッド。検出：段切 5 基底面で検出した。柱穴は、検出した順に S K 番号を振り、掘立柱建物跡として全体を把握した段階で、改めてピット番号を付した。重複関係：S K 222 に切られる。構造：南北 3 間、東西 3 間の総柱建物跡である。北側に 1 間の付属部をもつ。本体部は正方形を呈し、規模は柱穴心々で南北・東西とも 6.5 m を測る。柱穴の間隔は一定で、約 2.17 m である。付属部は、南北が 1 間 1.1 m、東西は 3 間 6.5 m で本体部と同じである。付属部を含めて柱筋の通りは良い。柱穴は平面円形基調であるが、円形・楕円形・不整楕円形のものがあり、現状、形状にはばらつきがある。規模は長径 40～100 cm、深さ 20～70 cm である。柱材が残る柱穴はないが、P 14 を除く 19 基には、太さ 20 cm 前後の柱痕が認められる。P 1・5・19 には扁平礫が、P 13・17 には板状木片が柱痕直下の底面に残っており、礎板的機能を果たすものと推測する。遺物：P 6 から尾張製品の山茶碗皿 (第 77 図 87)、P 20 から青白磁梅瓶 (第 75 図 12) が出土した。時期ほか：出土遺物の時期をもって、13 世紀前半～14 世紀前半と推測する。なお、P 17 柱痕、P 9 柱痕、P 1 掘方から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代 (1 σ) で、それぞれ、11 世紀中葉～12 世紀後半、12 世紀後半～13 世紀前葉、12 世紀後葉～13 世紀半ばに相当する測定値を得た。考古学的年代観より若干古い、概ね整合すると考える。基底面に被熱部は確認できなかったが、本建物跡を覆う 11 層は焼土粒や炭化物を含む。また、S T 01 にも関連するが、周辺や南側の N R 01 から出土した陶磁器には二次被熱を受

けているものがあつた。S T 01と同様に、本建物が火災に遭って焼失したことを推測しておきたい。

段切6 (第21図)

位置：B 13区、ⅡW 07・08・12・13グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。構造：斜面を断面L字状に切り開いて、基底面となる平坦部を造成している。東と南が開放する形状で、西壁から直角に屈折して北壁が延びるが、北壁はほとんど調査区外となる。残存状況は悪く、西壁長4m、高さ最大20cmほどが残存するに過ぎない。ただし、平坦部としては南北6.5m、東西4mほどが残存する。西壁から1mほど東側に、西壁に平行して延びる溝S D 14がある。長さ4.7mほどを確認した。幅10～30cmほど、深さ10～15cm前後を測る。南端は、55×60cm、深さ55cmの方形の土坑に接続する。廃絶後、暗褐色～黒褐色土が埋積する。主要関連遺構：S T 03。遺物：埋土から、かわらけ(第77図111)、水注と推測する白磁片が出土した。時期：遺構としての残存状況が悪く、遺物も僅少のため、時期を特定し難い。埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代(1σ)で、15世紀初頭～前葉に相当する測定値を得た。出土遺物と年代測定結果を考慮併せ、13世紀前半～15世紀前葉の幅広い時期を想定するにとどめたい。

S T 03 (第45図)

位置：B 13区、ⅡW 07・08・12・13グリッド。検出：段切6の基底面で検出した。重複関係：S K 515との切合い不明である。構造：掘立柱建物跡である。検出したのは南北1間、東西1間である。北方および東方に続く可能性があり、全体形は明確でない。柱間隔は、柱穴心々で東西・南北とも2.6mを測る。遺物：なし。時期：13世紀前半～15世紀前葉の幅広い時期を想定するにとどめたい。

S K 05 (第40図)

位置：B 1区、ⅡP 01・02グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：S K 04・06を切る。埋土：レンズ状および断面三角形状堆積を示す黒褐色～褐色シルト質土の1～8層が埋積する。形状・規模：平面形は隅丸方形を呈する。規模は南北方向2.4m、東西方向2.2mを測る。床・壁：床は堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。壁は最大で高さ62cmを測り、垂直に近く立ち上がる。柱穴：確認できなかった。遺物：砥石(第79図8)が出土した。時期：明確な中世遺物は出土していないが、中世の土葬墓と考えるS K 04を切ることから、中世の堅穴状遺構と判断した。

(3) 溝跡

溝状の掘込みは14条を検出した。そのうちS D 01～04は現代の掘込みであることがわかった。また、S D 06・07・08・09・10も近現代の可能性が高い。S D 11～13は段切5の付属施設であり、S D 14は段切6の付属施設と考える。残るS D 05について簡潔に記述する。

S D 05(第20図)はB 6・7区に位置する。自然流路跡N R 01内に、その埋土上部を切って掘込まれている。N R 01の南岸に沿って西から東へ延びており、宅地造成により消失している。確認延長は33mを測る。断面形は、西端部では幅に比べて深いU字状を呈するが、その他の部分では緩やかなU字状となり、最大幅3.7m・深さ最大60cmを測る。埋土はレンズ状堆積を示す暗褐色～黒褐色のシルトである。出土遺物は輸入陶磁器(第75図20・54)、国産陶磁器(第76図70)、山茶碗系の片口鉢、かわらけ(第77図122・125)、内耳土器(第78図137)、銭貨(第82図26)が出土した。内耳土器の出土をもって、15世紀後半以降に属すると考える。埋土出土の生材の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代(1σ)で、8世紀後葉～10世紀中葉頃の結果となった。古い時期の木材の混入と考える。

(4) 土坑 (第46～48図)

今回の調査で検出した土坑はおおよそ500基を数える(墓跡を含む)。分布は、北尾根北斜面部から南尾根北斜面部まで、調査区内の広い範囲に及ぶ。時期不明確なものが大部分を占めるが、古代～中世の建物建

造城や墓城の広がりや重なり、そのほとんどは古代～中世の所産と考える。

土坑の形態は、円形～長方形、小形～大形、二段掘り状を呈するもの、内部に石組をもつもの、単純な掘り込み、柱穴様の小土坑などさまざまである。数量的には、平面円形ないし楕円形を呈する単純な掘り込みが大多数を占める。個別実測図は、形態・構造、遺物や礫の出土状況を勘案し、代表例を選択して掲載した。なお、南尾根北斜面部の土坑は、テラス状遺構群との関連が考えられるため、個別遺構図をテラス群の遺構図に含めて掲載したことがある。

個々の属性については、添付DVD収録の土坑一覧表に記載した。土坑一覧表には後述の土葬墓・火葬墓・火葬施設を含めて記載している。

土坑一覧表における平面形状、断面形状の分類は、以下の分類法による。

平面形状は開口部の長軸長と短軸長の比により、以下のように分類した。一定の形状を示さないものについては不整形とした。

- ・円形・方形：長軸長/短軸長 = 1.2 未満のもの
- ・楕円形・長方形：長軸長/短軸長 = 1.2 以上のもの

断面形状は底部と壁の状態から、以下のように分類した。

- ・逆台形状：底部が平坦で壁が斜めに立ち上がるもの
- ・タライ状：平面形が円形基調で、底部が平坦で壁が垂直ないし垂直近くに立ち上がるもの。
- ・箱形状：平面形が方形基調で、底部が平坦で壁が垂直ないし垂直近くに立ち上がるもの。
- ・U字状：底部が丸みを帯び、壁が垂直もしくは斜めに立ち上がるもの
- ・掘鉢状：小さく丸い底部から壁が斜めに立ち上がるもの
- ・袋状：開口部より外側に底部が広がり、壁がオーバーハングするもの
- ・二段掘状：底部に有段状の凹部をもつもの
- ・円筒状：小型で直径と比較して深さがあり、壁が垂直ないし垂直に近い角度で立ち上がるもの

中央低地部の自然流路跡北岸部（B6区・7区・12区南・13区）と南岸部（C8区）には、小形の土坑が集中する。建物跡を構成する組み合わせを抽出することはできなかったが、形状・規模が類似する小土坑が群在しており、建物跡が存在した可能性は高いと考える。帰属時期は不明確であるが、C8区に位置するSK 395から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代（1σ）で、13世紀末～14世紀末頃に相当する測定値を得た。C8区では、検出面出土であるが、13世紀前半の山茶碗が出土している。また、B6区・7区・12区南・13区は、SB 11やST 01・02などに隣接する部分であり、C8区の小土坑群を含めて、その大部分は中世の主要建物群に並行する時期の所産と推測しておきたい。

（5）土葬墓（第49・50・56図、PL4）

遺体を火葬せずに埋葬したことを想定し得る遺構13基を土葬墓とした。人体遺存は認められないが、副葬品と考え得る遺物を伴うものを含めることとする。出土した人骨については、茂原信生氏・櫻井秀雄氏に鑑定を依頼し、その報告を第4節に掲載した。以下の出土人骨鑑定結果に関する記述は、その報告に基づくものである。なお、以下の個別遺構図（第49～53図）中の骨番号は、本文末（253～264頁）に掲載した第11表の出土骨一覧表に一致する。

形態・構造

墓坑の平面形は長方形、丸みを帯びた長方形、方形、楕円形、円形が、断面形は箱形状、逆台形状が認められる。長方形のものは、箱形状を呈して壁が垂直に立ち上がる傾向が強い。円形のものはSK 85のみ、方形のものはSK 124のみである。

構造的には、A：木棺を伴う可能性があるもの（SK 04・110・111）、B：石組を伴う可能性のあるもの

(SK 19・130)、C：現状素掘り状のもの（その他）、が認められる。SK 04は出土した鉄釘4本のうち3本に木質が遺存していた（第81図12・13）。釘は遺存していないが、SK 110・111からも木片が出土した。SK 19・130は壁に立てかけるように石を配している。また、SK 03・81・83・85・111・124は埋土から石が出土した。特に、SK 85・111は多量の石が、SK 83は墓坑幅に匹敵する大形石1個が出土しており、墓の上部構造や葬送儀礼に関わる可能性も考えられよう。

確認できた埋葬姿勢はすべて屈葬で、人骨の遺存状況不良のものも、墓坑の大きさからみて屈葬と判断してよいであろう。

副葬品

確認した副葬品は銭貨のみである。SK 03・08・19・110・111・124の6基で出土している（第82図）。SK 19・110には永楽通寶（第82図12・16）、SK 111には洪武通寶（第82図20）が認められる。他は唐銭、北宋銭である。出土銭貨の詳細は、添付DVD収録の銭貨一覧表に記載した。

分布

北尾根北斜面部（SK 83・85）、北尾根頂部（SK 02～04・08・16・19・81）、北尾根南斜面下部～中央低地部（SK 110・111・124）、南尾根北斜面部（SK 130）で確認した。特に北尾根頂部には7基が集中する。なお、南尾根北斜面部の土葬墓は、テラス状遺構群との関連が考えられるため、個別遺構図をテラス群の遺構図に含めて掲載した。後述の火葬墓・火葬施設についても同様である。

時期

SK 16およびSK 81出土炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。結果は、暦年較正年代（1 σ ）で、SK 16が12世紀後葉から13世紀前葉、SK 81が13世紀末から14世紀末に相当する測定値を得た。北宋銭・明銭を副葬した墓は中世に属すると考える。その中で、SK 111は1368年以降、SK 19・110は1408年以降となる。上記の年代測定結果を考え併せ、土葬墓は総体として中世の埋葬と推測する。年代的には13世紀から15世紀前半頃を想定しておきたい。

被葬者

被葬者の性別や年齢等がある程度わかるものがある。鑑定によると以下のとおりである。SK 02は青年男性の可能性が高い。SK 04は青年女性、SK 16は壮年、SK 19は男性の可能性が高く壮年後半程度、SK 81は青年程度である。SK 83は妊娠歴のある女性で、今回の調査で確認した土葬墓の被葬者の中で最高齢の可能性が高い。SK 85は熟年程度の女性と考えられ、歯槽性突顎など中世的な特徴を示す。

(6) 火葬墓（第51・52・54・55・57・59～63図、PL 4）

火葬骨を埋葬したことを想定し得る遺構31基（SK 17は9基とした）を火葬墓とした。

形態・構造

墓坑の平面形は、楕円形、円形が、断面形は逆台形状、U字状、クワイ状が認められる。

構造的には、A：蔵骨器を伴うもの（SK 31・32・80）、B：石組を伴うもの（SK 40）、C：現状素掘り状のもの（SK 07・106・89・ⅢG 09骨№10）、D：小ピット（SK 17はか多数）、が認められる。Aに属するSK 31・32は美濃須衛製品の四耳壺を蔵骨器としており、SK 80は銭貨が密着した木片が遺存するため、曲物などの有機質の蔵骨器を推測する。Dの小ピットは、長径20～30cm前後の平面円形～楕円形で、深さ最大15cmである。以下、Dを火葬骨埋納ピットまたは納骨ピットと呼称することとする。

SK 31は墓坑底に直接四耳壺（第76図58）を納めている。四耳壺は頸部以上を失っているが、埋納時に意図的に打ち欠いたのかは明らかでない。表土直下の検出のため、後世の耕作等により消失した可能性もある。蓋は確認できなかった。SK 32は墓坑の北壁に板状石を立てている。四耳壺（第76図59）は当初から高台の半分を欠いており、墓坑底中央を掘り窪めて四耳壺を据えている。

S K 17 は当初、2 m × 2 m ほどの範囲で焼骨片が出土し、分布が密な部分を中心に骨出土番号を付した。精査を進めるうち、納骨ビット9基の集合であることが判明したが、骨出土番号をそのままビット番号として用いた。骨№1・2・3・5・7・8・9・15・16がそれぞれ納骨ビットである。

副葬品

確認した副葬品は銭貨のみである。S K 80 から3枚が出土した。いずれも北宋銭である。

分布

北尾根頂部 (S K 07・17)、北尾根南斜面部 (S K 31・32・40・106)、西尾根東斜面部 (S K 89)、南尾根北斜面部 (S K 134・Ⅲ G 08 骨№1 は大多数) で確認した。北尾根南斜面部には、美濃須衛製品の四耳壺を蔵骨器とする S K 31・32 が存在する。また、古瀬戸四耳壺の頸部～胴部の大形破片が2個体 (第76図 61・62) 出土しており、さらに多くの蔵骨器埋納墓が存在した可能性は高い。南尾根北斜面部では、後述のテラス状遺構群内やその周辺で火葬骨埋納ビットを13基確認した。掘込みは確認できなかったものの、焼骨集中箇所が16箇所あり、さらに多くの納骨ビットが存在した可能性は高い。なお、南尾根北斜面部の納骨ビットについても、S K 17と同様に、検出時に付した骨出土番号をそのままビット番号として用いた (Ⅲ G 08 骨№1等)。

時期

S K 31・32の四耳壺 (第76図 58・59) は13世紀初頭と考え得るもので、遺構の年代はそれ以降である。S K 80 は出土した北宋銭により、中世に属する火葬墓と考える。南尾根北斜面部の火葬骨埋納ビットⅢ G 08 骨№1 とⅢ G 15 骨№3 の出土炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代 (1σ) で、13世紀末から14世紀後葉頃に相当する測定値を得た。火葬墓、特に火葬骨埋納ビットは、五輪塔等の上部施設を伴っていた可能性がある。出土した五輪塔は16世紀に下ると推測し得るものがあり、加えて、四耳壺の伝世期間を考慮し、火葬墓群の年代は、総体として13世紀前半から16世紀半ば頃を想定しておきたい。

被葬者

鑑定によれば、S K 31 の出土人骨は性別不明で、さほど高齢ではない。S K 32 は性別不明の成人である。S K 17 出土骨には、年齢や性別は不明だが、細い女性的な四肢骨も含まれている。他の火葬骨埋納ビットについては、被葬者の性別や年齢について得られた知見は少ないが、ビット個々の人骨量が少ないこともあって、別個体と確認できる部分の出土、すなわち明らかに複数個体が埋葬されたビットはない。

(7) 火葬施設 (第52・53図、P L 4)

火葬施設と判断した遺構は、北尾根南斜面部の2基 (S K 36・103)、南尾根北斜面部の2基 (S K 138・189) がある。S K 36 は平面楕円形を呈し、長軸上の両端に煙道部が張り出す。底面および壁面が被熱している。S K 103 は隅丸長方形を呈し、底部に短軸方向の溝状掘込みをもち、その片端が煙道部となって張り出す。溝状掘込みを除く部分に石を敷いている。S K 138 は、残存状況不良で形状不明ながら、底面が被熱している。S K 189 は隅丸長方形に近い形状で、底面に短軸方向の石の並びを2列有する。石は被熱している。S K 103・189からは焼骨が出土した。

年代を示す遺物は出土していないが、S K 36 出土炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代 (1σ) で、12世紀後半から13世紀前葉頃に相当する測定値を得た。個々の年代は明確でないが、中世火葬墓群の形成と関連する遺構であることは確かであろう。

(8) テラス状遺構 (第17・18・23・54～63図、P L 5・6)

斜面を断面L字状に切り開いてテラス状の平坦部を造成した遺構を、南尾根北斜面部で9基、西尾根東斜面部で2基を確認した。平面形は等高線に平行する方向に広く、直交する方向が狭い形状である。北尾

根南斜面下部から中央低地部の段切遺構と区別する意味も含め、テラスと呼称することとした。南尾根北斜面部にはテラス1～9、西尾根東斜面部にはテラス11・12が存在する。テラス10は欠番である。

南尾根北斜面部では、テラスとその周辺で火葬骨埋納ピットを確認したほか、広い範囲で火葬骨片が出土しており、墓地が形成されていたことは明らかである。遺存状況が良好なテラスでは、テラス面に石を敷き詰め、その上に五輪塔を造立した状況を捉えることができた。納骨ピットはテラスの端部や周囲に存在する傾向があり、テラスは造塔区画としての性格が主体であることを推測する。

西尾根東斜面部では、人骨や礫、原位置を保つ石造物は存在しなかったものの、同様な形状のテラスを検出した。五輪塔各部や板碑が出土しており、墓地が営まれていたと理解してよいであろう。

以下、各テラスについて簡潔に記載する。規模は等高線に平行する方向で幅、直交する方向で奥行として記載した。各テラスとも検出は基本層序第Ⅲ層上面である。なお、テラス群遺構図中の五輪塔番号は取上番号である。添付DVDに収録した五輪塔一覧表に、取上番号を記してあるので参照されたい。同様に、骨番号も取上番号である。第11表(253～264頁)の出土骨一覧表に取上番号を記した。ただし、取上番号は遺構番号(納骨ピット)・出土地点番号を兼ねている。

テラス1(第54・55図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG11～14)に位置する。テラス群は5段を確認し、テラス1はその最上段の5段目にあたる。西側にテラス5が隣接する。テラス面の幅21m、最大奥行1.4mを測る。石敷は確認できなかった。五輪塔各部が出土したが原位置は保っていない。テラス面で火葬骨片が出土したものの、納骨ピットはなかった。

テラス2(第56図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG12・13)に位置する。テラス群の4段目にあたる。掘込み壁の平面形は弧状を呈する。テラス面の幅6.6m、最大奥行1.3mを測る。石敷は確認できなかった。五輪塔各部が出土したが原位置は保っていない。テラス内西部に土葬墓SK130が位置する。

テラス3(第56図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG08～13)に位置する。テラス群の3段目にあたる。西部のみ残存し、テラス面の幅1.8m、最大奥行0.7mを測る。石敷は確認できなかった。五輪塔各部が出土したが原位置は保っていない。テラス内西部に石組を伴う土坑SK131が位置する。

テラス4(第57図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG08・09・13・14)に位置する。テラス群の3段目にあたる。掘込み壁の平面形は台形状を呈する。テラス面の幅6.9m、最大奥行1.8mを測る。中央部に石敷が一部残存し、その直下に浅い掘込みが存在する(ⅢG09骨№10)。火葬骨が集中して出土し、火葬墓と判断した。テラス面の中央に位置しており、テラス7の石敷直下のSK466に類似した在り方である。西部に石組を伴う土坑SK220が位置する。テラス面から五輪塔各部が出土したが原位置は保っていない。

テラス5(第54・55図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG11)に位置する。テラス1の西側に隣接する。西側が調査区外となり、全体の形態は不明である。確認したテラス面の幅4.2mを測る。明確な平坦面の奥行は0.8mであるが、前面に緩傾斜面があり、それを含めると3.0mとなる。掘込み壁際に石組を伴うSK132・133があり、平坦面と緩傾斜面の境にSK135が位置する。緩傾斜面を主体に五輪塔各部、礫が出土したが原位置は保っていない。また、鉄釘(第81図14)が出土した。

テラス6(第57図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG06・07・11・12)に位置する。テラス群の3段目にあたる。掘込み壁の平

面形はコ字状を呈する。テラス面の幅6.2m、最大奥行1.5mを測る。広い範囲で石敷が残存し、その直上に一部、五輪塔地輪が残存していた(テラス6-29・30)。本来の造塔位置にあると判断したが、劣化が著しく、形状を保ったまま取上げることができなかった。他にテラス面や前面から五輪塔各部が出土したが、それらは原位置を保っていない。

テラス7 (第58～60図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG 07・08)に位置する。テラス群の2段目にあたる。掘込み壁の平面形はコ字状と推測する。テラス面の全幅13.2m、最大奥行2.7mを測る。西部と東部に大きく分かれる。

西部は幅5.0m、最大奥行1.8mを測る。明確な石敷きは確認できなかった。東部を含め、上段のテラスから崩落してきたと考えられる礫で覆われていた。西端部に納骨ピット2基が存在する。

東部は西部より若干低く掘り込まれている。東端部を少し欠失するが、幅8.2m、最大奥行2.7mを測る。石敷が良好な状態で残り、石敷内には幅3m、奥行1.5mのコ字状に区画する石の並びが認められる。区画石列の内部に梵字を刻んだ大型の地輪が並ぶ。残存するのは2基(第102図57・58)だが、区画内の東部にはもう1基分の余地がある。同様な梵字を刻んだ同石材・ほぼ同型同大の地輪(第102図59)が斜面下方で出土しており、その地輪を含めた3基が区画内に並列していたことは確実とみてよい。残存する地輪の梵字は2基とも、北面に「アク」、東面に「ア」、南面に「アー」を刻んでいる。西面には梵字の刻出はなく、墨痕も認められない。地輪2基の間には、どちらかに組み合わせると推測し得る水輪1個体(第101図46)が落ち込んでいた。石敷下には、区画石列内の中央やや東寄りに東西1.5m、南北0.9mの長方形の坑SK466が存在する。SK466は断面U字状で、壁・底面に扁平礫を貼り付けている。人体遺存や埋納品はなかったが、石敷の礫や地輪が落ち込んでいるため、内部に一定の大きさの有機物が存在したことを推測し得る。石敷は上段のテラスから崩落してきたと推測する礫で覆われていたが、その礫中に、板碑と考えられる緑色片岩の小片がわずかに混じていた。また、崩落礫中や石敷上から、鉄釘29点、銭貨1点(第82図25)が出土した。鉄釘のうち1点は六花形の釘隠しを伴う(第81図20)。出土数の多さや釘隠しの存在からみて、少なくとも区画石列部分に上屋が建っていた可能性は高い。

テラス8 (第61図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG 10・15、H 06・11・12)に位置する。東端部は調査区外となる。テラス面の幅19.5m、最大奥行1.8mを測る。石敷は確認できなかった。掘込み壁中央部の壁下に溝が延びている。溝は両端が屈折し、全体として平面形がコ字状を呈する。この溝によりテラス8は、東部、中央部、西部の3区域に区画された状態になっている。西部の壁下にも溝が延びており、中央部の溝の西端に接続する。五輪塔各部が出土したが原位置を保っていない。そのほか、山茶碗小皿(第77図91)、鉄釘(第81図21・22)が出土した。西部と中央部に納骨ピットを確認した。また、西部のテラス面および、やや下の斜面に火葬施設と推測するSK138・189が存在する。SK138・189周辺に多く認められる焼骨の散布はSK138・189に関連する可能性もあろう。

テラス9 (第23図)

南尾根北斜面部(C5区、ⅢG 09)に位置する。現状、テラス群の最下段にあたる。掘込み壁は平面コ字状を呈し、テラス面の幅4.0m、最大奥行0.6mを測る。石敷は確認できなかった。五輪塔、人骨は出土していない。

テラス11 (第18図)

西尾根東斜面部(B2区西、IY 10・15、II U 11)に位置する。急斜面に位置しており、安全を考慮したため、全体を明らかにすることができなかった。掘込み壁は平面弧状を呈し、高さは2m以上ある。テラス面は岩盤(基本層序第IV層)を削り込んでいる。確認したテラス面の幅10.6mを測る。明確な平坦面の

奥行は3.0mであるが、前面に緩傾斜面があり、それを含めると4.9mとなる。石敷を含め、テラス面の施設は確認できず、人骨の出土もなかった。埋土から五輪塔各部および板碑片が出土した。

テラス12 (第17図)

西尾根東斜面部(B2区西、I Y 05・10)に位置する。掘込み壁は平面弧状を呈する。テラス面の幅5.7m、奥行0.9mを測る。石敷を含め、テラス面の施設は確認できず、人骨、五輪塔、板碑の出土もなかった。

南尾根北斜面部テラス群の配置と時期 (第23図)

テラス1の東西中央から北に延ばしたラインを中軸として、テラス2・4・6・7は左右対称に位置する。また、テラス1の東端と4・9の東端、テラス1の西端とテラス6の西端がほぼ揃う。配置には計画性を看取できる。各テラスが強く関連し、一つの大きなまとまりを成すと考える。最上段に位置するテラス1は長大で、他のテラスとは異なる性格を備えていたかもしれない。テラス8はテラス1と同様に長大である。北側5mに五輪塔・磔の集中部(SQ01)があるなど、テラス8の北側にテラス群が存在した可能性はある。しかし、現状、テラスは確認できない。

テラス個々の時期については詳細を明確にし難い。テラスや火葬骨埋納ビット出土の炭化物、出土土器付着物の放射性炭素年代測定では、暦年較正年代(1 σ)で、以下の年代に相当する測定値を得た。

A: テラス7の地輪テラス7-1底面挟込み内炭化物が13世紀前半~13世紀中葉

B: テラス7石敷下のSK466埋土1層出土炭化物が13世紀後半~13世紀末

C: テラス8埋土出土炭化物が現代

D: テラス4西端部の納骨ビットⅢG08骨№1出土炭化物が13世紀後葉~14世紀後葉

E: テラス8南西の納骨ビットⅢG15骨№3出土炭化物が13世紀末~14世紀後葉

F: テラス1埋土出土かわらけ付着物が13世紀後葉~14世紀後葉

AよりBが新しい年代を示すことについては、先にSK466の埋納物の腐朽に伴って石敷の磔が落ち込んだことを推定したが、試料はその落ち込み部分から採取したものであるため、矛盾はないと考える。Cについては自然擾乱によるものと考えられる。

出土遺物はテラス8出土の山茶碗小皿(第77図91)が13世紀後半、テラス1埋土出土のかわらけが13~14世紀と推測する。五輪塔は、個々の時期を特定し難いが、およそ14世紀から16世紀半ば頃の様相を示すと考える。

以上を総合して、テラス群を含めた南尾根北斜面部の墓域の時期は、総体として13世紀後半から16世紀半ば頃を想定する。西尾根東斜面のテラスについては、資料僅少のため時期不明確であるが、南尾根北斜面部の墓域存続期間におさまると考えておきたい。

(9) 被熱部、焼土跡 (第64図、PL7)

単独の被熱部・焼土跡は6基を確認した。個々の属性は添付DVD収録の被熱部・焼土跡一覧表に掲載した。ここでは、SF04についてのみ言及する。

SF04は北尾根南斜面部(B3区、II P 21・22)に位置する。南北方向77cm、東西方向46cmを測る平面略楕円形の被熱部である。上面に2箇所の小さな凹部があり、その内部に粒状炭化物が集積していた。この粒状炭化物が、炭化した植物種子である可能性があるため、種実同定分析を実施したところ、ほぼ穎が残るオオムギであることが判明した。詳細は第5節に記載した。また、放射性炭素年代測定では、暦年較正年代(1 σ)で、12世紀後葉~13世紀半ば頃に相当する測定値を得た。本被熱部に伴う他の遺物はなく、性格は明らかにならなかった。上記の年代測定結果を援用し、本被熱部の時期を12世紀後葉~13世紀半ば頃と考えておきたい。なお、発掘時点では、粒状イコール米と短絡的に判断して「炭化米集中部」と呼称してしまった。DVDに収録した樹種同定・種実同定結果報告書の記載も「炭化米集中部」とな

ているので注意されたい。

(10) 自然流路跡 (第65～70図、P.L7)

中央低地部の最底部には埋没した自然流路跡が存在する。主流路は南西から北東に下り、B6区で屈曲してほぼ真東に延びる。屈曲部に北西から小規模な支流路が合流する。主流路をNR01、支流路をNR02と呼称した。

NR01は、確認西南端から合流部までの延長50m、幅8～10m、深さ1.7mを測り、合流部から確認東端までの延長58m、幅12～15m、深さ1.6m以上を測る。平面的に検出した部分すべてを最底部まで掘り切ったわけではないが、断面形はおおよそ緩やかなU字状を呈する。

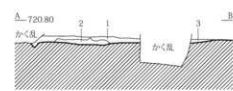
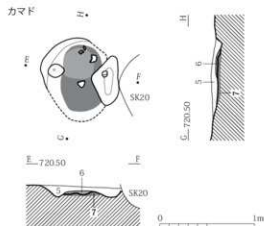
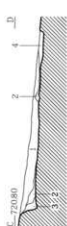
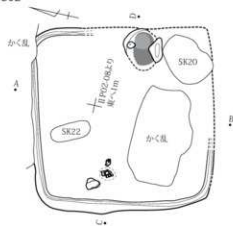
NR02は、北西端から合流部までの延長45m、幅4m～8m、深さ0.2～1.0mを測る。断面形はおおよそ緩やかなU字状である。北西端部で二股に分かれる形勢を示すが、ごく浅くなって確認不能となる。

NR01・NR02を埋積する土層は、両者を通した16層に分層した。そのうち、黒色シルト質粘土～粘質シルトの10層から中世の陶磁器・土器および木製品が多く出土した。10層はNR02下流部からNR01のほぼ全域に形成されているが、ⅡV18・19・23・24グリッド部分には存在しない。10層直上の8・9層は部分的に堆積する粗砂・礫混シルト層で、特に8層は互層状を成す。その上の7層は、ほとんどの部分で10層の直上に堆積する砂・礫を多量に含むシルト層で、合流点から下流25mほどには礫集中部分が帯状に延びている。7層からは中世の陶磁器・土器および木製品が出土した。9～7層の性状や、後述する合流部の杭列の状況から考えて、9～7層はある程度の強さの水流を伴って形成されたことを想定し得る。ⅡV18・19・23・24グリッドに10層が存在しない部分があることから、9～7層は10層を削って形成されたと考えてよいだろう。本来的な中世遺物包含層は10層と考える。7層出土土器・陶磁器と10層出土土器・陶磁器の接合例は少ないが、離れた地点間の接合例はすべて、上流側10層と下流側7層の接合であった。このことは、9～7層が10層を削り取ったことの傍証となろう。11層以下は古代以前の遺物を包含するが、その量は少なく、かつほぼ上部に限られる。NR01のすべての部分を最底部まで掘り切らなかったのは、安全上の理由とともに、上記のような遺物の出土傾向による。

NR01・02合流部の西岸部で杭列を検出した(第70図、P.L7)。太さ3～5cmほどの角杭を密集して打ち込んでいる、設置範囲は南北2m、東西0.4mほどを確認した。杭は10層を貫き、基本層序第Ⅲ層～第Ⅳ層に達している。杭は10層と7層の層界で破断する状況が明らかであった。機能は明確ではないが、密集する状況から、護岸に関わる施設と推定しておきたい。

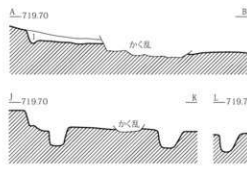
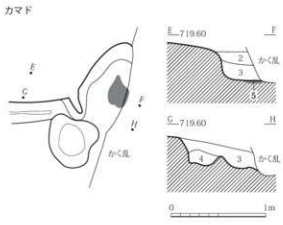
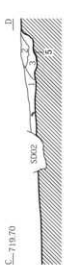
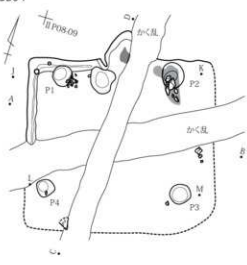
B12区南のNR01北岸にSE01が存在する(第64図)。NR01北岸斜面に直径2m、深さ0.4mほどの円形部を掘込んでおり、その周囲にも浅い堀込みを検出した。また、北側に階段状の幅狭い平坦部を作り出したような部分を検出した。壁面や底面から常時湧水し溜水することから、水溜め施設としての機能を想定してSE01とした。SE01からは木製品や陶磁器が出土しており、その様相はNR01と同様である。

SB02



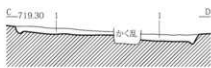
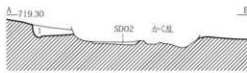
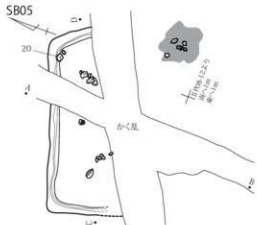
- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト質土。粘性なし。しまりややあり。地山土粒混
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト質土。粘性なし。しまりややあり。部分的に地山土ブロック混。
- 3 褐色 (10YR4/6) シルト質土。粘性ややあり。しまりあり。粒子細。地山土主体。壁崩落土。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト質土。粘性なし。しまりややあり。焼土粒ブロック混。2層と類似。
- 5 暗褐色 (10YR3/4) シルト質土。粘性・しまりなし。地山土粒・焼土混。カマド崩落土。
- 6 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 粘性なし。しまり弱。2~10mm焼土粒ブロック多混。カマド天井・袖・焼土崩落土。
- 7 明赤褐色 (2.5YR5/8) 火床。

SB04

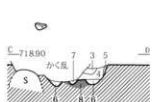
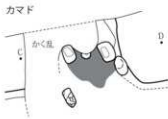
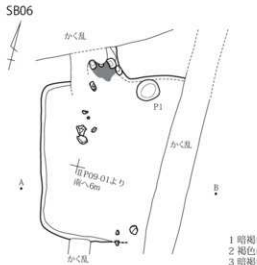


- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質土。粘性・しまり弱。褐色土ブロック少量混。粗かく乱あり。
- 2 暗褐色 (10YR3/4) シルト質土。粘性・しまり弱。黒褐色土・褐色土混在。褐色土ブロック混。5mm焼土ブロック少量混。粗かく乱あり。
- 3 褐色 (10YR4/4) シルト質土。粘性・しまり弱。焼土・褐色土多混。粗かく乱あり。
- 4 褐色 (10YR4/4) シルト質土。粘性なし。しまりあり。暗褐色土少量混。カマド崩落土。
- 5 火床。

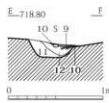
第33図 S B02・04 遺構図



I 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性・しまり弱 部分的に褐色土ブロック少量混 入かく風あり

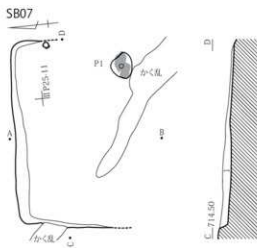
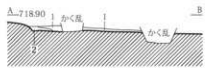


P1 礎・遺物出土状況



0 1m

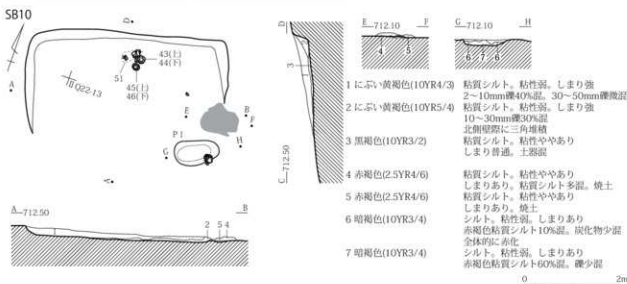
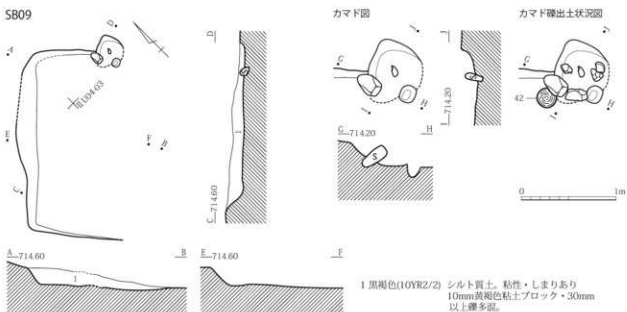
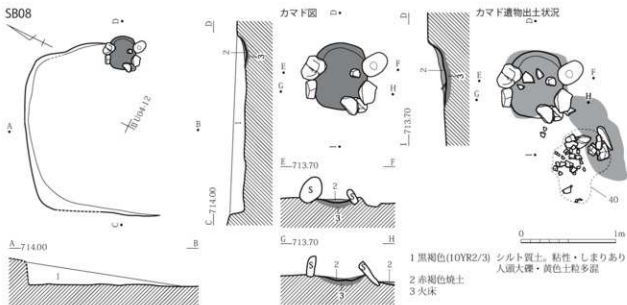
- 1 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性弱。しまりあり。褐色シルト質土少量混入。粗かく風あり
- 2 褐色(10YR4/4) シルト質土。粘性弱。しまりあり。地山土主体。暗褐色シルト質土少量混入
- 3 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまり弱。地山土・暗褐色土混在。焼土ブロック少量混入
- 4 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまり弱。地山土・暗褐色土混在。焼土ブロック少量混入
- 5 褐色(10YR4/6) シルト質土。粘性・しまりあり
- 6 褐色(10YR4/4) 粘質土。しまり弱。焼土ブロック混。袖石状取混
- 7 暗赤褐色(5YR3/6) 粘質土。しまりなし。暗褐色土・褐色土ブロック・焼土混在
- 8 明赤褐色(2.5YR5/8) 灰土。粘性なし。しまりあり
- 9 赤褐色(5YR4/8) 焼土。粘性なし。しまりあり
- 10 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。褐色土・暗褐色土混在
- 11 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。褐色土・暗褐色土混在
- 12 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。褐色土・暗褐色土混在。20～30mm礫多混



- I 黒褐色(10YR2/3) 粘性・しまりあり。黒色粘質シルト主体 50mm礫・10mm褐色土ブロック混
- 2 暗褐色(7.5YR3/3) 粘性弱。しまりあり。5～10mm焼土ブロック多混。炭化物混 入や焼熱劣化
- 3 暗褐色(10YR3/3) 粘性弱。しまりあり
- 4 黒褐色(10YR2/3) 粘性あり。しまり弱

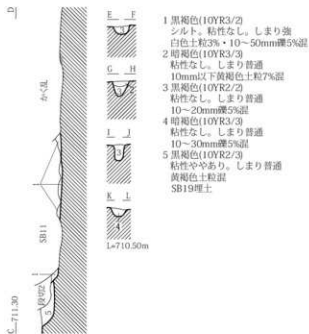
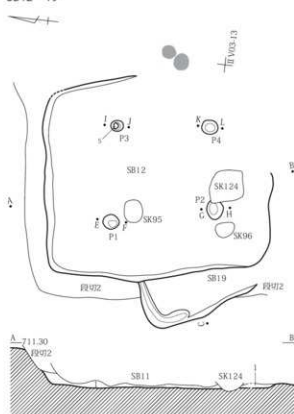
0 2m

第34図 SB05～07 遺構図



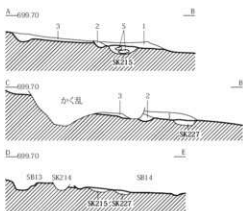
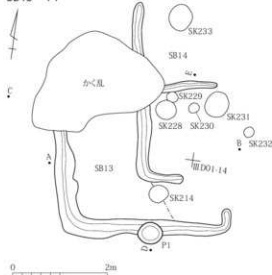
第35図 SB08~10 遺構図

SB12・19



- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性なし。しまり強
白色土粒3%・10～50mm礫5%混
- 2 暗褐色(10YR3/3)粘性なし。しまり普通
10mm以下黄褐色土粒7%混
- 3 黒褐色(10YR2/2)粘性なし。しまり普通
10～20mm礫5%混
- 4 暗褐色(10YR3/3)粘性なし。しまり普通
10～30mm礫5%混
- 5 黒褐色(10YR2/3)粘性ややあり。しまり普通
黄褐色土粒混
SB19埋土

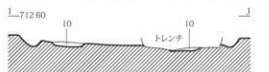
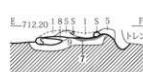
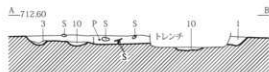
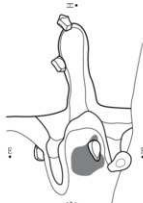
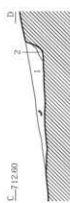
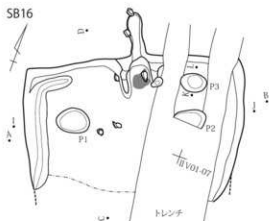
SB13・14



- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性なし。しまりあり。30～50mm礫多混
SB14埋土
- 2 黒褐色(10YR2/3)粘性なし。しまりあり。10～30mm礫5%混
地山土少混。B14埋土
- 3 黒褐色(10YR2/2)粘性なし。しまりあり
10～50mm礫10%・地山土ブロック 75%混
200mm礫・炭化物微混
SB13埋土

第36図 SB12・19・13・14 遺構図

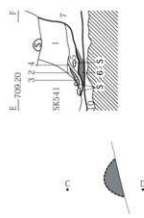
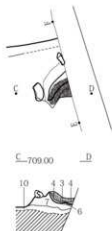
SB16



- 1 黒褐色(10YR2/3) シルト。粘性なし。しまり強
黄褐色土粒1%・炭化物粒1%・焼土粒1%混
10~30mm礫微混。入道大礫数個混
- 2 黒褐色(10YR3/2) シルト。粘性なし。しまりあり
地山土ブロック10%混。礫微混
- 3 黒褐色(10YR2/2) シルト。粘性なし。しまりあり
黄褐色土粒1%混。黒色帯びる。周溝埋土
焼土ブロック混
- 4 暗赤色(10R3/6) 粘性なし。しまり普通
- 5 暗赤褐色(5YR3/6) 粘性なし。しまり普通
黒褐色土ブロック混。炭化物微混
- 6 黒褐色(10YR2/2) 粘性なし。しまりややあり。砂質強
炭化物多混。黒色帯びる

- 7 明赤褐色(2.5YR5/8) 硬化した火床
- 8 褐色(10YR4/4) ローム主体。軽石混。暗褐色土ブロック・
黄褐色土ブロック少量。10mm礫微混
カマド側方埋土
- 9 にぶい黄褐色(10YR4/3) ローム多混。炭化物粒・焼土粒少量
カマド側方埋土
- 10 黒褐色(10YR2/3) シルト。粘性なし。しまりあり
地山度ブロック3%混。1層に細裂
粘性なし。しまりあり。焼土粒3%混
- 11 黒褐色(10YR2/2) 炭化物やや多混

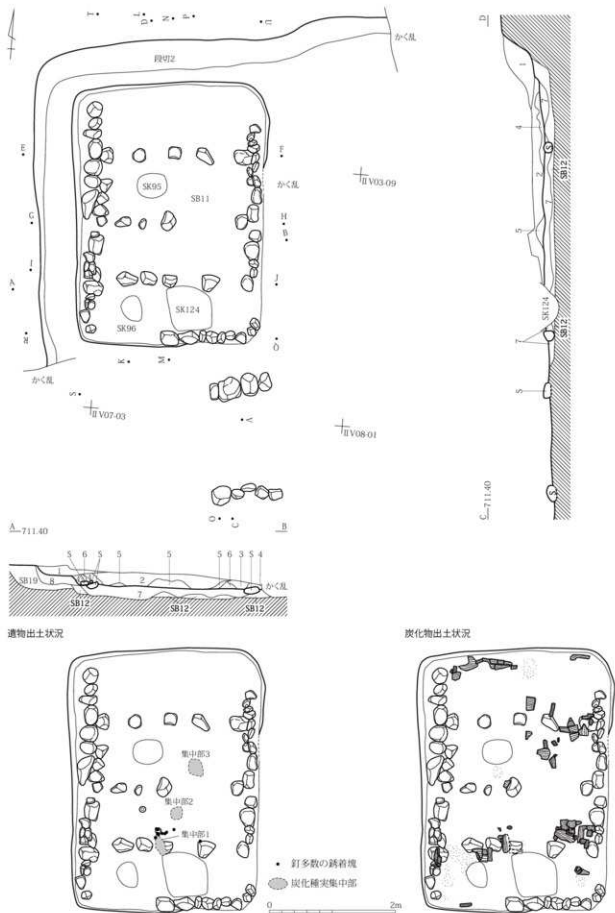
SB20・21



- 1 黒褐色(10YR2/3) シルト。やや砂質。粗砂多混。炭化物粒混。20~50mm礫微混
7層に類似
- 2 黒色(10YR2/1) シルト。しまりなし。炭化物粒極多混
- 3 明黄褐色(10YR7/6~8/6) シルト質粘土。中央部は還元により灰色化。被熱硬化。炉1構築材
- 4 明赤褐色~暗赤褐色(5YR5/6~3/6) シルト。被熱硬化。内から外へ明赤褐色~暗赤褐色に漸移
7層の酸化部分か
- 5 黒褐色(10YR2/2) シルト。やや砂質。焼土粒・炭化物粒2%混。1層に類似

- 6 炉2火床
- 7 黒褐色(10YR2/3) シルト。やや砂質。粗砂20%・10mm以下礫2%混
20~50mm礫・炭化物粒微混
- 8 黒褐色(10YR2/3) シルト。やや砂質。明褐色土ブロック・15mm以下礫れ混5%混
- 9 褐色(10YR4/4~6) シルト。やや砂質。黄褐色土粒・黄褐色土ブロック多混
- 10 黒褐色(10YR2/3~3/3) シルト。しまりあり。黒褐色シルト・黄褐色土混合層
SB21貼床

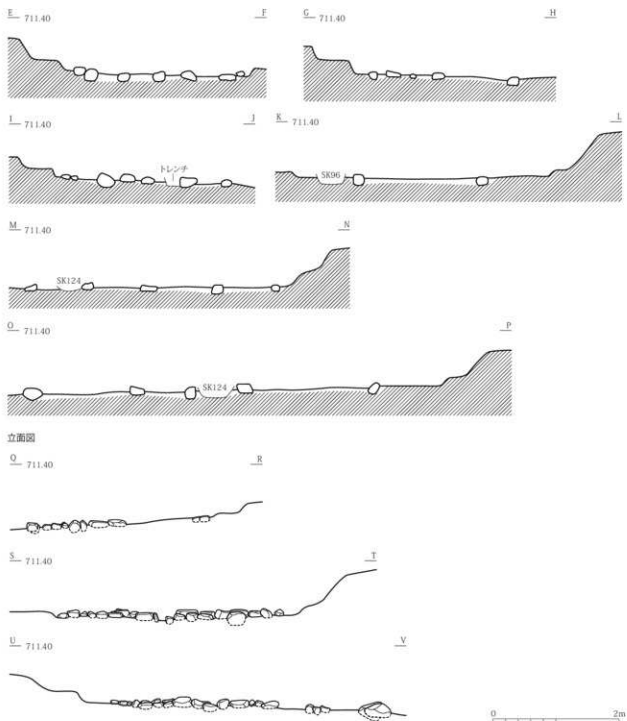
第37図 SB16・20・21 遺構図



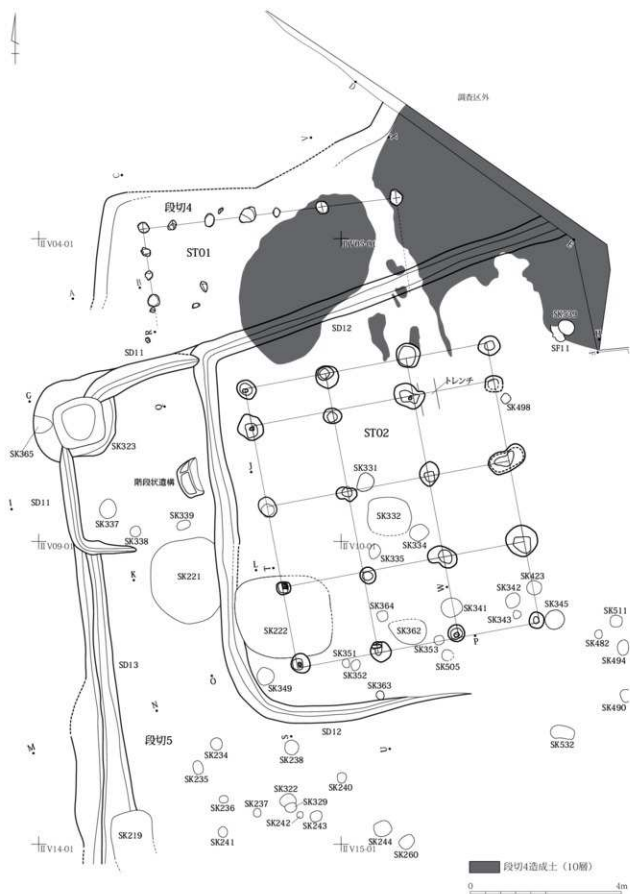
第38図 S B11、段切2 遺構図(1)

第4章 地家遺跡

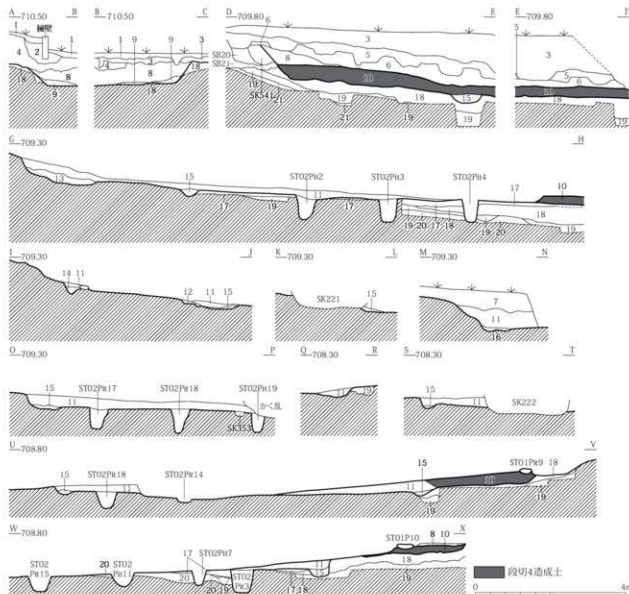
- 1 暗褐色(10YR3/4)
粘性なし。しまり強。白色土粒・10mm以下雜5~7%混。段切2埋土
- 2 暗褐色(10YR3/4)
粘性なし。しまり強。焼土ブロック・炭化材25~30%混
- 3 暗褐色(10YR3/4)
粘性・しまり弱。焼土ブロック・炭化材3~5%混
- 4 暗褐色(10YR3/4)
粘性・しまり弱。焼土ブロック・炭化材50%以上混
- 5 焼土塊。しまり強
- 6 暗赤褐色(5YR3/6)
粘性弱。しまりあり。焼土ブロック
- 7 暗褐色(10YR3/4)
シルト。粘性弱。しまりあり。炭化材破片・焼土ブロック3~5%混。掘方埋土
- 8 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性なし。しまり強。明黄褐色土ブロック・明黄褐色土粒15~20%混。造成土



第39図 SB11、段切2 遺構図(2)



第41図 段切4・5 (ST01・02, SD11・12・13) 遺構図 (1)



1 暗褐色(10YR3/4) 表土

2 褐色～暗褐色(10YR4/4～3/3) 雑草層方埋土

3 暗褐色(10YR3/3) 宅地造成土

4 褐色～暗褐色(10YR4/4～3/3) 砂質シルト。粘性弱。しまりあり。砂混

5 反黄褐色(10YR4/2) 2～10mm礫少混。20～60mm礫微混。耕作土

6 黒褐色(10YR3/2) 砂質シルト。しまり強。粗砂10%混

7 暗褐色(10YR3/3) 10mm以下礫微混。耕作土

8 暗褐色～黒褐色(10YR3/3～2/3) 砂質シルト。粘性。しまり弱

9 暗褐色(10YR2/3) 砂質シルト。粘性弱。しまりあり

10 黄褐色(10YR5/6) 1～5mm褐色土粒・2～50mm礫少混

11 暗褐色～黒褐色(10YR3/3～2/2) 8層との境界に部分的に焼土面あり

12 黒褐色(10YR3/2) ST01P4礫石に埋る。段切4自然土入土か

13 黒色(10YR2/1) 砂質シルト質粘土。粘性強。しまり弱

14 黒褐色(10YR2/2) 2～5mm礫1%。SD1埋土

15 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト質粘土。粘性あり。しまり強

16 黒色(10YR2/1) 2～30mm礫1%混。耕作土

17 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト。粘性。しまり強。2～30mm礫1%・2～5mm炭化物1%混。SD1埋土

18 黒褐色(10YR3/2) 粘質シルト。粘性。しまり強。2～5mm焼土粒2%・2～5mm炭化物3%混。段切5造成土

19 黒色(10YR2/1) 砂質シルト。粘性やや弱。しまりあり

20 黒褐色(10YR2/2) 2～20mm礫2%・30～50mm礫1%・黄褐色土粒・白色粘5%・2mm以下焼土粒1%・2mm以下炭化物粒1%混。基本層序D層

21 褐色～明黄褐色(10YR4/6～6/6) 粘土質シルト。粘性。しまりあり

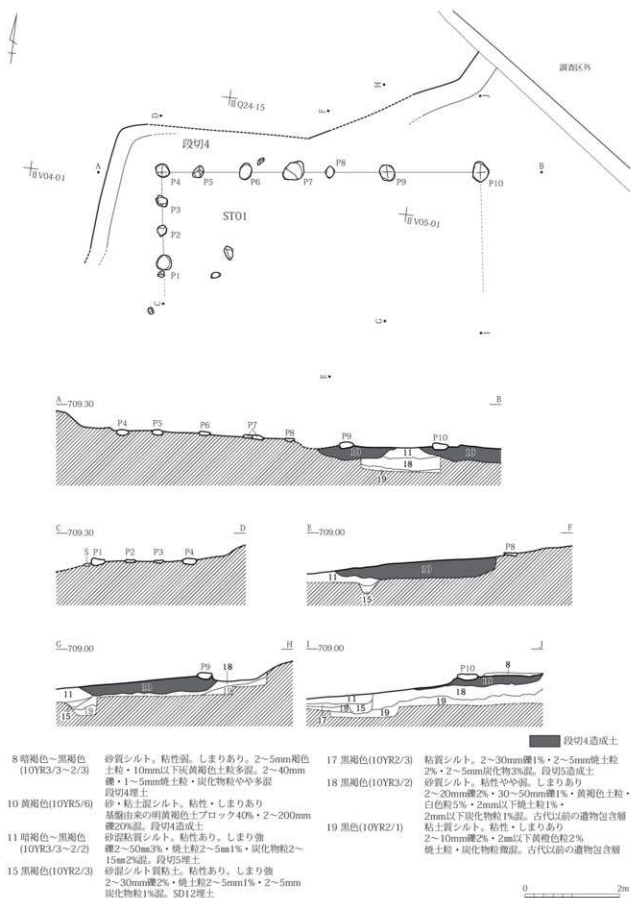
22 2～10mm礫2%・20mm以下黄褐色粒2% 焼土粒・炭化物粒微混。基本層序D層

23 砂礫混粘質シルト。粘性弱。しまりあり

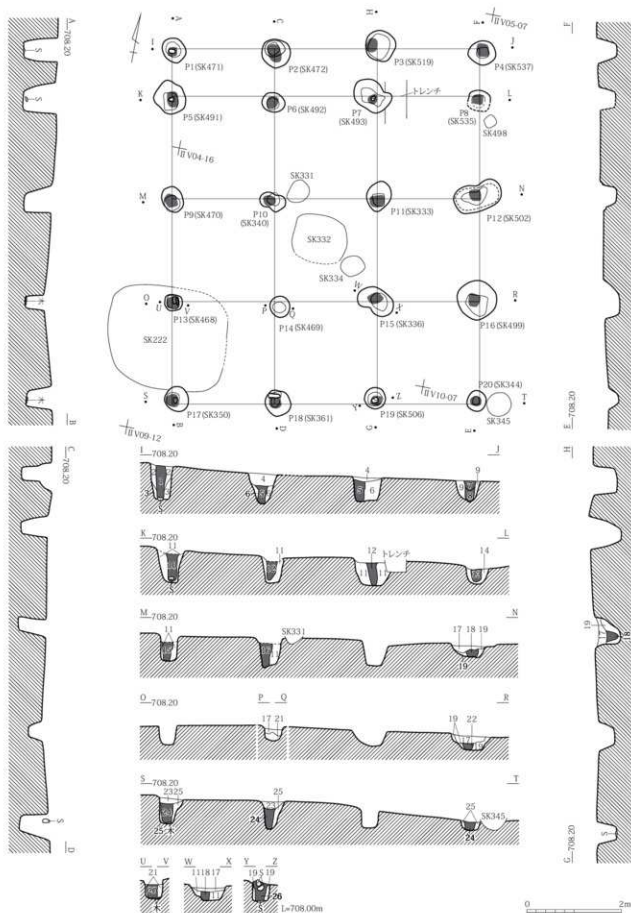
24 2～30mm礫7%・40～50mm礫3%・300mm礫1%混。基本層序D層

25 シルト。しまり強。礫混。基本層序D層

第42図 段切4・5 (ST01・02, SD11・12・13) 遺構図(2)



第43図 ST01、段切4 遺構図

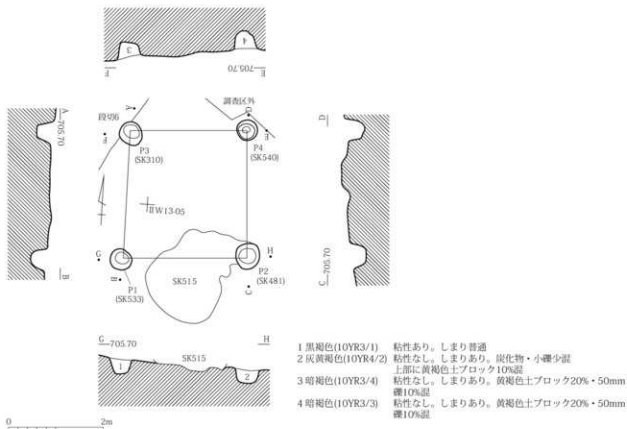


第44図 ST02 遺構図 (1)

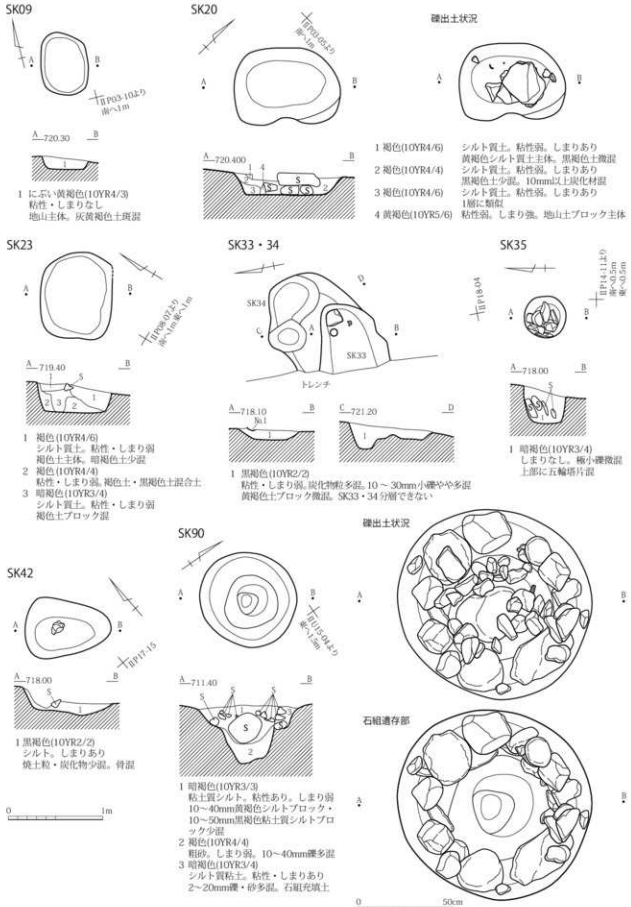
ST02

- | | | | |
|------------------|--|-------------------|--|
| 1 暗褐色(10YR3/4) | 粘質シルト。粘性・しまりあり
拳大礫多混。地山土粒1%以下混。柱痕 | 14 黒褐色(10YR2/2) | シルト。粘性なし。しまりあり
黄褐色土ブロック1%混 |
| 2 黒褐色(10YR2/3) | 粘質シルト。黄褐色土ブロック5%・炭化物
1%・1~3mm礫1%混。拳~人頭大礫数個混
裏込土 | 15 暗褐色(10YR3/4) | 粘質シルト。粘性なし。しまりあり。
10~30mm炭化物3%混。柱痕 |
| 3にふい黄褐色(10YR4/3) | 砂5%・1~5mm礫3%混。地山の埋戻土か
シルト。粘性なし。しまりあり | 16 黒褐色(10YR2/3) | 粘質シルト。粘性・しまり強。2~3mm
炭化物5%混。柱痕 |
| 4 暗褐色(10YR3/3) | 10~30mm黄褐色土ブロック10%混
人頭大礫2個混 | 17 黒褐色(10YR2/3) | 粘質シルト。粘性なし。しまりあり。5~10mm
黄褐色土ブロック10%・10~100mm礫5%・
1~5mm炭化物5%混 |
| 5 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。粘性なし。しまりやや弱
黄褐色土ブロック10%・10~30mm礫5%混
柱痕 | 18 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。粘性あり。しまりやや弱
10~30mm黄褐色土ブロック3%・10~50
mm礫3%混。柱痕 |
| 6 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。しまりあり
黄褐色土ブロック25%・10~50mm礫5%混
裏込土 | 19 黒褐色(10YR2/3) | 粘性ややあり。しまりあり。10~30mm
黄褐色土ブロック10%混。裏込土 |
| 7 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。しまりあり。5~10mm黄褐色
土ブロック20%・10~30mm礫5%・炭化物
3%混。柱痕 | 20にふい黄褐色(10YR4/3) | 粘質シルト。粘性・しまりあり
10mm礫5%混。柱痕 |
| 8 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。粘性やや弱。黄褐色土ブ
ロック1%混。柱痕 | 21にふい黄褐色(10YR4/3) | シルト。しまり普通。10~30mm礫10%混 |
| 9 黒色(10YR2/1) | シルト。粘性ややあり。しまりあり。黄褐
色土ブロック5%混。地山の埋戻土か | 22 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。粘性・しまりあり
10~20mm炭化物3%混。柱痕 |
| 10 黒褐色(10YR2/3) | 粘質シルト。しまりやや弱。拳大礫多混
10~20mm炭化物5%混。柱痕 | 23 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。黄褐色土ブロック少混
10mm炭化物3%混 |
| 11 暗褐色(10YR3/4) | シルト。粘性なし。しまりあり。黄褐色土
ブロック・10~30mm礫30%・10mm炭化
物3%混。裏込土 | 24 黒褐色(10YR2/2) | 粘質シルト。粘性・しまりあり。2~5mm
黄褐色土ブロック5%・2~10mm礫1%・
2~20mm炭化物1%混。柱痕 |
| 12 黒褐色(10YR2/3) | シルト。粘性なし。しまりあり。1~10mm
黄褐色土ブロック5%・10mm礫3%混。柱痕 | 25 黒褐色(7.5YR2/2) | 粘質シルト。粘性・しまりあり。砂多混
2~10mm黄褐色土ブロック5%・2~20mm
礫2%混 |
| 13 黒褐色(10YR2/2) | シルト。粘性なし。しまりやや弱
10~20mm黄褐色土ブロック5%・10~30
mm礫1%混。柱痕 | 26 黒褐色(10YR2/3) | シルト。粘性なし。しまりあり。5~10mm
黄褐色土ブロック10%・10~100mm礫5%・
1~5mm炭化物5%混。拳大礫3個混。柱痕 |

ST03

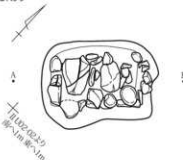


第45図 ST02 遺構図(2)、ST03 遺構図



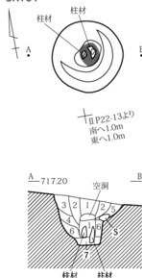
第46図 S K09・20・23・33・34・35・42・90 遺構図

SK99



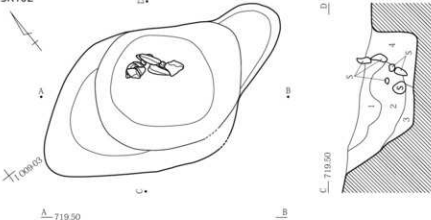
1 暗褐色(10YR3/3)
粘土質シルト。粘性あり。しまりあり

SK101



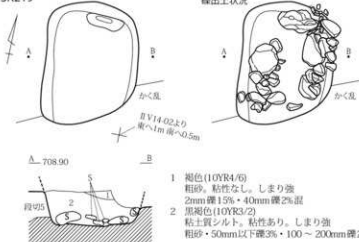
- 1 黒褐色(10YR3/2)
粘土質シルト。粘性ややあり。しまりあり
炭化物40%混。柱痕
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)
粘土質シルト。粘性・しまりあり
20~50mm礫30%混。埋め土か
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)
粘土質シルト。粘性・しまりあり
20~50mm礫40%・褐色砂質シルト20%混
埋め土か
- 4 暗黄褐色(10YR3/4)
粘土質シルト。粘性・しまりややあり
褐色砂質シルト多混。埋め土か
- 5 褐色(10YR4/4)
砂質シルト。暗褐色粘土質シルト40%混
埋め土か
- 6 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘土質シルト。粘性強。しまりややあり
浸水うる
- 7 黒褐色~褐灰色(10YR3/1~4/1)
粘土。粘性強。しまりあり。泥炭層に近い
柱材を固定するくらしいまる

SK102



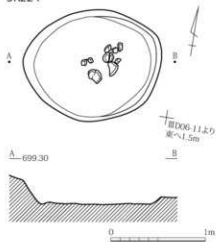
- 1 暗褐色(10YR3/4)
粘質シルト。粘性あり。しまりなし。黄褐色土ブロック多混
- 2 黒褐色(10YR2/3)
粘質シルト。粘性あり。しまりなし。黄褐色土ブロック少混
- 3 黄褐色(10YR5/6)
粘質シルト。粘性・しまりあり。暗褐色土ブロック・炭化物混
- 4 暗褐色(7.5YR3/3)
粘質シルト。粘性あり。しまりなし。黄褐色土ブロック・炭化物混
シルト質土。粘性・しまり弱。褐色土ブロック主体

SK219



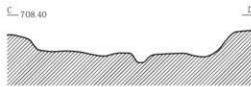
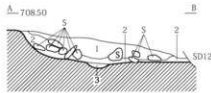
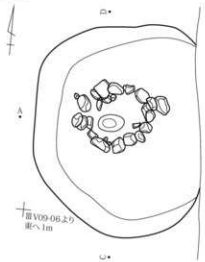
- 1 褐色(10YR4/6)
粗砂。粘性なし。しまり強
2mm礫15%・40mm礫2%混
- 2 黒褐色(10YR3/2)
粘土質シルト。粘性あり。しまり強
粗砂・50mm以下礫3%・100~200mm礫2%混

SK224



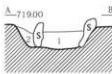
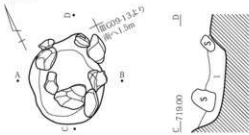
第47図 SK99・101・102・219・224 遺構図

SK221



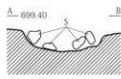
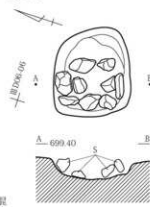
- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土。粘性・しまりあり。2～5mm黄褐色土ブロック少量
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土。粘性あり。しまり弱。2～5mm黄褐色土ブロックやや多量
- 3 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土。粘性あり。しまりなし。2～10mm礫微混

SK220

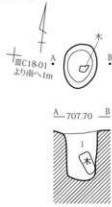


- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。しまりなし。10mm以下礫混
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)しまり弱。10mm以下礫少量。黄褐色土粒混

SK225

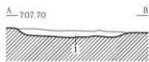
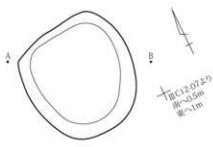


SK383



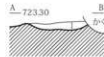
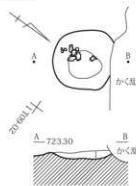
- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性ややありしまりあり

SK436



- 1 褐灰色(10YR4/1)粘性ややあり。しまり普通炭化物混

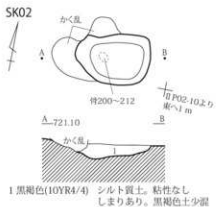
SK543



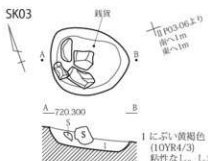
- 1 暗褐色(10YR3/4)粘性・しまり普通焼土粒微混



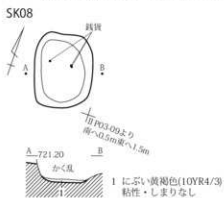
第48図 S K 220・221・225・383・436・543 遺構図



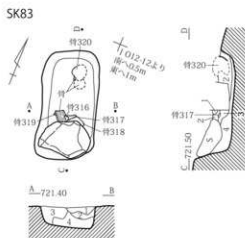
1 黒褐色(10YR4/4) シルト質土。粘性なし。しまりあり。黒褐色土少混



1 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性なし。しまりなし



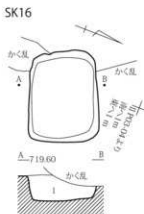
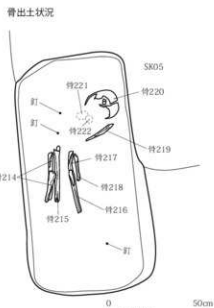
1 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性・しまりなし



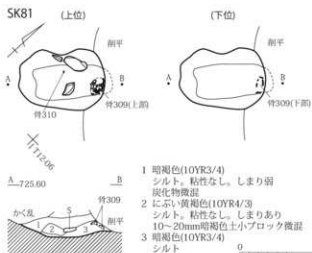
1 黄褐色(10YR5/6) しまりなし。ロームブロック層
2 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘質シルト ロームブロック多混
3 暗褐色(10YR3/4) 粘質シルト。黒色帯びる
4 褐色(10YR4/6) 粘質シルト。ロームブロック混 黒色帯びる



1 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性弱。黒褐色土・褐色土主体
2 褐色(10YR4/4) シルト質土。粘性弱。褐色シルト質土ブロック・暗褐色シルト質土少混
3 暗褐色(10YR3/4) シルト質土。粘性弱。暗褐色シルト質土ブロックを部分的に少混
4 褐色(10YR4/4) シルト質土。粘性弱。暗褐色シルト質土少混。2層に類似

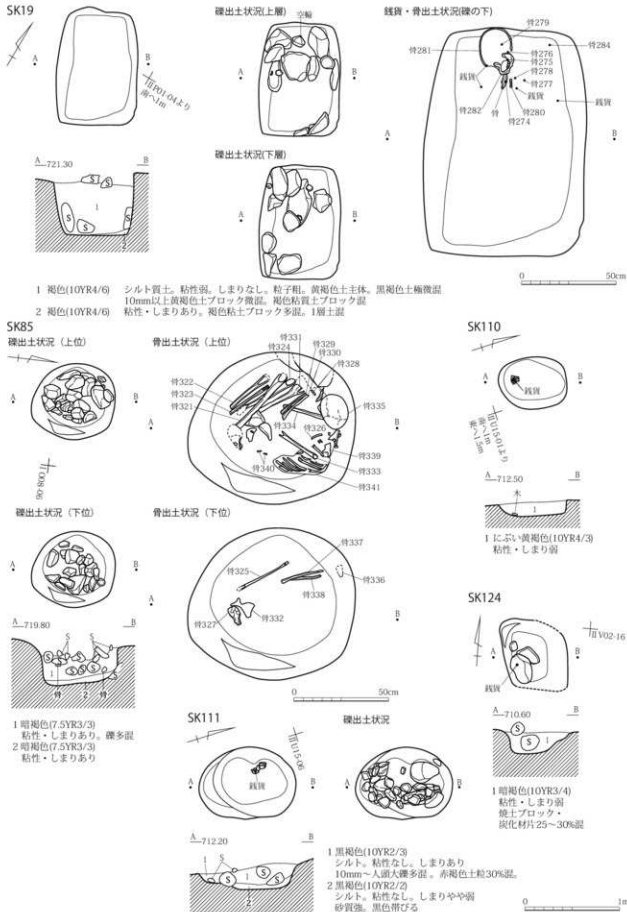


1 黒褐色(10YR2/3) 粘性なし。しまりなし。10mm以下地山土細ブロック混 暗褐色土・黒褐色土や砂に混在。黒色帯



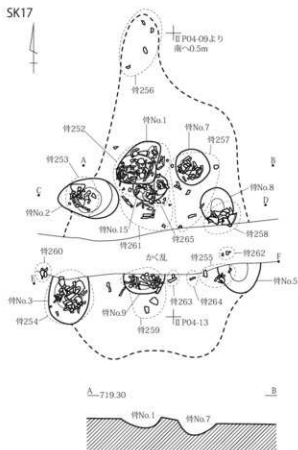
1 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性なし。しまり弱 炭化物微混
2 にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト。粘性なし。しまりあり 10~20mm暗褐色土小ブロック微混
3 暗褐色(10YR3/4) シルト

第49図 SK02~04・08・16・81・83 遺構図

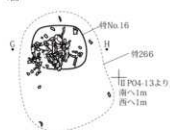


第50図 SK19・85・110・111・124 遺構図

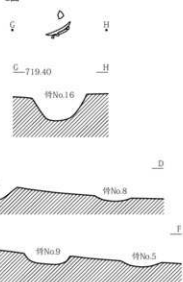
SK17



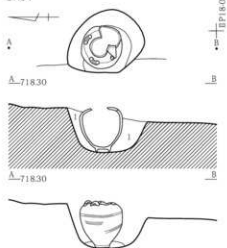
1面



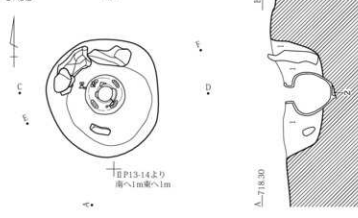
2面



SK31



SK32



- 1 黒褐色(10YR2/2)
粘性ややあり。しまり弱
30mm以下小礫混
20mm以下黄褐色土ブロック微混
底面に黒褐色土細粒3mmほど堆積。

参考図
四耳壺欠損部復元図

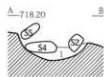
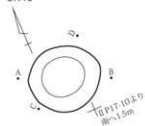


- 1 黒褐色(10YR2/2)
粘性ややあり。しまり弱
10~20mm小礫・黄褐色土
ブロック微混。
2 黒褐色(10YR2/2)
粘性ややあり。しまり弱
四耳壺下の土。

0 50cm

第51図 SK17・31・32 遺構図

SK40



1 黒褐色(10YR2/3)
シルト。粘性なし
黄褐色土小ブロック・焼土粒微混

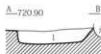
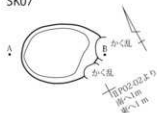
0 50cm

骨出土状況



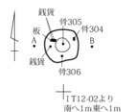
0 25cm

SK07



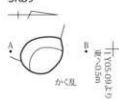
1 黒褐色(10YR4/4)
シルト質土。粘性なし
しまりあり。黒褐色土少

SK80



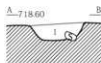
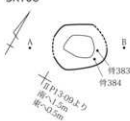
1 黒褐色(10YR3/2)
シルト。粘性なし。しまりあり
黒色土小ブロック微混

SK89



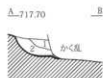
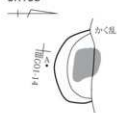
1 黒褐色(10YR2/3)
シルト。粘性なし

SK106



1 黒褐色(10YR3/2)
黒褐色シルト。粘性なし。しまりあり
5~30mm礫10%混。ロームブロックわずか

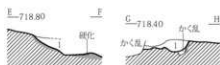
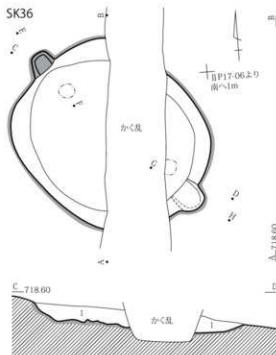
SK138



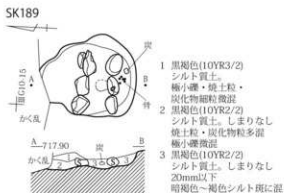
1 黒褐色(10YR2/2)
シルト質土。極小礫やや多混。焼土粒微混。炭化物微混
2 黒褐色(10YR2/2)
シルト質土。焼土粒多混。骨粉微混

0 1m

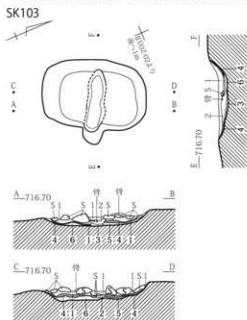
第52図 SK07・40・80・89・106・138 遺構図



1 黒褐色(10YR2/2~7.5YR2/2)
 焼土粒多混。部分的に混入量違う
 極暗褐色土ブロック・黒色土ブロック微混
 壁・底は極暗褐色に変色

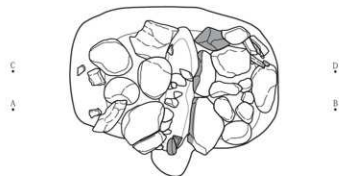


1 黒褐色(10YR3/2)
 シルト質土。
 極小礫・焼土粒・
 炭化物細粒微混
 2 黒褐色(10YR2/2)
 シルト質土。しまりなし
 焼土粒・炭化物粒多混
 極小礫微混
 3 黒褐色(10YR2/2)
 シルト質土。しまりなし
 20mm以下
 暗褐色~褐色シルト質に混

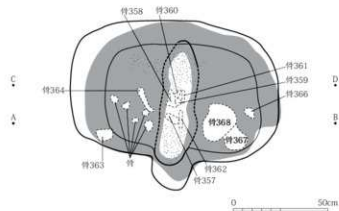


1 暗褐色(10YR3/3)
 粘土。粘性強。しまりあり。焼土粒少混
 2 暗褐色(10YR3/3)
 粘土。粘性強。しまりあり。炭化物。焼土混
 3 暗褐色(10YR3/3)
 粘土。粘性強。しまりあり。炭化物多混
 4 赤褐色(2.5YR4/6)
 粘土。粘性ややあり。しまりあり。暗赤褐色粘土混
 明赤褐色粘土・極暗赤褐色粘土少混。焼土
 5 に近い黄褐色(10YR4/3)
 粘土質シルト。粘性・しまりややあり。礫少混
 6 暗赤褐色(2.5YR3/2)
 粘土質シルト。10~80mm礫多混

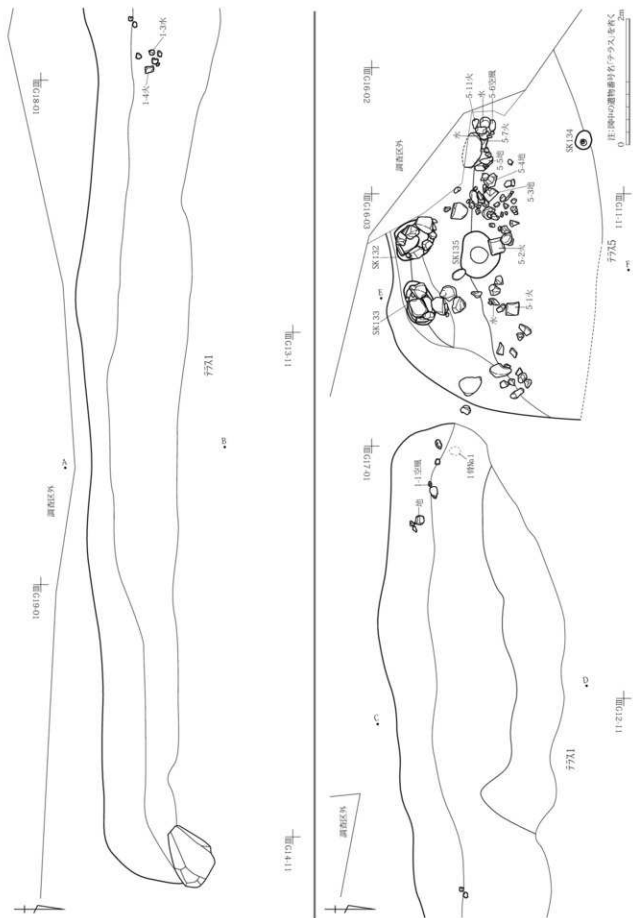
石敷



骨・焼土・炭化物出土状況

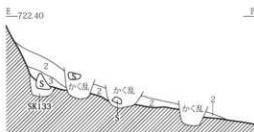
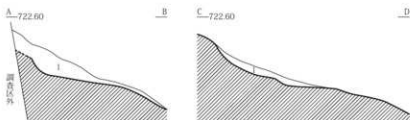


第53図 S K36・103・189 遺構図



第54図 テラス1・5 遺構図(1)

第4章 地家遺跡



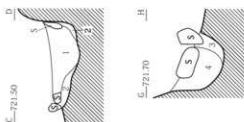
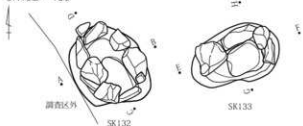
7251
1 暗褐色(10YR3/3) しまりなし、20mm以下礫多混
100~300mm礫・地山土小ブロック微混

7255
2 黒褐色(10YR3/2) 粘性ややあり、しまりなし
5mm以下極小礫多混。褐色土小ブロック微混

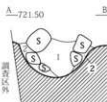
3 黒褐色(10YR3/2) 1層土主体。褐色土小ブロック混

0 2m

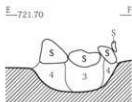
SK132・133



7216-03



7216-04



SK132

1 黒褐色(10YR3/2) シルト質土。粘性ややあり。しまり弱
20mm以下礫・10mm礫・黄褐色小ブロック微混

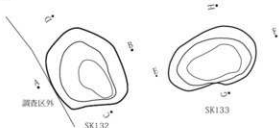
2 暗褐色(10YR3/3) シルト質土。粘性・しまり弱
黄褐色土ブロックやや多混

SK133

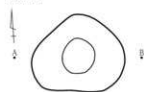
3 黒褐色(10YR2/3) シルト質土。しまりなし
5mm以下礫・20~30mm礫・黄褐色小ブロック微混

4 暗褐色(10YR3/3) シルト質土。粘性・しまり弱。5mm以下礫微混
黄褐色土ブロック混

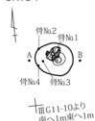
完備図



SK135



SK134

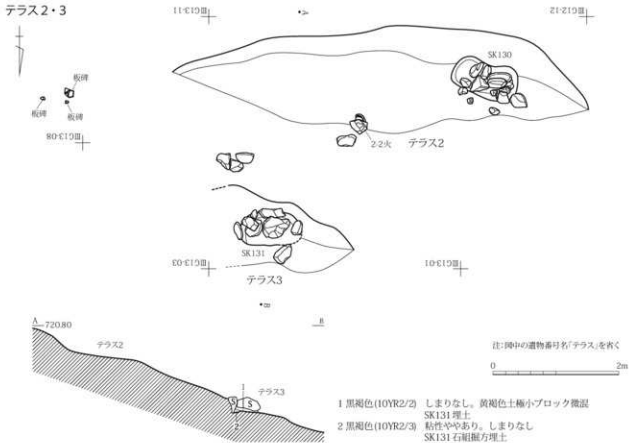


1 黒褐色(10YR2/3)
粘性・しまりややあり
粒状骨片混

0 1m

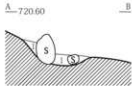
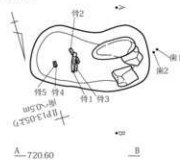
第55図 テラス1・5 遺構図(2)

テラス2・3

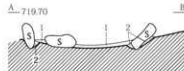
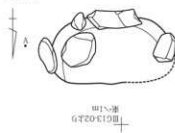


- 1 黒褐色(10YR2/2) しまりなし。黄褐色土極小ブロック微混
SK131埋土
2 黒褐色(10YR2/3) 粘性ややあり。しまりなし
SK131石組掘方埋土

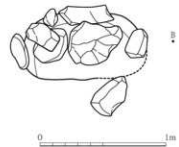
SK130



SK131

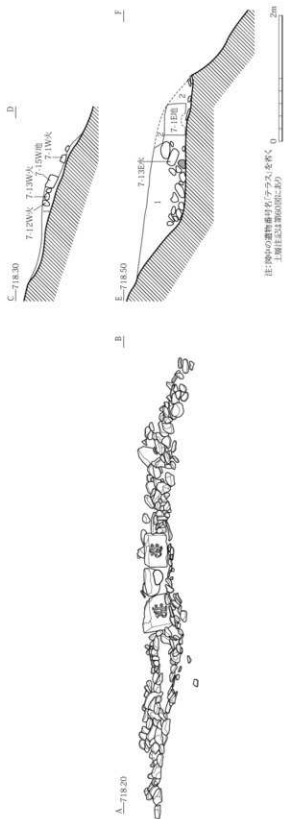
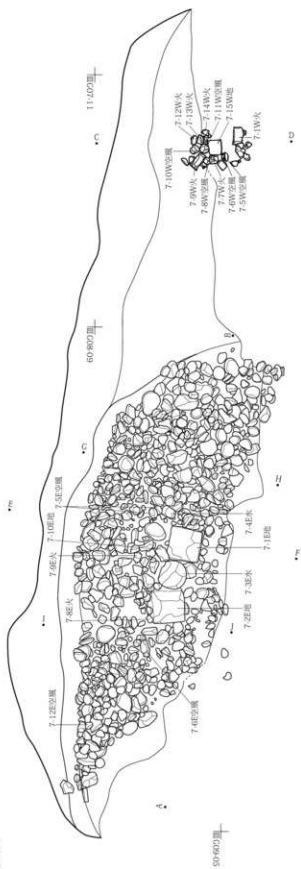


礎出土状況



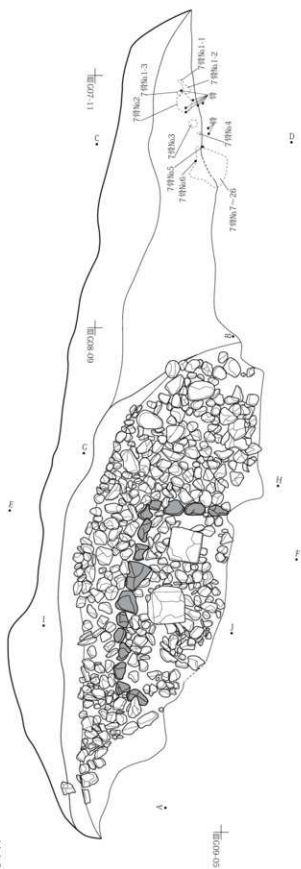
第56図 テラス2・3 遺構図

テラス7

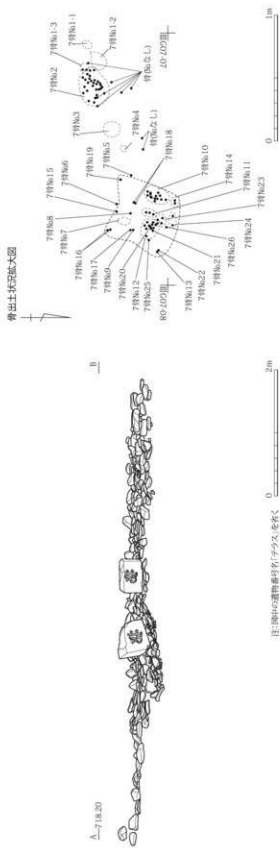


第58図 テラス7 遺構図(1)

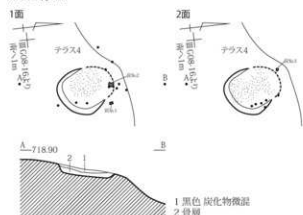
テラス7



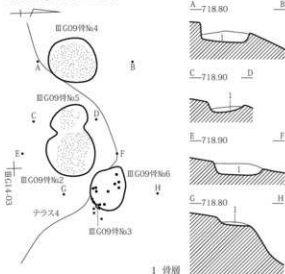
第59図 テラス7 遺構図(2)



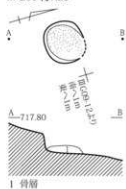
III G08骨No1



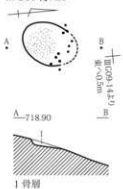
III G09骨No2・3・4・5・6



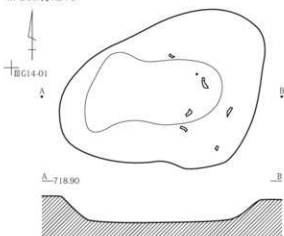
III G09骨No8



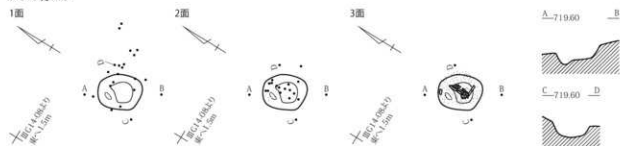
III G09骨No9



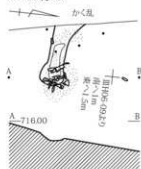
III G09骨No10



III G15骨No3



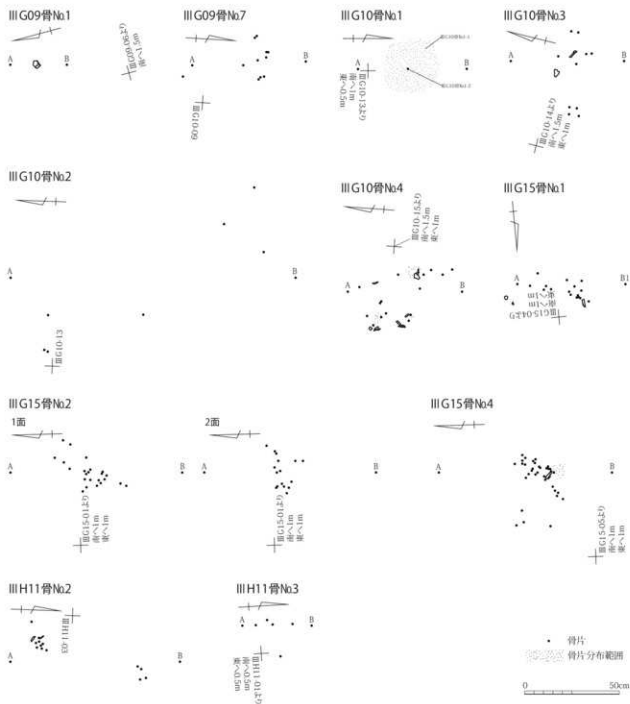
III H06骨No1



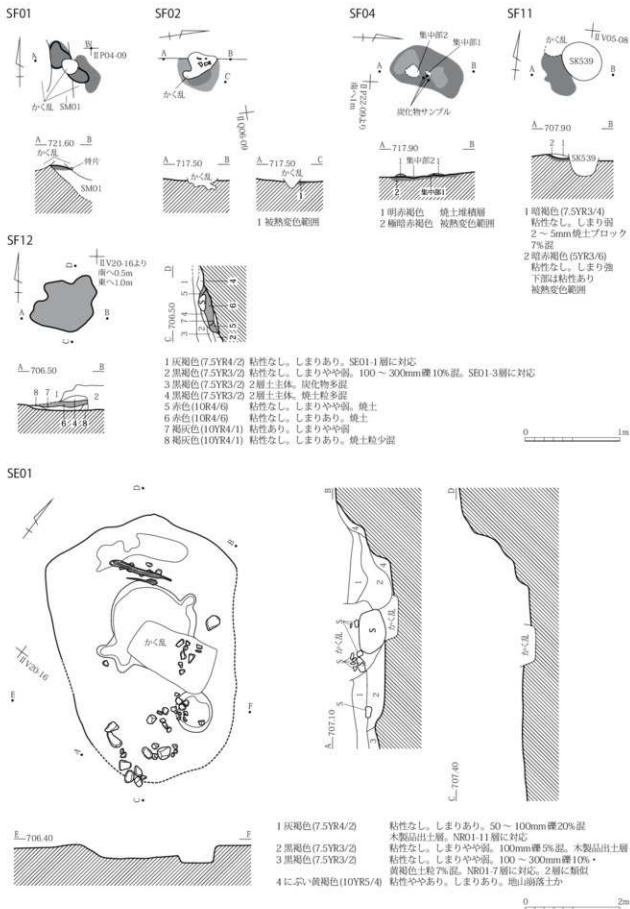
III H11骨No1



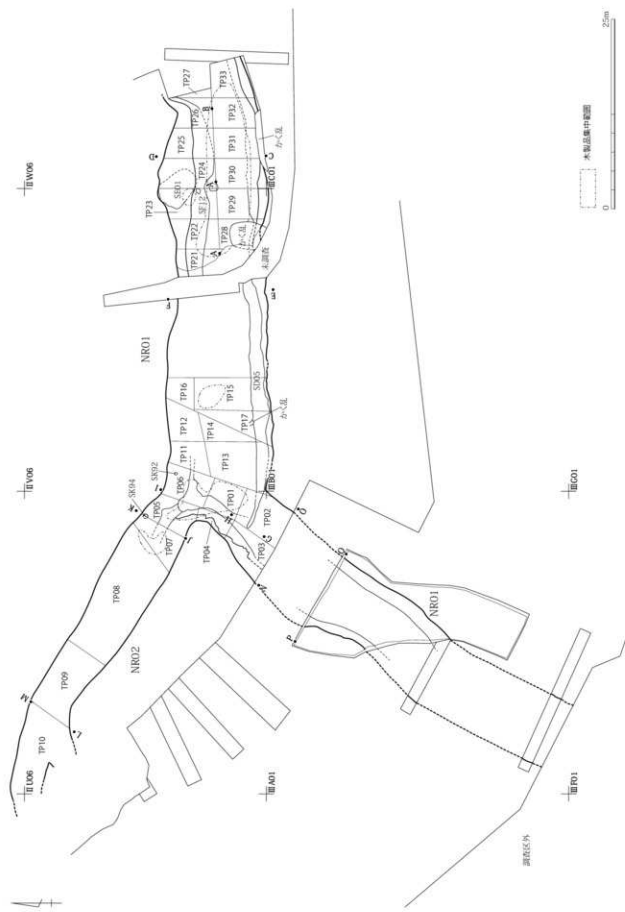
第62図 南尾根北斜面部火葬骨埋納ビット・火葬墓



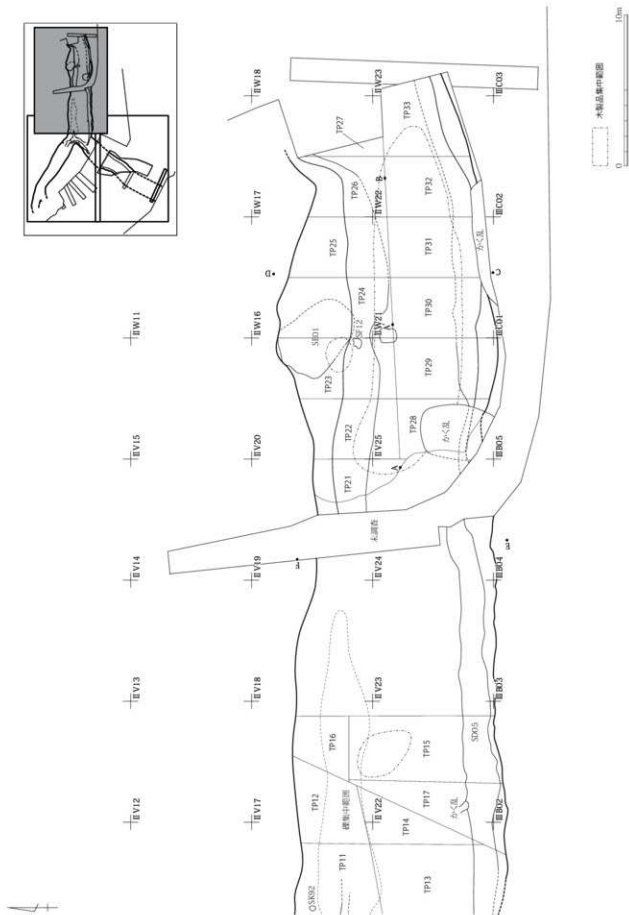
第63図 南尾根北斜面部火葬骨出土箇所



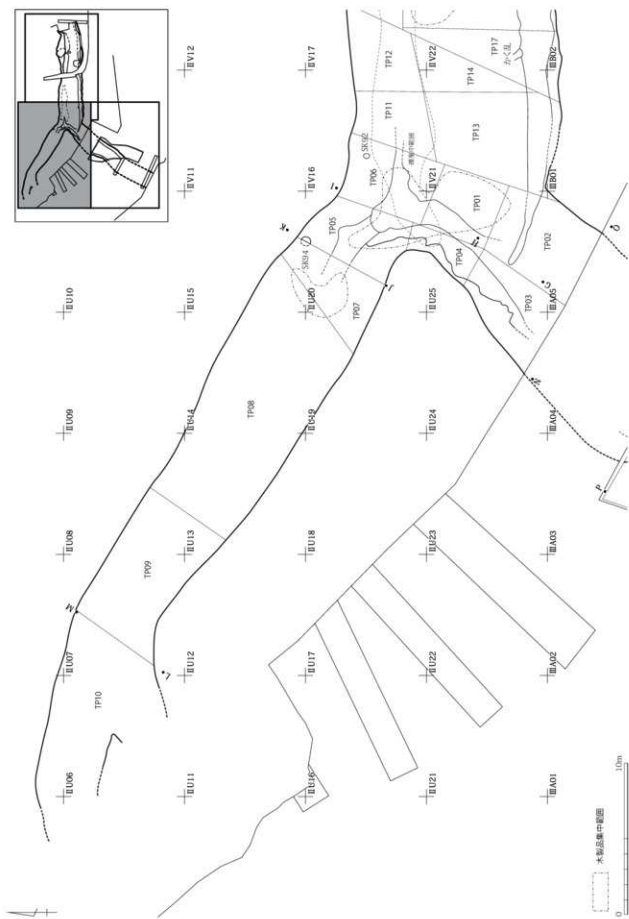
第64図 S F 01・02・04・11・12、S E 01 遺構図



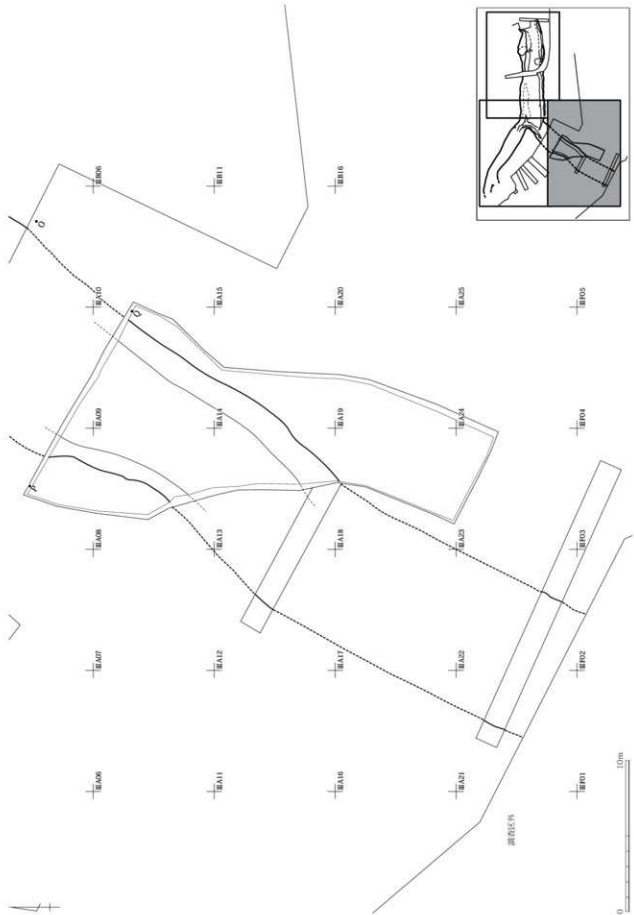
第65図 NR01・02 全体図



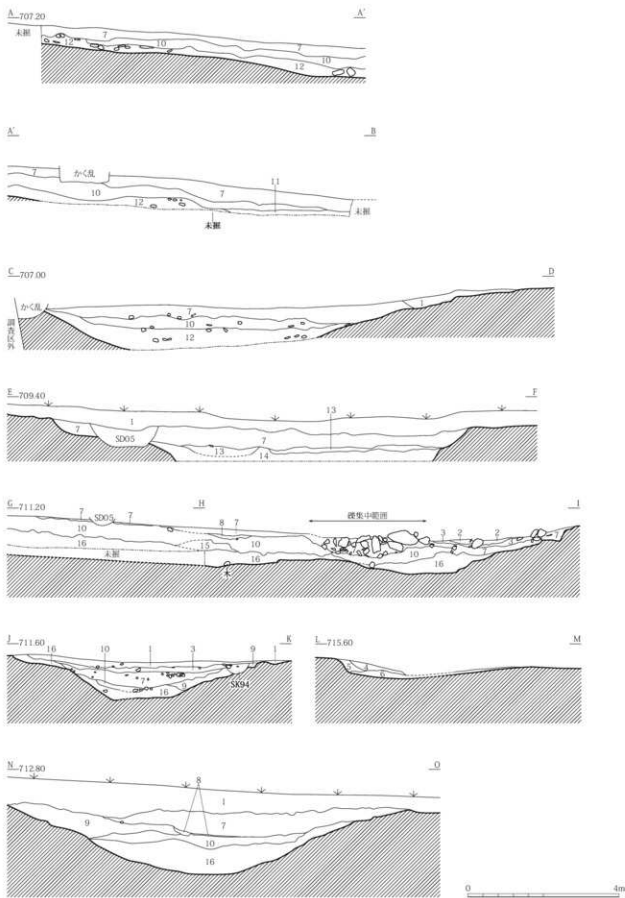
第66図 NR01・02 部分拡大図(1)



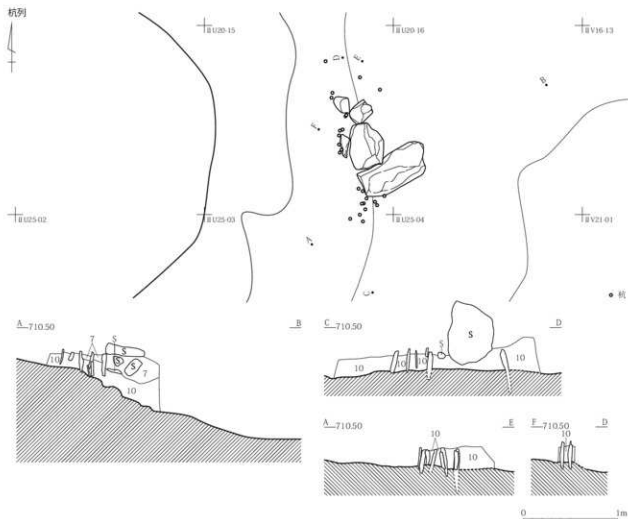
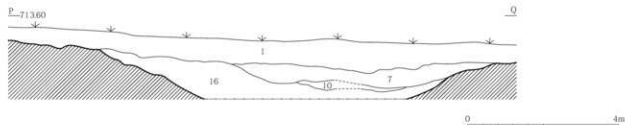
第67図 NR01・02 部分拡大図(2)



第68図 NR01・02 部分拡大図(3)



第69図 NR01 断面図(1)、NR02 断面図



- 1 暗褐色(10YR3/4)
- 2 極暗褐色(7.5YR2/3)
- 3 黒色(10YR2/1)
- 4 暗褐色(10YR3/3)
- 5 黒褐色(10YR2/2)
- 6 黒色(10YR2/1)
- 7 黒褐色～暗褐色(10YR2/3～3/4)
- 8 暗褐色(10YR3/3)
- 9 黒褐色～暗褐色(10YR3/1～3/4)
- 10 黒色(10YR2/1)

- 11 黒色(10YR1.7/1)
- 12 暗褐色(10YR3/3)
- 13 暗褐色(7.5YR3/4)
- 14 黒色(7.5Y2/1)
- 15 黒褐色～暗褐色(10YR3/3～3/1)
- 16 黒色～暗褐色(10YR2/1～3/4)

表土・耕作土・造成土

砂質シルト。しまり強。2～10mm礫多混。50～100mm垂直角礫少混。NRO2埋土

礫・砂混粘土。しまり強。2～5mm礫混。50～150mm垂直角礫微混。NRO2埋土

粘土質シルト。粘性あり。10～30mm礫20%混。NRO2埋土

粘土質シルト。粘性ややあり。10～30mm礫10%混。NRO2埋土

粘土質シルト。粘性ややあり。10mm前後礫5%混。NRO2埋土

砂・礫混シルト。粘性あり。しまり普通～弱。2～250mm礫多混。200～500mm垂直角礫少混

2～10mm炭化物粒微混。中世遺物包含(土器・陶磁器・木製品)

シルト・粘土混粗砂(互層状)

粗砂・礫混粘土質シルト。2～40mm礫多混

礫・砂混シルト質粘土～粘質シルト。粘性あり。しまりあり。2～30mm礫混。30～50mm礫・炭植物多混

100mm礫微混。上流側のB6・7区では粘土質強。下流側のB12区南では砂質強。部分的に砂礫混在(互層をなす箇所あり)。

鉄分集積による硬化箇所あり。中世遺物包含(土器・陶磁器・木製品)

粘土質シルト。粒子細。淘洗良好。自然本混。泥炭層に近い。古代以前の遺物包含

礫・粗砂混粘質シルト。しまりやや弱。3～150mm礫多混。鉄分集積による硬化箇所あり

礫混粘質シルト。粘性あり。しまりなし。2～50mm礫多混。鉄分集積による赤化

礫・砂混シルト質粘土。粘性強。しまり弱。20～50mm礫少混

礫・砂混粘質シルト。粘性・しまりあり。2～5mm礫多混。2～10mm礫少混

粗砂・粘土混砂礫。しまりやや弱。10～30mm礫主体。砂・粘土の薄層が多く介在(互層をなす箇所あり)

自然本混

第70図 NRO1 断面図(2)、杭列 遺構図

3 遺物

(1) 古代土器・陶器 (第72～74図、PL 11)

SB 02 (第72図、PL 11)

1は須恵器坏である。2～4・7は黒色土器で、2は坏、3は坏または埴、4は埴、7は鉢である。4の体部外面には墨痕がある。5は土師器坏で、口縁・体部にスガが付着しており、灯明皿と推測する。7は体部外面の凸部に回転ヘラケズリを施す。6は灰軸陶器碗で、口縁部外面～体部内面に軸をハケ塗りする。猿投窯の折戸53号窯式に該当しよう。8・9は土師器で、8は小型甕、9はロクロ調整の甕である。9は胴部内面に縦方向の板ナデを施す。時期は10世紀前半と推測する。

SB 04 (第72図、PL 11)

10～13は須恵器である。10は坏蓋で、折り返し部は垂直に落ち、内側の屈曲は強い。11～13は坏で、11は底部～体下部に回転ヘラケズリを施す。14は土師器坏で、底部は手持ちヘラケズリを施す。15は黒色土器坏で、底部は手持ちヘラケズリを施す。14・15は口縁部にスガが付着しており、灯明皿と推測する。16は黒色土器で、埴と考える。時期は、10は8世紀後半と考えるが、他は9世紀後半と推測する。

SB 05 (第72図、PL 11)

17は須恵器坏である。18～20は黒色土器坏である。18は底部を含めた両面に黒色処理を施す。19は底部手持ちヘラケズリを施す。20は、体部内面は放射状ミガキを施す。体部外面に横位の「石井寺」の墨書がある。21は灰軸陶器碗で、口縁玉縁状、体部内外面とも軸ハケ塗りである。黒笹90号窯式に該当する。22は土師器小型甕で、胴部は外面に上半横、下半縦ヘラケズリ、内面上部にヘラナデを施す。23は須恵器四耳壺である。時期は9世紀後半と推測する。

SB 06 (第72図、PL 11)

24～27は黒色土器である。24・25は坏で、24は底部手持ちヘラケズリ、体部内面は放射状ミガキを施す。25は底部手持ちヘラケズリを施す。26・27は埴で、26は高台が剥落している。27は底部から高台部分で、内面は放射状ミガキを施す。28～30は土師器である。28は小型甕で、口縁部から頸部の外面は横ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面は頸部の一部でヘラケズリを施す。29は、いわゆる武蔵甕の口縁部破片で、口縁部横ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。30は鉢の口縁部破片で、鉄鉢型の器形であろう。時期は9世紀後半と推測する。

SB 07 (第72図)

31・32は須恵器で、31は坏、32は高台坏である。32は回転ヘラケズリを施し、高台を貼付する。時期は8世紀後半と推測する。

SB 08 (第73図、PL 11)

33～39は須恵器である。33は坏蓋である。外面に発泡と降灰がみられる。34は高台が剥落した高台坏である。35は坏である。36は高台坏の破片だが、高台内に磨面が認められ、転用甕と考える。37・38は甕で、38は肩部に平行タタキ目、38は胴部に縦格子タタキ目を残す。39は横瓶体部で、端部付近に2条1単位の条線3列がめぐり、外面は平行タタキ目が残る。40は土師器甕である。いわゆる武蔵甕で、く字状に屈曲する口縁部は横ナデ、胴部の上部外面は斜めヘラケズリ、中～下部は縦ヘラケズリを施す。41は土師器小型甕で、頸部に沈線状の凹部が断続的にめぐり、強い横ナデにより胴部との境が段状を成す。胴部外面はヘラケズリを施す。時期は8世紀後半～9世紀初頭と推測する。

SB 09 (第73図、PL 11)

42は須恵器の坏蓋で、歪んで扁平な形態となっている。天井部は回転ヘラケズリ後、ナデを施す。折り返し部は垂直に落ち、内側の屈曲は弱い。つまみ部は薄く扁平である。8世紀代と推測する。

S B 10 (第73図, P L 11)

43～49は須恵器で、43～47は坏、48・49は高台坏である。43は底部手持ちヘラケズリを施す。44は底部に手持ちヘラケズリを施す。45は底部回転ヘラ切り後、底部外周と体部外面下端に手持ちヘラケズリを施す。47は底部回転糸切りである。48は深い器形で、底部を回転ヘラケズリ後に高台を貼付する。49は底部を回転糸切り後に回転ヘラケズリを施しているが、高台内に磨面が認められ、転用硯と考える。50は土師器甕で、底部および胴部外面にヘラケズリを施す。器壁は薄く、いわゆる武蔵甕に該当しよう。51は黒色土器鉢である。時期は8世紀後半～9世紀初頭と推測する。

S B 12 (第73図, P L 11)

52～56は須恵器である。52～55は坏、56は高台坏で、いずれも底部回転糸切りである。54は切離し後にナデ、55は板ナデを施す。56の高台は外縁接地である。57は黒色土器坏で、底部はヘラケズリを施す。58は土師器坏で、底部回転糸切り、体部外面最下部にヘラケズリを施す。59は土師器甕で、口縁部は断面コ字状に近い。胴上部にヘラケズリを施す。いわゆる武蔵甕に該当しよう。時期は9世紀後半と推測する。

S B 13 (第73図)

60は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。61は黒色土器碗である。62は土師器坏または碗である。63は小型の土師器坏と考える。64はロクロ調整の土師器甕である。時期は9世紀後半～10世紀前半と推測する。

S B 14 (第73図)

65は黒色土器の坏または碗である。時期は9世紀後半から10世紀前半と推測する。

S B 16 (第74図)

66・68は須恵器で、66は高台坏、68は須恵器甕または壺である。66の底部は回転糸切りである。67は土師器坏で、底部は回転糸切りである。69～71は土師器甕である。69は、く字状に屈曲する口縁部の破片で、器壁は薄く、いわゆる武蔵甕に該当しよう。70は、胴部外面は縦ヘラケズリ、内面はハケ状工具による横方向のナデを施す。輪積み接合面にハケ痕がみられる。71は胴部上半にヘラケズリを施す。72は土師器(内黒)鉢で、口縁部は外反する。体部内面はミガキを施す。時期は8世紀後半と推測する。

S B 19 (第74図, P L 11)

73～77は須恵器である。73～76は坏で、いずれも底部は回転糸切りである。77は高台坏である。78は黒色土器皿である。時期は9世紀後半と推測する。

S B 20 (第74図)

79は黒色土器で、鉢とする。80は土師器坏または碗である。時期は10世紀代と推測する。

S K 06 (第74図)

81は土師器坏で、底部回転糸切り、内面は丁寧なナデを施す。時期は10世紀前半と推測する。

S K 20 (第74図)

82は土師器坏で、底部は回転糸切り、内面は丁寧なナデを施す。83は黒色土器鉢である。ロクロ目が強く、多段の突縁状をなす。時期は10世紀前半と推測する。

S K 543 (第74図)

84～86は須恵器坏蓋である。84の折り返し部は、外面はやや内に向かって鋭く屈折するが、内側の屈曲は弱い。内面にヘラ記号「×」が刻まれ、降灰と気泡および黒色物の湧出が顕著である。内面を上にして焼成したものとみる。85は折り返し部内側の屈曲が強く、沈線状に強くくびれる。86の折り返し部は、外面は鋭く屈折し、端部が外に向かってやや開く。内側の屈曲はやや弱い。時期は8世紀後半と推測する。

遺構外 (第74図、P L 11)

87は土師器の羽釜で、体部外面は縦ヘラケズリ、内面は縦方向の板ナデを施す。罫部下は強い横ナデによりくびれた形状を成す。10世紀代と推測する。中世のSK 05出土のため、遺構外として扱う。88は須恵器環で、底部回転糸切りである。体部外面には墨書がある。判読できないが、何らかの文字を、部首の「かぜかんむり」に似た字形が囲む。呪的な意味をもつ特殊文字であろう。9世紀後半と推測する。89は黒色土器環で、底部回転糸切りである。外面には「□井」の墨書がある。88・89はNR 01の10層から出土した。9世紀後半と推測する。90・91は奈良三彩の蓋である。胎土は灰白色、軸は緑色・褐色である。90はB 5・12区の検出面、91はNR 01の10層から出土した。なお、掲載できなかったが、緑釉陶器の皿または碗と推測する小片3点が出土した。2点はNR 01の10層、1点はSE 01の出土である。

(2) 中世陶磁器・土器・土製品 (第75～78図、P L 12・13)

中世陶磁器・土器は中央低地部の建物建造域および自然流路跡NR 01を主体に出土した。そのうち大部分はNR 01からの出土である。輸入品は白磁、青白磁、青磁、天目茶碗、褐釉壺が、国産品は美濃須衛製品、古瀬戸製品、常滑製品、珠洲製品、山茶碗・片口鉢、かわらけ、内耳土器、瓦質土器、瓦がある。添付DVDに中世陶磁器・土器観察表を収録し、出土位置は第75～78図にも示した。

輸入陶磁器 (第75図、P L 12)

白磁

1は碗、2は口禿皿、3は口禿碗、4は草花文を刻出した皿、5・6は水注、7は玉壺春型瓶である。年代が推定できるものは13世紀中葉～14世紀前半におさまる。

青白磁

8～12は梅瓶である。8～10は片切彫り状の沈線で花卉唐草文を描き、文様の間を櫛描文で埋めている。11・12は片切彫り状の沈線による短い円弧を重ねて渦巻状の文様を構成する。蔓草表現は確認できない。13は合子、14は合子または水滴、15は耳付壺、16・17は水注である。年代が推定できるものは、概ね13世紀後半～14世紀前半におさまる。梅瓶については、遠藤啓介氏の編年(遠藤2003)に対比し、8～10は13世紀後半、11・12は14世紀前半に位置づくと考える。

青磁

18は同安窯系の碗である。内外面に櫛状施文具による文様を施す。19～53は龍泉窯系の製品で、19は小碗、20は蓮弁文の鉢、23は碗、21・22・24～36は蓮弁文の碗・小碗、37～42は画花文の碗・小碗、43は皿、44は小皿、45は稜花皿、46は折縁小鉢、47は鉢、48は蓮弁文の鉢、49は瘤状の突起に獅子頭を刻出した花瓶、50は香炉、51・52は折盤、53は草魚文を浮彫りする盤である。いずれも小破片であるが、13～14世紀代のものがほとんどで、わずかに15世紀後半～16世紀前半のもの(45)がある。

天目茶碗・褐釉壺

54～56は天目茶碗、57は褐釉壺である。胎土は濃い灰色～灰褐色を呈する。

国産陶磁器・土器・土製品 (第76～78図、P L 12・13)

美濃須衛製品

58・59は美濃須衛窯産の四耳壺である。どちらも蔵骨器であり、内部に焼骨を納めていた。

58は頸部から口縁部を欠く。肩部にヘラ刻みによる4条の沈線をもつ板状の耳が付く。中央部の沈線間が広い。耳の直下には1条の沈線がめぐる。胴部最大径の位置は肩に近い。胴部内面には底部中央からロクロ目を確認できるが、下部にはさらに横方向のケズリが施されている。粘土経積痕み痕は不明瞭である。高台はほぼ直立し、端部に斜めの面を作り出している。肩～胴上部の外面に青みを帯びた灰釉を確認できる。自然釉と判断する。胴部外面はやや赤褐色に焼きあがった部分もある。

59は埋納当初から高台の半分を欠いている。口縁部は、端部を折り曲げて玉縁状の形態を作り出しているが、大部分は頸部器面に密着していない。肩部にヘラ刻みによる4条の沈線をもつ板状の耳が付く。中央部の沈線間が広い。耳の直下には1条の沈線がめぐる。胴部最大径の位置は肩に近い。胴部内面には底部中央からロクロ口を確認できる。下部に粘土紐輪積み痕が残る。高台は外傾し、端部に斜めの面を作り出している。肩～胴上半部の外面に青みを帯びた灰釉を確認できる。自然軸と判断する。胴部外面は黒褐色に焼きあがった部分と赤褐色に焼きあがった部分があり、範囲は半々である。

山本智子氏による中世美濃国の初期四耳壺の分類・編年(山本2014)に対比すると、58・59ともに、そのB2類、第3期に該当し、13世紀初頭に位置づくと考えられる。

古瀬戸製品

60～62は四耳壺、63・64は瓶子、65は草花文の小型瓶子、66は水注、67は合子の身部、68は卸皿、69は折縁中皿、70は折縁小皿、71は入子、72は天目茶碗である。破片資料のため不明な点が多いが、藤澤良祐氏の古瀬戸編年(藤澤2008)に対比すると、61～64・67・71が前期様式、60・65・66・69・70が中期様式、68・72が後期様式に相当する。前期Ⅱa期～後期Ⅲ期までのものが確認でき、13世紀～15世紀前半の時間幅の中に位置づくと考えられる。

常滑製品

常滑製品は6点を確認し、うち5点を図化掲載した。73は肩に2条の沈線がめぐる壺、74～77は片口鉢である。74は高台を有する。75は、口縁部の器厚がわずかに減じ、丸みを帯びた端部に沈線状の凹部がめぐる。77は口縁端部が内外にわずかに拡張し、端面はわずかな凹部を形成する。中野晴久氏の常滑編年に対比すると(中野2012)、73～76は6a～6b型式、77が8型式に相当し、前者が13世紀後半、後者が14世紀後半に位置づくと考えられる。

珠洲製品

珠洲製品は78～81の片口鉢4点を確認し、すべて図化掲載した。78は緩やかな膨らみをもって聞く器体が器厚を減しつつ立ち上がる。口縁は内傾し、口端は水平に面を取る。79は波状卸し目を縦位に施す。80は口端が内と外に突出気味となる。卸し目は斜行する。81は緩やかな波状を呈する縦位と斜位の卸し目が交差する。吉岡康暢氏の珠洲陶器編年(吉岡1994)に対比すると、78はⅠ～Ⅱ期、79～81はⅡ期に相当し、12世紀末から13世紀前半に位置づくと考えられる。

山茶碗・片口鉢

82～86は碗、87は皿、88～93は小皿、94～104は片口鉢である。山茶碗・片口鉢は産地別に大きく5つの類型の存在が指摘されているが(瀬戸市埋蔵文化財センター1993)、82～86・88～90・92・93・99～104は東濃製品(中津川窯を含む)、87・91・94～98は尾張製品ないし尾張型である。藤澤良祐氏の山茶碗の編年(藤澤2007)に対比すると、ほとんどが5型式～7型式に相当し、12世紀末～13世紀後半の時間幅の中に位置づくと考えられる。

かわらけ

かわらけは、非ロクロ成形のものと同ロクロ成形のものに大別できる。前者を1群、後者を2群とする。

1群：非ロクロ成形のもの。底部は丸みを帯び、底部外面から体部外面下半に指頭圧痕を残す。手づくねか内型作りが確定できないため、非ロクロ成形とした。器形により1類と2類に分ける。

1類：口径11～12cm前後と相対的に大型で、体部の立ち上がりが長く、環状の器形を呈するもの。

105～108が該当する。105・107・108には円周方向ナデと指頭圧痕との境に弱い稜がある

2類：口径7～9cm前後と相対的に小型で、体部の立ち上がりが短く、皿状の器形を呈するもの。

109～118が該当する。内面調整は、見込み周縁部から口縁部にかけて円周方向ナデ(横ナデ)

を施す。さらに、112～118は、その後に施した直径方向のナデが見込みに観察できる。外面調整は、口縁部から体部上半に円周方向ナデ、体部下半から底部に直径方向のかいナデを施す。109・110・113・115・116・118には、円周方向ナデと指頭圧痕との境に弱い稜がある。

2群：ロクコ成形のもの。底部は平坦で、切り離しは回転系切りである。体部は直線的ないし外反気味に立ち上がる。器形により1類～3類に分け、さらに体部器壁の形態によりa～cに細分する。

1類：口径11～13cmと相対的に大型で、体部の立ち上がりが長く、坏状の器形を呈するもの。

1a類：体部は厚めで、内湾して立ち上がる。119～121が該当する。

1b類：体部は薄めで、内湾して立ち上がる。122～124が該当する。

1c類：体部は薄めで、内湾して立ち上がるが、口縁部がやや外反する。125が該当する。

2類：口径8～9cm前後と相対的に小型で、体部の立ち上がりが短く、皿状の器形を呈するもの。

2a類：体部は厚めで、直線的に立ち上がる。126～129が該当する。

2b類：体部は薄めで、直線的ないし内湾気味に立ち上がる。130～134が該当する。

2c類：体部は薄めで、外反気味に立ち上がる。135が該当する。

3類：やや突出する底部から体部が直線的に開く器形で、内面に明確な平坦部をもたない。口縁外端に面を取り上端を鋭く仕上げている。砂粒少なく白い精良な胎土、端整な形状で、他とは明確に区別し得る。136が該当する。136は底部外面にミガキのような丁寧なナデを施しており、切り離し痕は消失しているが、回転系切りによるものと推測し得る。

非ロクコ成形（手づくね、内型成形）のかかわりには、これまでの研究（服部1984、守矢1987など）により、ほぼ13世紀に属することが明らかになってきており、本遺跡出土の1群もほぼ13世紀に位置づくと考えられる。一方、ロクコ成形のかかわりには12世紀末から16世紀まで存続する。本遺跡の2群もその時間幅の中におさまると推測するが、佐久市大井城跡のA型（市教委1986）のような、外側に引き出すように外反させる口縁部形態が認められないことから、16世紀には下らないと考える。他の出土土器・陶磁器の様相を考え併せ、2群は13世紀～15世紀に属するものと推測する。ただし、2群3類とした136については、底部がやや突出する特徴から、12世紀末～13世紀初頭に位置づく可能性もあろう。

内耳土器・瓦質土器・瓦

137は内耳土器である。内耳土器はSD05の他、NR01などから22点の破片を確認したが、器形がわかる1点のみを掲載した。15世紀後半以降と考える。

138は描鉢で、描り目は幅2.6cmに8目である。139は直立する体部の外面に花文のスタンプを押捺する火鉢であろう。140は推定内口径14cmほどで、体部外面に花文のスタンプを押捺する香炉であろう。いずれも13世紀～14世紀の幅の中に位置づくと考えられる。

141は酸化炎焼成の瓦で、凸面に細かい斜格子タタキ目がある。

(3) 石器、石製品、ガラス製品（第79・80図、PL13）

石製品

1～8は砥石で、1～3・5・6が凝灰岩で中砥及び仕上げ砥石、7・8が砂岩で荒砥である。1は正面以外の3面に砥ぎ痕とは異なる条線が顕著に認められる。2は表裏面に砥ぎ線がみられるが、3の裏面は剝離面となる。4は結晶片岩製の砥石としたが、他の砥石に比べ太い条線が顕著に観察され、正面の一部と裏面に剝離面が残っている。石材が9の粘板岩に近い材質で、硯に関わる資料の可能性もある。

9は黒色の粘板岩の硯未製品と判断した。厚さ17.9～21.5mmの板状の石製品で、表裏面と右側面に研磨した擦痕がある。特に表面は平らに擦られており、1条もしくは並行する2条の幅0.5mm程の線刻が認められる。並行する2条の線刻に囲われる部分が硯線となる。海(墨池)となる部分に敲打痕が認められる。

左側面と上下側面には敲打痕と粗い線条痕が認められる。

10は千枚岩、11・12は黒色の粘板岩の硯または硯未製品である。10は硯縁の2辺が鋭角になるが、硯縁が剥落しており、陸部との段差がほとんどない。また、硯陰（裏面）も剥落して失われており全体の形状が想定できない。11は陸（丘）から舌（落潮）部にかけての破片で、裏面にも墨地のような掘り込みと1条の線刻が認められる。硯面の陸と縁には捺痕が認められ、未製品の段階で破損したものである可能性もある。12の表面は平坦で研磨した捺痕と幅0.5mm程の1条の線刻が認められる。隅を丸くした側面には研磨した捺痕が認められ、裏面は剝離している。硯縁が作り出されていないことから硯未製品と判断したが、硯ではない石製品の破片である可能性もある。

13は後に微細な剥離がある玉髄製の石器で、火打石と判断した。14は帯状の敲打痕がある敲石で、花崗岩製である。

15・16は滑石製の石鍋である。15は口縁部直下に削り出した鑿部がめぐる。鑿部は断面台形を呈し、張り出しは小さい。上辺は斜めに垂下し、下辺は上辺に比べて長い。器壁は口縁部より体部が薄くなっている。器面の整形はノミ削りの後、研磨する。口縁部・体部外面および鑿部側面には縦方向の細かいノミ削り痕が残る。研磨は口縁部・鑿部は横方向に施しており、体部内面には縦方向の研磨痕が観察できる。B7区検出面から出土した。15と同一個体と思われる破片2点（NR 01 T P 30 - 10層の鑿部片、NR 01 T P 24 - 7層の体部片）が出土した。15は鑿部形態からみて、木戸雅寿氏による石鍋編年（木戸1993）のⅢ - Ⅳ類に該当し、14世紀代と考えられる。

16は石鍋の再加工作品で、底部～体下部で、器体を縦に半載し、切断面を平滑に研磨したような状況を呈する。また、外底縁に一箇所、切断途中の痕跡と考え得る切れ目がある。破損品を再利用するための加工と推測するが、用途は不明である。体部外面に縦方向の細かいノミ削り痕が5段に残り、内面には粗成形時のものと思われる断面V字状のノミ痕が残る。研磨は、体部内面に縦方向、底部内面に円周方向、底部外面中央部に直径方向の研磨痕が観察できる。B12区北検出面とNR 01 T P 24 - 10層出土の破片が接合した。15・16以外に2点の石鍋の破片が出土した。

ガラス製品

17はガラス小玉である。古代以前の遺物の可能性が高い。

(4) 鍛冶関連遺物（第80図）

羽刃、鉄塊系遺物、鉄滓が出土した。1～4は羽刃の破片で、1がSB 20、4がSD 12から出土し、2・3は段切4造成土10層から出土した。SB 20の時期からみて、10世紀代の所産である可能性が高いと考える。

掲載できなかったが、鉄塊系遺物・鉄滓は53点が出土した。SB 04埋土、SB 11埋土、B3区、NR 01からも若干出土しているが、SB 20および周辺のII Q 24・25、II V 03～05グリッドに集中する。金属探知機（KDS社製DS - 100）で測定し、金属反応を示したものを鉄塊系遺物とした。鉄塊系遺物は15点で、全体的に塊状を呈し、割れて形状不明なものもあるが、断面形は下面が蒲鉾状に湾曲するものが多い。鉄滓は38点で、割れて形状不明なものが大部分であるが、一部、断面形が蒲鉾状に湾曲するものがある。

(5) 金属製品

鉄製品・銅製品（第81図、P.L14）

1～27は鉄製品、28は銅製品である。1・2は刀子である。1は両面で倒卵形の柄縁金具を伴う。3は火打金である。側面形は全体として山形を呈する。台形状を呈する体部の基部両端を延ばしてねじり、上部中央に曲げ合わせている。延ばした先端が欠くため、頂部での結合形態は不明である。4～23は釘

である。4～11はSB11からの出土で、釘多数が塊状に鑄着したもので分離した。頭部付近の太さ2～2.5mmの細いものである。基部上端を叩き延ばして45度ほどに曲げ、頭部を作り出す。12～19・21は基部上端を叩き延ばし、ほぼ90度折り曲げて頭部を作り出している。12・13は木質に打ち込んだことが明瞭な資料である。20は六花形の釘隠しを伴う。24は、遺存状況は良くないが、片面の周縁が肥厚し、側辺～下辺の形状が尾垂遺跡出土の髻（理文センター2019）に類似することから髻と判断した。残存部に装飾は認められない。25は鉤状鉄製品、26は環状鉄製品、27は帯状の薄い鉄板を十字に合わせたもので、器種不明である。28は耳環である。

銭貨（第82図、P.L14）

1～35は中世の銭貨（銅銭）である。中世の銭貨は43点確認した。出土した銭貨は、初鑄年の古い順に、開元通寶（7・17）、太平通寶（34）、咸平元寶（24）、祥符元寶（19）・祥符通寶（10・15）、皇宋通寶（28）、至和元寶（14）、嘉祐元寶（26・31）、熙寧元寶（2・8・18・33）、元豐通寶（5・9・11・13・23・27・30）、元祐通寶（1・3・21・29）、紹聖元寶（4・6）、大觀通寶（25）、政和通寶（22）、洪武通寶（20・32）、永樂通寶（12・16）である。35は元祐通寶または元符通寶である。半数以上は墓跡からの出土であるが、堅穴建物跡SB11、自然流路NR01などからも出土している。銭貨が出土した墓跡はSK03（1点）、SK08（3点）、SK19（6点）、SK80（3点）、SK110（3点）、SK111（6点）、SK124（2点）で、SK19・110・111からは明銭が出土しているが、大半は北宋銭である。

（6）木製品（第83～94図、P.L15～17）

木製遺物は7,064点が出土した¹。中世陶磁器・土器が多く出土したNR01の10層を主体として、その他NR02、SD05、SE01、SK80、SK101、SK110、SK111、SK323、SK383、ST02、ST04から出土している。資料の多くは破片で、器種の判別が難しいものが多かったが、時枝務氏による概括的な指導と既報告資料等を参考に分類を行い、268点（約38%）を選択して図化掲載した。なお、主な掲載遺物200点については樹種同定を実施した。同定分析の詳細は第5節に記載し、同定結果を記載した木製品観察表を添付DVDに収録した。

木製品観察表の「大別」「分類」「種類」は、考古学と中世史研究会2014「第12回考古学と中世史シンポジウム 木の中世」に準拠した。

まず最上位の分類概念は、資料が製品として使用された場合の「場面」を基準にした「大別」として、I「宗教・祭祀・呪術」、II「建築・職能」、III「生活用具」の3つのカテゴリとした。次に中位の分類概念はそれをさらに細別し、具体的な「用途」を想定したもので「分類」と呼称した。さらに下位の分類概念はそれぞれの器種を「種類」とした。特に「種類」欄に記載した用語のうち特に木製品の製作過程にかかわるものに関しては、千曲市東條遺跡の報告（岡村2013）で示された解釈を踏襲し、1～3次加工によって下記右の「」内が生じたと理解して、用語（「」内）を選択・統一し、下記のとおりとする。

[工程の定義]

[本工程を経て生ずる資料の呼称]

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1次加工：丸木を最初に分割する工程 | 「分割材」・「端材」 |
| 2次加工：分割材をさらに加工する段階 | 「加工材」・「端材」・「未製品」 |
| 3次加工：仕上げ調整 | 「製品」・「用途不明品」・「部材」等 |

一方、器種も用途も現時点で判断し難いものに関しては「大別」を「用途不明」とし、「分類」は空欄、「種類」には資料の形態（「棒状」・「板状」等）を記載した。

出土全点の器種組成を第6表に示した。以下、掲載資料について、「大別」ごとに記述する。

1 自然木、種実を含めた総数は7,420点であり、過去の年報等ではこの数字を用いていた。

第6表 木製品器種組成

大別	分類	種類	点数	大別	分類	種類	点数
宗教祭祀呪術	仏具	板塔婆・斎串	9	建築・職能	加工材		68
		角塔婆	2			端材	切断端材
		傘塔婆頂部宝珠か	0	飲食具	椀(漆器)		6
		納骨容器	1		箸	709	
		柿経・木札状木製品	7		板杵子・壺杵子か	3	
		飾り板(蓮弁・四弁花)	3		容器	曲物(底板・側板等)	10
	仏具(調度)	高欄斗東・台座・不明調度	3	蓋か(容器・納骨容器・竹筒)		3	
		形代	隅物・人形・杵子形・鳥形・刀形・臼形・楕形など	66		栓か・円板	6
	呪術具		呪符(栓・楔・箸状・棒状)	6	列物	2	
			呪符か(板状/釘打ち)	9	生活用具	調度具	盆・折敷・膳
宗教祭祀呪術用具を含む多目的具	印	印	1	随か			1
		木札状木製品	木簡・呪符・塔婆(文字あり8・なし12・用途不明・素材6)	35		取手	1
	その他の木札・板類		3090	容器食器その他			17
	その他の角・棒状木製品		976			火気具	火付木
	建築・職能	工具	楔状(刷毛か)	4		装身具	櫛
木槌状			1	履物		下駄	7
筥・止め具			6	その他		-	57
柄を含む棒状品			3	遊戯具		独楽か	1
農具		鎌・杭・不明・農具	20			傀儡人形か	2
		紡織具	板状木製品(不明)	10	用途不明具	-	棒状・角柱状
部材(駒あり)			1	-		板状・木札状	
建築部材		その他の建築部材	47	-		竹製品	19
		柱(丸木芯持材)	3	未製品	-	未製品か	3
		用途不明品	板状製品(礎板等の可能性)		3	合計	
建築・職能・宗教祭祀呪術	鳴鑼		1				
	武器・祭祀具	弓(形)	2				

① 宗教・祭祀・呪術の道具

仏具(第83・84図、P.L15)

塔婆：塔婆には板状の塔婆(笹塔婆)(13～21・38)と角塔婆(22・23)がある。板状の塔婆のうち、13・14は頂部が圭頭かつ2段の羽刻みを施す形態で、細長い薄板を素材とする。13は基部を剣先状に尖らせている。これらは板碑の形態と類似するが、13の頂部はやや丸みを帯びた宝珠型にも見える。19は両側面にそれぞれ2箇所の切り欠きを入れている。下端が剣先状を呈し、厚さが1cmを超えるやや厚手の16・17・20・21は物忌札に、上端が直線的で斜めに切り落とされている38は呪符(まじない札)の可能性がある。ただし、いずれも文字が認められないことから、その確定は保留したい²。角塔婆22は四角柱を素材とする。頭部は、頂部がやや平坦で四方になだらかな丸味を持つ宝珠状に作り出され、側面から水平な切り込みが2箇所に入り頂部全体を一周する。これを立体的な2段の羽刻みに相当すると解釈すれば、板塔婆を立体化して大型化したものと理解できる。「餓鬼草紙」の一場面(小松編1994)に描かれている

2 元興寺では角塔婆以外の板塔婆には笹塔婆(五輪塔形の頭部を有し、胴部は木簡状の札)、絵塔婆(地藏などの絵が描かれた札)、番衆札(念仏所の豊饗に当たった人名を表記)、参札(参拝に来た人がお堂を回るときの札)などが報告されている(注村1977)。

木製の塔婆は、木製板碑が角塔婆とみられ、本資料との関係が考えられるが、本資料の頂部形態はそれらより丸みをもつこと、彩色や文字が見られないことから、厳密な比較は難しい。23は同様な角塔婆の基部である。

柿経：幅1～2cm程度、厚さ0.5cm程度の薄板を、柿経の可能性のあるものと捉えた(24～30)。柿経は元興寺極楽坊等(辻村1975)に類例があり、形態的に類似するものもあるが、本資料群は文字が確認できないため、その確定は難しい。うち29は頂部と周囲に、30は頂部に斜めの削りが入り、なだらかに加工されている。呪符等の異なる用途も推測される。

飾り板：厚さ5mm程度の板を素材として周囲に切り込みを入れて花卉様の装飾を作成している31、同様な素材で1枚の花卉状に加工した32・33が該当する。後者は組み合わせるために隅に穿孔がある。蓮台や常華の一部の可能性もある。

高欄斗束：34は四角柱を素材とし、上部には架木(ほこぎ)を受けるための挟り(斗/ます)、中央部に平桁を組み合わせる切り込み、下部には地覆へ差し込むとみられる柄が切られていることから、高(匂)欄の斗束(通柄/とおしたたら)と考える。また長らく平桁が載っていないところが紫外線によって黒色化しているのに対し、載っていたところは本来の生木に近い色調をおび、両者の色調コントラストが明確である。裏面は親柱に組み合わせるためにU字状に挟られている。斗束の多くは単独で設置されるが、親柱に組み合わせる場合もある(井上監修1979)。34は裏面の形態から、後者にあたるものと理解される。高欄は、寺社の縁側の外側に設置される場合の他に、仏像・厨子を安置する須弥壇の周囲に設置される場合がある。34は長さ26.5cm、幅7.9cmと小ぶりであることから後者と推測する。須弥壇を仏教関係の調度と捉え、建築でなく仏具とした。

台座：厚さ2cmの厚板の周囲を削って卵形に加工している36を台座とした。中世には様々な仏像が製作され、台座の作りにも善し悪しが顕著なため、本資料は作りの粗い台座に相当するものと推定した。

小形納骨容器：37は、高さ4.8cm、底径3.2cmの円錐台の上部周囲に幅(高さ)8mmの挟りを廻らせ、全体を丁寧に調整している。上部は直径1cm、深さ2cm程度の穴が開けられ中空状となっている。そこに骨片を納める納骨容器の可能性を推測した³。外面全体が黒色化しており、塗装の下地の可能性がある。

形代(第85図、P.L.15・16)

人形：一般的な人形は40～42の3点で、40はやや厚い板に、41と42は薄板の側面に切り込みを入れて人の横顔を表出している。特に40は側面に眉、目、口を刻み、下端には2本の足を表現している。また、頭部を墨で黒く塗りつぶしている41は、下端を柄状に削り出していることから組み合わせ式とみる。なお、第93図240も角柱を素材とした立体的な人形で、41に類似した側面形態を有し、やはり人の横顔を表現したものとするが、肩の位置の側面に直径2mm程度の軸が貫通していることから、そこに腕を嵌め込んで動かすことのできるマリオンネット人形のような形態を推測する。そこで、生活用品、「遊戯具」の「傀儡人形」に分類した。

陽物：44は小形の立体的な陽物で、下端が柄状になっており、本体と組み合わせたとみる。板状の43もその可能性が高いが、横顔の人形の可能性もある。

鳥形：45は0.8cmの厚板を矩形に整形し、片方を小さく尖らせて頭、もう片方を三角形に加工して尾を表現したものである。片側面のコ字状の切り込みは羽を組み合わせるための加工と推測する。また、46は片側縁が弧状を呈し、45以外の鳥形木製品の羽の可能性もある。47は片側を細く削り出しており、鳥形を含む形代に嵌め込む軸と推測した。

3 時枝務氏のご教示による。

刀形：側面が刃と柄から成り、刀の形に類似した板状の製品を一括した（48～57）。背が厚く刃が薄い通常の刀の形に加工された48～51等と、逆に刃が厚く柄が薄く加工された52・53・57等があり、後者は「刀形状」とした。48は、側面形から「包丁形」（考古学と中世史研究会2014）とすべきかもしれない。加工方法は非常に粗雑で、割くあるいは削ったままの状態であり、端面の微調整はほとんどなされていない。

その他：58は軸と組み合わせる鋏形に類似する。その他、59～66は形代もしくは形代片の可能性が考えられるが、種類を特定できない。角柱状で側面から挟りが施されていることから、立体的な形代の未製品の可能性があるものに67・68がある。後者は人形であろうか。

呪術具（第85・86図、P.16）

呪術具としたものは、形態上塔婆等の仏具に分類できない資料を集めたものである。主に斎申（69・70）、多角柱の製品（71～74）、板状製品（75）、先端の尖った棒状品（76・77）がある。多角柱の製品は簀子等を含む呪術具としての用途の他、立体的な形代の未成品や素材の可能性も考え得る。また、75は側面両側から直径2mm程度の釘を打ち込んで作出したとみられる、くの字状の切欠きを有し、表面下部には実際に木釘が打ち込まれ、その右横にも同様な痕跡がみられる。本製品は静岡県道場田遺跡出土の蘇民将来札（河野2001）の形態にも類似するが、本例には文字が書かれていないため詳細は不明である。78は四角柱で、梯子状の記号が墨書で描かれている。

印（第86図、P.16）

印判は、一辺を少し欠失している以外は組み部までほぼ完形の82と、未製品としての83がある。82の印面を観察すると、幅約1mm程度の細い線で円と四方に延びる直線が刻まれ、分割された4つの部分それぞれに紡錘形の挟りが入れられている。これは菱の4枚の花びらと雌しべや雄しべを表現したもので、4.8×3.3cm程度の「花菱紋」に似た印影を想定し得る。印面を中心に黒ずんで見えるのは、黒の印肉か漆の下地の痕跡とみる。印面の隅が斜めに削られているが、これは使用による欠損というよりは故意に削いだ可能性が高い。押印対象としては漆器や染色布などが考えられる。ただし、印判施文による漆器の場合は黒漆の上に赤漆が押される事例が圧倒的である。樹種はモクレン属であり、押印対象を考慮して柔らかな素材が選ばれたと推測する。

木札状木製品（第86～88図、P.16）

0.2～0.5cm程度の薄板から厚さ1.5cmの厚板まで、様々な厚さの素材を極めて平滑に加工・調整⁴して仕上げたものを「木札（状木製品）」とした。これに対し、板状であるが平坦面が顕著に認められないものを「板（状木製品）」とした。

文字が確認された資料（木簡・呪符・塔婆等）：木札状木製品を中心に、表裏とも平滑に加工されているもののうち、肉眼観察によって、表面に墨のような黒色の痕跡が顕著にみられる資料75点を厳選し、2017年に長野県立歴史館保存分析室で赤外線観察を行ったところ、43点に文字が書かれている、もしくは墨痕が残存している可能性が認められた（第7表）。そのうち、第86・87図84～91・第83図13・第91図205・第92図228の11点を図化掲載した。ただし、11点の中には、墨書・墨痕として図示表現できなかった資料もある。84は、11.7×4.35×1.1cmの長方形の札で、上下端がやや粗雑に切り落とされ、左辺がかすかに弧を描いている。文字は表面のみに書かれ、肉眼観察でも右上から「百劫種相三十二度満足」と判読できる。「百劫」はきわめて長い時間、「相三十二」は仏の姿が備える32の特徴、「六度」は悟りの境地に達するために実践する六つの徳目・善行、「満足」は成就の意味である。いずれも仏教の経典や注釈書に登場する語句である。札自体の作りは粗雑ながら、文字の大きさと字間、左右の均衡もとれている。

4 刀子等による削りの後に紙草や皮等で表面を更に平滑に調整し、文字を書きやすくしたものと考えている。

第7表 墨書・墨痕木製品一覧

順位	図版番号	図版遺物番号	新管理番号	台帳番号	区	出土位置	備考	ランク
1	83	13	3003	製-5	B12南	SE01	表：文字あり	B
2	86	84	3001	製-34	B12南	NR01 TP25	表：百劫種相三十二度満足（明瞭）	A
3	86	85	3202	角-1177	B12南	NR01 TP25	表：字画とれない墨痕あり	C
4	86	86	3310	板-0688	B12南	NR01 TP31	表：□□、裏：□□	B
5	87	87	3209	角-1479	B12南	NR01 TP31	表：□□□（魚目跡）	B
6	87	88	3311	板-0540	B12南	NR01 TP32	表：□□（賀？）□、裏：墨痕あり	B
7	87	89	3312	板-1069	B12南	NR01 TP30	表：□□□	B
8	87	90	3313	板-2190	B12南	NR01 TP32	表：□□□□□□□□	B
9	87	91	3314	角-0913	B12南	NR01 TP32	表：□□□□□□□□（覚か大金）□□□	B
10	91	205	3006	製-8	B12南	SE01 No.6	表：千・文字あり（明瞭）	A
11	92	228	3094	板-1898	B12南	NR01 TP31	表：墨痕あり	C
12				棒-017	B	NR01	表：□□□□□□	B
13				板-3380	B12南	NR01 TP33	表：□□□□□□	B
14				角-0786	B12南	NR01 TP30	表：□□□□□□	B
15				板-0584	B12南	NR01 TP28	表：□□□□□□□□	B
16				板-1054	B12南	NR01 TP30	表：□□□□□□□□	B
17				板-1116	B12南	NR01 TP31	表：□□□□□□□□	B
18				板-2073	B12南	NR01 TP32	表：□□□□□□□□	B
19				板-2157	B12南	NR01 TP29	表：□□□□□□□□□□□□□□	B
20				板-2066	B12南	NR01 TP32	表：文字あり	B
21				板-3401	B12南	NR01 TP33	表：墨痕あり	C
22				板-080	B12南	SE01 No.6	表：墨痕あり	C
23				板-0312	B12南	NR01 TP22	表：墨痕あり	C
24				板-0411	B12南	NR01 TP29	表：墨痕あり	C
25				板-0636	B12南	NR01 TP31	表：墨痕あり、裏：墨痕あり	C
26				板-0694	B12南	NR01 TP31	表：墨痕あり、裏：墨痕あり	C
27				板-0843	B12南	NR01 TP29	表：墨痕あり	C
28				板-1010	B12南	NR01 TP29	表：墨痕あり	C
29				板-1030	B12南	NR01 TP30	表：墨痕あり	C
30				板-1383	B12南	NR01 TP31	表：墨痕あり	C
31				板-2502	B12南	NR01 TP24	表：墨痕あり、裏：墨痕あり	C
32				板-2644	B12南	NR01 TP24	表：墨痕あり	C
33				板-2807	B6	NR01 TP06	表：墨痕あり	C
34				板-2855	B12南	NR01 TP26	表：墨痕あり	C
35				板-1610	B12南	NR01 TP30	表：文字あり	B
36				板-1647	B12南	NR01 TP30	表：文字あり	B
37				板-1652	B12南	NR01 TP30	表：文字あり	B
38				板-1736	B12南	NR01 TP31	表：文字あり	B
39				板-2134	B12南	NR01 TP29	表：文字あり	B
40				板-1668	B12南	NR01 TP30	表：墨痕あり	C
41				板-1786	B12南	NR01 TP29	表：墨痕あり	C
42				板-1883	B12南	NR01 TP28	表：墨痕あり	C
43				板-1961	B12南	NR01 TP29	表：墨痕あり	C

ランク

A、文字が確実に読めるもの：2点

B、文字の配置の確認が可能で、場合によっては文字が読めそうなもの：21点

C、墨痕があるが文字は読めないもの：20点

85は表裏面が平滑に仕上げられ、棒状で、表面に墨痕がみられる。86は四角柱素材の上端を斜めに切り落とし、下端が剣先状で表面に2文字、裏面に数文字が書かれていた可能性があるが、字画はとれない。特徴的な形態からは呪術具の可能性が高く、松本市殿村遺跡の製品と類似する⁵。87は棒状の素材で表面全体に焦げと叩き痕が顕著にみられ、3文字が書かれている可能性があるが、字画はとれない。片側が薄く作り出され、中央でくの字状に曲がっている形状からは、刀形である可能性もある。88は表裏面が平滑な板目材であるが不定形の板片で、表面に「賀」の可能性のある文字を含む3文字、裏面に墨痕が認められる。89は約1mmの薄板の表面に2文字以上が認められる。90は幅5.9cm、厚さ0.6cmの厚手の板の下端を緩く尖らせた特徴的な形態で、表裏面にそれぞれ文字が書かれている可能性があるが、字画はとれて

5 註2に同じ。

いない。91は幅2.45cm、厚さ1.5cmの棒状で、表面に「覚」か「大」か「金」の可能性のある文字を含む8文字が認められる。この他に、第91図205は「千」他の文字が認められるが、蓋に転用されている。

中世において文字が書かれた木札には呪符・塔婆・柿経など宗教・祭祀・呪術に関係するものや荷札・掛札など様々な種類がみられるが（考古学と中世史研究会2014）、本遺跡では84・86・87を除いて、すべて一部欠損品か破片であり、既述のとおり84を除いては文字の意味内容の解説も殆ど不可能であるため、木札の用途を特定することはできない。

文字が確認されなかった資料（木簡・呪符・塔婆等）：「文字が確認された資料」と同様に表面が平滑に加工・調整されていて木簡・呪符・塔婆等の可能性があり、表面の一部が黒ずんで墨痕のように見えるが、赤外線では文字が確認されなかったものを一括した。92～103が該当する。このうち上部が平坦で幅4cm前後、厚さ0.3cm前後の札に92・99、幅1.2～2cm前後、厚さ1mm未満の札に94がある。幅3～4cm前後、厚さ5～7mm前後の厚手の札では、長さが7.3cmの完形の札に93、同様の幅、厚さであるがそれより長い形状を呈するものに95～97・102・103が該当する。また、厚さが0.2～0.3cmと薄手だが、幅が6cmを超えると推測できるものに98・100がある。

用途不明の木札状木製品：表面が平滑に加工・調整されているが、形態の特異性や穿孔等によって上記の資料とは異なる用途が予想されるが、具体的な用途は不明であるものを本類に含めた。101・104～108・110・112が該当する。そのうち104・108は上端が隅丸に、110は斜めに加工されている。また、穿孔は、101・104・108・112に施されている。

木簡・呪符・塔婆等の素材：短冊状の木製品で、表裏面が平滑に加工・調査されているが、文字の痕跡や汚れが全くみられない製品に111・113～117がある。遺跡全体では25点確認している。木札状木製品として3次加工までを完了し、文字を書き込む直前の状態で貯蔵されていたものとする。

② 建築・職能関係の道具

工具（第88図、PL16）

形態から工具と推測されるものを一括で説明する。

柃目の厚さ5mm以上の目の詰まった柃目板を素材に、片方に表裏両側から削りを入れて尖らせた118～121は楔状を呈しており、刷毛や調整具のような用途を推測する。このうち120は第92図214の盆と加工、断面形態が同一であることから、214の盆から二次的に転用したものとみる。樹種はどちらもサワラである。台形状の製品である122は全体が黒色化しており、留め具に使われた可能性がある。

棒状の素材で、一端もしくは両端が薄く加工されている123・125～127は篋としての用途を推測する。また、断面台形の棒状製品の124は、やや中央下の幅の狭い部分を柄部とすれば、木杓的な用途を想定できよう。また、鋭い剣先を有する板材の128は、祭祀具というよりも篋などの工具の可能性が高い⁶。上端が三角形に加工されてスリット状を呈する129、先端に水平な刻みが1条廻る130や131は柄の可能性もある。特に129の先端は炭化しており、スリット部分に薄い紙などを挟み込む用途も考え得る。

農具（第88・89図、PL16）

形態の民俗学的な比較検討から、農具と考えられるものを一括で説明する。

角柱を素材とし、長軸方向の中央部分に全周する袂りを入れていることから木鍾とみられるものに132がある。図の向かって下側がやや大きいことから、紐と本体が並行する形、すなわち縦方向に吊り下げて使用したと考える。コナラ属コナラ節である。大型の四角柱もしくは多角柱の先端を剣先状に尖らせた杭には、133～135が該当する。

6 註2に同じ。

武器（祭祀具の可能性あり）（第89図、P L 16）

中空のウツギ属の端を削り出している137は弓の可能性はある。ただし、通常の弓の両端のようにL字状に作り出されていないこと、中空素材では強度を保ち得ないと推測できることから、実戦用ではないと考える。また、本遺跡では矢に装着する鳴鏑138も出土した。棗形に加工され、上下方向に孔が貫通した製品で、側面上方には方形の孔（目）が5箇所穿たれ、空気の振動で音を発する仕組みとなっている。側面には黒色の付着物が残存し、漆が塗られた痕跡と考える。中央で2片に割れているため、内面が緩く削られて中空を呈していたことが解る。サワラ製である。

紡織具（第89図）

杵などの紡織具の部品と考えられる製品に、139・140がある。

建築部材（第83・89図、P L 15・16）

四角柱でホゾが切られた建築部材は141のみである。また、S T 04 P 1からは柱材9の礎板として、薄い板材10と厚い板材8が重なって出土した。特に柱材9の下端は非常に平滑に加工されている。

製品以外（第89・90図、P L 16・17）

加工材：2次加工や転用の際に生じたとみられる加工材には、札状を呈するものと角柱状を呈するものがある。札状のうち小型（幅2cm程度で長さ2～3cm）のものに142・143、中型（幅2～5cmで長さ3～5cm）のものに144・145、大型（幅・長さともに5cm以上）のものに146がある。角柱状を呈するものには147、棒状のものには148～150等がある。

端材：1～3次加工で生ずる端材には、木材の伸長方向に対し垂直に切断したものが多数認められる。ここでは10点（151～160）を掲載した。これらのうち、厚手のものは151～155で、151のように鋸の痕跡があるものと153のように手斧痕があるもの等に分かれる。また、厚い剝片状を呈するものは1283点確認したが、そのうち156～160を掲載した。また、後者のうち、端部が炭化しているものは火付木に分類した。

③ 生活用具**飲食具**（第90・91図、P L 17）

椀：いずれも漆器椀で、163～168が該当する。163は高さ6.1cmの椀で、内外面全面に黒漆が塗られている。164も内外面ともに黒漆塗で、外面のみに赤漆で細い4本の線を描いている。これは、芒などの秋草を赤漆で描いたものの残存とみる。また、166は椀の底部、168は椀の口縁部であるが、やはり内外面ともに漆が塗られ、前者は内面底部、後者は外面に黒漆の漆膜も残る。さらに前者は内面底部の中央付近に、後者は外面口唇部付近に朱漆がごく微量残存する。167は内外面全面に黒漆が塗られて残存している。165は口縁部の破片であるが、外面に黒漆、内面に赤漆が良好に残っている。この時期、椀・皿類の下地塗には、漆でなく柿渋を用いるようになったといわれているが、本資料での判断は保留する。

塗箸：断面円形で黒漆、赤漆が施された塗箸は1点出土し、169が該当する。

箸（串）：箸もしくは箸状の木製品は、完形・欠損を含めて本遺跡で709点出土している。その中には、割れた同一個体が含まれる可能性があるが、時間をかけての接合は行っていないため詳細は不明である。うち20点（170～189）を掲載した。これらのうち完形品の長さは、最も長いもので170の23.7cmであるが、平均的な完形品の長さは21cm前後で、幅6mm未満、両端が細く尖っている形態が典型であり、171～177が該当する。また、長さが20cm未満のものに178・179・182等、10cm前後のものに183～187がある。短い木針状の製品には188の長さ6.3cm、189の長さ3.8cmがある。これらの断面形は、四角形、五角形、六角形、かまぼこ形、多角形、円形等がある。用途については、飲食具としての箸他、紐などで束ねられ、隙間に御幣を挟んで使用する御幣串という見方もある。

杓子：杓子には、柄を含む全体が平坦なしゃもじ状の製品と、柄がスプーン状に曲がる製品がみられる。前者は板杓子で190・191が該当する。後者に該当する192は壺杓子の可能性があると考える。「木の中世」(考古学と中世史研究会編2014)に準拠し、長さ10cm、幅4cm以上の製品を杓子、長さ6cm、幅1cm未満の製品を杓子形と仮定すれば、本例は杓子に含まれるが、やや小振りであり、葬送に関わる枕飯など特殊な用途に使われた可能性がある⁷。

容器 (第91～92図、P.L17)

曲物：底板・蓋と側板がある。前者は193～196が該当する。後者は197が該当する。また、厚さが5mm以上の198～200も、ほぼ等間隔に連続する鋭い平行線をケビキ線とすれば、側板と考え得る。ただし、201も同様の線が見えるが、斜めがかつ本体が厚いことから、また、199は本体の表裏面が整形されていることから、曲物以外の用途も考えられる。また、202は曲物他の蓋の綴じ皮の素材である。

蓋か：板材を円形に加工したもので、断面が台形に加工され、対象容器と組み合わせることで密閉性が確保できたと推測し得るものに、203・204がある。内面がやや黒色化しているため漆の下地等何らかの塗布物があった可能性もある。また、205は木簡・呪符・塔婆などの文字が書かれた札が、竹筒などの蓋に転用されたとみられるもので、表に「千」他の文字が明確に残存し、肉眼でも判読可能である。これらは直径5～8cmで、通常の曲物の蓋に比べてかなり小形であることから、特殊な容器の蓋と推測する。

栓か：断面楕円形素材に206、断面五角形素材に207、断面半円形素材に208・209があり、栓または何らかの部材と推測する。また、直径2.2cmと小形の板状製品の211は、栓か円板と考える。

刳物：厚手素材に大きく抉りを入れた製品で、刳物とした。舟形に加工した212と形態不明の213がある。

調度品 (第92図、P.L17)

盆と折敷：厚さ1cm以上の平滑な板を加工したものを盆、盆の縁を立ち上げたものを折敷とすると、前者は214・215、後者は216が該当する。ただし、215は1.2cmと通常の盆よりかなり厚手であり、216は通常別素材を組み合わせた管の側部が削り出されているため、どちらも特異である。盆の表面には使用に伴うとみられる引っ掻き傷が顕著に認められる。いずれも目の詰まったサワラの柃目材を用いている。

脚部か(獸脚付)：217は1辺4cmの四角柱の基部に抉りを入れ、下端に獅子の爪のような刻みを施していることから、獸脚付の膳脚等の台の脚部と考える。ただ、上端は故意に切断されている。

その他：中空のウツギ属の先端を鋭角に削り、樋の先端様に加工した、樋の可能性のある製品には218が該当する。また、板に台形状の抉りを入れた219は取手等の用途が推測される。

火処具 (第92図)

当初は何らかの製品や加工材であったが、先端を粗雑に尖らせた棒状に加工され、一端もしくは両端が著しく炭化しているため最終的に火付木(火を移すために用いる道具)として使用されたと判断したものを一括した。遺跡全体では145点出土しているが、11点(220～230)を掲載した。このうち、表面に3方向以上から削りを入れて先端が尖る棒状に作り出しているものに220～223、一端を薄く削ぎ落としたものに226・229、板状を呈するものに224、丸棒状を呈するものに225がある。227は箸の先端が炭化したか、箸を付木に転用したものとみる。また、稀に火付木と同様の形に加工されているが、炭化していないものがある。一方、228は小形の板の両端が櫛歯状に加工され、黒色化している。火付木の可能性とともに土器などの器面調整工具の可能性を有する。

装身具 (第92図、P.L17)

全面が黒漆で塗られた横櫛に231が該当する。櫛歯の長さは2.9cmで、地元には産しないイスノキ製で

7 註2に同じ。

あり、紀伊半島以西から持ち込まれたものと考ええる。

履物 (第92・93図, P.17)

履物はすべて下駄で、232～238が該当する。232は田下駄、233～237は連歯下駄である。このうち237は何らかの用途のために歯に沿って垂直に切断し、転用したものと考ええる。また、236は全面に黒漆が塗られ、側面が湾曲している。一方、238は、歯歯下駄のうち差し歯のホヅが台の表に現れた「露卯の下駄」の歯である。下駄の樹種はケヤキ、カツラ、サワラ、トネリコ属と多様である。

遊戯具 (第93図, P.17)

239は全体を黒漆で塗った円錐形の製品で、中央に軸を通すと考えられる孔が貫通していることから、独楽と推測した。また、組み合わせ式の立体的な人形である240は先述の通り、傀儡人形と考える。さらに、筒状の板材の一端に穿孔がある241も、組み合わせ式の人形の足である可能性を推測する。

④ 用途不明品 (第93・94図, P.17)

第93図の242～255、第94図の256～268は用途不明品である。素材は棒状、板状に分類される。用途の可能性が想像できるものに関しては、木製品一覧表(DVD収録)の備考欄に可能性を付記した。

木製品の処理

木製品は2009年、2010年に出土し、水洗作業を経て、2011～2013年に、すべての木製品に対してエチレンジアミン四酢酸三ナトリウムによる脱色(脱鉄)を行った。発掘段階で木簡(84)を確認しており、他の木製品の中にも墨書・墨痕資料が含まれている可能性があった。そこで、表面の汚れを除去し、より良好な状態で資料を観察するために有効な方法として脱色処理を実施した。脱色処理の後は、防腐剤などは使用せず、水道水中で保管している。

(7) 板碑 (第95～98図, P.18)

総重量約50.2kgの板碑片が出土した。出土した板碑のほとんどは破片で、接合率も悪く、全体形をとどめる個体は2点(1・3)、全体形をおよそ推測できるものは3点(2・4・5)である。出土した板碑は、いわゆる武蔵型板碑の範疇に入るものと考ええる。

出土位置

板碑の出土は、A：西尾根東斜面部(B2区西、B2区、B3区)、B：北尾根南斜面上部(B1区) C：中央低地部東部(B12区北、B13区)、D：北尾根南斜面部(C5区、C6区、C7区)、の4つの範囲にほぼ限られる。Aでは大形破片から小形破片まで出土しており、特に大形破片はこの範囲に集中する。全体形を推測できる5点はすべてA範囲からの出土である。Cでは大形破片1点が出土しているが、他はすべて小形破片である。B・Dではすべて中・小形破片である。以上から、A範囲あるいはその西側に、板碑が集中して造立される区域があったことを推測する。掲載資料の出土は、1～6・10・12がA範囲、7・8・11がC範囲、9・13がD範囲からの出土である。

石材

板碑の石材は結晶片岩で、色調は緑色系と灰色系に分けられる。緑色系が圧倒的に多く、なかでも、曹長石の結晶が多く生じた点紋緑泥片岩が大部分を占める。重量による割合は、点紋緑泥片岩51.8%、その他の緑色系32.5%、灰色系15.7%である。

形態

大きさについては、全長がほぼわかるものは2点のみで、各々全長89.3cm、全長47.6cmである。体部の両側縁が残り、幅がわかるものは上記を含めて13点あり、最大30.3cm、最小11.8cmである。基部破片の10は体部片方の側縁が残り、現状幅24.4cmだが、復元すると28cmほどとなる。資料数が少ないため、細かなグループ分けは難しいが、幅30cm前後の大型、幅20cm前後の中型、幅15cm程度以下の小型の3群が

あるようである。6は厚さと梵字の大きさから大型と判断する。

横断面形を確認できるものは、浅い舟底形に近い形状のものがわずかにあるが、ほぼ、前広・後狭の逆台形を呈する。頭部形態が左右両端まで残るものは5点。いずれも二等辺三角形の山形を呈する。山形の頂角は120度～135度程度である。頭部の装飾については、実際に二条線や額、羽刻みを作成しているものはない。ただし、1はケガキ線が残っており、作出予定であった可能性もある。

種子

種子が確認できるものは6点ある(1～6)。1は梵字キリーク・サ・サクの3字を刻み(阿弥陀三尊形式)、2～5はキリーク1字を刻出している。6は破片で、キリークの刻出を確認できる。1・4・5の梵字は、それぞれ蓮座を伴う。1は梵字・蓮座内に漆・金箔、2は梵字内に漆・金箔、5は梵字内に漆・金箔の付着が認められる。2はキリークの右下および左下に、字刻は認められないが、漆・金箔が付着している。9は中軸上に墨・漆・金箔が付着している。彫刻によらない種子もある可能性を推測する。種子の字体については、主尊のキリークにはa類およびb類(三宅2016)を確認できる。それぞれ2点(1・6)、4点(2～5)がある。1・6のキリークa類は字が大きく、断面V字状に深く刻む。2～5のb類は小さく、刻みも浅い。板碑自体の大きさとの相関をみると、大型はキリークa類を用いており、中型はキリークb類を用いている。小型で種子を確認できるものはない。なお、10は横位刻線直上の中軸上に、文字らしき刻線があるが、内容不明である。

枠線、ケガキ線

7・8は側辺のやや内側に、漆・金箔が縦線状に残り、3は体部下半に横位の漆線2条、10は体部下端に横位の刻線1条が認められる。いずれも枠線と考える。種子を含めた細部形態を作出するためのケガキ線が1・6に認められる。

成形・調整技法

成形・調整技法については、幅1.5cmほどの側縁側からの押し削り痕が1・2・3・12の4点に認められ、3は基部の正面に押し削り痕を残す。側面の敲きはいずれも正面側から施されている。側面の磨き調整は1の頭部と体部に認められるが、他の板碑には明瞭には確認できない。

板碑の時期

今回の調査で出土した板碑の形態的特徴としては、横断面形は前広・後狭の逆台形で、顕著な舟底形はみられないこと、頭部頂角は120～135度程度で140度台はみられないこと、があげられる。また、過去に地家地区で発見された紀年銘板碑は、延文五年(1360)、永和二年(1376)、寛元(1243～1246)または寛正(1460～1466)の3点がある(佐久市1993)。後述するように、今回の調査で出土した1は暦應二年(1339)と推測する。

武蔵型板碑の頭部頂角の変化について、三宅宗謙氏は、造立初期の13世紀前半は140度台、13世紀後半は概ね120度台で推移し、14世紀から15世紀になると総じて110度、100度台の板碑が急増する、と指摘する。また、横断面形について、13世紀前半は前狭・後広の台形で、その後、前広・後狭の傾向を強めてゆき、14世紀中頃には前広・後狭の逆台形として定着するが、15世紀頃になると逆台形という前提が崩れ、浅い舟底形となる、と述べている(三宅2016)。

三宅氏の変遷観との対比と紀年銘から、出土した板碑の時期については、14世紀前半～15世紀後半を想定しておく。

第95・96図1の板碑

全体がほぼ完存する1について、やや詳しく記載する。1は全長89.3cm、最大幅29.2cm、最大厚2.7cm、重さ14540gを測る。石材は点紋緑泥片岩である。頭部は山形で頂角128度を測る。側面は、敲き調整の

後に施された磨きが頭部上端と体部側面に部分的に観察できる。正面は磨き調整を施している。背面には幅1.2cmほどの横方向の押し削り痕がみられる。断面形は正面が広く背面が狭い逆台形を呈する。

体部上部には蓮座を伴う阿弥陀三尊種子が彫刻され、下部には紀年銘が刻まれている。種子のキリークa類、サ、サクの彫り面の断面形はV字状を呈する。種子の彫り面には漆が付着しており、ごくわずかであるが金箔が残存する。また、紀年銘の右側に漆による短い横線が4本ある。何らかの文字あるいは図像が描かれていた可能性があるが、現状では横線としか認識できない。

頭部山形の直下には7本の横位のケガキ線が残る。山形の作出、二条線や額の彫刻のためのものと考えられるが、実際には二条線や額は刻出されていない。下から4本目の横位ケガキ線直下に、ケガキ線に沿う墨線を引いてある。ケガキ線は種子部分にも残る。梵字・蓮座各部の端や中心、屈折点を通る横位線が10本以上確認できる。種子の配置・割付に関わるものと考えられる。また、梵字外形線（輪郭線）がキリークの一部に残っている。さらに、左右側面からやや内側に縦位線が各々1本あり、これに直交する横位線が基部下端から20cmほど上に引いてある。枠線彫刻あるいは枠内部面の刻込みのためのケガキ線と推測するが、縦位線は梵字サ・サクの蓮座端を通っており、両梵字の割付線でもある可能性が高い。なお、体部下端の横位ケガキ線から下部は風化が進んでいないので、この部分を地中に埋設して立てていたと考える。

紀年銘については、字の刻線が細く浅いうえ、かなり磨滅しているので、判読は難しいが、中央に「□□二年三月」、その右に「己」、左に「卯」、年号□□の第2字は「厂」あるいは「广」を含むと考える。そうすると、13～16世紀では暦應二年(1339)が該当する。暦應は北朝の年号である。

(8) 宝篋印塔 (第99図, P.18)

宝篋印塔は相輪7点、塔身3点が出土した。相輪はすべて破損資料で、全体形をとどめるものはない。形態は個体ごとに異なる。石材は10点とも安山岩で、色調は黒色ないし灰色を呈する。出土は、相輪3点が南尾根北斜面、相輪3点と塔身3点が北尾根南斜面である。

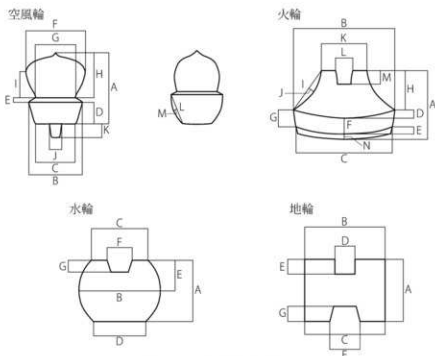
1～6は相輪である。1は宝珠・上受花・九輪上部が残存する。2は宝珠・上受花部分である。3は相輪下部・下受花・伏鉢部分でホゾをもたない。1・4・5に比べて傘蓋一段が高い。4は相輪下部・下受花・伏鉢・ホゾが残存する。5は相輪下部・下受花・伏鉢・ホゾが残存する。受花は花卉が幅広く、2に類似する。6は下受花・伏鉢・ホゾ部分であるが、伏鉢はドーム状ではなく鐔状を呈する。

7～9は塔身である。7は側面が正方形で、内部を左右から一段深く割り込むが、上下は開放する形状である。四面に梵字を刻出している。第9図の下から時計回りに、「ア」、「タバン」、「カン」、「マウ」と推測する。8は側面がやや横長で、上下左右とも二段に割り込む。四面に梵字を墨書しているが、判読できたのは「アク」のみである。9は側面がやや縦長で、上下左右とも二段に割り込む。梵字は確認できない。

(9) 五輪塔 (第99～102図, P.19・20)

五輪塔は824点が出土した。部位ごとの点数では、空風輪180点、火輪253点、水輪205点、地輪185点、火輪水輪一体型1点を数える。紀年銘を有するものはない。梵字を刻出した地輪が3点出土した。このほか、部位不明の小破片として取上げたものが土嚢袋30袋ほどある。全体的に遺存状況不良で、破片の状態で出土したものが相当数あり、全体形状がほぼ完存するものでも、空風輪の頂部突起やホゾ、火輪・地輪の角部を欠く例が大部分を占める。

五輪塔は、墓域が形成されている北尾根・西尾根・南尾根の斜面部から裾部で出土した。ほぼすべて表土からの出土であり、テラス上で出土したものはほとんど二次的に移動している。そのなかで、テラス7の梵字を刻んだ地輪2点、テラス6の地輪2点は、本来の造塔位置をとどめていた。ただし、後者は下部が薄く残存するだけで、かつ劣化が著しく、形状を保ったまま取り上げることができなかった。



第71図 五輪塔計測凡例

五輪塔の石材は、灰色～灰黄色系の凝灰岩、黒色～灰色系の安山岩である。安山岩は多孔質のものが相当数ある。

総数 824 点のうち、完形や完形に近いものや代表的・特徴的な形態を示すものを中心に、空風輪 25 点、火輪 13 点、火輪水輪一体型 1 点、水輪 10 点、地輪 10 点を選択して図化掲載した。大きさや形態から分類は可能であるが、今回は資料提示にとどめた。なお、各個体の属性は、添付 DVD に収録した五輪塔一覧表に記載した。

空風輪 (第 99 図 1～100 図 25)

一覧表における計測値・数値は以下のことを示す (第 71 図)。なお、空風輪の正面については不明と言わざるを得ない。便宜的に最大幅をもつ面を正面として計測・実測等を行った。

A : 空風輪の高さ

H : 空輪の高さ

B : 風輪の上端径

I : 空輪の下端から最大径位置までの高さ

C : 風輪の下端径

J : 空輪のホゾの最大幅

D : 風輪の高さ

K : 空輪のホゾの長さ

E : 風輪と空輪の境界部の高さ

L : 風輪の側面断面形を弧とした場合の弦の長さ

F : 空輪の最大径

M : 風輪の側面断面形を弧とした場合の弦から弧頂点までの長さ

G : 空輪の下端径

$$F/B : F \div B \quad H/D : H \div D \quad I/H : I \div H \quad M/L : M \div L$$

F/B は数値が大きくなるほど、風輪径に比べて空輪径が大きくなることを示す。 H/D は数値が大きくなるほど、風輪高に比べて空輪高が大きくなることを示す。 I/H は数値が小さいほど空輪最大径位置が下位に下がり、数値が大きいくほど空輪最大径位置が上位に上がることを示す。 M/L は数値が小さいほど側面形状が直線的で、数値が大きいくほど側面の膨み具合が大きいくことを示す。

風輪径と空輪径の比率 (F/B) では、風輪径と空輪径がほぼ同じか、空輪径がやや大きいものが多い。空輪径が極端に大きいものはない。風輪高と空輪高の比率 (H/D) では、風輪高と空輪高にさほど差が

ないものと、明確に空輪高が高いものはほぼ半々である。空輪最大径位置（I/H）では、最大径位置が下位にあるもの、中位にあるもの、上位にあるものの数量的な差はあまりない。ただし、北尾根南斜面・西尾根東斜面部出土のものは、南尾根北斜面部に比べて、最大径位置が下位にあるものが多い傾向にある。空輪の側面形状（M/L）では、空輪側面ラインが直線的なものが圧倒的に多い。

火輪（第100図26～101図39）

一覧表における計測値・数値は以下のことを示す（第71図）。なお、火輪の正面については不明と言わざるを得ない。便宜的に最大幅をもつ面を正面として計測・実測等を行った。

A：火輪の高さ	H：軒口上辺端部から屋根頂部までの高さ
B：軒口上辺の幅（端部）	I：屋根の隅棟を弧とした場合の弦の長さ
C：軒口下辺の幅（端部）	J：屋根の隅棟を弧とした場合の弦から頂点までの長さ
D：軒口上辺中央から端部までの高さ	K：屋根頂部の幅
E：軒口下辺中央から端部までの高さ	L：屋根頂部のホゾ穴の幅
F：軒口中央の下辺から上辺までの高さ	M：屋根頂部のホゾ穴の深さ
G：軒口端部の下辺から上辺までの高さ	N：底面中央から軒口下辺中央までの高さ
D/B ： $D \div B$	E/C ： $E \div C$
B/C ： $B \div C$	J/I ： $J \div I$

D/B は軒口上辺ラインの反り上り具合を表し、数値が小さいほど軒口上辺ラインが水平に近く、数値が大きいくほど軒口上辺ラインの反り上りが強いことを示す。 E/C は軒口下辺ラインの反り上り具合を表し、数値が小さいほど軒口下辺ラインが水平に近く、数値が大きいくほど軒口下辺ラインの反り上りが強いことを示す。 B/C は軒口面の開き具合（外傾度）を表し、数値が小さいほど軒口が垂直に近く、数値が大きいくほど軒口の開き（外傾）が強いことを示す。 J/I は屋根隅棟のたるみ具合を表し、数値が小さいほど屋根隅棟のたるみが弱く直線的で、数値が大きいくほど屋根隅棟のたるみが強いことを示す。

軒口上辺ラインの反り上り具合（ D/B ）では、水平なものは少なく、反りが弱いものと強いものがほぼ半々である。軒口下辺ラインの反り上り具合（ E/C ）では、反りが強いものは少ない。また、南尾根北斜面部のものは、弱く反るものが圧倒的に多いが、北尾根南斜面・西尾根東斜面部出土のものは、水平なものと同く反るものがほぼ半々である。軒口の開き具合（ B/C ）では、軒口が垂直でないしほぼ垂直なものが多い。屋根隅棟のたるみ具合（ J/I ）では、たるみがない直線的なものはごく少なく、たるみが弱いものと強いものがほぼ半々である。

なお、30は火輪と水輪が1石で造られた火輪水輪一体型である。また、32は幅66cm、高さ37.6cmを測り、今回の調査で出土した最大の火輪である。幅に比べて軒口は薄く、上辺ライン・下辺ラインはほぼ平行してわずかに反り、軒口面はほぼ垂直である。

水輪（第101図40～49）

一覧表における計測値・数値は以下のことを示す（第71図）。なお、水輪の上下・正面は不明と言わざるを得ない。水輪は、上下面とも窪み例が多く、かつ仕上げが粗雑で、上面と下面の形状や仕上げ方に差がない。便宜的に径が大きい面を下面とし、最大幅をもつ面を正面として計測・実測等を行った。

A：高さ	E：上端から最大径位置までの長さ	B/C ： $B \div C$
B：最大径	F：上面の凹部の幅	B/A ： $B \div A$
C：上面径	G：上面の凹部の深さ	
D：下面径		

B/C は側面の突出度を表し、数値が小さいほど円筒状に近く、数値が大きいくほど側面の突出が大きいくことを示す。 B/A は偏平率を表し、数値が小さいほど幅に比べて高さがあり、数値が大きいくほど幅に比

べて高さが低く扁平な形状であることを示す。また、水輪は、側面カーブが弧状を呈する～最大径位置が角張る～最大径位置が稜を成し算盤玉状を呈する、という変化もある。

側面の突出度（ B/C ）では、突出度が強いものは少ない。扁平率（ B/A ）では、扁平率が低い、つまり高さや幅がほぼ同じものはほとんどない。側面形状は、側面カーブが弧状を呈するものがほとんどを占め、角張るものや算盤玉形のはごく少ない。

なお、46は地輪57と58の間に残っていたもので、大きさや石材からみて、57か58のどちらかに組み合うことは確実である。残存は最大径部分だけで、完周もしないが、第101図では、57と同じ高さで仮定して推定復元ラインを描き入れてある。残存部分に梵字の刻出は認められない。

地輪（第101図50～102図59）

一覧表における計測値・数値は以下のことを示す（第71図）。なお、地輪は上面および側面を研磨して平滑に仕上げている。下面は研磨せず、成形・整形痕（鑿痕、敲打痕）が残って仕上げが粗雑なままであり、窪む場合も多い。こうした状況から、研磨なく粗雑な面を下面、その反対の研磨された平滑面を上面として計測・実測等を行った。

A：高さ	D：上面の凹部の幅	G：下面の凹部の深さ
B：上面幅	E：上面の凹部の深さ	B/A ： $B \div A$
C：下面幅	F：下面の凹部の幅	

B/A は扁平率を表し、数値が小さいほど幅に比べて高さがあり、数値が大きいほど幅に比べて高さが低く扁平な形状であることを示す。扁平率では、高さや幅がほぼ等しいものはごくわずかである。

なお、57・58はテラス7の石敷上に本来の造塔位置を保ったまま残っていたものである。57・58は両者とも、3面に梵字を刻んでいる。北面は北方涅槃門「アク」、東面は東方発心門「ア」、南面は南方修行門「アー」である。西面に梵字の刻出はなく、墨痕も認められない。59はテラス7の下方斜面で出土したもので、やはり3面に同じ梵字を刻み、残る1面に梵字の刻出はない。58は他2者に比べてわずかに大きく、今回の調査で出土した最大の地輪である。

五輪塔の時期

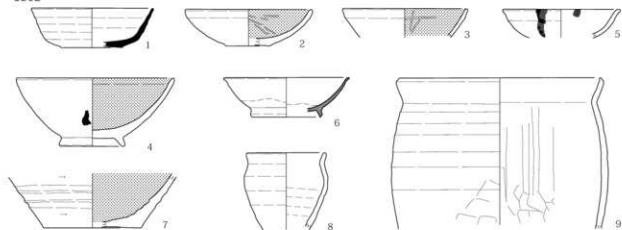
本遺跡の五輪塔群は、数の多さや形態の多様さから、長期にわたって造塔が続けられたことを想定し得るが、紀年銘をもつものがないため、時期の特定は難しい。出土した五輪塔各部位の形態を、長野県東信地方の資料を対象とした宮下真澄氏の編年（宮下1965）や、群馬県の資料を対象とした磯部淳一氏の編年（磯部1992）に対比して、本遺跡における五輪塔の造立が14世紀から16世紀にかけて行われたことを推測する。火輪28・31・33は小形で、軒口上辺の反り上りが極端に強く、両端が屋根頂部に近い高さまで反り上がっている。31は軒口が厚い。28は屋根頂部がごく低く、軒口上辺両端が屋根頂部を超える。上田市上室賀の前松寺は、天文年間（1531～1555）の開創で、その背後の山麓には開創の頃のものと伝えられる五輪塔がある（宮下1965）。この五輪塔の火輪の形態は28や31に類似する。28・31・33のような形態は、16世紀前半～半ば頃の所産であり、本遺跡における造塔の最終段階に属する五輪塔と考える。また、最大の火輪32は幅に比べて軒口が薄く、ほぼ平行する上辺ライン・下辺ラインは水平に近いわずかな反りをみせる。軒口面はほぼ垂直である。こうした形態的特徴やその大きさから、造塔の初期段階に造立された可能性を推測しておきたい。13世紀に遡る可能性もあろう。

引用・参考文献

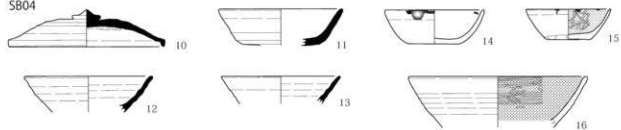
- 磯部淳一1992「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』第2号
 磯部淳一1999「高崎市小八木町妙典寺の石造物」『高崎市史研究』第10号

- 伊藤隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 井上光貞監修 1979『図説歴史散歩辞典』山川出版社
- 今里英三 1979『日本仏教民俗基礎資料集成第3巻 元興寺極楽坊』Ⅲ 中央公論美術出版
- 上田秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2
- 遠藤啓介 2003『景徳鎮青白磁梅瓶の編年の研究—宋・元代を中心に—』『貿易陶磁研究』No.23
- 岡村秀雄 2012『第2章第4節 東條遺跡の調査 6小結(中世) 木製品』『東條遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター
- 木戸雅寿 1993『石鍋の生産と流通について』『中近世土器の基礎研究』Ⅸ 日本中世土器研究会
- 考古学と中世史研究会 2014『第12回考古学と中世史シンポジウム 木の中世—資料・技術・製品—資料集』
- 河野潤知郎 2001『さまざまな祭祀・呪術』『図解 日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 小松茂美編 1994『日本の絵巻7 餓鬼草子 地獄草子 病草子 旧相時絵巻』山川出版社
- 小峰智行 2018『梵字字典』東京堂出版
- 佐久市 1993『佐久市志』歴史編(二) 中世
- 市教委 1986『大井城跡(黒岩城跡)』
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1993『東海の中世窯—生産技術の交流と展開—』
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻村泰圓 1975『日本仏教民俗基礎資料集成第6巻 元興寺極楽坊』Ⅵ 中央公論美術出版
- 辻村泰圓 1977『日本仏教民俗基礎資料集成第4巻 元興寺極楽坊』Ⅳ 中央公論美術出版
- 時枝 務 2011『特論1 木製板碑について』『珠洲市野々江本江寺遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 富沢一明 2001『第IV章第4節 木製品』『権名平遺跡』第IV分冊中世・近世編 佐久市教育委員会
- 中野晴久ほか 2012『愛知県史』別編 室業3 中世・近世 常滑系 愛知県
- 服部実喜 1984『中世都市鎌倉における出土かわらけの編年の位置づけについて』『神奈川考古』第19号
- 藤澤良祐ほか 2007『愛知県史』別編 室業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 埋文センター 1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- 埋文センター 1999『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』古代1編
- 埋文センター 2019『小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡 尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢 岩陰遺跡群』
- 埋文センター 2020『北畑遺跡群 仁東側遺跡、北裏遺跡群 西東山遺跡 東山遺跡』
- 松尾秀昭 2017『石鍋が語る中世 ホゲット石鍋製作遺跡』新泉社
- 三宅宗謙 2016『板碑の製作技法—武蔵型板碑の場合—』千々和到・浅野晴樹編『板碑の考古学』高志書院
- 宮下真澄 1965『東信地方における中世石造塔婆の様式手法の推移について』『信濃』第17巻 第10号
- 守矢昌文 1987『第VI章第1節 磯並遺跡出土のかわらけについて』『磯並遺跡』茅野市教育委員会
- 山口正紀 2014『中世都市鎌倉の木の利用と役割』『第12回考古学と中世史シンポジウム 木の中世—資源・技術・製品—』考古学と中世史研究会
- 山本智子 2014『中世美濃国における初期四耳壺生産についての一考察』『陶説』第733号
- 横田賢次郎・森田勉 1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

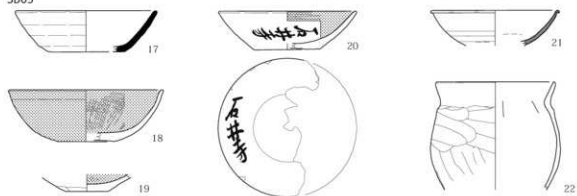
SB02



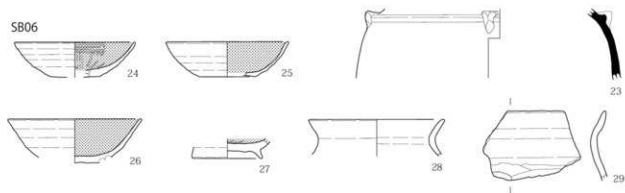
SB04



SB05



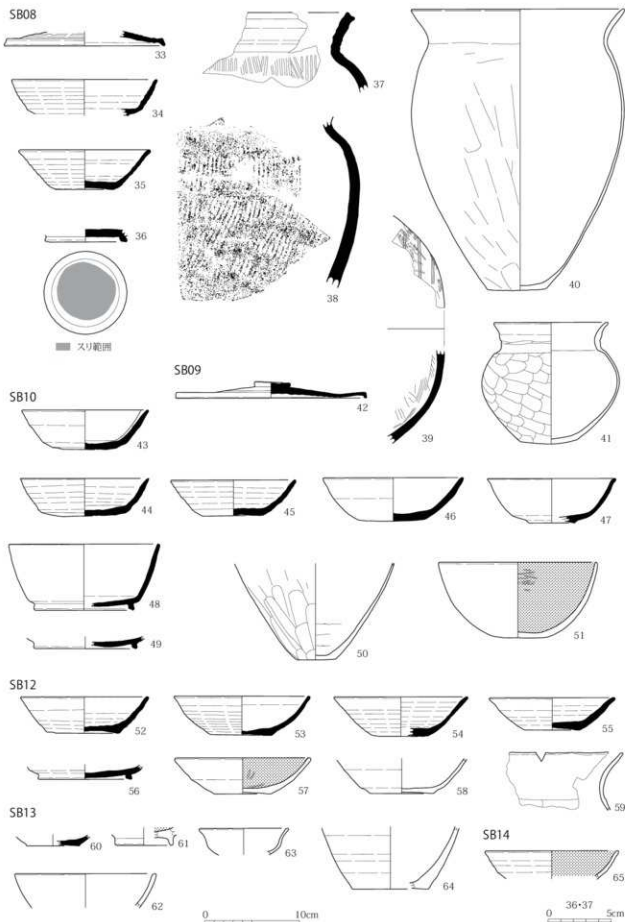
SB06



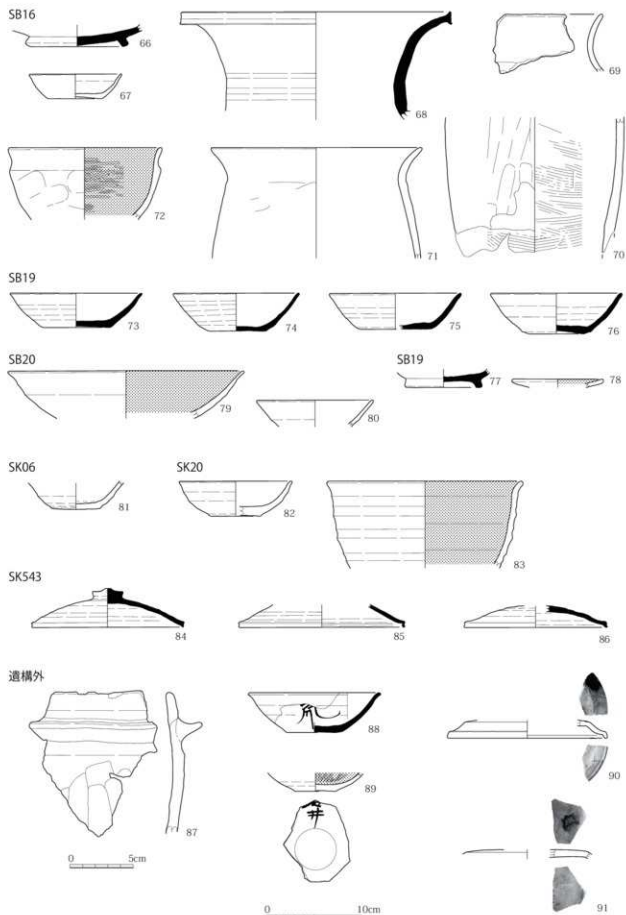
SB07



第72図 古代土器(1)

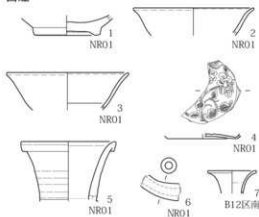


第73図 古代土器（2）

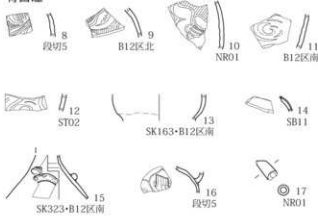


第74図 古代土器(3)、陶器

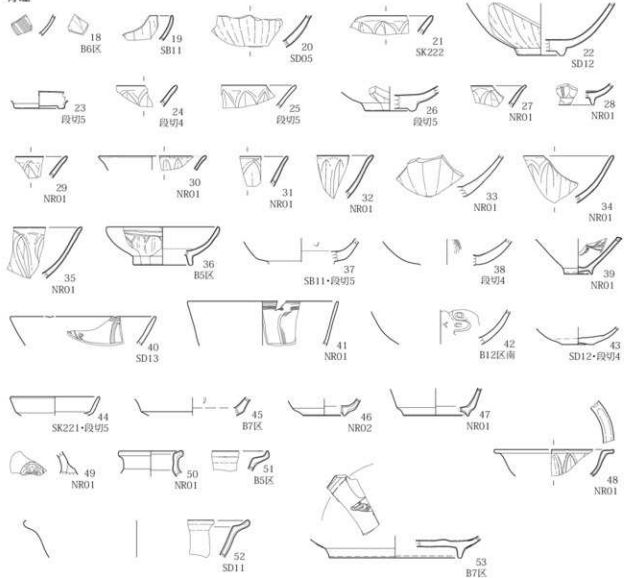
白磁



青白磁



青磁



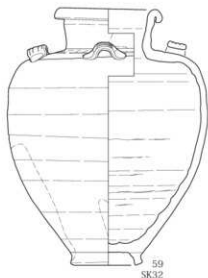
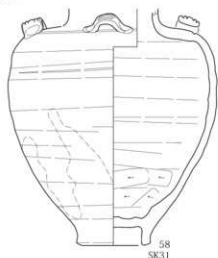
天目茶碗、褐釉壺



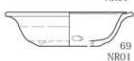
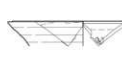
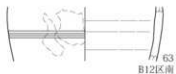
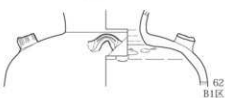
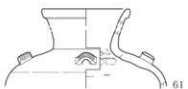
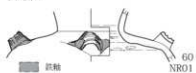
第75图 中世陶磁器・土器(1)

0 10cm

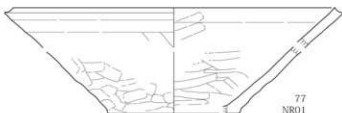
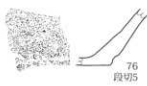
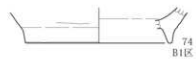
美濃須衛



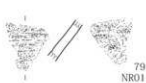
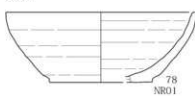
古瀬戸



常滑



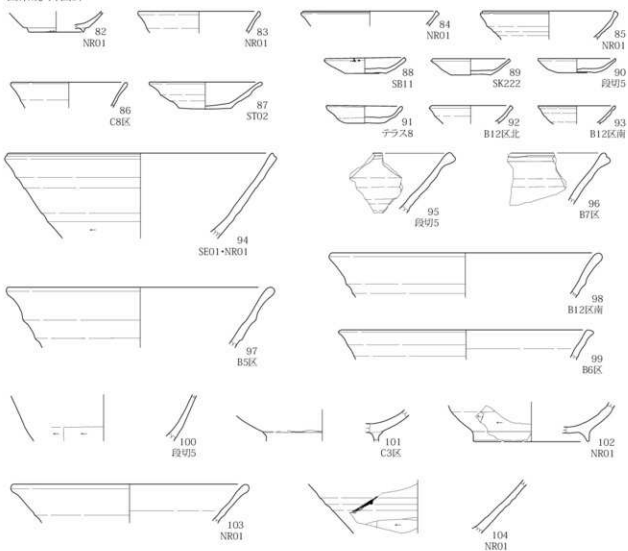
珠洲



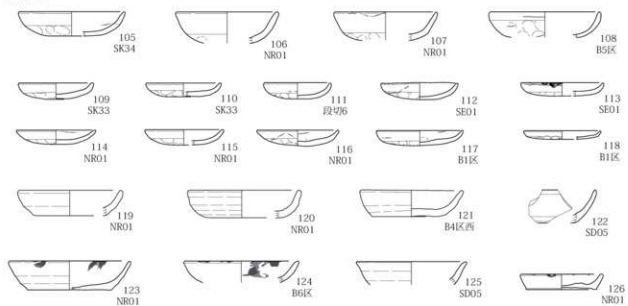
第76図 中世陶磁器・土器(2)

0 10cm

山茶碗・片口鉢



かわらけ



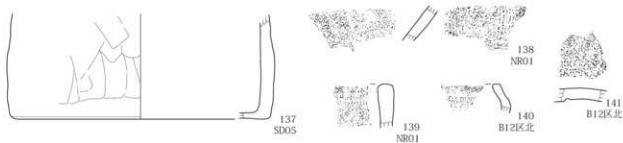
0 10cm

第77図 中世陶磁器・土器（3）

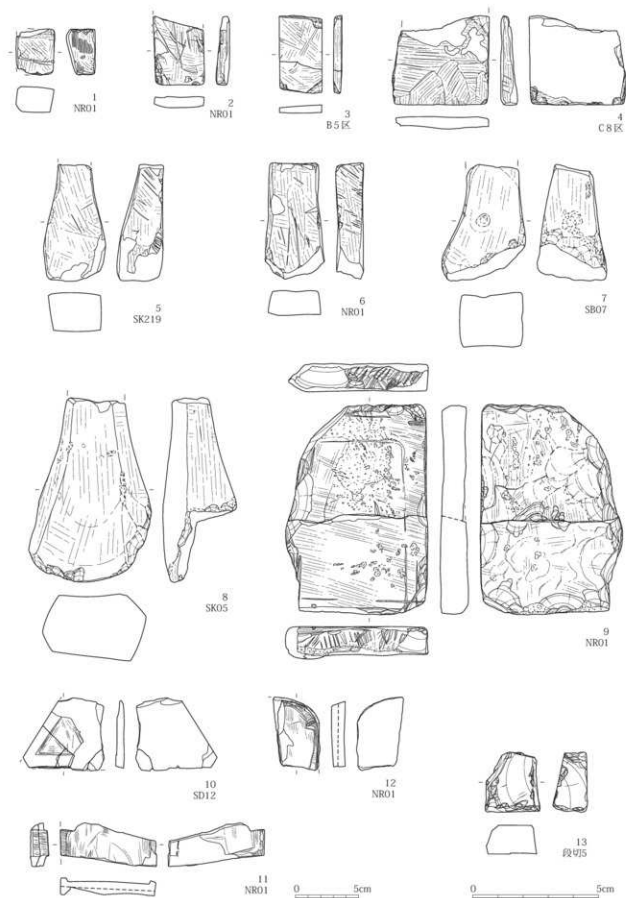
かわらけ



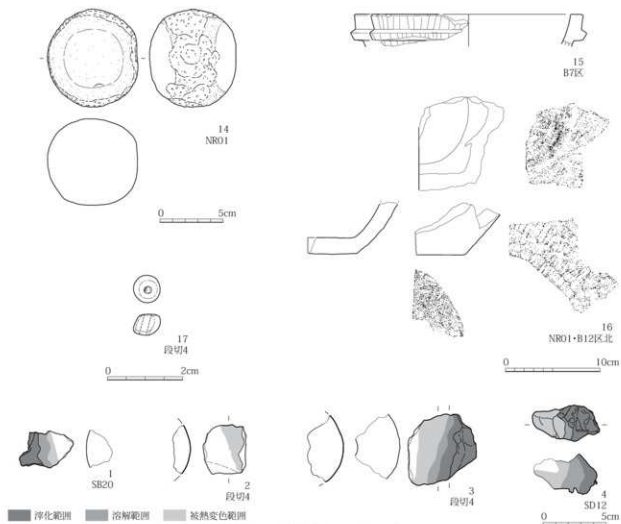
内耳土器、瓦質土器、瓦



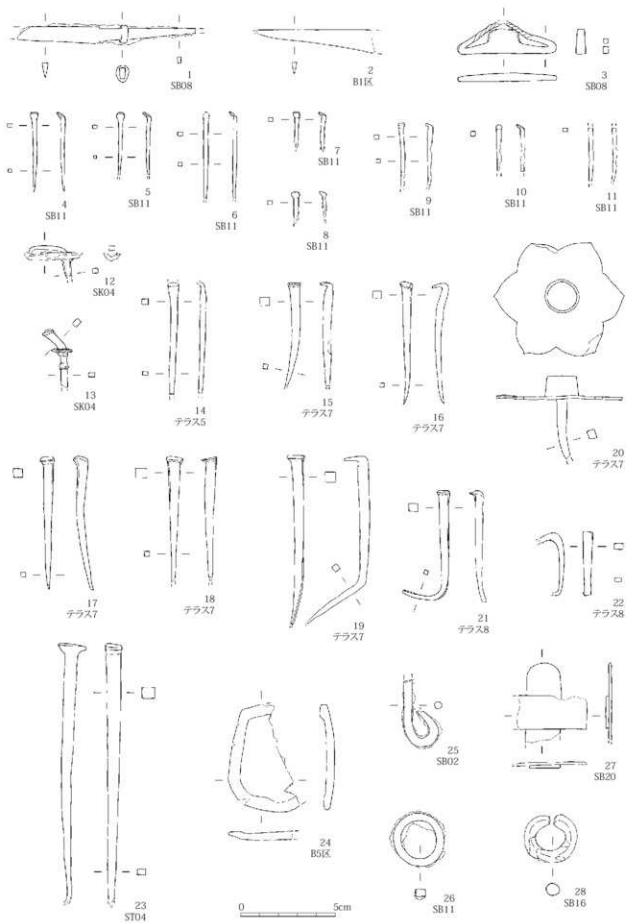
第78図 中世陶磁器・土器（4）、土製品



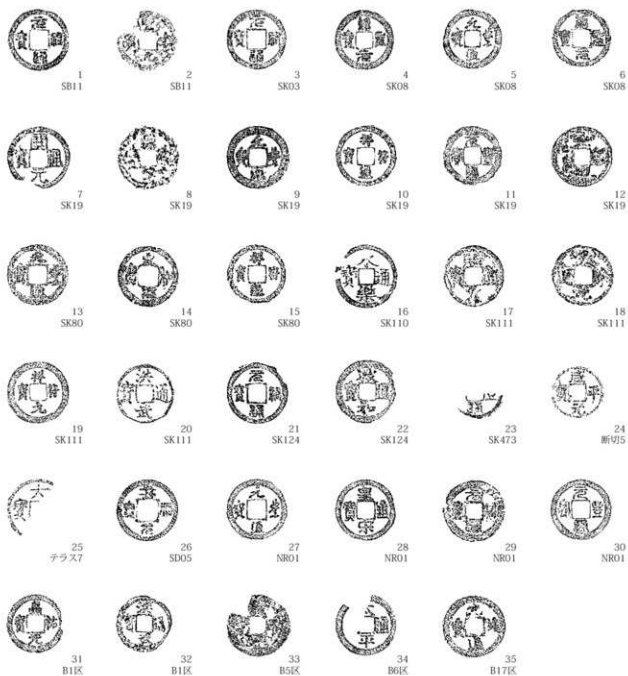
第79図 石器・石製品(1)



第80図 石器・石製品（2）、ガラス小玉、羽口

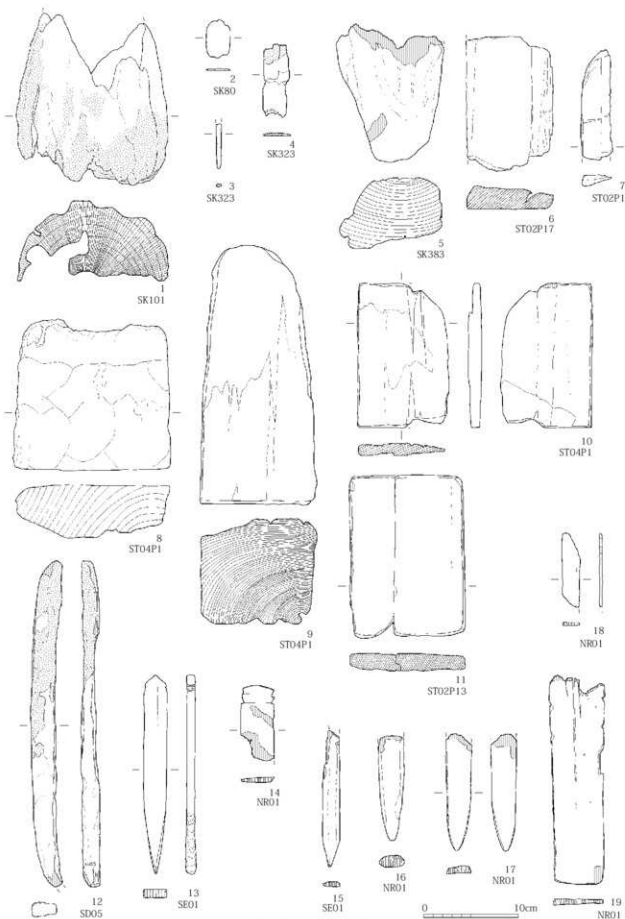


第81図 金属製品(1)

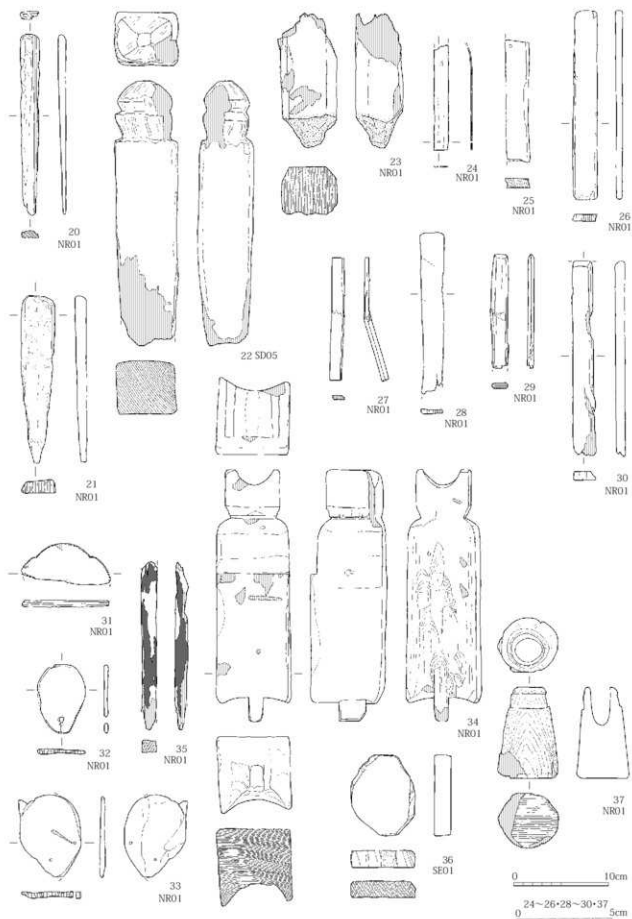


第82図 金属製品(2)

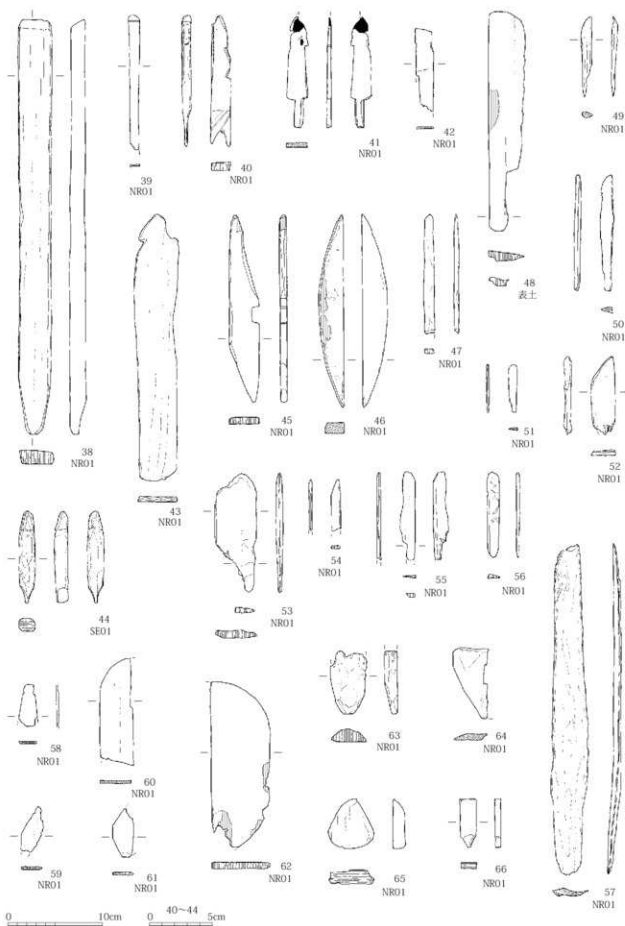
0 5cm



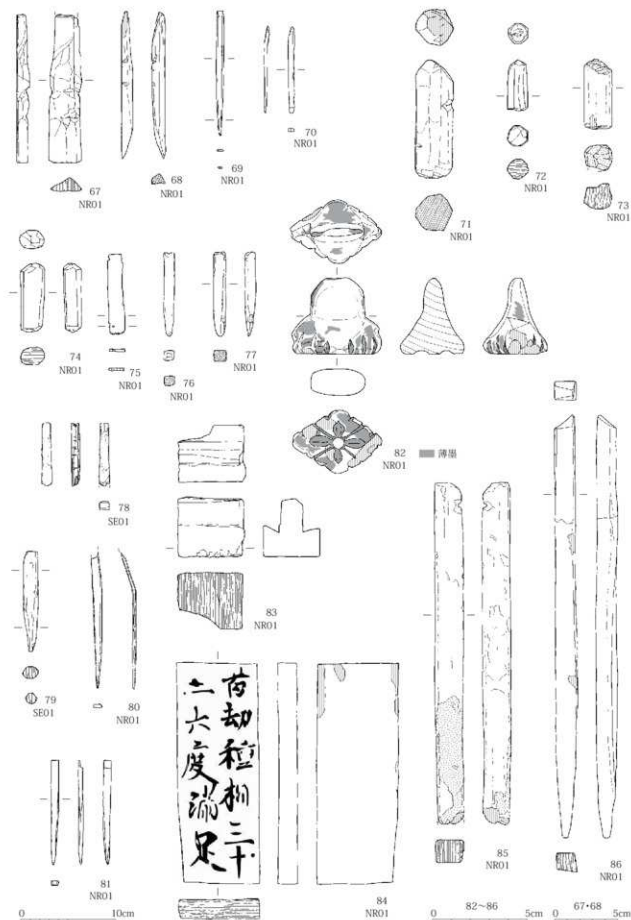
第83図 木製品 (1)



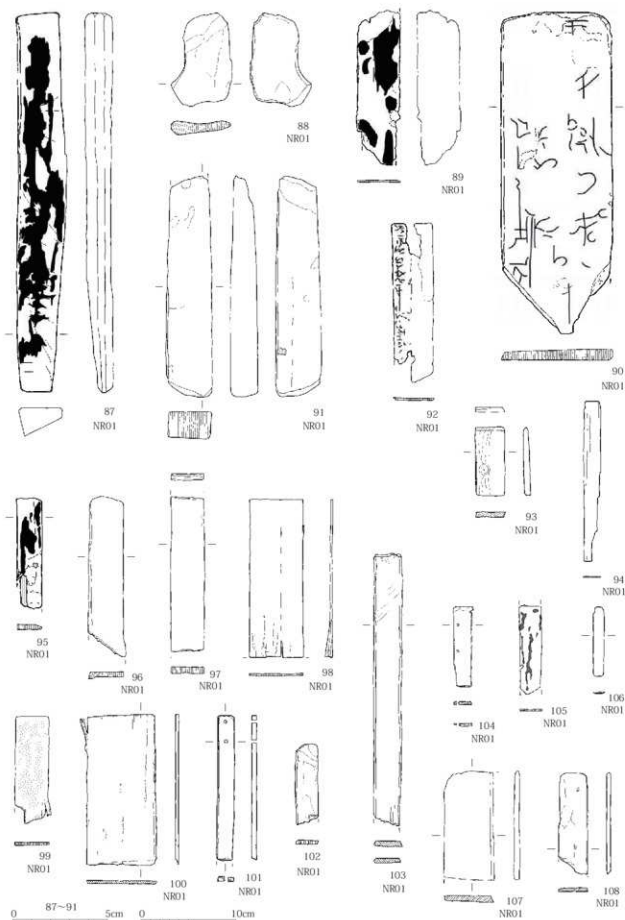
第84図 木製品(2)



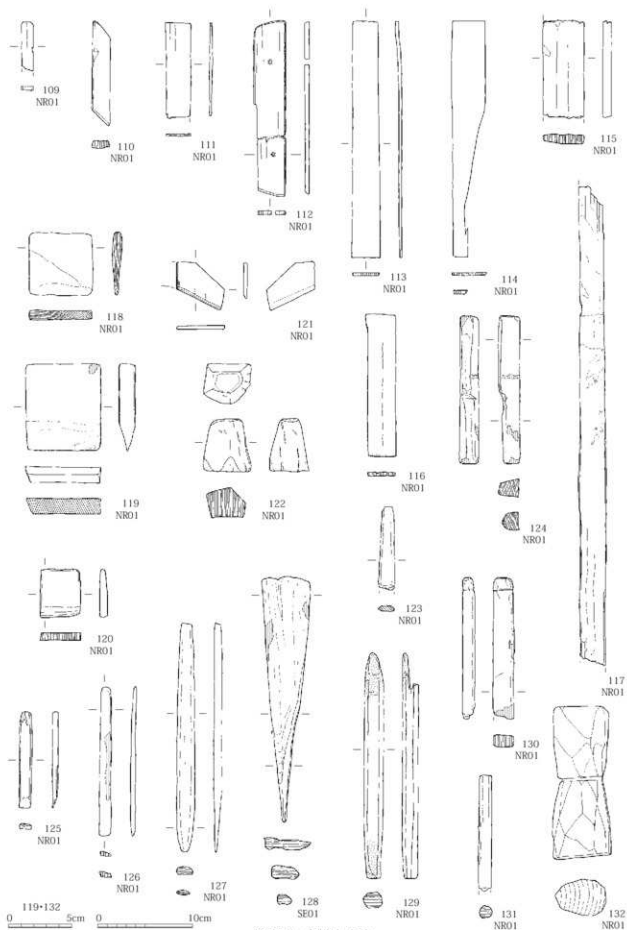
第85図 木製品(3)



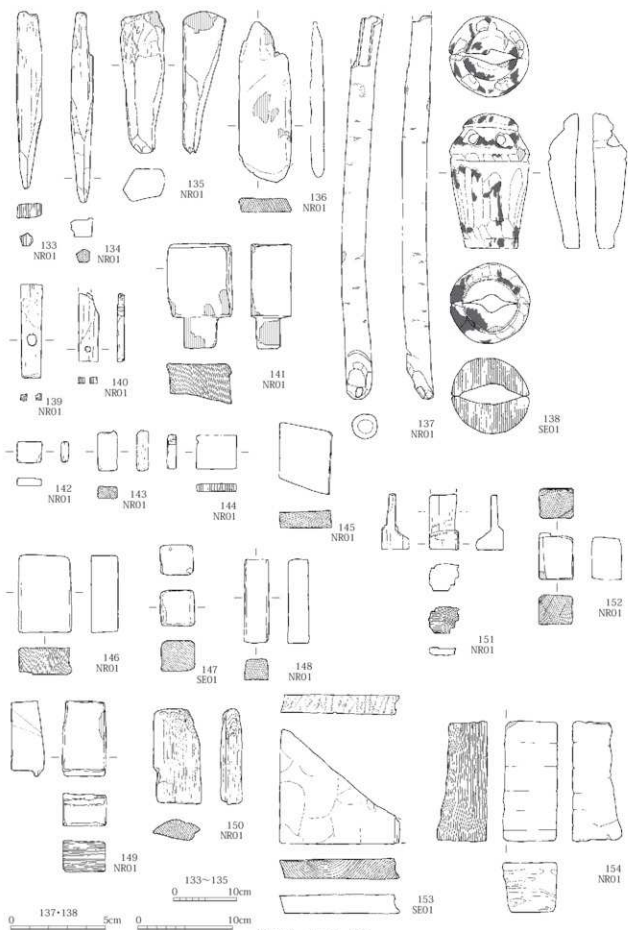
第86図 木製品(4)



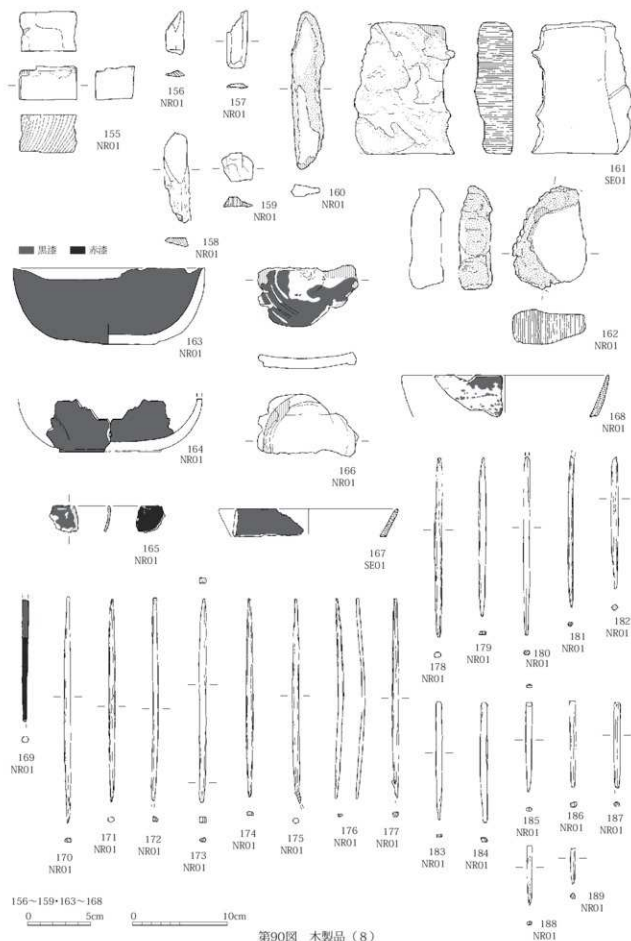
第87図 木製品 (5)



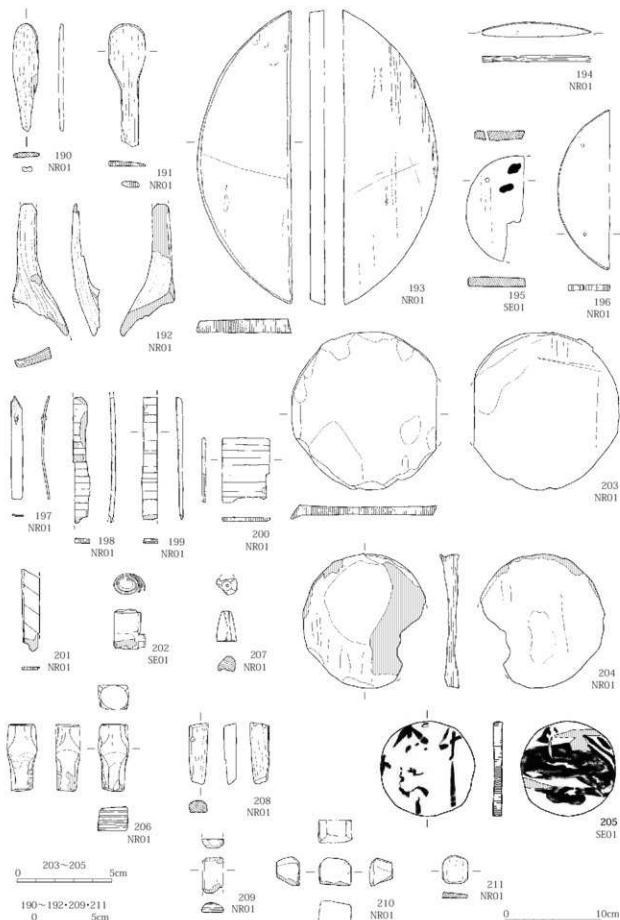
第88図 木製品(6)



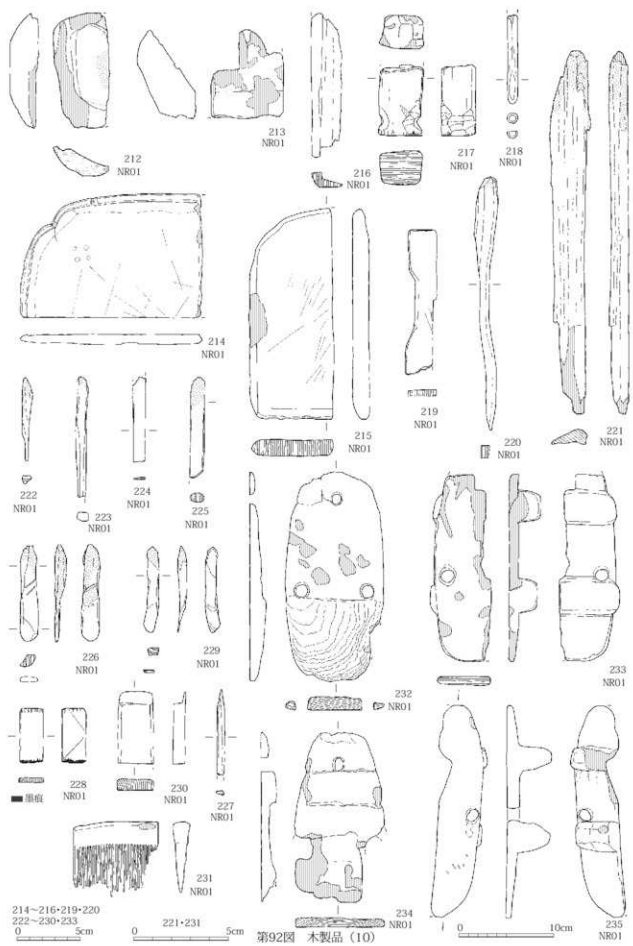
第89図 木製品 (7)



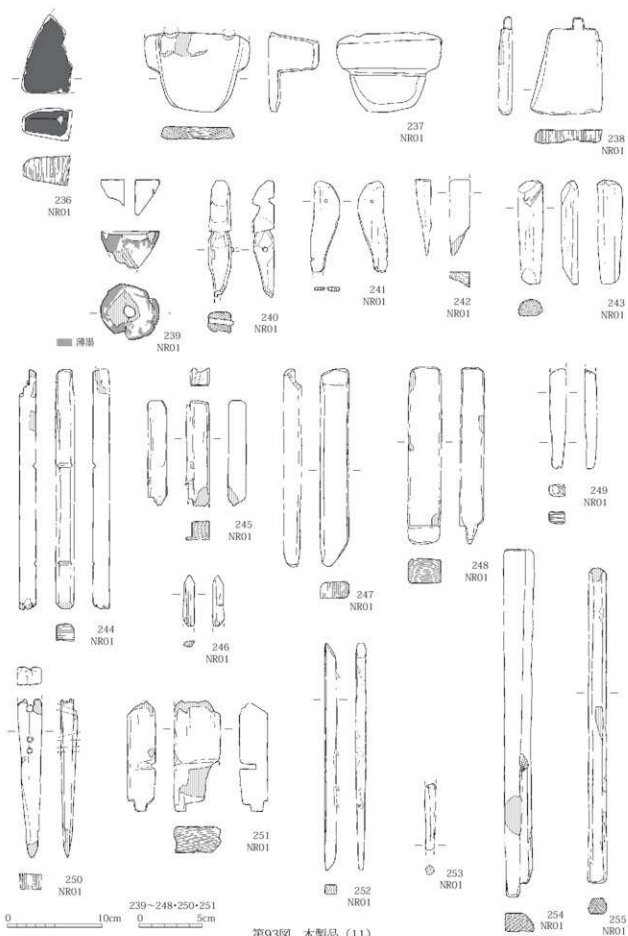
第90図 木製品(8)



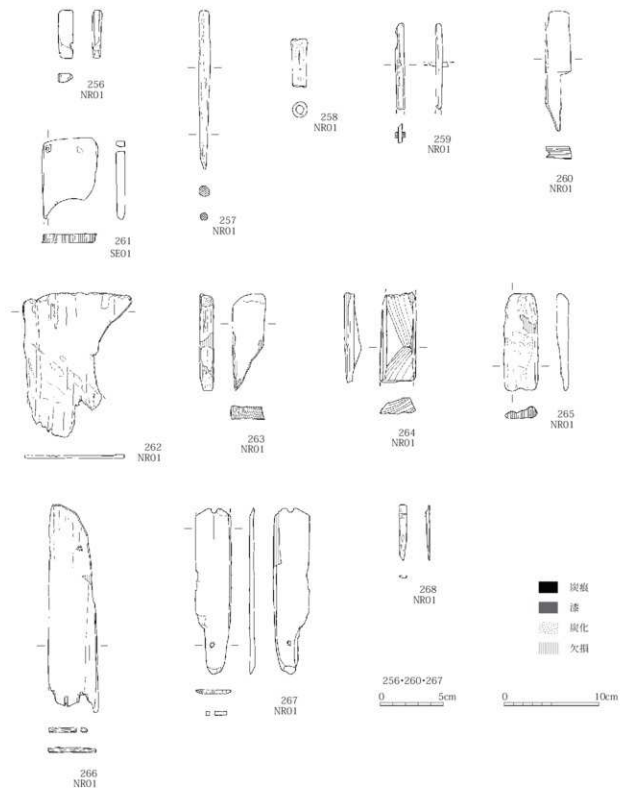
第91図 木製品 (9)



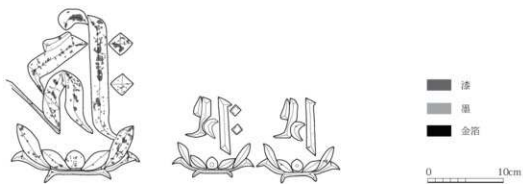
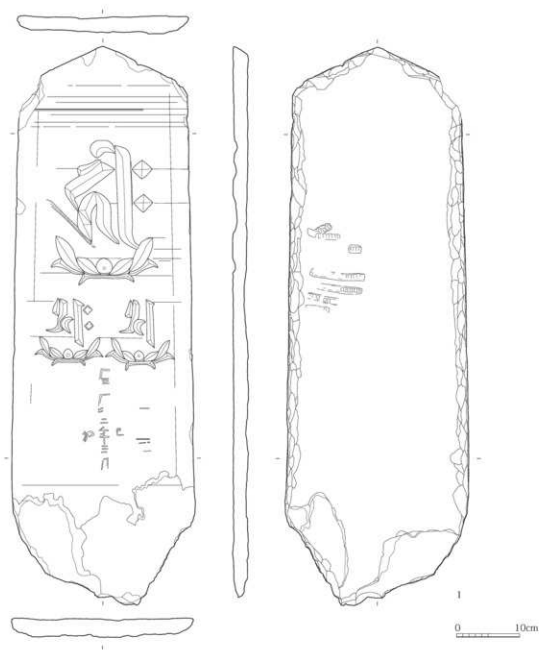
第92図 木製品 (10)



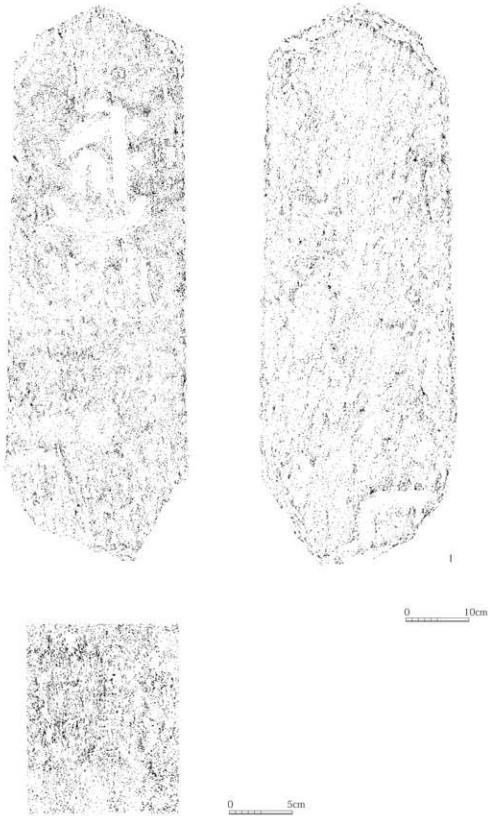
第93図 木製品 (11)



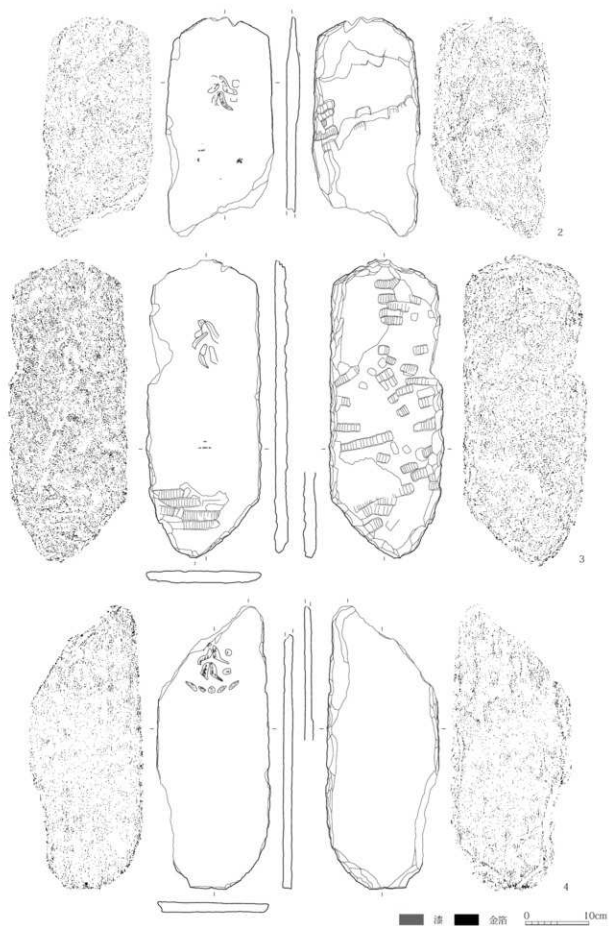
第94図 木製品 (12)



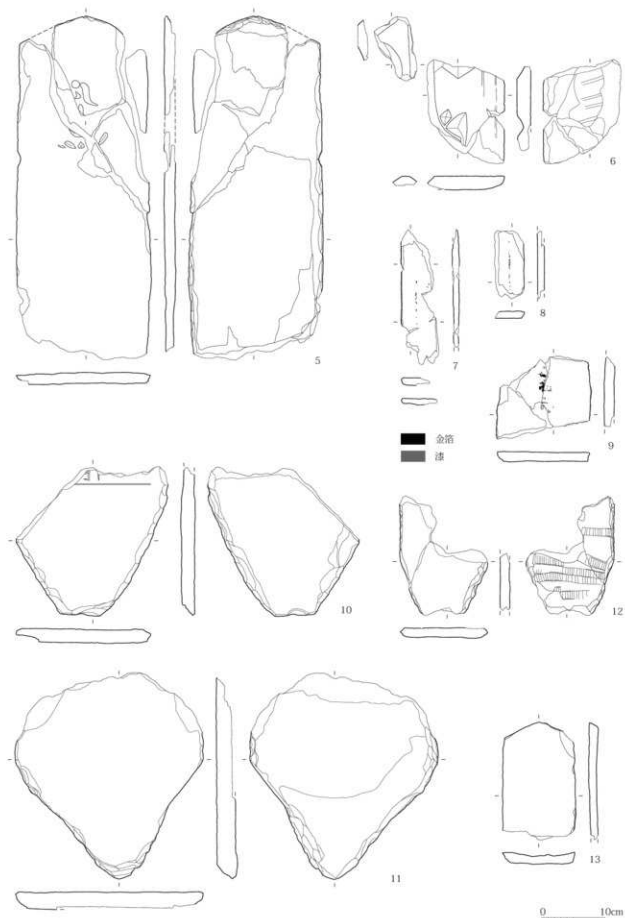
第95図 板碑(1)



第96図 板碑(2)

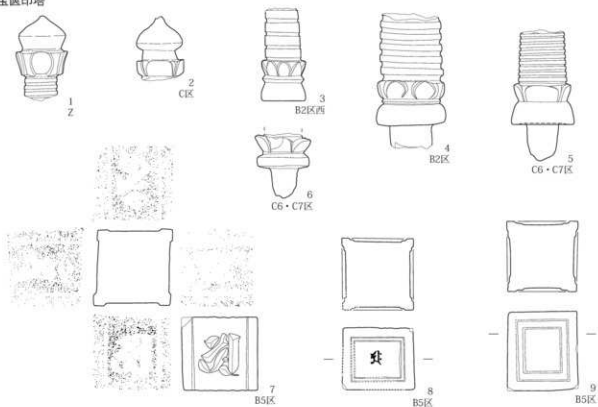


第97図 板碑(3)

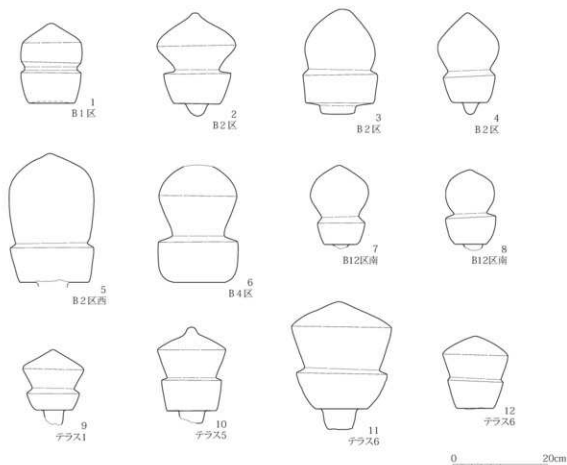


第98図 板碑(4)

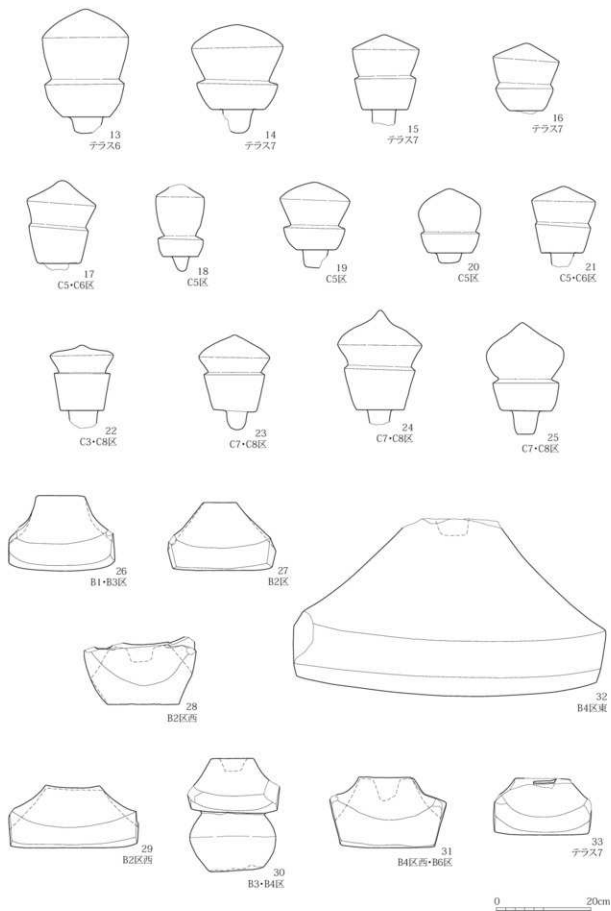
宝篋印塔



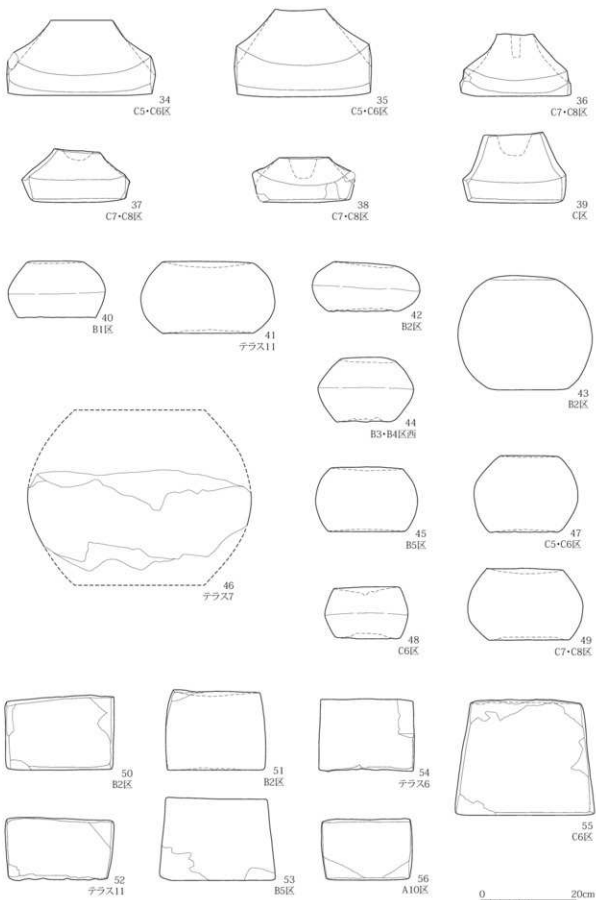
五輪塔



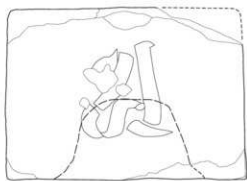
第99図 宝篋印塔、五輪塔（1）



第100図 五輪塔（2）



第101図 五輪塔(3)



東面 57
テラス7



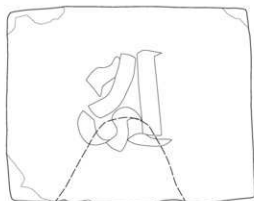
北面梵字



東面梵字



南面梵字



東面 58
テラス7



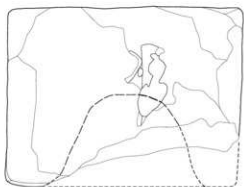
北面梵字



東面梵字



南面梵字



(東面) 59
CS-6区



(北面梵字)



(東面梵字)



(南面梵字)



第102図 五輪塔(4)

第4節 地家遺跡出土の人骨と動物骨

茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美

はじめに

地家遺跡は長野県佐久市の大沢地家にある遺跡で、中部横断自動車道建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって2009年から2014年にかけて発掘調査された。本報告はその際に出土した人骨および動物骨に関するものである。地家遺跡の年代は縄文時代から中世にかけてである。発掘調査では中世の墓が多数見つかっており、今回報告する人骨のほとんどは中世の墓から出土したものである。

出土した骨類は、生骨（土葬）、焼骨（火葬）の両方があり、総重量は約10.2キログラムである。そのうち焼骨の取り上げ重量は約6.9キログラムで、動物骨は約110グラムにすぎない。

なお、添付DVDおよび本文末に出土骨一覧表（第11表 253～264頁）および歯計測表（第12表 265頁）を掲載した。

1 出土人骨の状態と形態

生骨ならびに焼骨が出土している。生骨はA10区、B1区、C5区などの土葬墓から出土している。またB1区の納骨ピットからも少量が出土している。生骨の保存状態はよくない。生骨の中では歯の残りは比較的よい。一方、焼骨はB1区の蔵骨器、B1区やC5区の納骨ピット、B3区の火葬施設などから出土している。自然流路（NR）からは骨片が出土しているが、焼骨片だけである。ピットから出土する焼骨はほとんどがよく焼かれており、灰化している。焼骨には波形の亀裂が入っており、軟組織がついた状態で焼かれたことを示している。出土したのはほとんどが人骨で、ヒト以外の動物骨は数点に過ぎない。

発掘時には堀込みを伴う遺構として、ピットが確認されるものとされないものがあり、はっきりしていないので一部のみを報告している。またほほ散乱した小さな人骨片しかないものは個々の記載をしていない。詳細は一覧表を見て頂きたい。納骨ピットは独立に埋葬されたと考えられているものであるが、それぞれからの出土量は少なく、骨の同一部分が出土しているようなことはみられなかった。納骨ピットは消極的ながら多数個体が埋葬されているような証拠はないようである。

B1区から蔵骨器が2基見つかっており、蔵骨器が壊れていないので骨の埋蔵の仕方が確認できた。上部から約3cm刻みで納骨された焼骨を取り出して、納められたものに規則性があるかどうかを分析した。蔵骨器に用いられた四耳壺は13世紀初頭（鎌倉時代）のものと考えられている。

全体の保存状態は悪く、骨が計測できるようなものは生骨でもごく限られている。人骨の計測はマルチン法（馬場1993）に従い、歯の計測は藤田（1947）にしたがっている。歯の計測値は本文末に掲載した歯計測表（第12表）にまとめている。

2 出土人骨の記載

出土形態が多様なので、それぞれ出土形態に区別して記載する。

（1）土葬墓から出土した人骨

S K 02（第103図：写真4-18、破損した歯は写真には載せていない）

歯だけが出土している。上顎は 左 I 1、I 2、C、P 1、P 2、M 1、M 2、M 3 と右 I 1、M 3 の

10本が残っており、下顎は左P1、P2、M1、M2、M3と右P1、P2、の7本が残り、合計17本が出土している。重複するものはなく、全体の咬耗の程度や隣接面磨耗（隣り合う歯とおしのすり減り面）がお互いに適合すること、形態が似ていることなどから1体分と考えていいだろう。M3が萌出しているので18歳は過ぎている。歯の大きさはM1などが現代日本人の平均値（権田1959）よりもやや大きく、強いて言えば男性の可能性が高い。どの歯にも顕著な咬耗はない。M3にも咬耗があるが、M1などの咬耗はさほどではないので、さほど高齢ではない。20歳代後半くらいと思われる。上顎のM3は3咬頭性で、上顎の中切歯や側切歯はシャベル型が顕著で、縄文時代人のつべりした舌側面の中切歯などとは異なり、現代人型である。

この個体は男性の可能性が高く、まだ若い青年程度である。

SK 04（第104図：写真5-19、7-21～27）

頭蓋骨では頭蓋冠（前頭部から後頭部まで）と左側頭骨の下顎窩部、ならびに左・右の錐体部が出土している。外後頭隆起はあまり発達せず、わずかに張り出している程度である。主要縫合は内板では癒合を完了しており、外板では冠状縫合が単純化している。矢状縫合もかなり癒合している。頭蓋冠の骨は薄い。眉弓はあまり発達していないようである。女性の可能性が高い。

歯が植立した右上顎骨と下顎骨の一部が出土している。

上顎歯は、右はI1、I2、C、P1、P2、M1、M2、M3で左はC、P1、P2、M1、M2、M3の14本が残る。一方、下顎歯は右がI2、C、P1、P2、M1、M2、M3、左はP1、P2、M1、M2の11本で、合計25本が出土している。上顎M3の形態は左右とも退化形で咬頭が明瞭ではない。咬耗は進んでおらず、犬歯の先端やM1の舌側咬頭頂に象牙質の露出がみられる程度で、咬耗度はMolnar (1971) の2～3である。青年程度（20歳代）であろう。上顎の中切歯は軽度のシャベル型である。

上腕骨片が出土している。骨体は細い。また、右大腿骨の骨体が残っている。後面の粗線はやや発達している。骨体の前後の湾曲は小さい。上部外側にある殿筋隆起はわずかに張り出している。両端がないので推測した位置だが、中央の幅径は26.6mm 矢状径は27.1mmで断面示数は98.2と柱状性は弱い。左大腿骨は骨体の半分が残っているだけである。右脛骨は骨体片である。後面の鉛直線は発達しておらず、細い。

この個体は女性で、青年程度の年齢（20歳代）である。

SK 16（第104図：写真6-20）

左側頭骨片や下顎骨の左骨体、歯が残っている。下顎体は厚くない。前歯部分の歯槽は不明である。下顎歯は左M1、M2が植立している。M3の歯槽は吸収されていて、M2の遠心面には隣接面磨耗があるのでM3は生前に脱落したのでであろう。咬耗はやや進んでおり、上顎の小白歯は左側がかなり進んでいる。M1の咬合面はほぼ平坦化している。成人には達していたと思われる。上顎歯は歯冠のみが残っており、歯冠が完形、あるいはほぼ完形のものが左右I2、右C、左右P1、P2、左右M3の8本があり、下顎は上記の左M1、M2以外に右C、P2の4本がある。合計12本が残る。咬耗は全体に軽度だが、上顎の小白歯は左側がかなり進んでいる。さほど高齢ではないが壮年程度と思われる。性別は不明である。

四肢骨では、左大腿骨骨体近位部が残る。骨質は厚い。上部外側の殿筋隆起は発達している。上部は扁平ではない。他に四肢骨片が多数出土しているが、細片で同定できない。

この個体は、性別は不明で、壮年（30歳代）と思われる。

SK 19

生骨が主であるが、焼骨片が混在する。焼骨は量的には多くない。細片だが頭蓋骨片も含まれ、左側頭骨錐体片、上顎骨片（大白歯部の歯槽がある）などがある。全体で51グラムほどの出土量である。性別など詳細は不明である。

生骨では、歯の多くが残っている。上顎歯は左I1片、C、P2、M1、右はI2からM3までで、合計11本が残る。下顎歯は、左はP1、P2、M1、M2、M3で、右はI1からM3までがあり、合計13本が残る。歯は合計24本が残る。大きさは現代日本人の男性（権田1959）よりも大きい。咬耗はやや進んでおり第1大臼歯は象牙質が大きく露出しており咬合面は平坦化している。M3にも咬耗があるので壮年の後半程度であろう。前歯の咬耗はさほどすすんでいない。性別は、歯の大きさではどちらかといえば男性の可能性が高い。

この個体は男性の可能性が高く、壮年の後半程度（30～40歳代）と考えられる。

SK 81（第105図：写真8-28）

左右の上・下顎歯が出土している。25本が残る。両者が咬合した状態で出土していたが、咬合して取り上げられたのは右側のみで、左はバラバラで出土している。右の上・下顎歯の残りはよい。もろいが歯根が残るものもある。頭蓋の他の骨はほとんど残っていない。上顎は右CからM3まで、下顎歯はやはりI1からM3までが植立している。上顎のM3は咬合平面にまで達していない。すなわち、まだM3の萌出を完了していない若い個体である。下顎のM3は萌出している。下顎の右M2、M3と左のM2の咬合面中央に小さな齧蝕がある。大歯の歯頸近くに、栄養不良や病気など何らかのストレスで形成される石灰化不全を示すエナメル質減形成がある。M1の象牙質の露出は上下顎とも舌側の咬頭にごく小さなものがあるに過ぎない。咬耗はさほど進んでおらず、M3にほとんど咬耗はない。上顎の左右のM3と思われる歯は矮小歯である。成人ではあろうがさほど高齢ではなく、20歳程度の青年程度と思われる。性別は不明である。

この個体は性別不明で、青年程度と考えられる。歯にエナメル質減形成やむし歯がある。

SK 83（第105図：写真9-29・30）

保存状態はよくない。頭蓋では、左側頭骨錐体部や下顎骨がある。下顎骨では左側下顎骨が残っている。下顎骨は薄い。歯は、咬合面を上にして上顎歯が出土している。切歯部は破損しているが上顎歯列の形はうかがえる。I2からM2までが植立している。咬耗は顕著で大臼歯は歯頸部近くまで磨耗している。歯槽骨は退縮しているので、歯根は大きく露出している。上顎右側切歯はシャベル型である。別に下顎左M1が出土している。熟年には達していたであろう。

四肢骨片が多数残っており、それらは生骨である。保存状態は悪く、表面が剥落している部分が多い。寛骨片が残る。寛骨臼部と大坐骨切痕部で、大坐骨切痕は広くて女性的である。耳状面の横に妊娠痕様の浅い溝がある。

遠位部が欠けた右大腿骨が出土している。左大腿骨は近位半が残っている。殿筋隆起は発達していない。大腿骨頭は小さい。後面の粗線は発達していない。骨体は細い。左足根骨（踵骨片、距骨片）が残る。これらは小さい。

この個体は妊娠歴のある女性で、この遺跡の土葬で埋葬された個体の中ではもっとも年齢が高いと考えられる個体である。

SK 85（第105・106図：写真10-31～35、11-36、12-37～44、13-45～47）

埋葬人骨で、唯一の円形土葬墓から出土した人骨である。

1体分の埋葬で、右側を下にした屈葬である。比較的残りがよく、ほぼ全身の部位が出土している。椎骨（いわゆる背骨）の残りは悪い。

上肢では肘をほぼ直角に曲げて顔の前方に手を置いている。下肢では、股関節はほぼ直角に曲げており膝を強く曲げて膝は手の近くに位置している。足は寛骨のすぐ近くにある。膝を左に倒しているため左の下肢骨が右側下肢骨の上に載っている。

頭蓋骨

残りは比較的良好で、顔面の骨は残っている。しかし、土圧を受けてややひしゃげているので正しい頭蓋長と頭蓋高、あるいは顔面の計測値はとれない。また、骨の形は残っているが風化されており、そのまま取り上げることは出来なかった。頭は後上方から土圧で押された形にひしゃげている、頭はひしゃげていることを割り引いてもやや長い頭ではある。頭蓋冠も破損はしているがほぼ残っている。

顔は細い。眉弓はあまり発達していないで額はほぼ直角に立っている。鼻根部はさほど凹んでいないので顔面の印象は平坦である。上顎切歯部が前方に出ている歯槽性顎突で、中世的な形質である。乳様突起は内外的にやや厚いが大きくない。左右の眼窩上壁には鉄欠乏貧血が原因とされる多孔性のクリブラオルビタリアが見られる。後頭部は全体的に膨隆しているが、外後頭隆起は発達しておらず目立たない。側頭線も明瞭ではないので側頭筋はあまり発達していなかったであろう。頭蓋冠の骨は子供を思わせるように非常に薄い。しかし、いろいろな形態から年齢がかなり進んでいると思われるので、女性と判断するのが適当であろう。矢状縫合・冠状縫合・ラムダ縫合の外板はかなり癒合が進んで消えかかっているのさほど若い個体ではないだろう。

下顎骨では、下顎体は厚くない。下顎底はほぼ直線的であり角前切痕はみられない。下顎枝は低い、筋突起はかなり高い。しかし、厚さはない。大臼歯部の歯槽線は吸収されている。下顎の筋突起は発達しておらず短くて薄い。やはり側頭筋の発達はよくなかったことを示している。

歯

上顎歯は右I1、I2、C、P1、P2までが植立しており、M1・M3は脱落している。

左はI1、I2、Cまでは植立しているが、P1から遠心の歯ではMの1本だけが残る。この部分の歯槽は萎縮している。生前にこの歯が脱落したのであろう。

下顎歯は、右はI1からM3まで萌出している。左はI2、C、P1、P2、M1、M2、M3が残る、I1は不明である。歯槽のスペースから考えると植立していたと考えていいだろう。M3は齶蝕により歯冠がほとんど失われており、M2の遠心部にも齶蝕がある。唯一残っている上顎の右大臼歯はM2と思われる。咬合面が遠心に向かって強く磨耗している。

下顎大臼歯は咬耗が進んで平坦化しており、象牙質の露出も顕著である。上顎の切歯部は舌側面が磨耗しており、切縁から数mmに及んで磨耗している。歯槽性顎突の影響で、上顎前突になっていた結果であろう。右M2は咬耗が顕著で咬合面は遠心に傾いている。

体幹骨・四肢骨

頸椎から骨盤部にかけての部分からは肋骨片や椎骨が出土している。もろいので完形のものはない。

上肢骨

左・右肩甲骨片が残っている。左鎖骨骨体と右鎖骨の一部が残る。鎖骨の両端は欠ける。左鎖骨の中央付近の前後径は122mm、高径は10.0mmと細い。右上腕骨は両端が欠けるが骨体は残る。左上腕骨は骨体の他に骨頭も残っているが接合は出来ない。三角筋粗面はさほど発達しておらず、骨体は直線的である。中央（推定）の最大径は21.6mm、最小径は17.4mmである。左橈骨も両端を欠くものの骨体は残る。骨間線は発達しているが太くはない。位置を推定した中央付近の前後径は11.5mm、左右径（幅径）は14.8mmである。右尺骨の大部分が残っている（近位肘頭と遠位端欠）。骨幹線はよく発達している。他に指骨がある。

下肢骨

寛骨臼部を含む左右の寛骨片が残っている。左右の大坐骨切痕部が残る。大坐骨切痕は大きめである。左右大腿骨は両端が欠け、表面は侵食されているが骨体は残っている。大腿骨の後面の粗線は発達しておらず低い稜となっているに過ぎない。上横径は35.2mm、上矢状径は26.5mmで扁平指数は75.2である。骨

体の弯曲は小さい。上部の殿筋隆起は発達していない。位置を推定した中央付近の横径は27.2mm、矢状径は25.5mmで横断示数は93.7で骨体の柱状性は低い。左右脛骨は両端が欠けるが、骨幹は残っている。頑丈な脛骨であるが後面の鉛直線は発達していない。やや扁平で中央(推定)付近の断面は最大矢状径28.9mm、中央横径19.1mmである。栄養孔位横径は20.1mm、栄養孔位最大径33.4mmで、扁平示数は60.1で扁平脛骨である。加齢変化は見られない。腓骨片が何点か出土しているが槌状腓骨ではない。

この個体は、全体の中でももっとも保存のよい個体である。頭蓋骨の薄さや、外後頭隆起が発達していないこと、乳様突起もさほど大きくないこと、下顎骨がきゃしゃなこと等を考えると、四肢骨は比較的良好に発達しているものの女性と考えられる。M3が萌出して磨耗していることから成人であることは間違いなく、頭蓋の縫合がかなり癒合していることや大臼歯の咬耗を考えるとやや高齢と思われる。熟年程度であろう。歯槽性突顎(出っ歯)など中世的な特徴を示す。

SK 111

下左M1の歯冠が出ている。近心の頬側と舌側の咬頭頂にごくわずかな磨耗が見られるので萌出後間もないものと思われる。6歳～7歳程度の幼児であろう。

SK 130

生骨である。歯の破片、上腕骨遠位骨幹片、大腿骨片や同定できない小さな四肢骨片がある。詳細は不明である。

(2) 蔵骨器に納められた焼人骨

SK 31 蔵骨器 骨重量1555.08グラム

蔵骨器の口縁に近い方を0cmとして、およそ3cm刻みで取り上げた。そこに含まれている主なものを記載した。

上から0～3cm

四肢骨片で、部位の特定が出来るものはない。量は少ない。

上から3～6cm

頭蓋骨は2点のみである。上顎左大臼歯は焼かれたことにより表面のエナメル質が失われて象牙質のみが残る。下顎切歯唇側面エナメル質、上顎小臼歯舌側片エナメル質が残り、これらの摩耗はさほどではない。四肢骨片には鱗状の亀裂が多数あり、軟組織がついたまま火葬されたことがわかる。大きさが数cmの四肢骨片多数あり、他に右膝蓋骨、手指骨1点、中足骨1点などがある。

上から6～9cm

頭蓋骨数点がある。歯では下顎右第2小臼歯歯冠、上顎左第3大臼歯の象牙質、上顎犬歯の象牙質(左右不明)、下顎左大臼歯歯冠片が残る。通常焼かれると破損するエナメル質が残っているのだからさほど高い温度で焼かれたわけではないと考えられる。四肢骨では、左上腕骨遠位骨幹、遠位関節内側部、橈骨片、上腕骨片、手指骨5本、足指骨1本、肋骨少数、左側頭骨関節窩前方部などがある。

上から9～12cm

頭蓋骨片は少数である。後頭骨鱗部(外後頭隆起は小さい)、後頭骨の舌下神経管部、右上顎骨と頬骨片(眼窩の下部外側)、頭頂骨の後部(後頭骨との接合部分)がある。縫合は鋸歯状が明瞭であり、さほど高齢ではない。歯は歯種不明の歯冠片(エナメル質)が1点のみである。他に、肋骨が少数と手と足の指骨がある。

上から12～15cm

頭蓋骨片が多い。右側頭骨下顎窩、左錐体、後頭骨の縫合骨(鋸歯状が明瞭)などである。下顎左第2小臼歯歯冠は熱によって破損していない。四肢骨では、肩甲骨肩甲棘の基部、体幹骨では胸椎の棘突起がある。

上から15～18cm

頭蓋骨では、下顎骨正中部、右下顎体から下顎枝にかけての部分があり残っている歯槽から判断すると生前に脱落していた歯はない。下顎骨底部には軽度の角前切痕がある。他に筋突起があるがあまり発達していない。歯は右上顎大臼歯片、下顎右第2大臼歯歯根がある。四肢骨では、右鎖骨骨幹、左腓骨の遠位端、右踵骨上関節面、仙骨後面の一部がある。

上から18～21cm

頭蓋骨はほとんどない。右側頭骨錐体部と歯である。下顎の第1小臼歯の象牙質（左右不明）が残る。椎骨片があり第2頸椎（いわゆるのど仏といわれる骨）の歯突起と思われる小片が含まれる（第103図：写真1-1）。

S K 31 蔵骨器の人骨についてのまとめ

重複部分がないので1体分と思われる。性別は不明である。通常の火葬では破損して失われる歯のエナメル質が残るものがあり、骨の状態では灰化が不十分なものもあるので、さほどの高温で焼かれたものではないと考えられる。ただし、後述の2号蔵骨器よりは高温で焼かれている。永久歯は第3大臼歯まで萌出しているが年齢はさほど高齢ではない。四肢骨の大腿骨とか脛骨は量的に少ない。四肢骨が全体に取り上げられておらず、一部分が蔵骨器に入れられた可能性がある。後述のS K 32蔵骨器で最上部にあった「のど仏」の第2頸椎（歯突起部）は、この壺では最深部近くにあるので、今回の調査では、「のど仏」を上部に置くという風習があったということは確認できなかった。

S K 32 蔵骨器 骨重量 890.48 グラム

S K 31 蔵骨器のものよりも低温で焼かれているため、骨の収縮が少ないので、S K 31 蔵骨器の人骨より頑丈な印象を受ける。

上から0～9cm

口縁から9cmの部分で検出したのは、第2頸椎の歯突起周辺で、通称「のど仏」の一部である（第103図：写真2-2）。

上から9～12cm

頭蓋骨片や下顎骨片が10点ほどある。四肢骨では、寛骨臼を含む破片、尺骨片、椎体片などが含まれている。

上から12～15cm

手根骨、寛骨、下肢骨片、中手骨あるいは中足骨、指骨、歯など多様な焼骨片が混在している。特に決まった様式があるようには思えない。

上から15～18cm

頭蓋骨片があり、他に指骨・肩甲骨・上腕骨・下肢骨などの四肢骨片が含まれる。

上から18～21cm

頭蓋では、側頭骨左錐体部を含む頭蓋骨片が残る。四肢骨では大腿骨遠位部や脛骨の栄養孔部分、椎骨片などがある。

上から21～24cm

踵骨、距骨、大腿骨の骨頭やそれ以外の細片などがある。

S K 32 蔵骨器の人骨についてのまとめ

S K 31 蔵骨器のものよりも焼かれた温度は低いと思われ、焼け縮みは少ない。そのためS K 31 蔵骨器の人骨より頑丈な印象を受ける。性別は不明で成人という以外年齢は不明である。いわゆる「のど仏」にあたる第2頸椎（歯突起の部分）が最上位におかれていた。

蔵骨器に納められた焼人骨についてのまとめ

全体としては骨の納め方に一定の傾向はうかがえなかったが、SK 32 蔵骨器で、いわゆるのど仏が最上位にあったことは興味深い。現代に見られる同じ風習とつながるものがあるかどうか確認したかったが、前述のように、もう一例の蔵骨器ではこの風習がみられなかったので、偶然に上部に置かれたと考えた方がいいだろう。SK 31 蔵骨器の場合もSK 32 蔵骨器の場合も、第2頸椎は完形ではなく確認できたのは歯突起という小さな部分に過ぎない。いわゆる「のど仏」を最上位におく風習は現代にみられる風習であり、この風習自体が比較的新しい時代にはじまったとされているらしい(文献などでの確認は出来なかったが、国立歴史民俗博物館の山田康弘氏ならびに氏のご存じの研究者の方のご教示によれば、比較的新しい時代の風習で、中世にあったとの報告はないということである)。しかし、このような事例が見られたことは、記載しておく必要があると思われる。

(3) SK 31・32以外の火葬墓から出土した焼人骨

SK 17 (第103図:写真3-3~17)

ここには9つの火葬骨埋納ピットが確認されている。9体以上の人骨が含まれている可能性があるが、それぞれのピットからの出土量は少なく、全体での個体識別は出来ない。したがって、出土個体数は人骨の情報からは確認できない。焼骨で、かなりの量が出土している。数cm程度からいろいろな程度の大きさに割れており、部位の同定できるものは多くない。頭蓋骨では左右の側頭骨錐体、前頭骨片、後頭骨、上顎骨、下顎骨の体部や下顎骨などがある。側頭骨の錐体は小さい。他に歯冠エナメル質が割れて失われた大臼歯の歯根などがある。四肢骨では、上肢では、肩甲骨片や鎖骨片、上腕骨の骨頭や遠位部の骨幹片、桡骨片、尺骨片が確認できる。鎖骨は焼けているにしても細い。下肢では、寛骨臼部、大腿骨骨幹、胫骨、腓骨、距骨などが残っている。大腿骨の後面粗線部片などが確認できる。四肢骨は、ほぼ全身にわたって残っていると言えよう。ただし、個体識別は難しいので個体数は不明である。

ここで出土したのは焼骨で、年齢や性別は不明だが、四肢骨には細い女性的なものも含まれている。

SK 40

焼骨の細片だけである(58グラム)。

SK 80

焼骨である。四肢骨細片のみである。

SK 134

焼骨である。細片が多数出土している。頭蓋骨片が11点、歯根が3点などで他に四肢骨片が多数ある。

(4) 上記以外の火葬墓から出土した焼人骨

発掘報告の考古学的記載にあるように、火葬骨は、斜面に切り込まれた面にある小穴(ピット)に埋葬する例が多い。納骨ピットが幾つかまとまる場合もあり、SK 17では9基の納骨ピットが確認されている。

そこで、同じピットに1個体が埋められているのか、あるいはそれ以上の複数個体が埋葬されているのかを知る手がかりが得られればいかと考えた。しかし、焼骨の場合は熱による変性を受けてねじれたり縮小したりすることが多く、しかもひび割れがあるため細片化しやすい。また、個体識別で重要な役割を果たす歯のエナメル質が残らないのでかなり難しい作業になった。結果として、個々のピットに納められた焼人骨の量が少ないこともあって、別個体と確認できる部分の出土、すなわち明らかに2体以上埋葬されているというピットは認められなかった。個々のピットの出土骨については出土骨一覧表で確認していただきたい。

3 出土人骨についてのまとめ

地家遺跡から出土した人骨の量は、骨の重量で焼骨、生骨を合わせて全体で約10kgほどで、そのうち焼骨は7kgにやや足りないほどの重量である。

土葬墓では、全体の保存状態は悪かったが歯の残りは比較的良好であった。咬耗が進んだものは少なく、やや高齢の個体はSK 83の1体（女性）だけである。土葬墓の個体は、上顎中切歯は顕著なシャベル型で、渡来系の影響が強いかかえる個体である。歯槽性突顎（出っ歯）など、中世的な特徴を示す個体（SK 85）もある。全体としては、すでに現代日本人に通じる形態がほぼ完成していたと考えてよさそう。

土葬墓以外から出土した人骨は多くが焼骨で、形質を抽出できるようなものではなかった。出土したピットや墓坑の数はかなりの数になるので、焼けた骨は火葬された人骨のすべてを集めたわけではなく、ごく一部がそれぞれのピットに埋葬されたものと考えられる。

2例ある蔵骨器のうちの1例で、いわゆる「のど仏」（第2頸椎）の一部が最上部に置かれていたことは事実として記載しておく。このような風習は最近のものと考えられており、今回の例はたまたま第2頸椎が上部にきたということであろうが、今後の検討課題として記載しておく。

4 地家遺跡から出土した動物骨

人骨に比して動物骨の出土は数点に過ぎない。いずれも自然流路（NR）から出土したものである。3種類の動物の遺物である。規則的な部位とか埋葬方法などのものは何もなく、たまたま紛れ込んでいたものであろう。

イノシシ *Sus scrofa*

♂イノシシの下顎左犬歯である。厳密には飼育されていたブタか野生のイノシシかどうかの区別は出来ない。

シカ *Cervus nippon*

右肩甲骨片である。

ウマ *Equus caballus*

上顎左I 1とウマの中手または中足骨体片が1点出土している。

この報告をまとめるにあたり、長野県埋蔵文化財センターの皆さんに骨の整理作業を手伝っていただいた。特に若林卓さんや水澤教子さんには記録の整理・表の作成、全体のとりまとめで多大な配慮いただいた。心から感謝いたします。

参考文献

- 馬場悠男（1993）人骨計測法。雄山閣 人類学講座別巻1。：Pp. 359。
 藤田恒太郎（1949）：歯の計測規準について。人類学雑誌。61：1-6。
 榎田和良（1959）：歯の大きさの性差について。人類学雑誌。43（1）：151-163
 Molnar, S. (1971) : Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability. *American Journal of Physical Anthropology*, 34: 175-190.

写真1
SK31



写真2
SK32



写真3
SK17

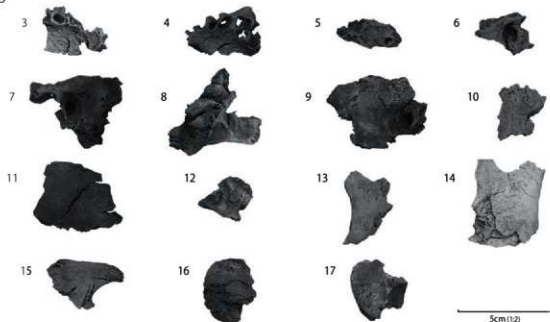


写真4
SK02

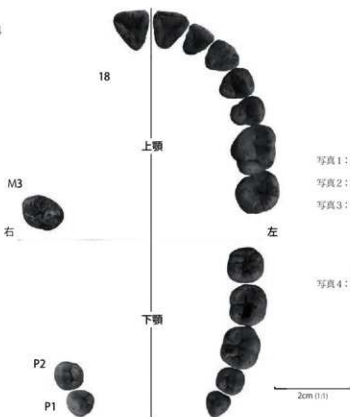


写真1：SK31出土の焼人骨

1 人骨の第2頰椎（いわゆるのど仏）の歯突起後面

写真2：SK32出土の焼人骨

2 人骨の第2頰椎の歯突起後面

写真3：SK17出土の焼人骨

3 上顎骨の歯槽部、4 上顎骨左歯槽、5 左側頭骨の離体、

6・7 側頭骨離体、8 左側頭骨外耳道部、9 側頭骨離体、

10 側頭骨のアスタリオン部、11 後頭骨外後頭隆起部、

12 左側頭骨下顎窩、13 右下顎骨突起部、

14 下顎骨左下顎枝、15 右肩甲骨肩甲縁部、

16 大腿骨骨頭、17 左距骨

写真4：18 SK02出土の埋葬された個体の上下顎歯

第103図 地家遺跡 出土人骨（1）

写真5
SK04

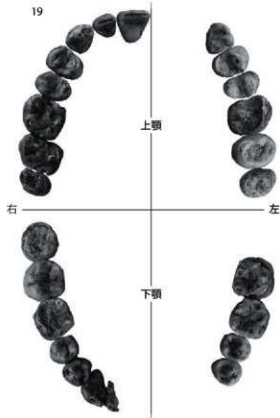


写真6
SK16

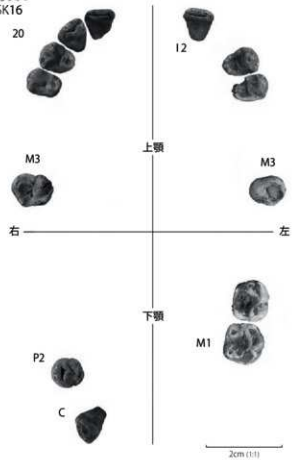


写真7 SK04

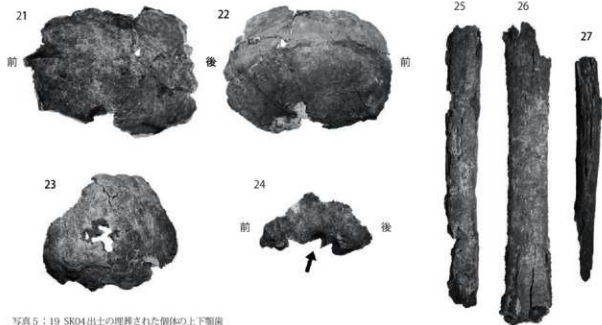


写真5：19 SK04出土の埋葬された個体の上下顎面

写真6：20 SK16出土の埋葬された個体の上下顎面

写真7：SK04出土の人骨

21 頭蓋冠内面（左が前）、22 頭蓋冠外面（右が前）、

23 後頭骨外面、24 右側頭骨外面（左が前、矢印は外耳孔）、

25 左大腿骨前面、26 右大腿骨前面、27 右脛骨前面

第104図 地家遺跡 出土人骨（2）

写真8
SK81

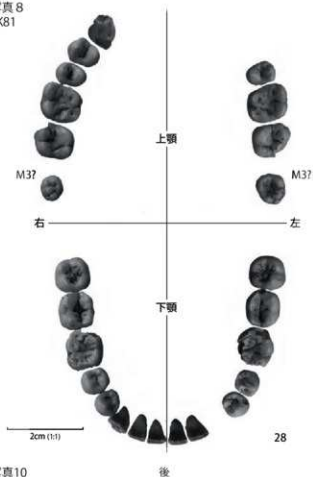


写真9
SK83



写真10
SK85

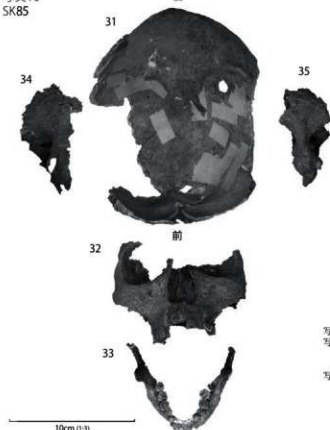


写真8：28 SK81出土の埋葬された個体の上下顎
 写真9：SK83出土の人物の四肢骨
 29 右大腸骨前面
 30 左寛骨（左が耳状面で、矢印が恥骨痕を示す）
 写真10：SK85出土の人物の頭蓋骨
 31 内面観（下が前方で上が後方。前頭骨の一部が欠けている）
 32 顔面下部の頬窩下縁と上顎骨、33 下顎上面
 34 右側頭骨、35 左側頭骨

第105図 地家遺跡 出土人骨（3）

写真11 SK85

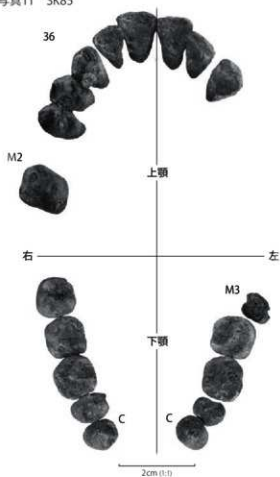


写真12 SK85

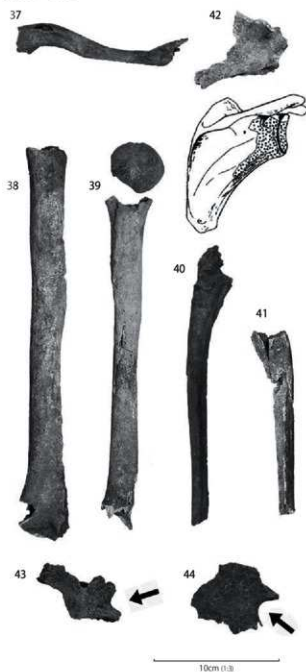


写真13 SK85



- 写真11：36 SK85出土の埋葬された個体の上下顎歯列
下顎の左M3は臍胞によって歯根だけになって直立している
写真12：SK85出土の人骨
37 左肋骨前面、38 右肋骨前面、39 左肋骨前面
40 右肋骨外面、41 左肋骨
42 右肩甲骨の関節面と出土部の位置を示す図
43 右寛骨の大坐骨切痕部（矢印）
44 左寛骨の大坐骨切痕部（矢印）
写真13：SK85出土の人骨の四肢骨
45 SK85の右大腿骨前面、46 SK85の左脛骨前面
47 SK85の右脛骨前面

第106図 地家遺跡 出土人骨（4）

第5節 自然科学分析

地家遺跡では自然科学分析として、放射性炭素年代測定（AMS測定）、樹種同定、種実同定を実施した。分析の詳細については、DVD収録の分析報告書を参照されたい。なお、分析は、放射性炭素年代測定（AMS測定）を株式会社加速器分析研究所、樹種同定、種実同定をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

1 放射性炭素年代測定

分析は2009・2010・2014年度に実施した。分析試料は2009年度が土坑、竪穴建物跡、溝跡、平場から出土した炭化物および生材10点、2010年度が主に土坑、テラス、火葬骨埋納ピット、出土土器から採取された炭化物15点、2014年度が竪穴建物跡、土坑、溝跡、焼土跡、段切から採取された炭化物11点である。目的は、遺構、遺物包含層、試料を採取した土器などの時期検討の一助とするためである。以下、年度毎の概要を記す。

2009年度の測定結果は、暦年代範囲（1σ）における最小値と最大値について、土坑は、SK 21で780calBC-566calBC、SK 38で726calBC-415calBCを示し、縄文時代晩期後葉から弥生時代初頭頃の年代値となった。SK 36で1167calAD-1219calAD、SK 38で1416calAD-1436calADを示し、12世紀後半から13世紀前葉頃と15世紀前半頃となる。竪穴建物跡は、SB 09 P 1出土試料が723calAD-870calADと8世紀前葉から9世紀後半頃、SB 11で1051calAD-1208calADと11世紀後半から13世紀初頭頃を示した。12区平場出土試料は1225calAD-1270calAD、1022calAD-1149calADである。12区平場は段切4・5の10・12層上面に相当する。溝跡は15世紀後半以降と推定したSD 05で、783calAD-962calADと8世紀後葉から10世紀中葉頃の結果となった。SD 05を除いて、概ね調査所見と整合する。

2010年度の測定結果は、暦年代範囲（1σ）における最小値と最大値について、土坑がSK 350で1047calAD-1176calAD、SK 515で1654calAD-1953calAD、ほか5基のSKで1169calAD-1291calADに収まり、主に12～13世紀頃に位置付く。テラス関係では、テラス7試料が五輪塔地輪底部抉り込み内の試料で1225calAD-1260calAD、テラス8がテラス面付近の試料で現代、テラス1が中世の墓地区画を形成するテラス状平坦部から出土した土器付着炭化物試料で1285calAD-1385calADであった。テラス状平坦面の造作と五輪塔設置時期が13～14世紀頃になされたと推測できる。

南尾根北斜面の火葬骨埋納ピットの試料2点は、1295calAD-1388calADと1287calAD-1385calADとなり、13世紀末から14世紀後葉頃の数値となった。一方、残る自然流路跡NR 01出土の土器付着炭化物では、1059calAD-1213calADと1447calAD-1610calADとなり、前者の範囲が13世紀頃の東濃産の陶器とした位置付けと調和する。

全体的には主に12世紀から14世紀にかけての測定結果となり、中世の墓域形成と継続する時期を示唆し、調査所見と整合する。

2014年度の測定結果は、試料11点の暦年代範囲（1σ）における最小値と最大値は687calAD-1429calADであった。このうち、SF 12焼土内の778calAD-885calAD、SB 12の687calAD-767calAD、SK 20の897calAD-767calADは7世紀後葉から10世紀後葉頃の年代を示す。その一方で、SB 11床直の1290calAD-1385calAD、SF 04の1183calAD-1245calADなど、測定値が12世紀後半から14世紀後葉頃の年代を示す結果となった。

以上、3回の分析結果を俯瞰すると、時期として、BC 8世紀～BC 5世紀頃、AD 7世紀～AD 10世紀頃、

AD12世紀～AD15世紀頃の3時期に大きく分かれ、調査所見と整合する結果といえる。

2 樹種同定

分析試料は木製遺物全体7,064点のうち、主な掲載遺物200点を行った。

分析の結果、針葉樹4分類群（マツ属複雑管束亜族・トウヒ属・サワラ・ヒノキ科）と広葉樹12分類群（オニグルミ・ヤナギ属・コナラ属クスギ節・コナラ属コナラ節・クリ・エノキ属・ケヤキ・モクレン属・カツラ・イスノキ・ウツギ属・トネリコ属シオジ節）に同定された。特に200点中166点がサワラで、試料の8割以上を占める結果である。サワラは長野県内の山地や隣接する埼玉県秩父地域の山地に分布しており、周辺山地に育成していることが利用量の多い背景と考えられると報告されている。また、サワラは木理が通直で割裂性と耐水性が高いことも要因と考えられ、様々な用途に広く利用されたことが推定される。サワラ以外の樹種をみると、印判（モクレン属）、弓（ウツギ属）、漆椀（ケヤキ・トネリコ属シオジ節）、櫛（イスノキ）、下駄（ケヤキ・カツラ・トネリコ属）、独楽（ヤナギ属）などがある。櫛に利用されイスノキは西日本に分布する樹木であるとされるが、本来自生していない北陸地方や東北地方等でも確認例があり、製品の運搬等により持ち込まれた可能性を示唆している。漆椀については、11～12世紀頃に材料や工程を大幅に省略した漆下地漆器が登場し、木地もケヤキから安価なブナやトチノキなど多様なものが選択されるようになり、木材利用の変化を考えるうえでも重要との指摘をしている。印判については、調査例がほとんどない器種で、用材選択の詳細は不明であるが、モクレン属が比較的軽軟で加工の容易なことで、木材選択をした可能性を推定している。

全体としては、仏具、形代、工具、農具、箸（串）、曲物などの利用材の多くがサワラであることが、他家遺跡の特徴ともいえる。

3 種実同定

分析試料は中世の堅穴建物跡SB11出土の粒上炭化物の集中から抽出された試料48点、SF04の20個の計68点である。目的は種実遺体の同定により、当該期の植物利用を検討する手掛かりを得ることである。

分析の結果、裸子植物1分類（カヤ）6個、ヒシ植物6分類群（モモ、ナシ属？、草本のアワ、オオムギ、アズキ類、キク科？）73個の計79個の炭化種実が同定された（同定個数は分割していた同一個体試料をそれぞれ数えた結果である）。炭化種実の保存状況は不良である。栽培種は、SB11からモモの核1個、アワの穎・胚乳が19個、SF04からオオムギの穎・胚乳が19個の計39個である。栽培の可能性があるアズキ類の種子がSB11から23個、SF04から1個の計24個と、SB11からナシ属？の果実が6個、キク科？の果実？が4個確認されている。その他、SB11からカヤの種子の破片が6個確認された。

SB11から出土したモモ、アワ、SF04から出土したオオムギは、近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、遺跡周辺域で利用された植物質食料と示唆され、火を受けたと報告している。また、アワ、オオムギにはほほ穎（穂）が残存している出土状況から、穂殻を取り去る前に火を受けたと推測している。アズキ類22個は、「野生型」9個、「栽培型」3個、「中間型」10個と確認され、当時複数系統のアズキ類が利用されていた可能性を指摘している。この他、SB11から出土したナシ属？、キク科？は、他の栽培種の共存を考慮すると、栽培の可能性が高く、種類の解明が今後の課題としている。また、カヤの種子は当時の周辺域の山地に育成したと考えられ、食用可能であることから、他の栽培種とともに当時利用されていた可能性が十分あるとしている。

今回の多くの試料はSB11の3箇所の粒状炭化物集中部から抽出した。集中部は直径1.4～1.8mm程度

の略扁球形の炭化物（A類）と長径3.5～6.5mm程度の直方体状長球形の炭化物（B類）の集中がみられた。同定結果はA類19点がアワの穎・胚乳、B類21点がアズキ類の種子である。同定を実施した個体はごく一部であるが、その他の個体も形態が相似するため、粒状炭化物集中部から出土したA類はアワ、B類はアズキ類と考えている。これらは、種類ごとに集中すること、アワに穎が遺存することを考慮すれば、建物内に貯蔵された食糧あるいは種である可能性が高いと考える。このほか、多数の同規格の鉄釘もまとまって出土しており、この建物が倉庫として利用されていたことを示唆する結果と考えている。

また、アズキ類は、「野生型（簡易楕円体積30ml以下）」9点・「中間型」10点・「栽培型（同60～70ml以上）」2点のサイズが確認された。SB11の時期は、出土遺物や炭化物の放射性炭素年代測定結果から13世紀後半～14世紀後葉と考えている。当時、複数系統のアズキ類の利用を行っていた可能性とともに、現在の栽培種に比べて、小型サイズの系統が主流であった可能性も示唆される。本事例は、日本列島における現在の栽培種アズキの形成過程に関する基礎資料のひとつとなろう。

第6節 小結

今回の発掘調査では縄文時代、弥生時代前期、弥生時代後期、古代、中世の資料を確認した。

縄文～弥生時代

縄文時代は、少ないながら早期末葉・前期初頭・中期初頭・後期初頭～末葉の土器が出土し、該期の人々の活動域であることがわかった。また、中期前葉の竪穴建物跡1軒を確認し、縄文時代中期の一時期には、居住地として利用されたことも判明した。

弥生時代前期は、水Ⅱ式期の土坑3基を確認した。水Ⅱ式土器と水Ⅰ式直後段階およびそれに併行する時期の土器は、北尾根頂部から中央低地部・自然流路跡にかけての広い範囲から相当量が出土している。遺構の存在や土器の量からみて、一過性の活動とは考えにくい。この地が該期の人々の生活域であり、居住施設は確認できなかったものの、一定程度の定住生活が営まれていたことを想定しておく。

弥生時代後期は、後期末の方形周溝墓1基を確認した。細い尾根上に立地しており、地形的に隣接地に墳丘を築造する余地はなく、単独である可能性は高い。低地部からの比高はさほどではないが、集落から離れた丘陵頂部に立地する在り方は前期古墳に通ずる立地形態である。段丘上や台地上に、集落に隣接しない近接して群集する形態とは異なる。弥生時代末における、立地形態が異なる方形周溝墓の築造背景を探ることは、今後の課題であろう。

古代

古代は、8世紀～10世紀の集落跡を確認した。古代の集落は、北尾根南斜面の裾部に8世紀～9世紀初頭の竪穴建物が集中するが、9世紀後半になると、北尾根頂部にも営まれるとともに、自然流路跡NR01の南岸部にも展開し、居住域が分散化する傾向を示す。9世紀末～中世は、寛平五年(893)開創と伝えられる長命寺の存続期間と重なる時期である。長命寺がこの地に存在したかどうかを確認することは、今回の発掘調査の主要課題でもあった。しかし、古代寺院の伽藍と推測し得る建物跡はなく、仏教関連遺物も出土していない。調査地内では、古代に寺院が存在した確証は得られなかった。9世紀後半～10世紀は調査地内に集落が展開しており、寺域を想定しにくいと考える。「石井寺」墨書土器については、何処かの地に「石井寺」という寺があり、その寺が長命寺の開創に関わった可能性は否定し切れないが、現状、評価は難しい。「石井寺」と長命寺をつなぐ資料が確認されるまで評価を保留したい。

中世

中世は、輸入陶磁器、国産陶磁器・土器、石製品、金属製品、木製品など多種多様な遺物が出土し、中央低地部で掘立柱建物跡、礎石建物跡、竪穴建物跡を検出した。周囲の斜面部では土葬墓、火葬墓、火葬施設、造塔・造墓区画を検出し、板碑や多数の五輪塔各部が出土した。中央低地部の自然流路跡からは木製品をはじめとした多数の遺物が出土している。

出土した陶磁器には、青白磁梅瓶、青磁盤など通常の一般集落での保有・使用を想定しがたいものがある。木製品は塔婆、柿経、形代、須弥壇の高欄斗東など、ここで行われた行為・活動や建造物の特質に強く関わるものを含んでいる。「百劫種相三十二六度満足」の木簡は、仏教の經典や注釈書に登場する語句を書き連ねており、特に注意すべき資料といえる。また、譬と推測する鉄製品も出土した。これらの出土遺物は、ここで行われた行為・活動が、一般集落とは異なる性格をもつものであり、周囲の斜面部で出土した石造物とともに、仏教に深く関係するものであったことを物語る。こうした仏教的色彩の濃い環境のなかに中央低地部の建物群が建造されている。

ST 02は、斜面を大きく開削して造成した平坦部に建つ東西3間、南北3間の総柱建物で、北側に付属部をもつ。本体部の平面形は正確に正方形を呈し、各柱で囲まれる小部分も正しく正方形である。付属部を含めて柱間隔は一定で柱筋の通りも良い。厳密な設計・施工による建造が行われたことは確実である。整然とした構造や、排水溝等の複雑な造作を伴う土地区画の中に建造されていることからみて、一般集落の掘立柱建物とは性格が大きく異なることは間違いない。仏教関連遺物の出土を考え併せ、ST 02は仏堂であると判断する。内陣の位置としては、P 6・7・10・11に囲まれる部分またはP 9・13・14・10に囲まれる部分を想定しておきたい。前者の場合は仏堂の正面は南、後者の場合は東となろう。ST 02の上位で検出したST 01は残存状況が悪く、北辺と西辺の一部しか残存していないが、礎石建物であること、ST 02を踏襲する位置に、軸線を揃えて建造していることから、ST 02と同じく仏堂跡と判断する。廃絶したST 02の跡地を再整備して、新たな仏堂を建造したことを推測する。

ST 01の西約20mで検出した堅穴建物跡SB 11からは、アズキ、アワ、同規格の鉄釘多数がまとまって出土した。貯蔵された食料や道具類として理解でき、SB 11は倉庫と判断する。SB 11の下位では、同じ位置で同規模の建物跡ST 04を検出した。SB 11に引き継がれる性格を備えた建物、すなわち倉庫であると考え。仏堂と同じく、廃絶後に同位置での再建が行われたことを推測する。

仏堂ST 02と倉庫ST 04の建造は同時期に行われた可能性があろう。その後の廃絶と再建は、仏堂と倉庫でずれるようだが、主要建物の存続に複数時期があることは確かである。建築部材や調度品部材の出土は、建物の再建が行われた可能性を示唆し、複数時期の建物跡の存在と符合する。

上記の建物群は13世紀後半～15世紀に属するものと推測しており、発掘調査資料と伝承を考え併せ、中世長命寺の伽藍に該当するものと判断する。中央低地部には柱穴様の小土坑が数多く存在し、自然流路跡の南岸部でも同様な土坑が密集している。建物跡を構成する組合わせを抽出することはできなかったが、中心伽藍に付随するかたちで建物が存在したことを想定し得る。僧侶あるいは寺の雑務を担う人々の居住施設の可能性を考えておきたい。中央の低地部に仏堂が建ち、隣接ないし近接して車裡が配置される。

伽藍群を取り巻く斜面部には五輪塔や板碑を造立した墓域が展開する。南尾根北斜面部では、造墓・造塔区画であるテラス状遺構が5段にわたって整然と配置された状況を確認した。西尾根東斜面部では、同様な形状のテラス状遺構を確認したほか、板碑の集中造立区域が存在したことを想定し得る。北尾根頂部には土葬墓が集中し、その南斜面部では美濃須術製品の四耳壺を蔵骨器とする火葬墓を検出した。北尾根南斜面部では古瀬戸四耳壺の大形破片が出土しており、さらに多くの蔵骨器埋納墓が存在した可能性が高い。墓域は区域によってその様相に特徴がある。中央低地部に建造された中世長命寺の伽藍構成や、周囲の斜面部に展開する墓域構成に迫り得たことは、今回の発掘調査の成果であろう。

また、出土した硯や石鍋には再加工あるいは再製作した跡が認められ、加工材や端材の存在は、建築の廃材であるほかに、道具類をここで製作していた可能性を示唆する。さらに、SB 11のアズキ、アワが次期の栽培に備えた備蓄分を含む可能性も充分考え得る。とすれば、畑地耕作すなわち食糧生産活動も行ったことを推測できる。宗教・祭祀・呪術行為だけでなく、道具の加工・製作、さらには食糧生産など、中世長命寺で行われた様々な活動や、寺院内での生活実態を示す資料群を得たこともまた、今回の発掘調査の大きな成果といえよう。

伝承によれば、中世長命寺の廃絶は天正十年(1582)である。しかし、16世紀の土器・陶磁器はほとんどない。五輪塔には16世紀半ばに下るものがあり、造塔が続いて墓域は継続するとみてよいが、生活痕跡はごく希薄となる。時期不明の遺構のなかに、長命寺の廃絶までの16世紀に属するものがある可能性は否定できないものの、その存在を明確にすることはできなかった。

第5章 兜山遺跡 兜山古墳

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観（第107図、P.L21）

兜山遺跡は千曲川左岸地域、佐久市大沢川兜山に所在し、ハヶ岳連峰から北東に延びる丘陵の頂部～南斜面に立地する。遺跡範囲は東西約250m、南北約90mで、標高は740～724mを測る。縄文時代および古墳時代～古代の遺物散布地として周知されているが、遺跡内容は明確でない。

兜山古墳は、兜山遺跡西半部の一角、丘陵斜面の中腹部に位置する古墳時代終末期の古墳で、横穴式石室を内部主体とする。中部横断道の建設に伴う確認調査で新たに発見された古墳である。

兜山遺跡が立地する丘陵上には幾つかの遺跡が連なる。西方には、古墳時代～古代の遺物散布地である大柵遺跡、縄文時代前期～中期後半および平安時代の住居跡群が確認された一丁田遺跡（市教委1996）がある。東方には、縄文時代～中世の遺物散布地である城山遺跡および中世城跡の荒山城跡が存在する。一方、丘陵の南方には東流する大沢川が形成した扇状地が広がっており、大沢川右岸部に大沢屋敷遺跡が存在する。大沢屋敷遺跡については本書第6章で報告する。

2 調査の経過（第108・109図、P.L21）

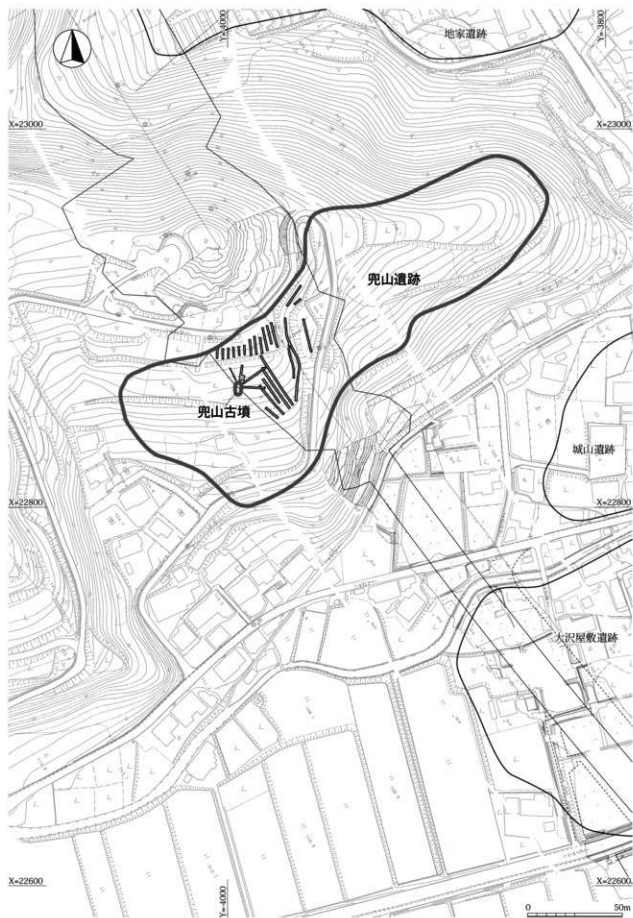
中部横断道用地は遺跡範囲の中央部～西寄りを南北に横断する。調査前の地目は山林、畑地および荒地で、畑地等の区画造成が複数段にわたってつくられていた。調査は2008・2011・2012年度に実施した。

2008年度は、遺跡内容や遺構・遺物の分布状況が不明確であったため、まず、確認調査を行い、必要に応じて面的調査に移行する計画を進めた。未取得地を除く範囲に合計23本のトレンチ（1～23 T）を掘削したが、遺構はなく、表土からわずかな遺物が出土したにとどまった。また、未取得地は急斜面となっており、周辺で遺構が存在しなかったことをふまえ、未取得地を含めて面的調査不要と判断した。

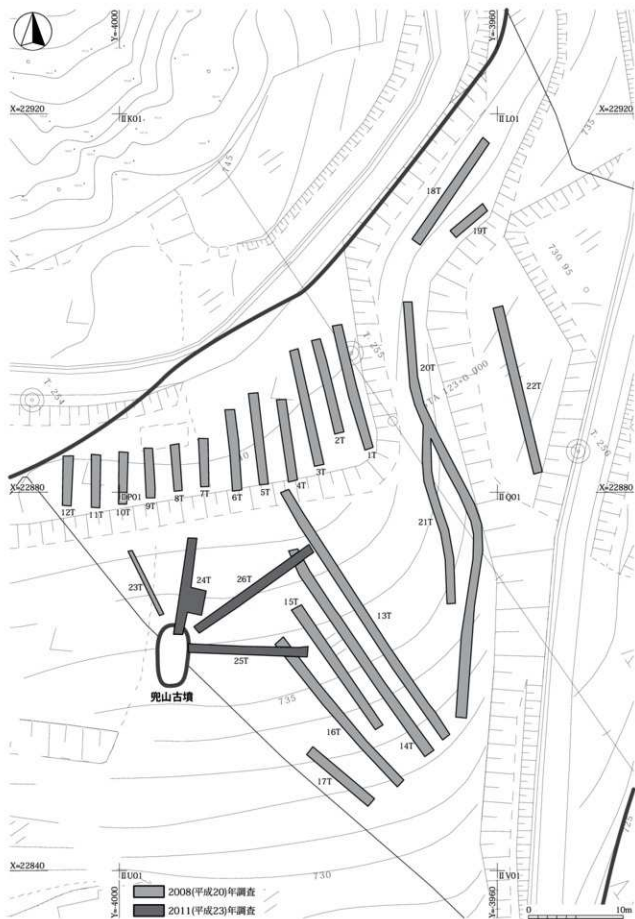
一方で、対象範囲の西側用地境付近に石積みを発見し、清掃・精査を行った。石積みは1.5mほどの間をおいて大形石が南北方向に2列に連なり、その北端には2列に直交する巨石が存在し、全体としてコ字状の並びを呈していた。その内部および周囲には拳大～人頭大の礫が集積しており、南東側には巨石が崩落していた。市教委と検討・協議した結果、横穴式石室であると判断し、市教委は兜山古墳として登録した。調査面積は4,000㎡、期間は11月10日～12月16日である。

2011年度は、兜山古墳の範囲と現況確認のためのトレンチ調査を実施した。石室の北・北東・東側にそれぞれ1本、合計3本のトレンチ（24～26 T）を掘削した。その結果、対象地内には墳丘および周溝が残存していないこと、石室上部は崩壊して原位置を留めていない部分が多いことがわかった。調査面積は340㎡、期間は10月4日～11月21日である。

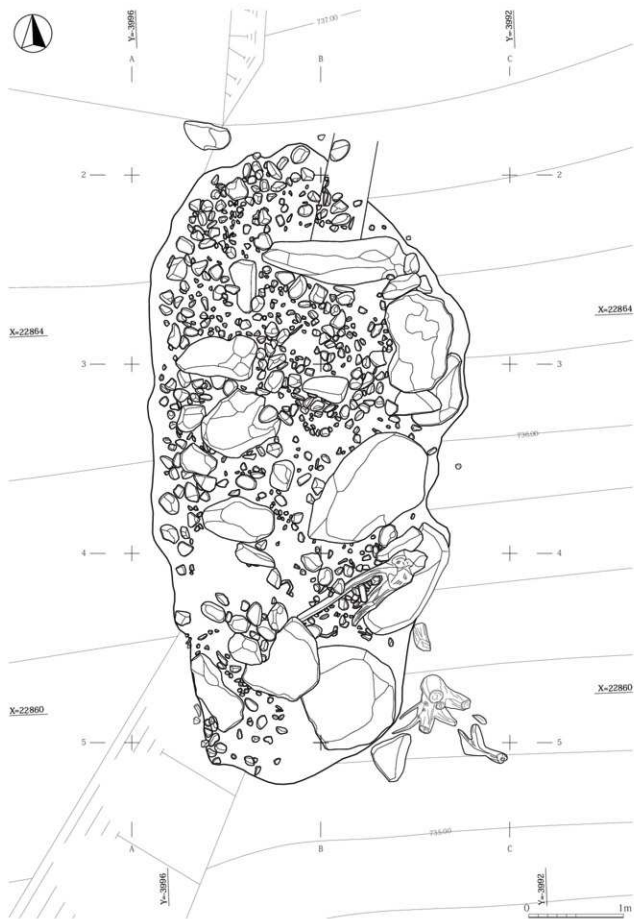
2012年度は、兜山古墳の横穴式石室について、記録保存のための本発掘調査を実施した。石室は、その南西部が隣接する私有地に及んでいる。この部分についての発掘承諾を土地所有者から得たうえで、石室全体の発掘調査を実施した。調査面積は30㎡、期間は5月15日～8月28日である。



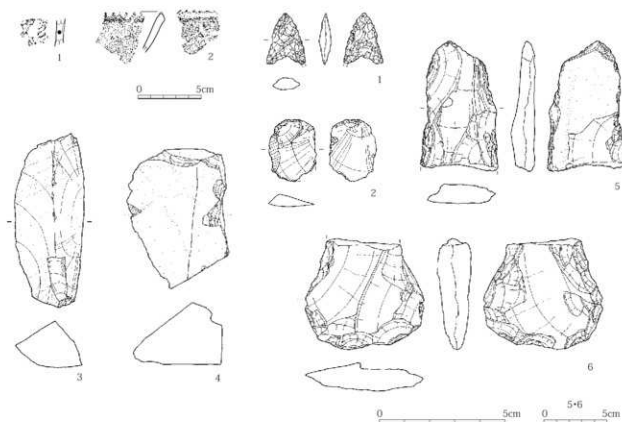
第107图 遺跡範囲・調査区位置图



第108図 トレンチ配置図



第109図 兜山古墳 石室検出状況



第110図 兜山遺跡 出土遺物

3 兜山遺跡の調査概要

(1) 概観 (第108図、P.L.21)

兜山遺跡では、兜山古墳周囲の3本を含めて合計26本のトレンチを掘削した。しかし、厚さ10～40cmの表土直下が黄褐色～明褐色土の地山となり、調査範囲内には遺構も遺物包含層も存在しなかった。遺物は表土から縄文土器、石器が少量出土したのみである。また、兜山古墳石室の埋土、裏込め、旧表土中から縄文土器、石器が若干出土した。それらについても本項で報告する。

(2) 出土遺物 (第110図)

土器 (1・2) 1は深鉢胴部片で、胎土に繊維を含み、外面に絡状体圧痕を有する。縄文時代早期末葉に属すると考える。兜山古墳石室裏込めから出土した。2は深鉢口縁部片で、鋭くつまみ出した口唇部に鋸歯状に連続刻みを施す。口縁直下は無文部となる。縄文時代後期中葉加曾利B1式に該当するものと考える。24トレンチ表土から出土した。

石器 (1～6) 石器は縄文時代に属する可能性が高い。1はチャート製の無茎凹基鏃である。2は黒曜石剣片で、片方の側縁～下縁に微細な剝離があり、使用痕の可能性もある。3・4は黒曜石原石である。5・6は打製石斧で、石材は安山岩である。5は刃部を欠損する。両側縁が磨耗しており、柄への装着痕である可能性がある。6は基部を欠損する。刃部は磨耗しており、対象物との衝突によって生じた使用痕と推測する。1は兜山古墳の石室裏込め中、2は17トレンチ表土、3・4は兜山古墳石室埋土1層、5は兜山古墳周辺の表土、6は兜山古墳石室下の旧表土の出土である。

第2節 兜山古墳

1 概観 (第107図、P.L.21)

兜山古墳は千曲川左岸地域、佐久市大沢字兜山に所在する。八ヶ岳連峰から北東に延びる丘陵の南東斜面中腹に立地し、南に開口する横穴式石室を内部主体とする古墳時代終末期の古墳である。標高736m前後を測る。墳丘および周溝が残っていないため、墳丘規模は明らかでない。

本古墳が立地する丘陵上には、東方約450mに城山古墳、西方約500mに一丁田古墳群1号墳・2号墳が存在する。一丁田2号墳は市教委が行った一丁田遺跡の試掘調査により検出された古墳で、横穴式石室を内部主体とする(市教委1998)。「佐久市志」(佐久市1995)は、大沢地区には一丁田古墳群2基、城山古墳群3基の合計5基の古墳が存在したが、現在2基しか確認できないと記す。この2基は、城山古墳および一丁田1号墳のことであろう。

本古墳周辺の7世紀から8世紀にかけての集落遺跡については、市道遺跡、辻遺跡、儘田遺跡などの発掘調査により、東方平地部の千曲川沿いの微高地上に該期の集落が展開する状況が明らかになっている(市教委2008)。一方、本古墳が立地する丘陵上および南側扇状地上では、該期の様相は不明確である。

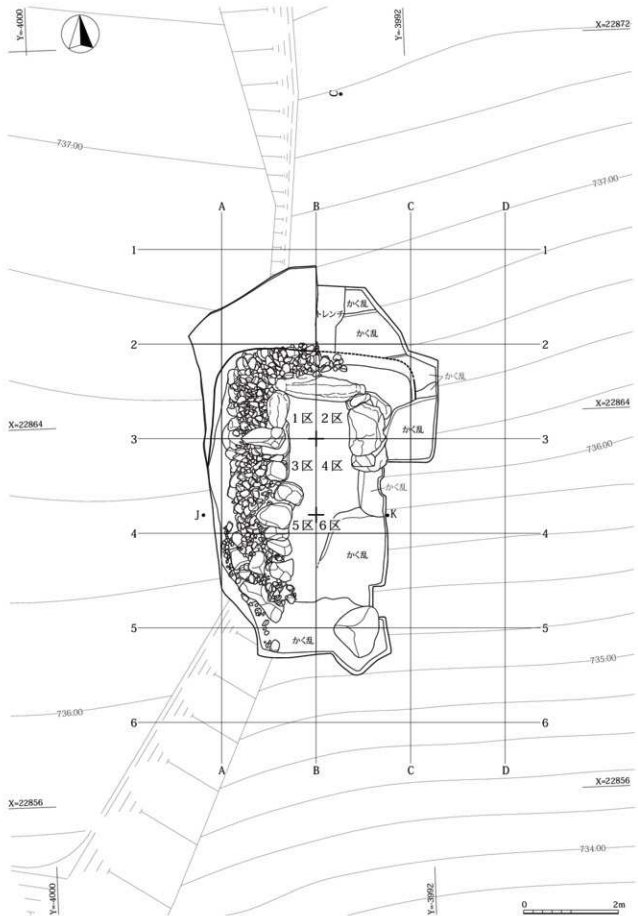
2 発掘の方法 (第111図)

発掘を開始するにあたり、石室壁残存部の形状と方向に合わせた石室長軸(主軸)と、それに直交する短軸を設定した。短軸は断面図の作成を考慮して、側壁全体の遺存状況が最も良い、奥壁から約1mの位置に設定した。さらに石室長軸・短軸を基準として2mメッシュの調査グリッドを設定した。長軸に平行するグリッドラインは4本設定し、西からA～Dと呼称した。短軸に平行するラインは6本設定し、北から1～6の呼称を与えた。Bラインが石室長軸延長、3ラインが短軸延長にあたる。グリッド杭はラインの交点に打設し、B3、C4のように呼称した。

石室内の調査は、Bラインと3ラインおよびセクションラインJ-Kにより石室内を6分割、左奥から千鳥状に1区～6区と呼称し、それぞれの区画を石室調査の単位とした。掘下げは断面観察用ベルトを残して区画ごとに進め、断面観察用ベルトは観察と記録を済ませた時点で崩し、再度ベルトを残して各区を掘り下げる工程を数回繰り返して床面まで精査した。石室埋土最下3層土(床障間埋土4層を含む)は篩別・水洗し、微細遺物の抽出を試みた。床面調査終了後、床を断ち割り、床構造と下部状況を調査した。

石室内の調査が一定程度進んだ段階で、壁体外側の調査に着手した。最上部の土石層(1層)を除去するとともに、周囲の平面精査を行い、原位置を保つ裏込めの上面および外縁と掘方のプランを捉えた。石室長軸・短軸およびJ-Kラインに沿ってベルトを残し、掘方および裏込めの調査に取り掛かった。遺存状況良好な西半部については、掘方壁と裏込め間の充填土を掘り下げ、裏込め外面を立体的にも把握・記録して裏込めの解体調査へと進んだ。一方、東半部は、耕作等のかく乱により掘方上部および南部が失われ、裏込め礫もほとんど残存していなかった。

石室の床下調査と裏込め解体調査の後、石室壁体の解体調査および掘方底面調査を行った。壁体の解体や崩落した大形石材の除去には重機を用いた。なお、発掘状況を記録するにあたって、側壁などの左・右および奥・前の表現は、開口部から奥壁に向かっての左・右、奥・前とした。



第111図 兜山古墳 任意グリッド設定状況

3 石室

(1) 残存状況と埋没状況 (第112～115図)

本古墳の内部主体は南に開口する横穴式石室である。石室は、上部および玄室右側壁前部から羨道右側壁が失われているが、奥壁および左側壁と玄室右側壁奥部の下部が残存する。

石室内の埋土は3層に分かれる。1層は現代遺物を含み、石室内から壁体外側に及ぶ。2層には裏込めに由来すると思われる礫が多く混入する。壁体石と考えられる大形の石もある。最下の3層は礫の混入が少なく2層に比べて層厚も薄い。3層は天井部が存在していた期間の形成であり、2層は天井部損失後の堆積と推測する。3層中で平安時代の土器がまとまって出土したことから、2層の堆積はそれ以降とみてよいだろう。壁体石が失われた南東部では、2層も外側に流れ出している。

なお、墳丘および周溝は残存していないが、石室西側に存在する6層(第114・115図)は墳丘盛土の残存と考える。旧表土(10層)と地山土(11層)のブロックを含み、粘性・しまりがある暗褐色土で、掘方充填土(8層)および旧表土の直上を覆う。調査区西壁で南北長2.3m、最大厚16cmを確認した(第115図)。

(2) 石室の構造 (第112～116図、P.L21～23)

石室は残存長4.0m、奥壁部分での幅1.3mを測り、床面からの高さは最大110cmである。長軸はN25°Eを指し、丘陵斜面の走向に対してほぼ直交する。立柱石と欄石が玄門を構成する。石室の石材は、奥壁が火山礫凝灰岩、その他の壁体・裏込めは輝石安山岩である。床礫はほとんど輝石安山岩だが、床上部の礫敷はチャートを含む。火山礫凝灰岩・輝石安山岩は古墳周囲の山体に含まれる岩石であり、チャートは千曲川の河原で採取可能である。

玄室 玄室は、立柱石を含めた左側壁で長さ2.4m、幅は奥壁部1.3m、中央部1.4mを測る。

奥壁は第1段が残存する。高さ130cm、幅200cm、厚さ60cmの扁平な一枚石を用い、石材の広い面を内側に向けて設置している。左右両端は側壁面の外側に突出する。床面からの最大高は110cmである。

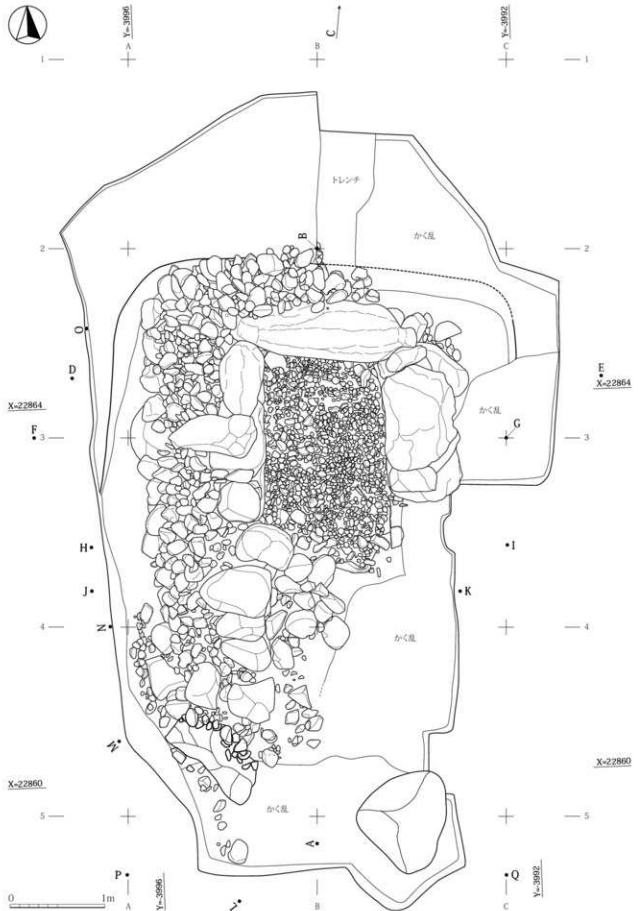
左側壁は壁体石が最大3段残存し、床面からの高さ100cmを測る。第1段は石材2石、第2段は3石で構成され、第3段は2石が残る。壁体石は総じて石材の大きさ・形状が不揃いである。各段を構成する石の上面レベルも一定せず、目地が通らない。

右側壁は壁体石が最大4段残存し、床面からの高さ80cmを測る。第1段は石材2石、第2段は2石が残る。第3段は2石が残るが、玄門側の1石(現状割れている)は、板状石材を奥壁側第2段の上から玄門側第1段の上に斜めに架すように積んでいる。その上に第4段の1石が残存する。右側壁も石材の大きさ・形状が不揃いで、各段の上面レベルが一定しない。なお、右・左側壁とも、壁体石第1段の下に小形の石材を詰めている部分がある。

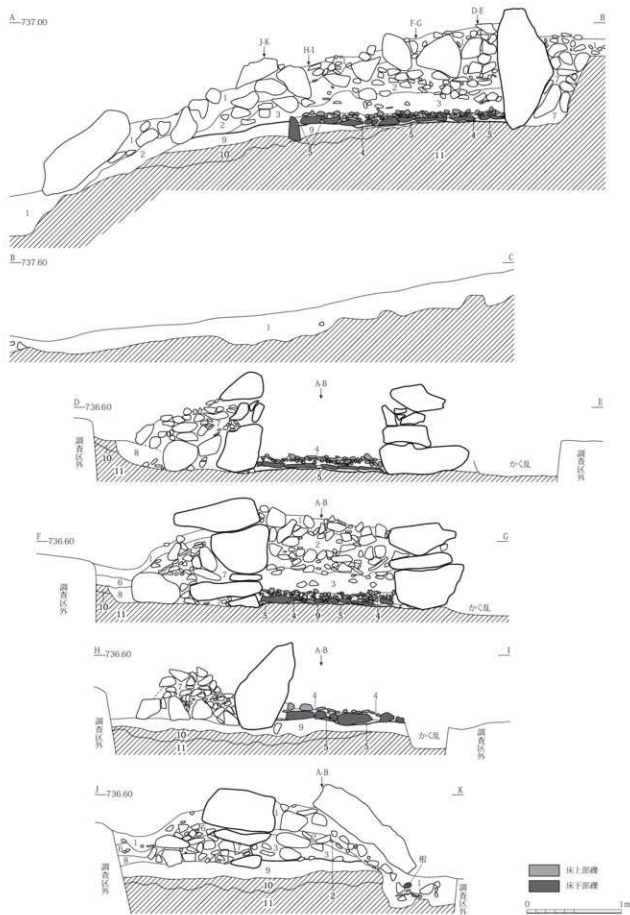
側壁壁体石の積み方は、基本的に石材の長手を石室長軸に平行に用い、石材の広い平坦面を上下に向けた平積みにしており、腰石積みの用材法ではない。また、第3段の玄門側の石は細長い石材の長手を石室長軸に直交させている。2層に落ち込んでいた壁体石と判断できる大型の石材も、長手が石室長軸に直交する状態のものが多かった。壁体の下部と上部で用材法が異なっていたと考える。壁体は持ち送り状に積み上げており、壁面は内傾する。それに対応してか、立柱石の内面も内傾している。

立柱石は左側のみ確認した。高さ90cm、幅45cm、奥行50cmの石材を立てている。内面は、玄室壁より30cm、羨道壁より20cmほど内側に張り出す。外側に壁体石はない。右立柱石の掘方ないし抜痕は確認できなかったが、欄石左端が左立柱石に接すること、欄石右端と右側壁の位置関係からすれば、右立柱石も存在した可能性が高いと考える。

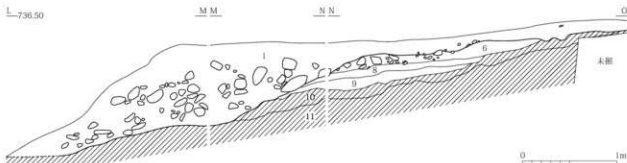
床は、15～40cmの扁平な亜角礫を密に敷き並べた直上に、5～10cmを主体とした小円礫・亜円礫を敷き詰めた二重構造をもつものである。下部礫敷の直下にはごく薄い敷土層が存在する(5層)。砂を多く



第112図 兜山古墳 石室平面図(女室床上部)



第114図 兜山古墳 石室断面図(1)



- | | | | |
|----------------|--|------------------------------|--|
| 1 表土 | 調査範囲全体の表土を一括する。耕作土、造成土、かく乱、石室最上部の土石層（現代）を含むシルト。しまりやや弱。粒子細。空隙目立つ1mm以下小礫1~2%混。裏込め石とみられる50~300mm礫混。壁体石と考える大型の石材あり | 5 暗褐色 | シルト。粗砂~細砂多混(10YR3/3~3/4) |
| 2 黒褐色(10YR3/1) | シルト。しまりやや弱。粒子細。空隙目立つ1mm以下小礫1~2%混。裏込め石とみられる50~300mm礫混。壁体石と考える大型の石材あり | 6 暗褐色(10YR3/4) | 下層礫直下の薄い敷土層。下部床敷土シルト。粘性・しまりあり。旧表土ブロック・地山ブロック微混。墳丘盛土シルト。粘性あり。しまりやや弱。粒子極小。 |
| 3 褐色(10YR4/4) | 石室埋土層（およびその流出）シルト。粘性あり。しまり普通~やや弱。粒子上部に50~70mm円礫・下部に100~200mm垂円礫混。他に1~5mm・10~15mm礫混 | 7 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) | 礫多混。裏込め |
| 4 褐色(10YR4/4) | 石室埋土下層シルト。粘性あり。しまりやや弱。粒子極小。10~30mm垂円礫・角礫・1~5mm小礫多混。3層に類似。上床敷敷きの隙間に流入した3層が主体か。上部床礫間隙の土 | 8 暗褐色(10YR3/4) | シルト。粘性・しまりあり |
| | | 9 褐色(7.5YR4/6) | 旧表土ブロック・地山ブロック主体。掘方埋土シルト。粘性ややあり。しまりあり |
| | | 10 黒褐色~暗褐色(10YR2/2~3/3) | 地山土主体。旧表土ブロック混。石室敷土シルト。黒褐色土・暗褐色土が塊状に堆積 |
| | | 11 明褐色~黄褐色(7.5YR5/6~10YR5/6) | 旧表土シルト。粘性・しまりあり。地山 |

第115図 兜山古墳 石室断面図(2)

含むシルトであるが、本来砂のみだった可能性もあろう。礫の安定材としての機能を推測しておきたい。

羨道床との境には板状石材2石を横並びに配した柵石が設置されている。右側は大振りて横長の石材、左側は小振りの石材を用いている（PL 22）。上端は床上部礫敷と同レベルで、床より突出しない。左端は立柱石に接する（PL 22）。柵石は掘方をもたず、9層を敷き詰めることで固定している。

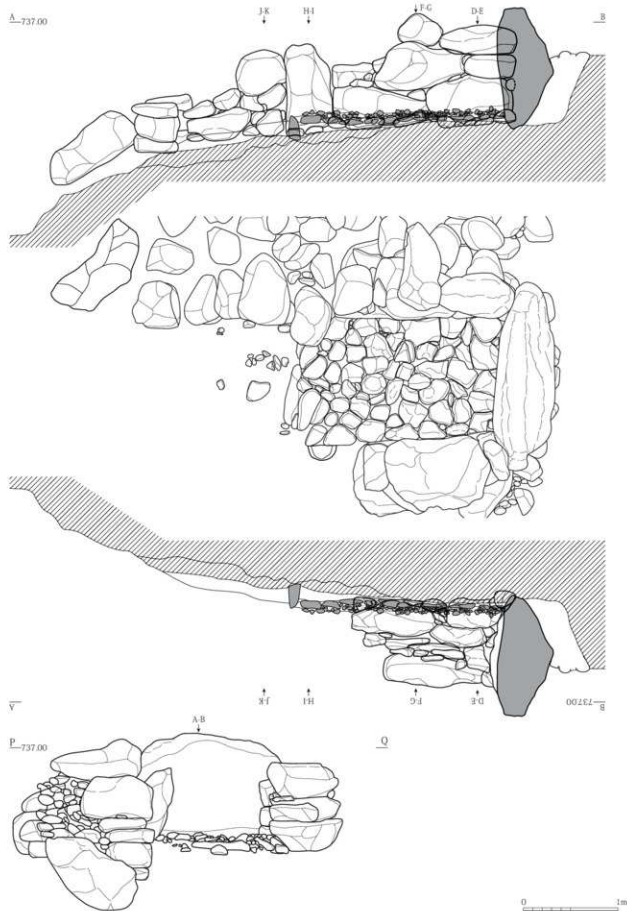
羨道 羨道は左側壁のみ残存し、長さは1.6mを測る。幅は明確ではないが、玄室とほぼ同じかわずかに狭い幅を想定しておきたい。壁体石は最大4段が残存し、壁面は内傾する。床面（9層上面）からの高さは80cmを測る。第1段は最前部の1石のみ、第2段は3石、第3段は4石で構成される。第4段は最奥部の1石のみが残存する。玄室同様、壁体石は大きさ・形状が不揃いであるが、第2段の上面レベルがほぼ揃う。最前部の壁体石の左側には、それとほぼ同大の石が2石連っており、裏込めの右外縁に接続する。こうした状況から、最前部壁体石の前端を羨道の前端と捉えて、上記の羨道長とした。

壁体石の積み方は、石材の広い平坦面を上下に向けた平積みには玄室と同様であるが、石材の長手を石室長軸に直交させる傾向を窺うことができる。総じて、玄室に比べて石材は小振りであり、外圧への対処法として、用材法に差異が生じたことを推測しておきたい。

羨道の床については、9層の上に5~10cmの小円礫・垂円礫が若干存在し、また、20×30cmの扁平礫が1石あることから、本来、礫敷が施されていたと推測する。右側壁が失われたことにより流失したのであろう。二重構造を成していたかどうかは明確でない。

柵石の前面に、20~30cmの礫が乱雑に重なった状況が認められ（第112・114図）、発掘段階では閉塞施設の残存である可能性を考えた。しかし、礫間の隙間は大きく、隙間の土は特に堅固でも特異な土質でもないため、壁体や裏込めの崩落である可能性を否定しきれない。

天井石の推定 天井石の可能性が高い扁平な形状の巨石3石が石室東側~南側の1・2層に崩落していた（第109・114図）。長軸1.3~1.6m、短軸1.0~1.2m、厚さ40~60cmを測る。側壁面が内傾することは上述したが、同じ傾斜角が続くとすれば、床面から高さ1.5mで左右壁面間は約1mとなり、3石は天井石として充分架構し得る。検出時の接地面は、反対面に比べて平坦な形状を成しており、天井面と考える。



第116图 兜山古墳 石室立面图

(3) 掘方と裏込め (第112～115図、P.L.21～23)

石室は斜面を断面L字状に切り開いて平坦面を造成した掘方内に構築されている。掘方は平面コ字状を呈し、開放する南がやや広がる。北壁東半～東壁は削平やかく乱により遺存状況が悪い。北壁長4m、東壁残存長80cm、西壁確認長2.3m、深さは北壁中央部で最大の70cmを測る。掘方底の、玄室中央にあたる位置から南側には敷土が施され(9層)、9層施工部分では、その上面が石室構築の基底面となる。

壁体石の外側60～80cmほどの範囲で重円礫・亜角礫を用いた裏込めが壁体を囲む。掘方壁との間には土(8層)を充填するが、奥壁部分ではほぼ礫のみを充填している。掘方同様、奥壁東半～右側壁部の遺存状況は悪く、裏込めはほぼ失われている。裏込めの下部は30～50cmを主体とする大型の礫を用いており、60cmを越すものもある。上部は10～30cmの小型の礫を用いているが、外縁部に大振りの礫を配する傾向が窺える。小礫部分を押しさえ、充填土および盛土との混交を防ぐことを企図した用材法であろう。

4 遺物

(1) 出土状況 (第117図、P.L.23)

石室 石室内から鉄製品、土器、人骨が出土した。人骨については、茂原信生氏に鑑定を依頼し、結果を第3節に掲載した。

床面出土の遺物は鉄鍬、刀子がある(第118図1～5)。鉄鍬は4点が玄室右前側で出土した。うち3点は同位置にままとまっている。刀子は玄室左側壁の最前石と立柱石の間隙で出土した。出土個所に床はないが、レベル的に下部礫敷の上面にあたり、床面に伴う遺物と考える。

埋土中の遺物は土器、刀子がある。土器は、玄室床面から3～5cm浮いた埋土3層下部から平安時代の土師器・黒色土器坏・埴が多く出土した(第118図2～5、7～11)。完存個体もある。出土は、玄室左奥側・右奥側・右前側にそれぞれままとまりがある。また、羨道部の3層からも土師器坏が出土した(第118図6)。平安時代における石室再利用を示す遺物と考える。2層からは青磁碗片(第118図12)、1層からは須恵器坏・坏蓋、内耳土器、1・2層からは須恵器甕(第118図1)が出土した。刀子は1層の出土である(第118図6)。

埋土3層土(床礫間隙土4層を含む)の篩別・水洗により土師器・黒色土器坏片、鉄片を検出した。鉄片はすべて小細片で、器種や形態の特徴に言及することは困難である。

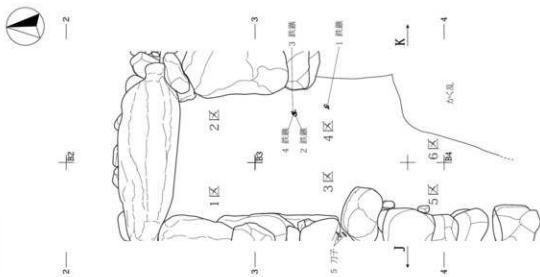
人骨は、垂直分布から上・下の2群に分け得る。上群(骨1～5)は2層と3層の層界付近に位置する。床面からは20cmほど高く、B群とは垂直分布が明らかに異なる。平面分布では、a：玄室左奥隅、b：1・2区境奥壁際、c：1・2区境前側の3箇所に位置する。上群は平安時代以降の埋葬骨の可能性が高い。下群(他番号の骨)は3層下部～床面で出土した。平面分布では、a：奥壁際、b：1・2区境前寄り、c：4区奥寄り、d：3区玄門部、の4箇所にままとまりがある。下群の主体は古墳への初葬ないし追葬時の埋葬骨と考えるが、3層下部の平安時代土器群と同レベルに位置する骨もあり、平安時代土器群に伴う埋葬骨を含む可能性がある。3層土の篩別・水洗では骨片・歯を検出した。これらも下群に属するものと判断する。歯や小骨片は床礫の間隙に落ち込んだものもあった。

人骨鑑定結果と照らし合わせると、頭部の骨や歯が玄室奥寄りに偏る傾向はあるが、総体として上群・下群とも散乱した状態で、人体本来の位置関係を保っていないと考える。骨の遺存状態不良のため、被葬者の個体数や性別・年齢について得られた知見は少ないが、鑑定によれば、上群には女性か、若いと推測される個体を含み、下群は最少個体が2個体で、ある程度年齢が進んだ個体を含む。

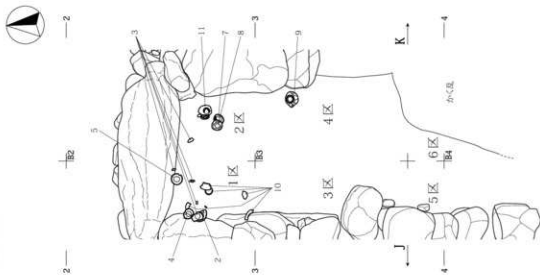
なお、骨5を試料として放射性炭素年代測定を委託により実施し、その結果を第4節に記載した。

石室外 石室周囲の表土から若干の遺物が出土している。第118図7の鉄製品が石室外B1グリッドから

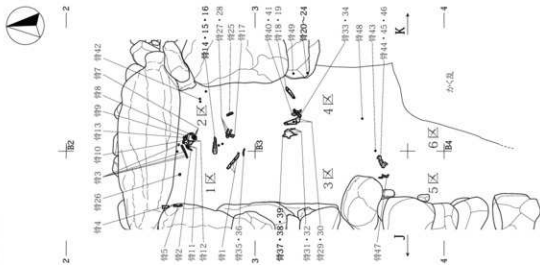
鉄製品出土状況



土器出土状況

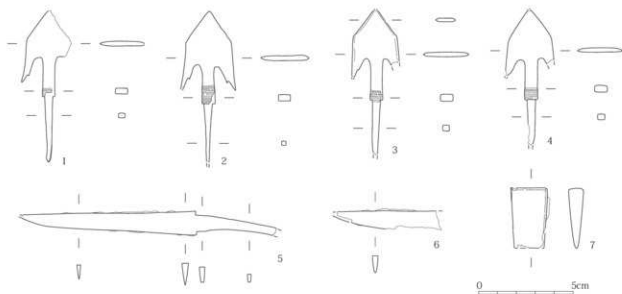


佛出土状況

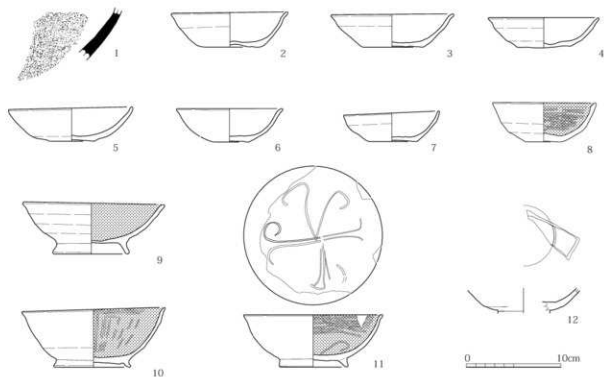


第117图 兜山古墳 石室遺物出土状況

鉄製品



土器・磁器



第118図 兜山古墳 出土遺物

出土したほか、小片のため掲載していないが、須恵器甕片がA 5・C 2グリッドほか、土師器坏片がA 4・B 4グリッドほかで出土した。なお、石室埋土・裏込め・旧表土(10層)から縄文土器、石器が若干出土したが、それらについては第1節3で報告した。

(2) 遺物 (第118図、P.L 23)

鉄鏃(1~4) 鉄鏃は4点出土した。個体により若干の違いはあるが、同一の形態とみてよいだろう。鏃身部は五角形を呈し、腸扶をもつ。腸扶は長さ1.2cm前後で、内側中央~先端寄りに挟りを施した重扶

の形態を成す。頸部長は2.1cm前後、茎間は直角間である。頸部茎寄りに巻糸らしき痕跡が残る。

刀子・その他の鉄製品（5～7） 5は刀子で、直角に切れ込む両間をもつ。上述のように床面に伴う遺物と判断した。6も刀子であるが、間部～茎を欠失している。7は楔状の鉄製品である。6は石室埋土1層、7は石室外B1グリッドから出土した。

土器・磁器（1～12） 1は須恵器の甕胴部破片で、外面は擬格子タタキ後ナデ、内面はナデを施す。石室1区埋土1層と3区2層出土の破片が接合した。2～7は土師器の坏で、底部切り離しは回転糸切り、体部は内外面とも回転ナデを施す。5は回転糸切後に手持ちヘラケズリを施す。8～11は黒色土器で、8は坏、その他は埴である。底部切り離しは8・11が回転糸切り痕を残す。外面調整はいずれも回転ナデを施す。内面調整は、8が横ナデ、9はミガキ、10は口縁部に横方向、体部に放射状にミガキを施す。11は口縁部に横方向、体部に疎らな放射状にミガキを施した後に、蕨手状ないし鉤状の暗文4対を表現している。2～5・7～11は1～4区3層下部の出土で、6は5区3層と6区1層出土の破片が接合した。12は龍泉窯系の青磁碗で、見込み周囲に沈線状の段がめぐる。石室1区2層から出土した。

5 年代

本古墳は出土遺物僅少のため、築造年代を特定することが難しい。そのなかで、年代推定の材料となるのは玄室の床面から出土した鉄鎌である。鉄鎌は4点ともほぼ同大・同型で、平林大樹氏による後期・終末期古墳副葬鎌の分類（平林2013）の平根有頸式腸扶五角（以下、腸扶五角）Ⅱ式に該当しよう。平林氏の編年では腸扶五角Ⅱ式はⅢ期に属し、Ⅲ期は飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ期に比定されている。このことから、鉄鎌は7世紀後半～8世紀初頭の年代を示すと考える。

鉄鎌の腸扶は重扶を成すが、その形態は、腸扶内側の中央付近から先端を浅い段状に切り落として整形したものといえる。信濃の重扶をもつ平根式鎌については平林大樹氏の論考（平林2014）があり、そこで大別3種、細別5種に分類されたうちのⅠb類に連なる形態であろう。重扶が腸扶五角Ⅱ式鎌の細部意匠に取り入れられた例として理解しておきたい。

本古墳の横穴式石室は、玄室と羨道の境に立柱石をもつ。奥壁は、下段に扁平な大型石材1枚を用いており、多段構成ではない。石室の規模は当地域の古墳のなかでもかなり小型の部類に属する。石室形態におけるこのような特徴は、鉄鎌の年代観におおむね整合すると考える。

材料は少ないながら、鉄鎌と石室形態から、さらに、鉄鎌が追葬に伴う可能性を考慮し、本古墳の築造年代として7世紀後半を想定しておく。

第3節 兜山古墳出土の人骨

茂原信生

兜山古墳は長野県佐久市にある古墳で、中部横断道の建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターが2008・2011・2012年に発掘調査を行った。その際、横穴式石室の玄室から人骨が出土した。出土骨は、埋葬された状態を保っていない散乱状態で、いずれも破片である。頭蓋骨と四肢骨が同じ位置にあるなど、攪乱を受けているものと思われる。なお、添付DVDおよび本文末に出土骨一覧表（第13表 266・267頁）を掲載した。以下の骨番号は一覧表に一致する。

頭蓋骨

右側頭骨の外耳道上部と錐体の一部（骨6）が出土している。乳様突起の基部は少なくとも頑丈な印象ではない。薄い骨の細片が残っているが頭蓋骨の一部である可能性はある。歯の植立していない下顎骨右側骨体の後部（骨42、第119図1）が出土している。歯槽の閉鎖状態から考えて第2・第3大臼歯が生前に脱落していた可能性が高い。

歯

上顎右I2（歯8）、下顎左P2（歯1）と上顎右M2と思われるもの（歯4）が残っている。他に下顎大臼歯片などがある。やや咬耗が進んだ大臼歯群と、あまり咬耗が進んでいない小臼歯・上顎第2切歯群に区別できる。この2つの群はエナメル質の色も異なっている。咬耗から考えて最少個体は2個体で、下顎の右第3大臼歯が生前に脱落している個体があり、ある程度年齢が進んでいると思われるが、これが先のやや咬耗が進んだ大臼歯群とは別個体で第3の個体であるかどうかは不明である。

四肢骨

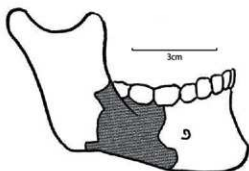
表面に侵食を受けている部分が多い。右上腕骨骨幹遠位部（骨1、第119図2）は非常に細い。三角筋粗面は発達していない。若い個体ではないと思われるので、何体かあるうちの1体は女性の可能性がある。左（骨3）と右（骨2）の橈骨骨幹部が出土している。骨間線はやや発達するが、非常に細くて華奢である。女性か若い個体であろう。右大腿骨（骨4）の殿筋隆起はやや発達している。大腿骨自体は太くなく、後面の粗線は発達していない。骨41は若い個体の大腿骨かと思われるが、断定できるほどの根拠はない。

1 右下顎骨 (骨42)



外面

内面



シャドウ部は出土した部分を示す

2 右上腕骨骨幹 (骨1)



3 大腿骨骨幹 左右不明 (骨19)



3cm

第119図 兜山古墳 出土人骨

第4節 自然科学分析

2012年度に、兜山古墳の石室内から出土した人骨を対象として、株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細については添付DVDに収録した。

目的は石室の埋没年代を推定するための資料を得ることである。試料は玄室左奥隅（1区）の2層最下部で出土した人骨1点（骨5。鑑定では右大腿骨骨幹）で、試料から抽出したコラーゲンを分析した。

分析結果は第8表に示したとおりである。1 σ 暦年代範囲では1294～1388calAD、2 σ 暦年代範囲では1285～1395calADとなり、13世紀末～14世紀末の年代を示す結果となった。

試料とした骨5は第2節4で述べた上群に含まれるもので、層位的には平安時代土器群の出土位置より上位にあたる。土層の性状と礫の出土状況から、3層は天井部が存在していた期間の形成、2層は天井部損壊後の堆積と考えている。測定結果からすれば、骨5は中世の人骨であり、天井部の損壊が起こったのは中世である可能性が生じる。

一方で、加速器分析研究所が作成した測定結果報告書には、試料の「コラーゲン回収率と炭素含有率は、コラーゲンの保存状態が良くないと判断される低い値で、年代測定の結果の解釈には注意を要する」との記載がある。状態不良の試料から得た測定年代を全面的に信頼することはできない。ここでは、考古学的知見に基づき、骨5の年代を平安時代以降とし、中世に限定しないこととしたい。

第8表 兜山古墳 放射性炭素年代測定結果

No	試料名	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	No.1	人骨	石室1区 2層 (骨5)	638 ± 24	1294calAD-1313calAD (26.0%) 1358calAD-1388calAD (42.2%)	1285calAD-1327calAD (39.9%) 1343calAD-1395calAD (55.5%)

第5節 小結

兜山遺跡では縄文土器、石器が出土した。土器は縄文時代早期末葉および後期中葉のものがあり、この地が該期の人々の活動域であったことがわかる。しかし、わずかな量の遺物が散在的に出土したのみで、遺構は存在せず、この地で展開された活動内容の詳細は明確にならなかった。

一方、遺跡の一角において未周知の古墳を1基発見し、兜山古墳として登録された。兜山古墳は、斜面を切り込んだ掘方内に横穴式石室を構築する、いわゆる「山寄せ」古墳である。墳丘と周溝は残存していなかった。石室も上部および右側壁前部が失われていたが、玄室と羨道の境に立てた立柱石、下段に大形の板状石材1枚を立てた奥壁、下段と上段の用材法が異なる側壁など、佐久地域の終末期古墳に通用の要素を認め得る。立柱石は左側壁のみ残存するが、本来、右側壁にも存在した可能性が高く、玄室と羨道の幅はほぼ同じと推測する。佐久市下大豆塚1号墳（市教委1983）や榛名平1号墳（市教委2001）の石室のように、左右から張り出した立柱石が玄門部を構成する、いわゆる擬似両袖の石室形態を想定しておく。副葬品は玄室床面から鉄鎌、刀子が出土した。出土遺物僅少のため、築造時期を特定することは難しいが、出土した鉄鎌や石室形態から7世紀後半の築造と推定した。

玄室出土の平根腸袂五角形鉄鎌は長めの腸袂に重袂を有する。こうした特徴をもつ鉄鎌は、現在のところ、

佐久地域では報告例がないようである。しかし、平林氏が指摘する（平林2014）、重袂という意匠に固執する佐久地域において、本古墳が唯一の出土例になるとは考えにくい。佐久地域の地域性を表出する資料の一つとなる可能性があり、今後、類似資料が増加することを期待する。

石室内からは、床面よりやや高い位置で10世紀前半～中頃の坏・埴がまとまって出土した。すでに指摘がある（原・島羽1979、原1998）ように、平安時代に、横穴式石室へ土器などの埋納品を伴って埋葬が行われることがしばしばある。近辺では、佐久市五雲西12号墳（白田町教育委員会1988）・幸神4号墳（白田町教育委員会1996）・東一本柳古墳（竹内・土屋1972）などの例がある。

本古墳でも、下群人骨の一部が平安時代の埋骨骨に該当する可能性があり、葬送儀礼に関わって土器が持ち込まれたものとする。土器は10世紀代のもので、100年以上の時間的隔たりがあり、本来の追葬とは異なる埋葬と考える。追葬ではなく、埋葬の場として横穴式石室が再利用された事例の一つとして理解する。上群人骨は、下群の土器群を伴う埋葬から一定の期間を経た後の埋葬に伴うものといえる。その時期について、2層から13世紀前半の青磁片が出土していることは示唆的だが、小片1点に過ぎないため混入の可能性も充分あり、平安時代以降とするにとどめる。本古墳では、古墳本来の埋葬が終了した後に、少なくとも2回の石室再利用埋葬があったと考える。仮に再利用1期、再利用2期とすると、再利用1期の土器群には時期差が窺え、そこでも複数回の埋葬が行われた可能性を推測しておきたい。

引用・参考文献

- 白田町教育委員会 1988 「五雲西12号古墳」
 白田町教育委員会 1996 「幸神古墳群」
 佐久市 1995 「佐久市志」歴史編（一）原始 古代
 市教委 1998 「市内遺跡発掘調査報告書1996」
 市教委 1983 「下大豆塚1号・2号古墳」
 市教委 2001 「榛名平遺跡」第Ⅱ分冊 弥生・古墳編
 市教委 2008 「市道遺跡Ⅲ 辻遺跡 儘田遺跡Ⅱ 西表遺跡」
 竹内恒・土屋長久 1972 「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』第13号
 津野仁 1990 「古代・中世の鉄鏡」『物質文化』54
 富沢一明 2000 「信濃、千曲川流域における横穴式石室の導入と展開—東信地域を中心として—」『専修考古学』第8号
 原 明芳・島羽英継 1979 「麻績村土塚古墳発掘調査報告」『長野県考古学会誌』33
 原 明芳 1998 「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌』86
 平林大樹 2013 「信濃における後期・終末期古墳副葬品の変遷」『物質文化』93
 平林大樹 2014 「信濃における後期・終末期古墳副葬品の生産と流通」『信濃』第66巻第9号

第6章 大沢屋敷遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観 (第120図)

大沢屋敷遺跡は佐久市大沢地籍に所在する。佐久盆地の千曲川左岸地域には、八ヶ岳の北端部から延びる丘陵が幾重にも張り出しているが、遺跡はそうした丘陵の間を東流する大沢川が形成した扇状地に立地する。遺跡の範囲は東西約380m、南北約140m、標高は706～693mを測る。扇状地の北寄りを流れる大沢川の右岸に沿って延び、大部分が大沢集落域と重なる。大沢集落の西～南側は水田域となっている。

大沢屋敷遺跡は縄文・古墳時代の遺物散布地として周知されていた。2009年、中部横断自動車道建設事業に伴い、県教委が遺跡西端部の南側隣接地において試掘調査を実施したところ、県道150号百沢白田線（以下百沢白田線）の北側部分で、土坑および流路跡と縄文～弥生時代と考えられる多数の土器を検出した。市教委との協議の結果、遺跡範囲は百沢白田線まで拡大された（県教委2010）。

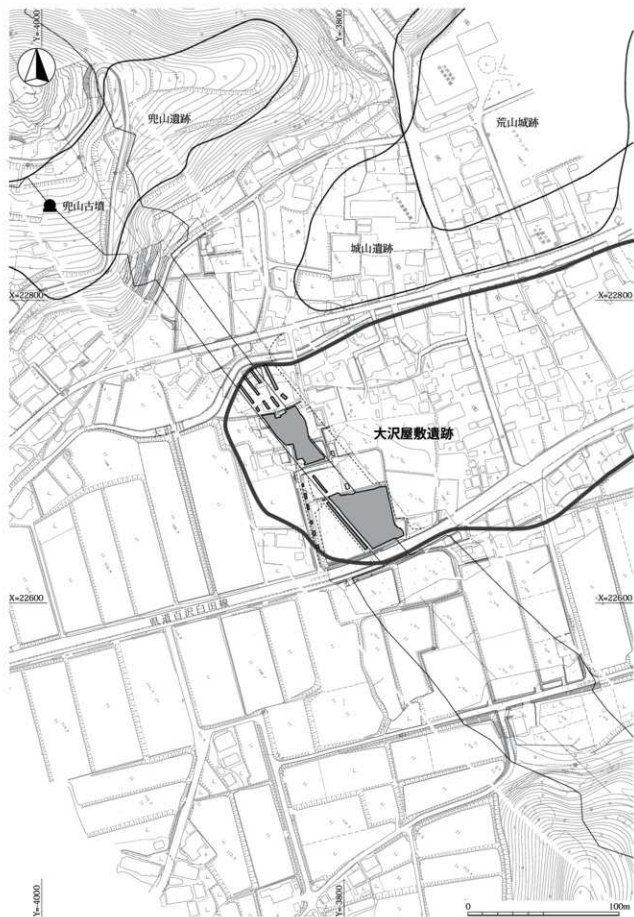
扇状地の北縁を限る丘陵上には幾つかの遺跡が連なっている。本遺跡の西北方には縄文時代・古墳時代および古代の遺物散布地である兜山遺跡が位置する。兜山遺跡については第5章で報告した。西方約600mの丘陵上から裾部にかけて広がる一丁田遺跡では、縄文時代前期～中期後半および平安時代の住居跡群が確認されている（市教委1998）。東北方の丘陵先端部には中世城跡の荒山城跡がある。また、丘陵頂部から裾部にかけて広がる城山遺跡は縄文時代～中世の遺物散布地である。一方、扇状地上には、東南方の扇端部付近に大中沢遺跡が位置する。古墳時代・古代の遺物散布地である。

2 調査の経過 (第121図)

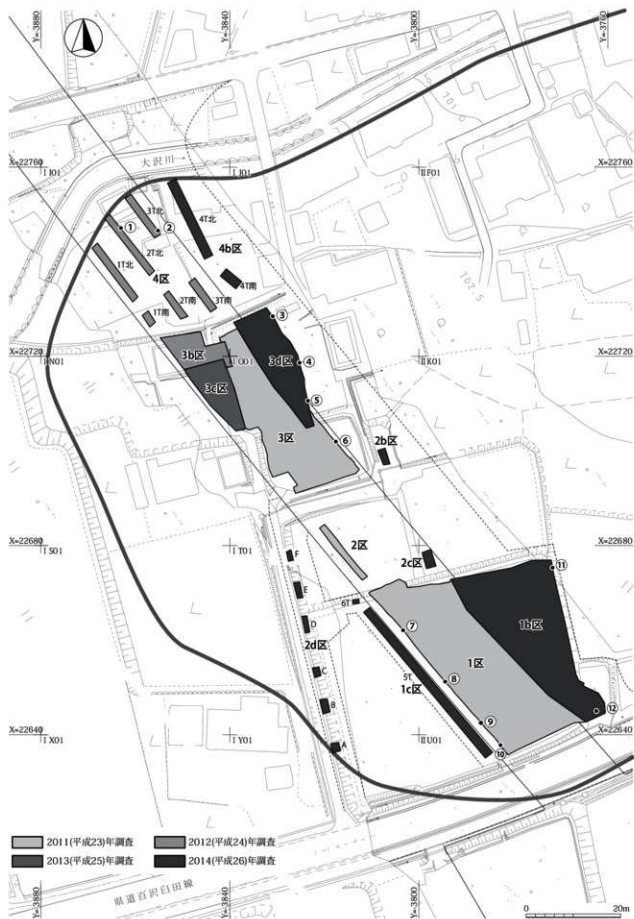
中部横断自動車道は、遺跡の西端部を南北に横断するように通過する。用地取得の進捗状況等により、発掘調査は2011年から2014年の4年次にわたる調査となった。土地区画と現道により対象地を四分割し、南から1区・2区・3区・4区と呼称して、発掘調査の単位とした。調査前の地目は、1区と2区は水田、3区は南半が水田、北半が畑地、4区は宅地および荒地であった。

2011年度は1区～3区について発掘調査を実施した。調査面積は1,880㎡、期間は9月12日～11月28日である。1区は県教委による試掘調査で土坑や遺物包含が確認された部分で、当初から面的調査を計画した。発掘では、縄文時代後期中葉初以前の遺物を包含する黒色土層と土坑6基、自然流路跡2条を検出した。遺物包含層はほぼ調査区全域に広がり、出土土器の大部分は後期前葉に属する。土坑と自然流路跡は調査区南部に分布し、出土土器の様相は包含層とほぼ同様である。2区は、県教委の試掘調査で表土直下に砂礫層が露出し、遺構・遺物が確認できないことから、削平を受けていることが予想された。確認トレンチを掘削したが、やはり、遺構・遺物とも存在しなかった。3区は県教委の試掘が及んでいないため、まずトレンチ調査を実施した。その結果、土坑や遺物包含層を確認し、面的調査を行うこととした。遺構は北部で土坑10基を検出し、そのうち8基は円形に並ぶ。遺物包含層は北部から中央部に広がり、南端部には残存していなかった。出土遺物の様相は1区とほぼ同様である。

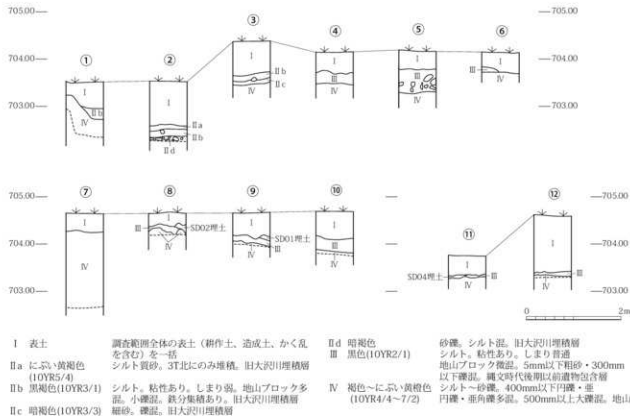
2012年度は3区北端部と4区の調査を行った。調査面積は582㎡、期間は8月28日～9月21日である。



第120図 遺跡範囲・調査区位置図



第121図 トレンチ・調査区配置図



第122図 土層柱状図

3区では土坑4基と遺物包含層を検出した。調査区名は3b区とした。4区は、トレンチ調査の結果、大沢川の旧河道の侵食部分にあたり、遺構・遺物包含層が残存していないことが明らかになったため、面的調査不要と判断した。

2013年度は、3区北端部に調査を実施した。調査面積は100m、期間は11月7日～11月27日である。調査では土坑4基と遺物包含層を検出した。調査区名は3c区とした。

2014年度は、本線残件部分、隣接地に計画された工事用仮設道路建設部分、市道新設部分について、合計7箇所(1b・1c・2b・2c・2d・3d・4b区)の調査を実施した。調査面積は2,218m、期間は4月9日～6月10日、10月16日～11月25日である。1b区および3d区では土坑と遺物包含層を確認した。土坑は1b区で11基、3d区で8基を検出した。出土遺物の様相は2011年度と同様である。ただし、1b区北端部で遺物包含層を切る自然流路跡から平安時代の須恵器が出土した。4b区は大沢川の旧河道部分にあたり、1c・2b・2c・2d区は後世の削平を受けており、遺構および遺物包含層は存在しなかった。

以下、一体化した1区・1b区をまとめて1区、3区・3b～3d区をまとめて3区と呼ぶ。

3 基本層序(第121・122図、P L 25)

基本層序は第I～IV層に大別できる。第I層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査範囲全体の表土を一括する。第II層は、大沢川の旧河道部分を埋積するシルト・細砂・砂礫で、3区北端部から4区に存在する。第III層は、基盤となる第IV層の直上に堆積する黒色シルトで、3区北部から中央部、1区はほぼ全域に分布する。縄文時代早期(後述のI群)・前期(II群)・中期(III群)・後期(IV群)の土器を包含する。その大部分は後期初頭～前葉(IV 1～3類)で、他の時期は少ないかわずかである。第IV層は遺跡全体の基盤を成す褐色～にぶい黄褐色シルト～砂礫である。円礫～垂角礫を多量に含み、50cm以上の巨石も混じる。

1区深掘部(土層柱状図⑦)では、上部40cmほどはシルト主体であるが、それより下位は砂礫主体となり、砂礫やシルトの不規則な累積が1.4m以上続く。こうした様相から、扇状地堆積物と考える。

遺構埋土は第Ⅲ層に酷似しており、平面的に分別することは困難で、遺構は第Ⅳ層上面で検出した。ただし、ST01P8とSK10は調査区壁にかかり、断面観察により第Ⅲ層を掘り込むことを確認した。

第2節 遺構と遺物

1 遺構

遺構は1区南部、1区北東部、3区北部の3箇所に存在し、分布域と空白域が明確に分かれる。確認数はそれぞれ土坑9基、土坑8基、土坑18基および円形土坑列1基を数える。また、1区南部と1区北東部で自然流路跡をそれぞれ3条、1条検出した(第123～125図)。

(1) 円形土坑列

ST01(第126図、PL24・25)

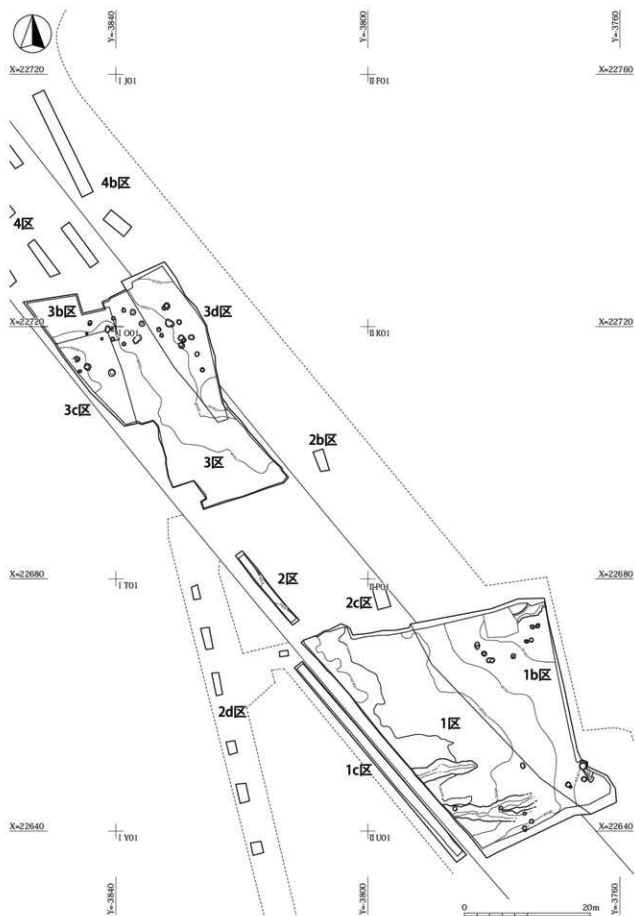
位置：3区北部、I I 25・J 21・N 05・O 01グリッド。検出：3区北部の遺構検出過程において、8基の土坑が円形に並ぶことが判明し、この土坑配置をST01と呼称することとした。各土坑には既に遺構番号(SK番号)を付していたが、ビット番号を新たに付与した。対応は第126図のとおりである。P1～P7は基本層序第Ⅳ層上面で検出した。P8は調査区南西壁にかかり、断面観察によって第Ⅲ層を切ることを確認した。重複関係：現状なし。埋土：8基とも同性状の黒褐色シルトの単層である。形状・規模：土坑配置はビット外縁で測って南北方向6.0m、東西方向5.3mで、南北にやや長い円形を呈する。ビット間隔は、心々で1.5～2.5mとばらつきがある。各ビットの形状は、やや不整な円形ないし楕円形である。平面規模は、西側のP1・2・6・7・8が長径60～70cm程度で相対的に小型であるのに対し、東側のP3・4・5はより大型である。P5は、短径では90cmとP3・4とさほどの差はないが、長径の140cmは大きな差がある。別土坑と切り合っている可能性も否定できないが、確認できなかった。深さは、最も浅いP2が26cm、最も深いP5が43cmである。遺物：ビットから縄文時代前期および後期初頭・前葉土器(第134図104～112)、黒曜石石錐・両極石器・剥片・砕片、安山岩打製石斧(第138図37)、大形スクレイパー(第138図40)、凹石(第139図52)、磨石が出土した。時期：出土土器の主体は縄文時代後期初頭～前葉であるが、P8が第Ⅲ層を切ることを考慮して、後期前半と考える。本遺構は堅穴建物の柱穴、掘立柱建物、円形柱列といった性格を想定し得るが、確定できないため、円形土坑列とした。

(2) 土坑(第127～130図、遺物：第131・134・139図、PL24～26)

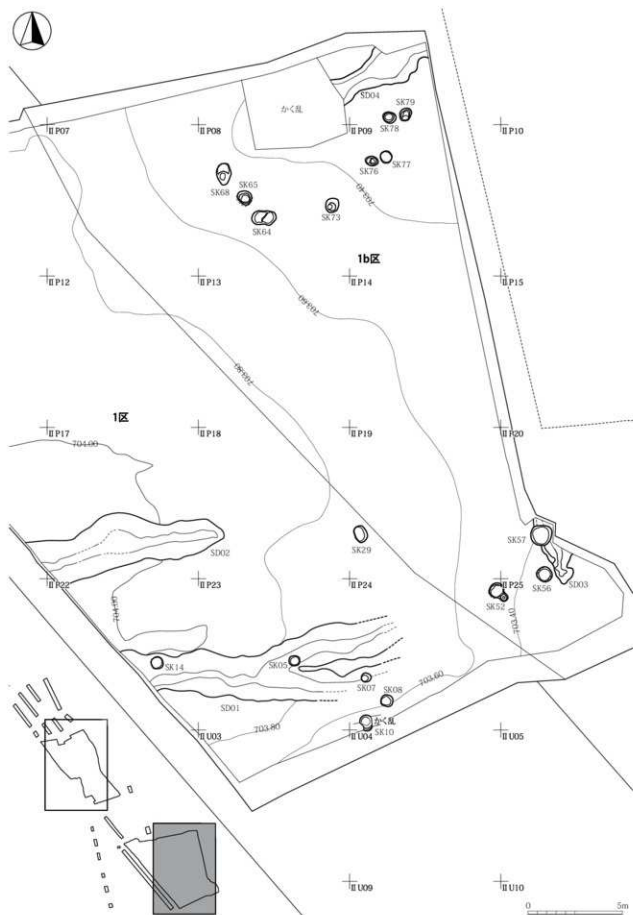
検出した土坑は合計35基を数える。検出時に遺構番号(SK番号)を付したが、調査の結果、遺構でないと判断したものの、ST01のビットに再認定したものがあり、欠番が生じている。検出は基本層序第Ⅳ層上面である。各土坑の属性については、添付DVDに収録した土坑一覧表に示した。

① 時期

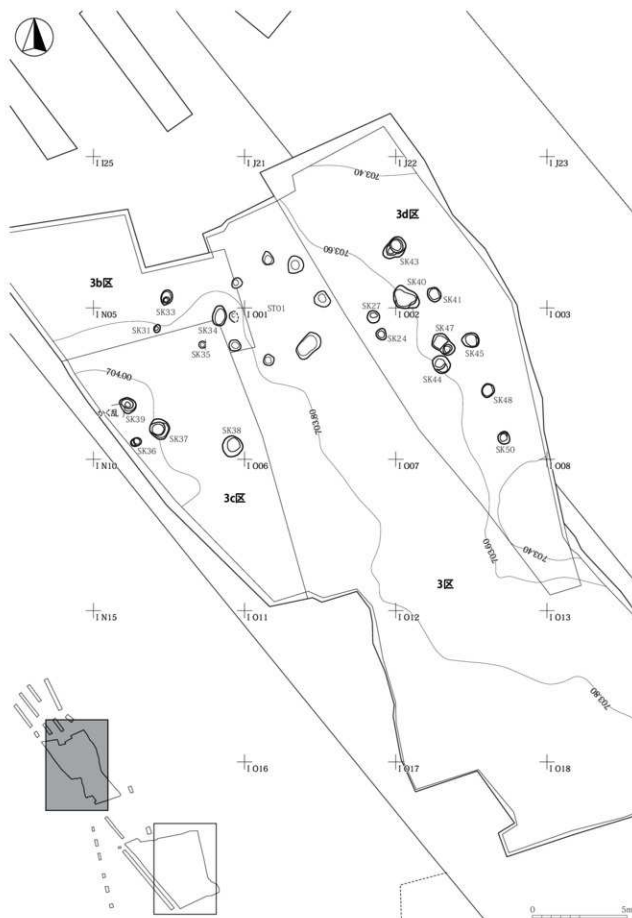
土坑からは縄文時代前期(Ⅱ群)、中期(Ⅲ群)、後期初頭(Ⅳ1類)・前葉(Ⅳ2・3類)・中葉初(Ⅳ4類)の土器が出土したが、出土量は少なく、複数時期の土器が混在する土坑がほとんどであるため、個々の土坑の詳細な時期決定は難しい。土器を出土した30基中、中期以前のみ出土した例は2基に過ぎず、他の28基からは後期前半(Ⅳ1～4類)の土器が出土している。また、調査全体として、縄文時代後期前半より新しい時期の遺物は、ごくわずかの弥生時代・古代・中世に限られ、そこには大きな断絶がある。後述



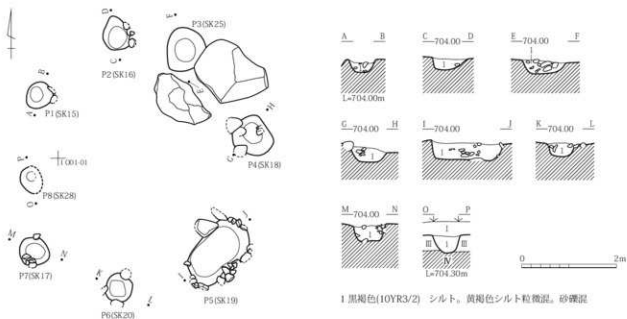
第123図 遺構分布全体図



第124図 1区 遺構分布図



第125図 3区 遺構分布図



第126図 S T01 遺構図

の分布状況を考え合わせ、土坑は、総体として縄文時代後期前半に属するものとする。

② 形状・規模

第4章第3節2に記した分類法により、平面形状は円形・楕円形、断面形状は逆台形・タライ形・袋状・二段掘状に分類した。平面方形・長方形のものはない。

分類ごとの土坑数は、平面円形19基・楕円形15基、断面逆台形14基・タライ形7基・袋状2基・二段掘状11基を数える。断面タライ形のは円形がほとんどで(7基中6基)、逆台形のは円形と楕円形がほぼ半々である(13基中円形6基、楕円形7基)。袋状のは円形のみである。二段掘状のは楕円形が多い(11基中7基)。SK 52は二段掘状ではあるが、相対的に大形で深い円形・袋状部分に、小形で浅い円形・逆台形部分が結合したような形態を呈し、特異である。

平面規模の分布範囲は、長軸長は38cm～148cm、短軸長は37cm～114cmである。SK 37・38・40・57は長径・短径とも100cm以上あり、これに長径130cmを超えるSK 43・47・64を加えた7基を大型とする。SK 31・35は長径が45・38cm、短径が34・37cmと最小で、この2基を小型とする。他の26基は区分することが難しく、一括して中型とする。深さの分布範囲は10cm～91cmで、10cm台1基、20cm台7基、30cm台6基、40cm台8基、50cm台6基、60cm台2基、70cm台1基、80cm台2基、90cm台1基を数える。深さと平面形状・規模には特に有意な相関を認めたいが、断面形状では、袋状を呈するSK 52・56・65は、それぞれ深さ80・64・80cmとかなり深い部類に属する。

③ 遺物出土状況

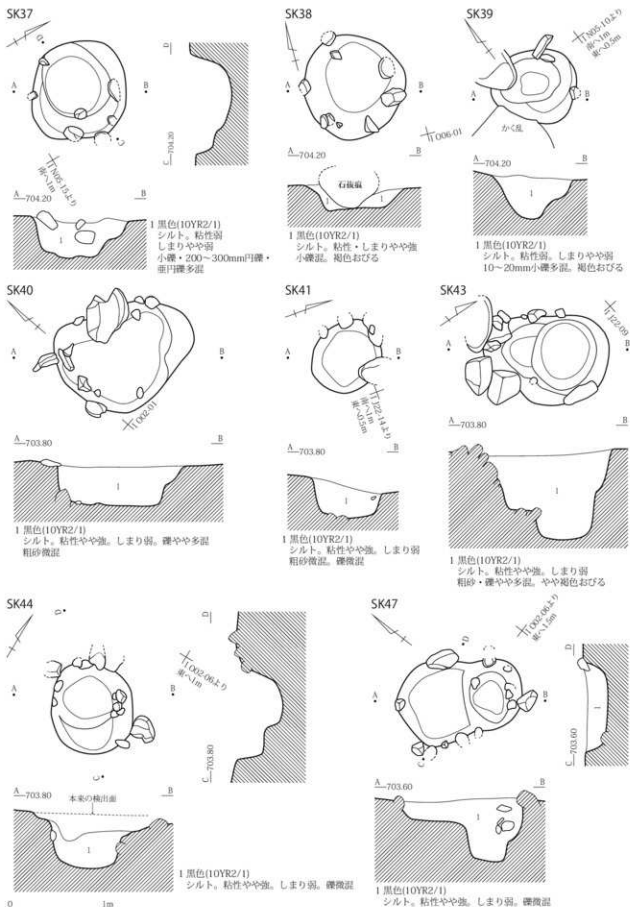
土坑からは土器、石器、礫が出土した。しかし、遺物は埋土中に無秩序に散在する状況であり、土器は小破片の状態がほとんどである。SK 14の深鉢胴下部も、土器自体磨滅しており、底面から浮いているため、意図的な埋置は考え難い。土坑出土の遺物は、埋没過程で流入した、あるいは投棄されたもので、土坑本来の機能・用途とは結び付かないと考える。植物遺体や人間を含めた動物遺体を確認した例はない。

④ 分布

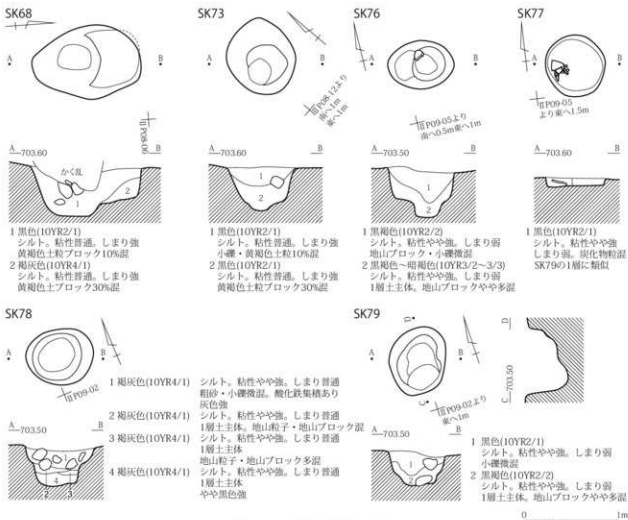
土坑は、A：1区南部、B：1区北東部、C：3区北部の3箇所にとまって群在する。A群内には、さらに、西側(SK 07・08・10)と東側(SK 52・56・57)の2小群がある。B群は西側(SK 64・65・68)と東側(SK 76～79)の2小群を認める。後者はさらに二分することも可能であろう。C群は東西2群に



第127図 土坑 遺構図(1)



第128図 土坑 遺構図(2)



第130図 土坑 遺構図(4)

分け得る。西群内は北側(SK 31・33・34・35)と南側(SK 36・37・39)の2小群を認める。前者は二分することも可能であろう。東群は、西群に比べて小群を把握しにくい、南側(SK 44・45・47)と北側(SK 24・27・40・41・43)の2小群を認める。後者は細分することも可能であろう。

A～C各群には単独で存在するものがあり、単独あるいは近接する1～3基が小単位を成すようにみえる。1～3基が一つの契機に構築される単位で、それが一定の範囲内に繰り返された結果、3箇所の大きなまとまりが形成されたことを推測する。また、小型土坑がC群のみに存在することを除けば、各群には大型土坑、中型土坑ともに含まれ、二段掘土坑も存在する。各群の土坑の規模や構造に顕著な差異はないと考える。各群における土坑の構築目的や使われ方が同様であったことを示唆しよう。

1区内の微地形は、中央部が高く、そこから北東および南東に向けて下っており、土坑群は高位部から低位部への変換点に位置する。3区北部の土坑群については、南東側に低位部があり、北側の大沢川河道は北側直近にも低位部があったことを示唆する。土坑は周囲の水田に引水していない時期で、かつ晴天が続いても、常時、土坑壁下部～底部から水が浸み出して溜水する例が多かった。

(3) 自然流路跡(第124図、遺物:第131・132・137～139図、P.L.25・26)

1区で4条を検出した。いずれも平面形状・深さとも一定しないことから、自然流路跡と判断した。4条とも平面検出は基本層序第IV層上面である。

SD 01は1区南端部に位置する。東西方向に延び、確認延長は14m、西は調査区外へ続き、東はII P 23グリッドで二股に分かれてII P 24グリッドで消失する。断面形は緩やかなU字状を呈し、分岐前の最

大幅3m・深さ40cmを測る。埋土は第Ⅲ層によく似た黒色シルトである。調査区壁の断面観察で基本層序第Ⅲ層を切ることを確認した。出土遺物は第Ⅲ層と同様である。ほぼ同時期の形成と考える。

SD 02はSD 01の北5～6mに位置する。東西方向に伸び、確認延長は11m、西は調査区外へ続き、東はⅡP 18グリッドで消失する。断面形は緩やかなU字状を呈し、最大幅3.5m・深さ50cmを測る。埋土は第Ⅲ層によく似た黒色シルトである。調査区壁の断面観察で基本層序第Ⅲ層を切ることを確認した。出土遺物は第Ⅲ層と同様である。ほぼ同時期の形成と考える。

SD 03は1区南東隅に位置する。確認延長は3.6mとわずかであるが、北に向かって伸び、調査区外へ続く。断面形は緩やかなU字状を呈し、最大幅3m・深さ50cmを測る。埋土は第Ⅲ層によく似た黒色シルトである。SK 57に切られる。出土遺物は第Ⅲ層と同様である。ほぼ同時期の形成と考える。

SD 04は1区北東部に位置する。西南西から北東北へ伸び、調査区外へ続く。確認延長5.8mである。断面形は非常に緩やかなU字状を呈し、最大幅2.4m・深さ20cmを測る。埋土は他の3条とは全く異なる褐灰色シルトで、第Ⅲ層を切る。埋土から9世紀前半の須恵器帯が出土し、該期以降の形成と考える。

落ち込みとして認識できないものを含めて、SD 01～03のような自然流路の形成と埋没が広範囲で繰り返され、第Ⅲ層の形成に大きく関わったと推測しておきたい。

2 遺物

遺物は、遺構、自然流路跡、基本層序第Ⅲ層から縄文土器、石器が出土した。縄文土器のほとんどは小破片で、全体形がわかる個体はなく、磨滅した例が多い。そのほか、平安時代の須恵器、中世の青磁・銭貨がごく少数出土した。弥生～古墳時代の所産と判断できる土器はない。

(1) 縄文土器 (第131～136図, P.L 26)

縄文土器は早期から後期にわたり、大部分が後期前半に属する。以下のとおり、時期別に分類する。1区と3区の調査地点が離れ、出土傾向に差が認められるため、地点別に扱う。遺構出土土器は遺構ごと、第Ⅲ層出土土器は次の分類に沿って説明する。土器片加工板(土製円板)も含める。

第Ⅰ群：早期。第Ⅱ群：前期 初頭の捺糸側面圧痕土器(第1類)、前葉・中葉の神ノ木式・有尾式(第2類)、後葉の諸磯a・b・c式(第3類)。第Ⅲ群：中期 初頭の五領ヶ台式期土器(第1類)、後葉土器(第2類)。第Ⅳ群：後期 称名寺式期土器(第1類)、堀之内1式期土器(第2類)、同2式期土器(第3類)、加曾利B1式期土器(第4類)、無文主体の粗製の土器(第5類)。

この分類で、例えば「第Ⅱ群第1類」に該当する場合、「Ⅱ1類」のように略記する。記述は主にこの分類と類型、器種等を示すにとどめ、詳細は添付DVD収録の土器観察表に記載する。

1区遺構および自然流路跡出土土器 (第131図1～32、第132図33～46)

SK 05(1)はⅣ1類後半の口縁部把手である。SK 08(2)はⅣ3類であろうか。SK 14(3)はⅣ1類である。SK 24(4)、SK 52(5)、SK 56(6)はⅣ2類の鉢である。SK 57(7・8)の7はⅣ1類、8はⅣ4類であろうか。SK 64(9～11)の9・10はⅣ2類の鉢、11は有孔の土器片加工板である。SK 65(12～19)の13はⅣ1類の小形浅鉢、19はⅣ3類の注口土器把手、それ以外はⅣ2類の鉢あるいは深鉢である。SK 76(20・21)はⅣ3類である。SK 77(22・31)の31は、Ⅳ1類後半に伴う圧痕隆帯が巡る粗製の土器、22はⅣ3類新段階の石神類型である。SK 78(23・24)の23はⅢ1類、24はⅣ2類である。SK 79(25)はⅢ1類であろう。SD 01(26～29)の26はⅣ1類の関沢類型、27は加曾利EV式、28はⅣ2類、29はⅣ3類の鉢である。SD 02(30・32～44)の30・32～35はⅣ2類の鉢、37は深鉢、36は浅鉢である。38・39はⅣ3類の朝顔形深鉢、40は体部屈曲鉢、41・42は鉢、43・44はⅣ5類である。SD 04(45・46)の45はⅣ2類の鉢、46はⅣ3類の小形鉢であろうか。

1区第Ⅲ層出土土器 (第132図47～74、第133図75～103)

Ⅱ3類 (47)：縦位・横位に半截竹管文を施す、諸磯b式期土器である。

Ⅲ1類 (48～55)：48～54は半截竹管状工具で区画文、集合沈線文の地文を施す、五領ヶ台I式期の土器である。55は同Ⅱ式期である。

Ⅲ2類 (56・57)：56は背割隆帯と沈線地文が見え、郷土式古段階頃の土器と推定する。57は圧痕隆帯で縦・横に区画し、縄文地文を施す。中期末葉の圧痕隆帯土器であろうか。

Ⅳ1類 (58～70)：58・59は本類後半の磨消縄文土器、60・61は口頸部を隆帯で裝飾する、終末期の茂沢類型である。63～65は、内屈する口縁部に太い沈線で楕円文を描く浅鉢である。66～68は口縁部に圧痕隆帯が廻り、以下は無文となる粗製の深鉢である。ともに本類の新段階からⅣ2類の古段階に見られる。69は隆帯で文様を描く瓢箪形土器、70は台付土器である。62は三十稲場式土器である。

Ⅳ2類 (71～86)：71～77は、外反する頸部が無文の鉢である。口縁部には円文 (71・74)、凹点 (72) などの意匠を配し、沈線 (72・73・75) や楕円文 (71) が廻るものと、無文 (74・76)、隆帯が垂下するもの (71・75・76) がある。内面文を有するもの (71・76) もある。77は浅鉢に多用される文様である。78～86はこれらの湾曲部から胴部である。湾曲部を沈線 (78・79)、8字状貼付文・円文を伴う隆帯 (80～82) で区画する。胴部文様には、おそらく横位の渦巻状意匠を描くもの (79・84・86) と、複数の沈線で縦位構成の意匠を描くもの (83・85) がある。

Ⅳ3類 (87～92・96・97)：口縁部の刻み隆線下に幾何学文を描く、朝顔形深鉢 (87～91) が有文土器の主体となる。3条以上の隆線 (89) は、長野県に特徴的である。92は本類新段階の石神類型である。注口土器96・97が伴う。

Ⅳ4類 (93～95・98)：口縁部の内面文が発達した平縁 (93) と波状口縁 (94) の深鉢がある。95は外面の沈線帯間に2列一組の刺突列を施す、鉢の希少例であろう。注口土器98がある。

Ⅳ5類 (101～103)：101・103は胴下半がやや湾曲、102は直線的に開く器形である。いずれも横位から斜位のヘラ削り後、ナデによって器面調整している。101・103は網代底である。

土器片加工板 (99・100)：99は無文土器で有孔、100は有文土器Ⅳ2類で無孔である。周縁を打ち欠く。

3区遺構出土土器 (第134図104～142)

ST01 (104～112) の104・105はⅡ2類、106・107はⅡ3類の諸磯b式、108はc式である。111はⅣ1類、110・112はⅣ2類である。SK 27 (113・114)・SK 39 (115・116) はⅣ2類の鉢である。SK 40 (117) はⅣ3類の朝顔形深鉢である。SK 43 (118～122) はⅣ2類の鉢である。SK 44 (123～126) の123はⅣ1類の垂下降帯がある深鉢、125・126はⅣ2類の鉢、124は土器片加工板である。SK 45 (127・128) はⅣ2類の鉢である。SK 47 (129～135) の129はⅡ3類の諸磯b式である。130はⅣ1類から2類古段階の注口付浅鉢、135は同じ時期の瓢箪形土器の仲間であろう。131～134はⅣ2類の鉢である。131・132は同一個体と推定する。孔が通ずる突起の内外面に、縁が盛り上がる円形刺突文を多用する。SK 48 (136・137) の136はⅣ2類の鉢、137は同古段階に伴う圧痕隆帯土器である。SK 50 (138～142) の140は口縁部直下から縦位構成の文様を描くⅣ2類の深鉢、その他は鉢である。

3区第Ⅲ層出土土器 (第135図143～179、第136図180～215)

I群 (143)：口縁部に横位沈線を施す。沈線文系土器と推定する。1点のみである。

Ⅱ1類 (144)：2本そろえの撚糸側面圧痕文を、横位羽状に施す。胴下半部では斜位の獣手状となる。花積下層式段階の土器であろう。

Ⅱ2類 (145～150)：146は、櫛歯状工具による連続刺突文を施す神ノ木式である。147は爪形文により菱形文を描く。145は口縁部の縄文地文上に、鋸歯状沈線と縦位刺突列を施す。いずれも有尾式である。

148～150は、縄文のみの土器で、148・150は原体末端の回転が見える。いずれも胎土に少量の繊維を含む。

Ⅱ3類(151～153)：151は爪形文で横位区画し、縄文地に円形刺突文を施す諸磯a式、152は平行沈線地文に細い結節浮線文、153は羽状沈線地文にボタン状貼付文がある、同c式である。

Ⅳ1類(154～167)：154～158は、加曾利EV式であろう。沈線文(154・156・157)と隆帯文(155・158)がある。称名寺式前半に位置しよう。159～161・163は称名寺1式後半、刺突文地文の162は同2式、164は茂沢類型である。165は三十桶場式である。166・167は、丘痕隆帯が巡る無文土器である。

Ⅳ2類(168～177・180・182～184・186～190・192～195)：168～177・180は鉢の口縁部、182～184・186～190・194は胴部である。1区と同類土器に少なかった装飾として、168の環状突起、173の左右非対称の突起、文様には重弧線(176)、複弧線(177・180)がある。胴部文様については、189が縦位構成をとるほかは、渦巻文とその変形の横位構成と推定する。194の内面の凹みは、種実痕の可能性はある。192・193は深鉢であろう。195は椀形の浅鉢である。内湾する口縁部に、C字状貼付文がある。

Ⅳ3類(178・179・181・185・191・196～203)：朝顔形深鉢196は帯状縄文、197は楕円文を描く。横位平行沈線が巡る198・199は石神類型と推定する。いずれも本類後半に位置する。鉢の口縁部178・179・181・185は外面が無文、口縁部内面に沈線が巡るものとなる。178は、口縁部数箇所を内側へ折り曲げる。191は浅い胴部である。200・202は注口土器の胴部、203は頸部である。201は赤彩された小形の鉢である。

Ⅳ4類(204～211)：205・207は平鉢、204・206・208は波状口縁の深鉢である。209は鉢で、平行沈線間に縦位の区切文を施す。211はミニチュア土器に近い鉢、210は注口土器である。

土器片加工板(212～215)：湾曲の少ない土器片を素材とする。212・214は無孔、213は有孔、215は外面から半分穿孔している。1区出土資料を含めて、確実に周縁を研磨しているものは認められず、有文土器はⅣ2類である。

まとめ 出土した縄文土器の定量的な把握は困難であるが、Ⅳ5類が最多量を占めることは確かである。時期が判明する有文土器の過半数を占めるのは、1区・3区ともⅣ2類で、前後の1類と3類がこれに次ぎ、4類が続くようである。新潟県の三十桶場式は、近年群馬県吾妻郡域で出土例が増加したが、本遺跡でも確認した。小破片のため細分編年に言及できないが、有文土器各型の中にも新旧の時期差があり、確実な断絶期は認められない。埋文センターでは、堀之内1・2式並行期の長野県の土器について、渦巻文を描く鉢を主体とする「ひんご式」を提唱した(埋文センター2018)。本遺跡でも共通の特徴を認めたが、相伴する新潟系あるいは関東系の深鉢は不明瞭であった。少数例に注目すると、I群、II群は3区、III群は1区に偏っている。

(2) 石器(第137図1～30、第138図31～48、第139図49～54、P.L25)

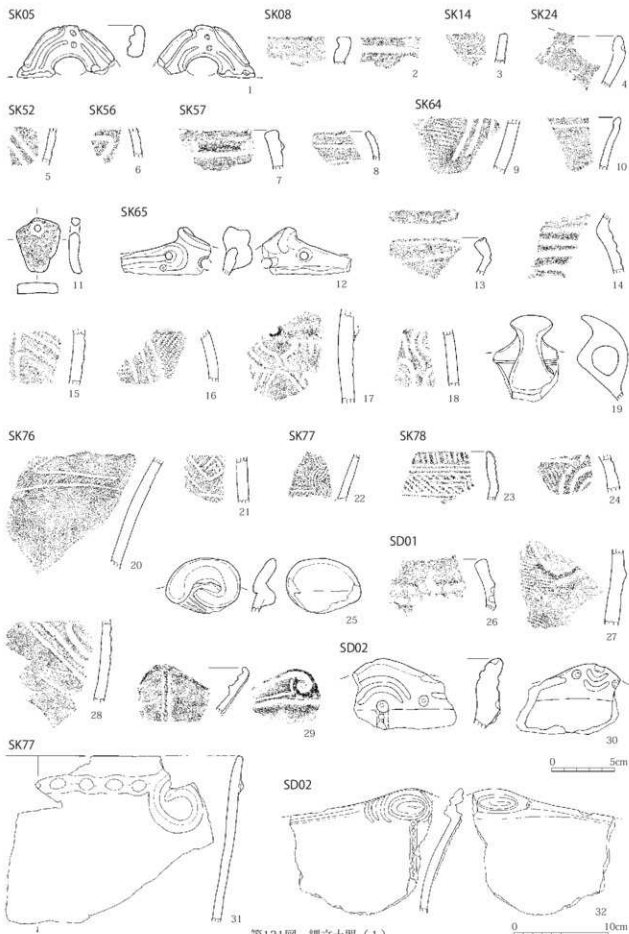
石鏃・石鏃未製品(1～16)：出土した石鏃の中では、1～3・6・10～14は小形である。製品の形態は、1～5・10～12・14が凹基、6・7・13・16は平基、15は凹基に近い。凹基鏃でも、3・10・12・14は脇扶が浅い。側縁形態は直線状か、わずかに外湾するものが多く、2・4・11は上半部が内湾する。8・9は未製品である。

石錐(17～19)：17・18は無頭、19は有頭である。17は棒状で短く、刃部が摩耗している。18は全周から剝離し薄身である。欠損した上端が刃部の可能性もある。19は頭部が厚く大きい。

石匙(20)：厚みのある横長剝片を素材とするらしい。表面左上のつまみを欠損した斜め型の石匙である。

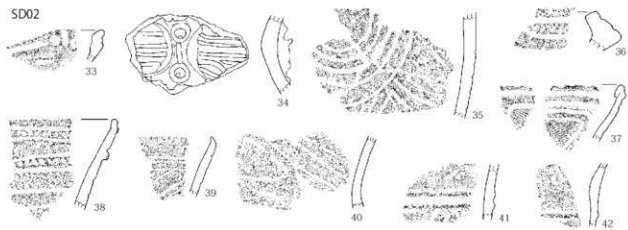
スクレイパー(21)：平面楕円形の剝片の下半部に剝離を施し、刃部を作っている。

異形石器(22～26)：スクレイパーのようにも見えるが、形態に統一性がない小形の剝片石器を一括した。22は剝片の左右側縁両面に、連続的な細かい剝離を施し、棒状を呈する。側縁は潰れている。23・24は平面形が円形に近く、両面の全周に剝離を施す。23はエンドスクレイパー状であるが、24とともに刃器



第131図 縄文土器(1)

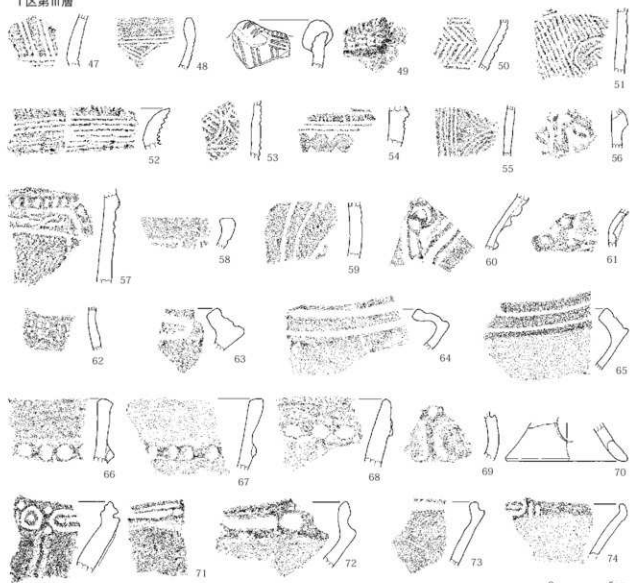
SD02



SD04



1区第三層

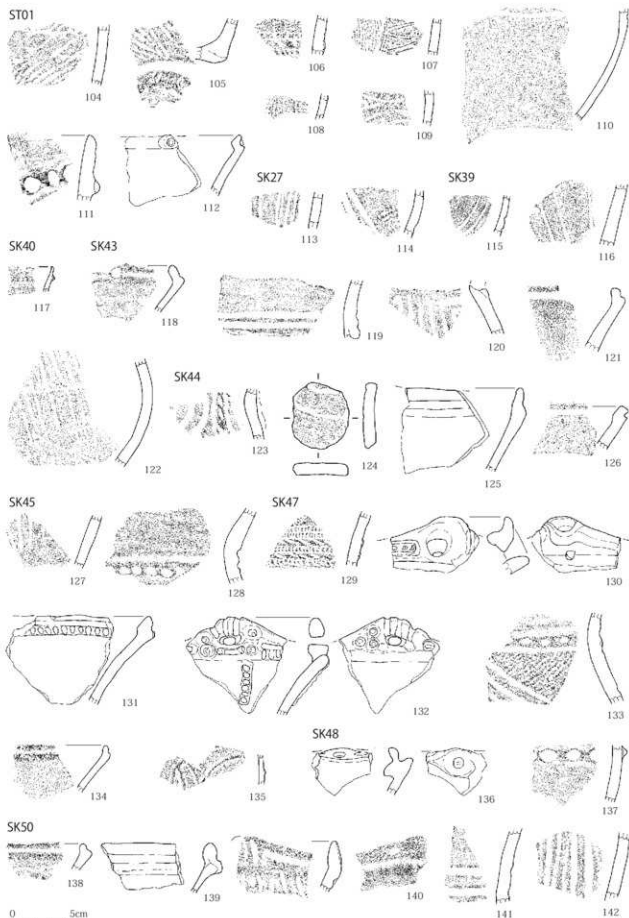


第132図 縄文土器(2)

0 5cm

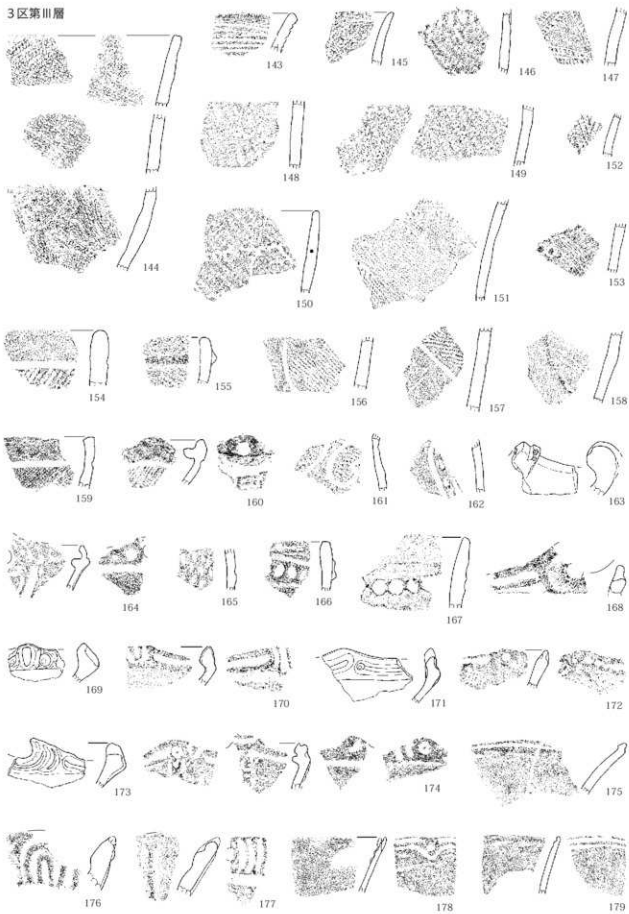


第133図 縄文土器 (3)

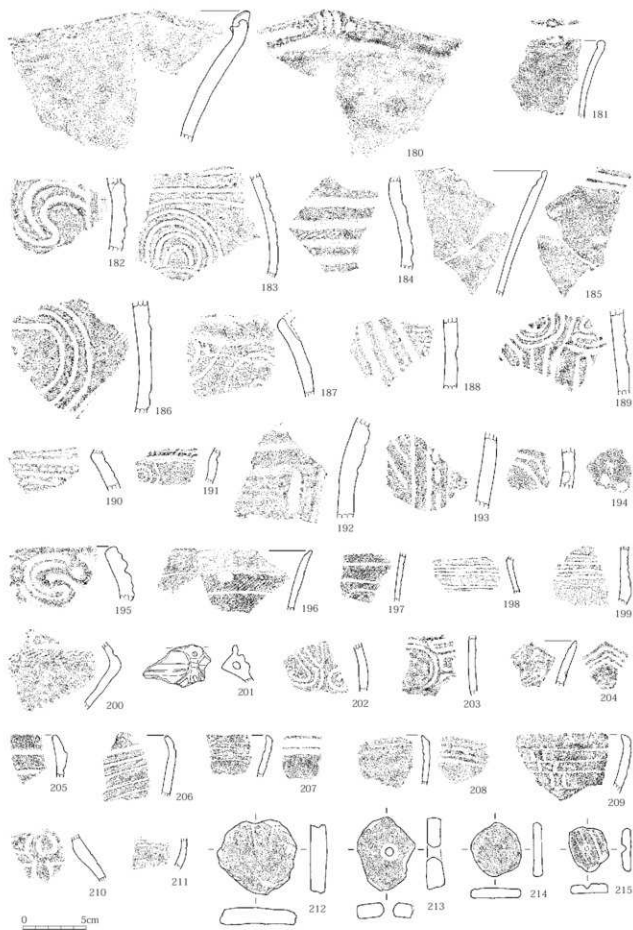


第134図 縄文土器(4)

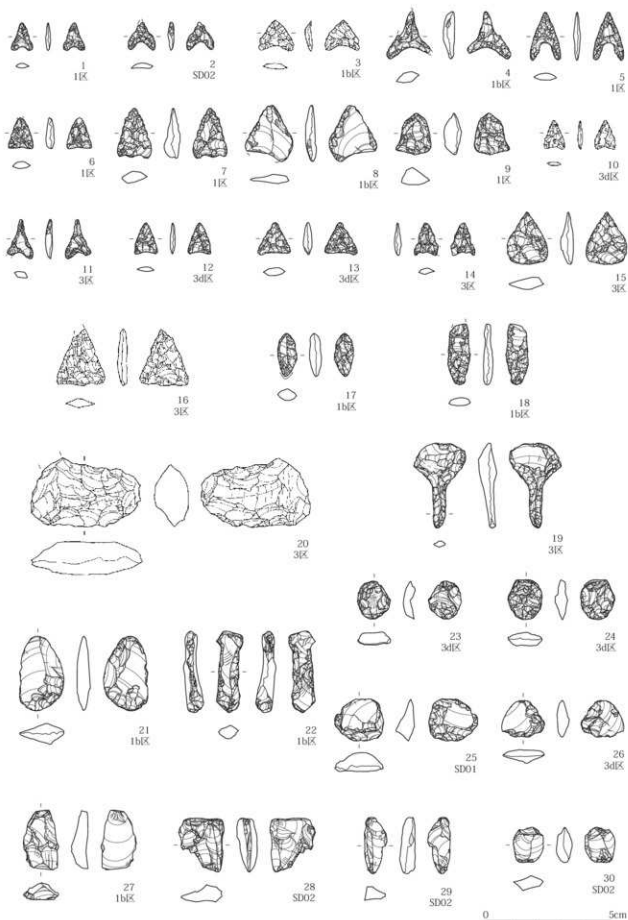
3区第Ⅲ層



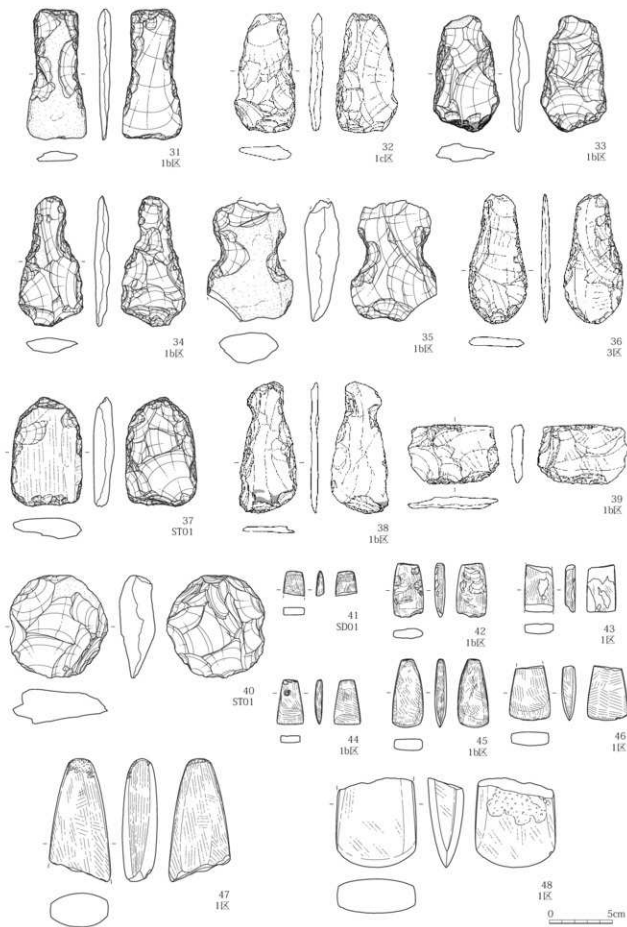
第135図 縄文土器(5)



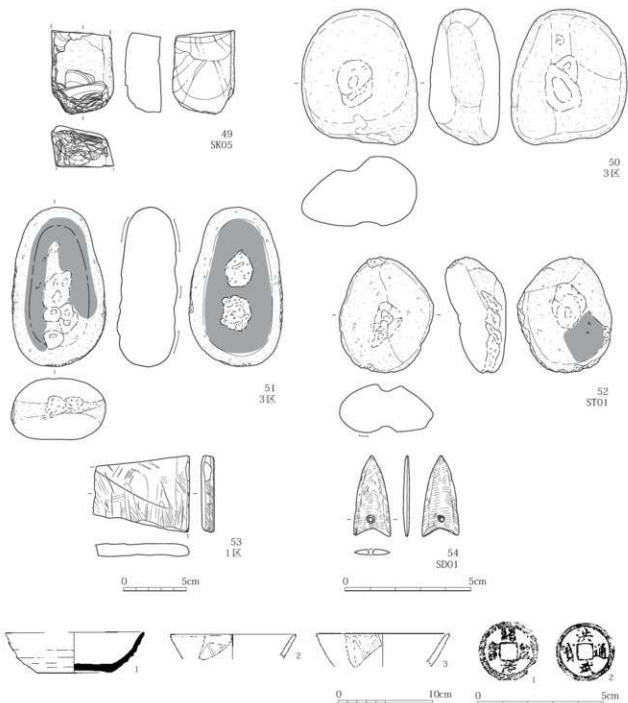
第136圖 縄文土器(6)



第137图 石器(1)



第138図 石器(2)



第139図 石器(3)、古代土器、中世磁器、銭貨

としては小形過ぎる。25・26は平面形が不整な円形、あるいは三角形状である。周縁の大半に剥離を施すが、第一次剥離面を残す。小形のスクレイパーとも考えられるが、石鏃未製品の可能性もある。

二次加工ある剥片(27)：縦長剥片の表面左側縁の一部に、剥離を施している。

両極剥片(28～30)：形態は共通性に欠ける。断面形は29が棒状、28・30はやや扁平である。上下端に細かい剥離痕が残る。石鏃素材の採取に関わる石屑であろう。掲載していないが、長径2～3cm大の黒曜石ズリ石が多数出土した。

打製石斧(31～37)：31～33は短冊形、34・36は楕形、35は分銅形である。素材は横長・縦長剥片の両者がある。31・35・37は剥皮が残り、その他はわずかに残るか、見られない。35のみ分厚く、その他は概して薄身である。33の刃部に磨耗が見られるが、その他は使用痕跡が明らかではない。

大形粗製石匙 (38)：薄板状の全周を剥離し、裏面の先端付近を左右から剥離して幅を減じ、着柄部を作っている。下端は摩耗している。

横刃型石器 (39)：薄い横長薄片の下縁両面に細かい剥離が連続する。上縁の小剥離は、厚みを減じたものである。

大形スクレイパー (40)：表面に一部礫皮が残り、裏面は全周から剥離して第一次剥離面を残さない。表面の右側縁と下縁が薄いため、スクレイパーと推定した。

磨製石斧 (41～48)：いずれも定角式の形態である。42・44・45以外は欠損している。8点の中では、41・44は残存幅約1.7～2.1cmの小形、42・43・45・46は同じく2.3～3.2cmの中形、47・48は同じく5cm以上の大形である。44には浅い穿孔の痕跡があり、垂れ飾りに転用する意図があった可能性がある。

敲石 (49)：表面に礫皮が残り、裏面が剥離面となる棒状礫の下端に、敲打による剥離が集中し、潰れが見られる。上側を欠損している。

凹石 (50～52)：51は楕円形礫の扁平な表裏面に2か所ずつの浅い凹みがあり、両面とも磨面である。50・52はやや不整な円形礫の両面に1か所ずつの深い凹みがある。52は一部磨面があり、周縁に敲打痕がある。

砥石 (53)：図の左・下側を欠損する。薄板状の砂岩の表裏両面、および側縁を磨面とする。磨痕は線状であり、金属器を対象とした可能性がある。

磨製石鏃 (54)：長身で浅い凹基に両面穿孔の孔がある。弥生時代に属するが、土器は確認していない。

まとめ 石器は帰属時期が絞られず、組成は把握できない。磨製石斧全点と、打製石斧・大形粗製石匙・横刃型石器のうち7点は1区、凹石は3区出土と、多少の偏りは窺える。

(3) 古代土器、中世磁器、銭貨 (第139図、土器・磁器：1～3、銭貨：1・2)

1はS D 04の埋土から出土した須恵器坏である。形態から9世紀前半の所産と考える。2・3は1区検出面で出土した龍泉窯系の青磁蓮弁文碗で、13世紀後半～14世紀と推測する。銭貨の1・2は1区のかく乱から出土した。1は紹聖元寶、2は洪武通寶である。

第3節 自然科学分析

2011年度に、遺物包含層である基本層序第Ⅲ層から採取した炭化物を対象として、株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細については添付DVDに収録した。

目的は第Ⅲ層のより明確な形成年代を推定するための資料を得ることである。分析試料は、1区南端部の第Ⅲ層(採取・分析時点ではⅡ層、以下同じ)から採取した炭化物1点、1区南部S D 01北側の第Ⅲ層から採取した炭化物1点、3区北部の第Ⅲ層から採取した炭化物1点、合計3点である。

第9表 放射性炭素年代測定結果

No	試料名	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
1	DOY1	炭化物	1区南端部第Ⅲ層	1,616 ± 23	406calAD-438calAD (35.2%) 488calAD-531calAD (33.0%)	395calAD-535calAD (95.4%)
2	DOY2	炭化物	1区南部第Ⅲ層	3,925 ± 29	2473calBC-2431calBC (29.6%) 2425calBC-2402calBC (15.7%) 2381calBC-2348calBC (23.0%)	2489calBC-2332calAD (90.3%) 2326calBC-2299calAD (5.1%)
3	DOY3	炭化物	3区北部第Ⅲ層	Modern		

測定結果は第9表に示したとおりである。1 σ 暦年代範囲の最小値と最大値をみながら、試料No.1～3の測定結果を整理してみる。第Ⅲ層の形成は、出土土器から縄文時代後期前半と推測している。No.2は2473～2348calBCである。小林謙一氏の年代観（小林2017）に対比すれば、縄文時代後期初頭（称名寺式期）にあたり、想定年代に整合する。これに対し、No.1は5世紀～6世紀前半、No.3は現代となり、大幅に新しい年代である。発掘時に認識できなかった自然擾乱による可能性を推測する。

第4節 小結

今回の発掘調査では、縄文時代後期前半の土坑群および円形土坑列を検出した。

土坑出土の遺物には、土坑の機能・用途を示唆する種類や出土状況は認められなかった。ただし、袋状を呈する形態や深く掘り込む例があること、微高地から微低地への変換点に群在すること、そして湧水状況に注目すれば、堅果類の遺存など直接的な証拠は見つからなかったものの、その多くは扇状地の伏流水を利用した低地型貯蔵穴である可能性が考えられよう。縄文時代後期以降、東日本でも低地型貯蔵穴が出現・普及してゆく動向が指摘されており（坂口2003）、長野県内では中野市栗林遺跡の報告例がある（埋文センター1994）。扇状地上に営まれた本遺跡の土坑群であるが、該期における低地型貯蔵穴の普及を示す事例の一つとして理解しておきたい。

円形土坑列ST 01は8基の土坑（ピット）が円形に並ぶ。ST 01についても、出土遺物には遺構の性格を示すような種類や出土状況は認められない。ピットは円形基調の単純な掘り込みであり、平面・断面とも特異な形状ではない。こうした形態のピットが円形に配列する様相は、柱穴のみ残った竪穴建物であることを推測させる。しかし、確定は難しい。今回の調査範囲内では、居住施設は明確にならなかった。

第Ⅲ層やSD 01～03の遺物は、場所により粗密はあるものの、層中や埋土中に散在する状況である。土器の大部分は磨滅しており、上流方向から移動してきたことを示唆する。ただし、土層の性状をみると、土石流を伴って一気に流れてきた状況ではない。一定の時間幅の中で徐々に動いたものと考ええる。一丁田遺跡の丘陵上において縄文時代中期後半に集落を営んだ集団が、後期に至って扇状地に移動してきたのかどうかは想像の域を出ないが、西方扇状地上のさほど遠くない場所に、第Ⅲ層遺物の出所であり、おそらく今回検出した遺構群の造営主体である集団の、居住域・墓域・廃棄域等を示す遺構・遺物群が存在することを推定し得る。今後、この一帯には注意が必要であろう。

引用・参考文献

- 県教委 2010 「県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査5」
 小林謙一 2017 「縄紋土器の実年代—土器型式編年と炭素14年代—」 同成社
 坂口隆 2003 「縄文時代貯蔵穴の研究」 アム・プロモーション
 市教委 1998 「市内遺跡発掘調査報告書1996」
 埋文センター 1994 「栗林遺跡 七瀬遺跡」
 埋文センター 2018 「ひんご遺跡」

第7章 前の久保遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観 (第140図、P.L.27)

前の久保遺跡は佐久市大沢地籍に所在し、八ヶ岳連峰北麓から北東に延びる丘陵部の先端に位置する。微地形的には、南から北へ下る尾根に東西両側を挟まれた、広い谷状地形にあたる。遺跡範囲は東西約170m、南北約200m(発掘時の範囲)で、標高は710～735mを測る。古墳時代～古代の遺物散布地として周知されているものの、発掘調査の経歴はなく、遺跡内容は明確ではなかった。

尾根を挟んだ東側に三枚平A遺跡、三枚平B遺跡が隣接する。三枚平A遺跡は縄文・古墳・古代の遺物散布地である。三枚平B遺跡は縄文～中世の遺物散布地である(本書報告)。尾根の西側には金山久保A遺跡があり、その西隣に金山久保B遺跡が存在する。金山久保A遺跡は弥生時代～古代、金山久保B遺跡は弥生時代の遺物散布地である。北方には、東流する大沢川が形成した扇状地上に、縄文時代後期の土坑群が検出された大沢屋敷遺跡(本書報告)、古墳時代～古代の遺物散布地である大中沢遺跡が広がる。

2 調査の経過 (第140・141・143図、P.L.27)

発掘調査は2008・2011・2012年に実施した。調査前の地目は山林および水田で、水田部分は切り盛りによる段造成がなされていた。

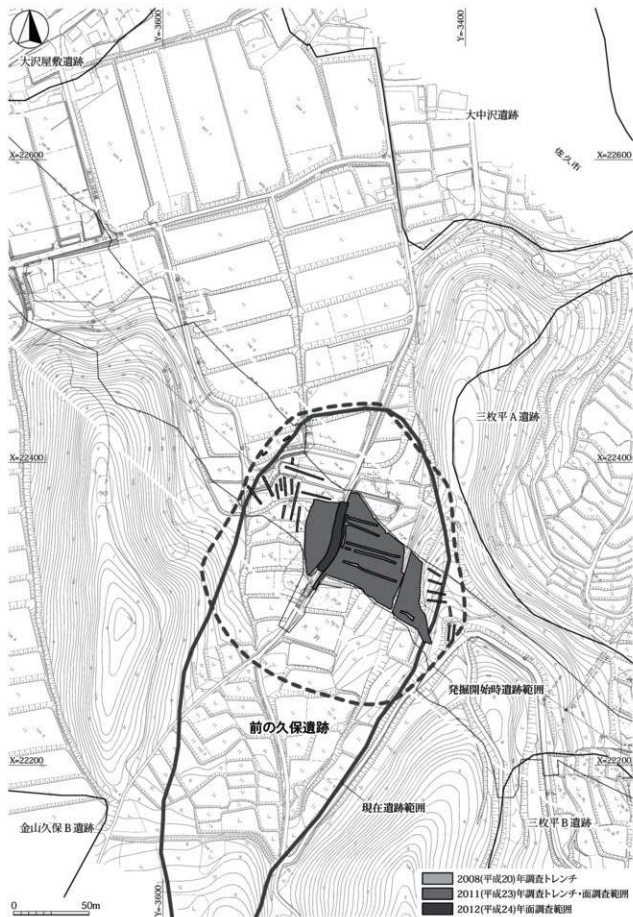
2008年度はトレンチ調査を行った。調査面積は3,000㎡、期間は11月25～12月16日である。西端部と中央西寄りの若干の未取得地を除いて、調査対象範囲はほぼ全域に24本のトレンチを掘削した結果、中央東寄りの部分で古墳時代前期前葉の竪穴建物跡、時期不明確な土坑等を検出した。

2011年度は中央部で面的調査、西端部でトレンチ調査を行った。調査面積は5,910㎡、期間は4月5～7月27日である。中央を南北に通る市道30-42号線の東側を1区、東端部の急傾斜地を3区とし、市道の西側を2区、西端部を4区として区分けし、調査の単位とした。1区はトレンチ調査で遺構を確認した部分で、3区の西半部を含めて面的調査を行った。遺構は主に1区の北側に分布し、トレンチ調査検出分を含めて、古墳時代前期前葉の竪穴建物跡1軒と溝跡1条、土坑16基を調査した。2区および4区は、2008年度のトレンチ調査が及ばなかった部分である。市道を挟んで1区に隣接する2区は面的に表土を剥ぎ、4区はトレンチ4本を掘削したが、どちらも谷状部にあたり、遺構は存在しなかった。

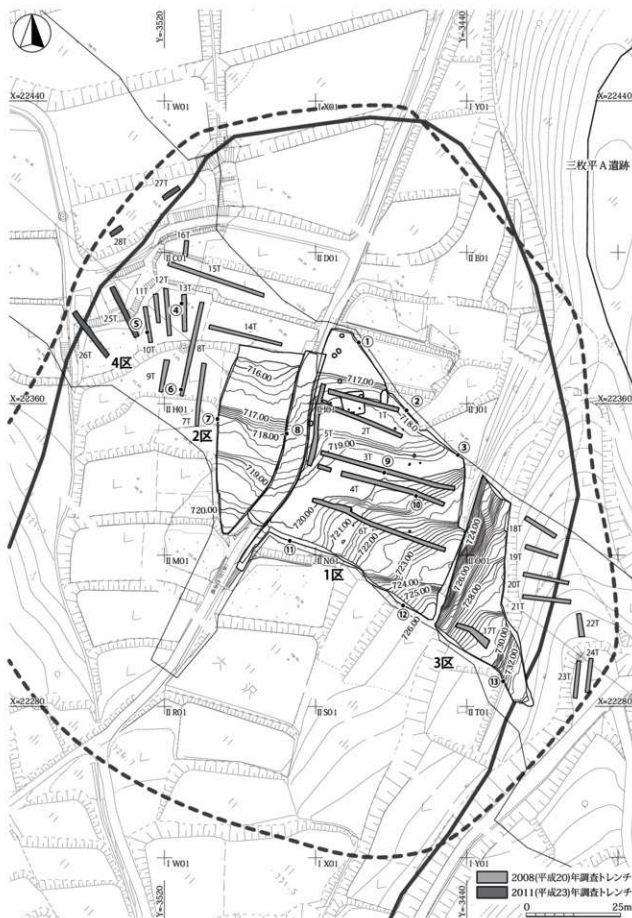
2012年度は中央部の市道30-42号線下の調査を行ったが、遺構・遺物はなかった。調査面積は530㎡、期間は11月1～6日である。

3 基本層序 (第141・142図)

調査地は北へ下る広い谷状地形にあたる。東尾根の急傾斜部3区から緩傾斜部1・2区へと続き、4区の西側は、西尾根斜面裾付近を流れる小沢となる。発掘調査で、中央と西端部に、さらに深く落ち込む谷状部があることがわかった。中央の谷状部は1区南西端から徐々に広がりつつ北へ延びる。西端の谷状部は4区にあり、西尾根斜面裾付近の小沢の旧河道と考える。



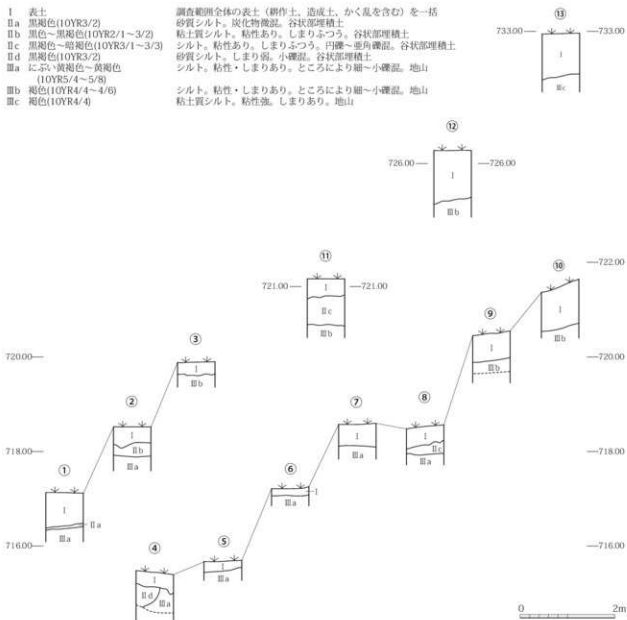
第140図 遺跡範囲・調査区位置図



第141図 トレンチ・調査区配置図

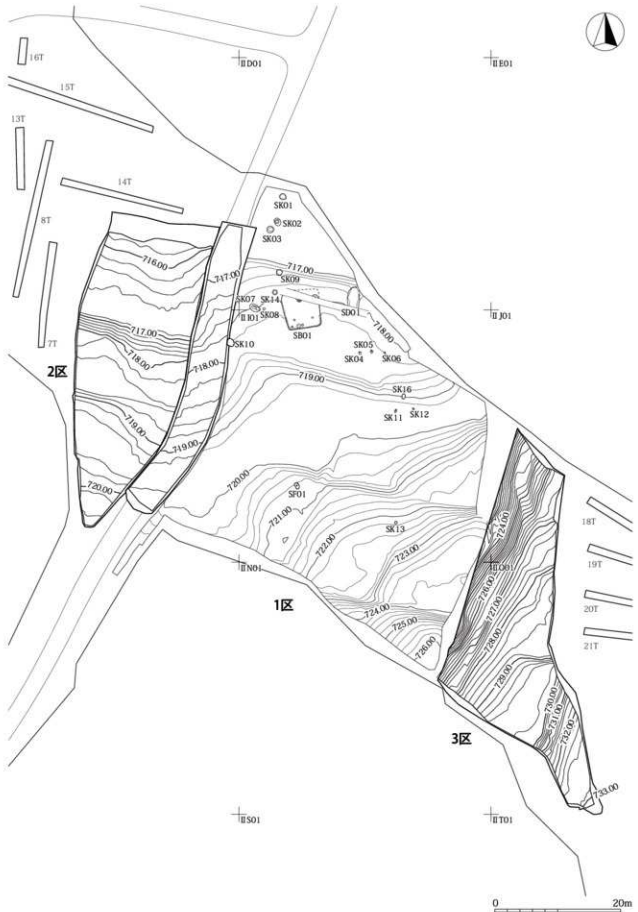
- I 表土
- IIa 黒褐色(10YR3/2)
- IIb 黒色～黒褐色(10YR2/1～3/2)
- IIc 黒褐色～暗褐色(10YR3/1～3/3)
- IId 黒褐色(10YR3/2)
- IIIa にぶい黄褐色～黄褐色(10YR5/4～5/8)
- IIIb 褐色(10YR4/4～4/6)
- IIIc 褐色(10YR4/4)

調査範囲全体の表土(耕作土、造成土、かく乱を含む)を一括
 砂質シルト。炭化物微混。谷状部埋積土
 粘土質シルト。粘性あり。しまりふつう。谷状部埋積土
 シルト。粘性あり。しまりふつう。円礫～亜角礫混。谷状部埋積土
 砂質シルト。しまり弱。小礫混。谷状部埋積土
 シルト。粘性・しまりあり。ところにより細～小礫混。地山
 シルト。粘性・しまりあり。ところにより細～小礫混。地山
 粘土質シルト。粘性強。しまりあり。地山



第142図 土層柱状図

基本層序は第I～III層に大別した。第I層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査区全体の現表土を一括した。第II層は上記の谷状部を埋積する黒色～暗褐色土である。IIa～IIdに細分したが、対比は不明確である。第III層は遺跡全体の基盤を成すにぶい黄褐色～褐色土である。細分したIIIa層は低位部、IIIb層は中位部、IIIc層は高位部に分布する。ほとんどの遺構が存在する1区北部は低位部にあたり、遺構検出面はIIIa層上面である。中位部にあたる1区南部で検出した土坑2基の検出面はIIIb層上面である。



第143図 遺構全体図

第2節 遺構と遺物

1 概観

遺構は1区において竪穴建物跡1軒、溝跡1条、土坑16基を検出した(第143図)。ほとんどの遺構は1区北部の標高約716～719mの緩やかな斜面部に分布する。それより南部は傾斜が徐々に急となり、土坑2基を除いて遺構はない。3区は急傾斜地であり、2区および4区は谷状部が入り込み、遺構は存在しない。時期は、竪穴建物跡および溝跡は出土した土器から古墳時代前期前葉と考える。土坑は出土遺物が皆無のため、時期不明である。遺構外の遺物は、竪穴建物跡の時期と同じ古墳時代前期前葉の土器のほか、縄文時代中期の土器、石器、古代の土器、中世以降の土器・陶磁器が出土した。すべて少量である。

2 遺構

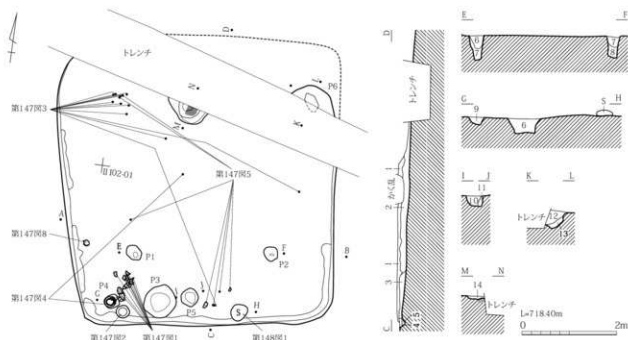
(1) 竪穴建物跡

SB 01 (第144図、P.L.27)

位置：1区、II D 21・22、II I 01・02 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ a 層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：1～5層が堆積する。壁際に褐色シルト5層・黄褐色シルト4層が堆積した後、斜面上方にあたる南辺・東辺側に褐色シルト3層が堆積する。それによって形成された凹部を灰黄褐色シルト2層が埋め、さらに1層褐色シルトが全体を覆う。形状・規模：北辺～北東部を削平および確認トレンチで失っているが、北西隅の屈曲、および削平部分に残るシミ状の暗色部の散在範囲から推測して、平面形は隅丸方形で、規模は東西・南北とも約6mと考える。床・壁：竪穴の掘方底を平坦に整えて床面を形成する。貼床はない。床面は硬化している。壁は残存部で高さ20cmを測り、斜め～垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴：南辺から1.5m内側にP1・2を主柱穴と考える。形状は不正円形で直径26cm前後、深さ45cmを測る。方形配列の4本主柱であると推測するが、北側の2穴は検出できなかった。周溝：西壁中央部～南壁～東壁南部の壁際で幅10～20cmの周溝を検出した。深さは5cm程度である。西壁の2箇所に途切れ部がある。炉：床中央と推定北壁の中間に1基を検出した。トレンチにより北側を失う。平面形は円形基調である。残存部は東西80cm、南北50cm、深さ6cmを測る。底面は被熱変色している。炉縁石は残存していない。その他の施設：南壁脇でP3・4・5、東壁脇北部でP6を検出した。P6は、発掘段階ではSK15としたが、明らかに本建物跡の東壁脇に位置し、出土遺物も同時期であるため、整理段階で本建物跡の施設と判断した。P3～5の平面形は円形を呈し、直径と深さは、P3が70cmと40cm、P4は32cmと14cm、P5は34cmと20cmである。P6はトレンチで南側を消失する。残存部は長軸105cm、深さ48cmを測り、平面形は円形基調である。P5は入口関連施設、P3・6は貯蔵施設と推測する。遺物：床面・埋土およびビットから古墳時代前期前葉の壺・甕・高坏・鉢(第147図1～8)、磨面をもつ扁平大形石(第148図1)が出土した。出土は南壁脇に集中する傾向がある。第147図2の甕は胴部以下を打ち欠いて輪状に成形しており、何らかの台としての使用を想定する。床面から正位で出土した。扁平大形石は床面から磨面を下にした状態で出土した。時期：出土した土器をもって古墳時代前期前葉と考える。

(2) 土坑 (第145・146図)

検出した土坑は16基を数える。検出面は、SK13・SF01が基本層序第Ⅲ b 層上面、その他はすべて第Ⅲ a 層上面である。SF01は掘り込みをもち、埋土中に焼土粒を少量含むが被熱部を有さないため土坑とした。分布はSB01・SD01が位置する1区北部に集中するが、遺物を出土した例が皆無のため



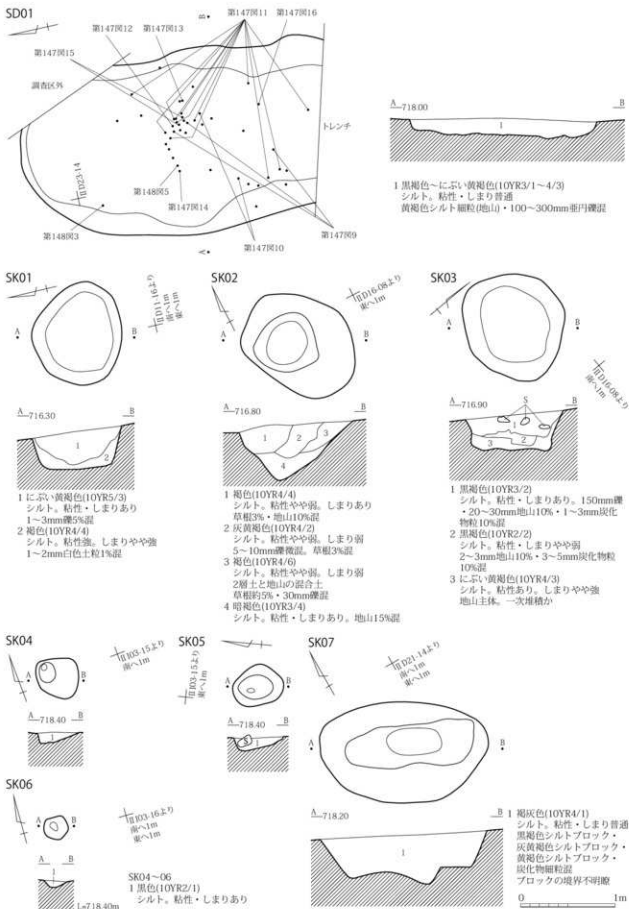
- 1 褐色(10YR4/6) シルト、粘性なし。しまり強。1~2mm白色粒子15%・3~5mm赤色粒子3%混
 2 灰黄褐色(10YR4/2) シルト。粘性。しまりあり
 3 褐色(10YR4/6) 1~3mm炭化粒15%混
 4 黄褐色(10YR5/6) シルト。粘性弱。しまりやや弱
 5 褐色(10YR4/6) 1~2mm炭化粒3%混。1~3mm白色粒子微混
 6 褐色(10YR4/4) シルト。粘性弱。しまりあり
 7 褐色(10YR4/6) シルト。粘性弱。しまりあり
 8 にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト。粘性強。しまりあり。20~40mm小礫15%混
 9 褐色(10YR4/6) シルト。粘性。しまり強。1~2mm白色粒子5%・2~4mm小礫3%混
 10 褐色(10YR4/3) シルト。粘性あり。しまり強。10~20mm小礫15%・1~2mm白色粒子3%・1~2mm炭化物粒2%混。9層と類似
 11 褐色(10YR4/6) シルト。黄褐色土粒混
 12 黄褐色(10YR5/6) シルト。粘性なし。しまりあり
 13 褐色(10YR4/6) 1~2mm炭化物粒3%混。草根微混
 14 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性あり。しまり強。2~3mm礫20%混
 15 シルト。粘性。しまりあり。1~2mm炭化粒3%・2mmほどの焼土ブロック1%混

- 7 褐色(10YR4/6) シルト。粘性弱。しまりやや弱
 8 にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト。粘性強。しまりあり。20~40mm小礫15%混
 9 褐色(10YR4/6) シルト。粘性。しまり強。1~2mm白色粒子5%・2~4mm小礫3%混
 10 褐色(10YR4/3) シルト。粘性あり。しまり強。10~20mm小礫15%・1~2mm白色粒子3%・1~2mm炭化物粒2%混。9層と類似
 11 褐色(10YR4/6) シルト。黄褐色土粒混
 12 黄褐色(10YR5/6) シルト。粘性なし。しまりあり
 13 褐色(10YR4/6) 1~2mm炭化物粒3%混。草根微混
 14 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性あり。しまり強。2~3mm礫20%混
 15 シルト。粘性。しまりあり。1~2mm炭化粒3%・2mmほどの焼土ブロック1%混

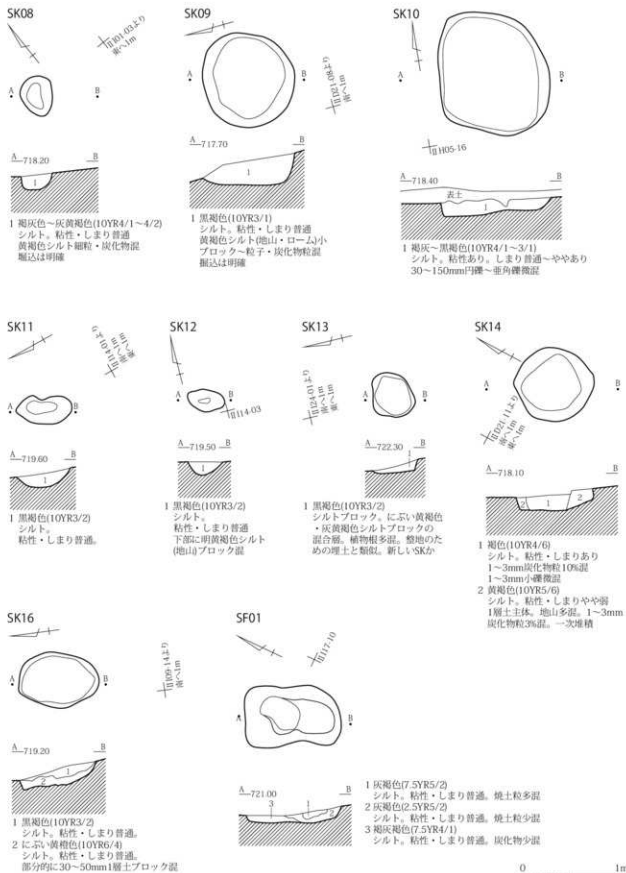
第144図 S B01 遺構図

第10表 土坑一覧表

番号	図版番号	地区	グリッド	形状		規模 (cm)			出土遺物	備考
				平面形	断面形	長軸	短軸	深さ		
SK01	145	1	II D 11	円形	逆台形状	109	95	40	なし	
SK02	145	1	II D 16	楕円形	挿鉢状	126	96	62	なし	
SK03	145	1	II D 16	円形	タライ状	120	106	42	なし	本来袋状か?
SK04	145	1	II I 03	円形	挿鉢状	46	43	11	なし	
SK05	145	1	II I 03	楕円形	挿鉢状	52	42	17	なし	
SK06	145	1	II I 03	円形	U字状	26	24	80	なし	
SK07	145	1	II D 21 II I 01	楕円形	逆台形状	178	106	50	なし	底面に不整な窪み
SK08	146	1	II D 21 II I 01	楕円形	U字状	43	35	18	なし	
SK09	146	1	II D 21	円形	タライ状	102	92	33	なし	
SK10	146	1	II H 05	円形	逆台形状	144	122	16	なし	
SK11	146	1	II I 14	楕円形	U字状	60	33	14	なし	
SK12	146	1	II I 09	楕円形	U字状	40	24	14	なし	
SK13	146	1	II I 24	円形	逆台形状	52	45	13	なし	
SK14	146	1	II D 21	円形	タライ状	82	78	20	なし	
SK16	146	1	II D 22	楕円形	U字状	86	60	20	なし	
SF01	146	1	II F 17	北側：方 南側：円	逆台形状	104	66	15	なし	2基が切り合う可能性あり



第145図 S D01、S K01～07 遺構図



第146図 SK08～14・16、SF01 遺構図

帰属時期は不明で、SB 01 および SD 01 と関連は明確でない。各土坑の属性は第10表に示した。平面形状と断面形状の分類は、第4章第3節2に記した分類法による。

(3) 溝跡

SD 01 (第145図, PL 27)

位置：1区、II D 23グリッド。検出：基本層序第Ⅲa層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：黒褐色～ぶい黄褐色シルトの単層である。形状：規模：トレンチおよび削平のため、残存するのは一部である。等高線に対してほぼ直交し南北方向へ延びる。残存部の長さ3.3m、幅90cm前後、深さ18cmを測る。断面形は逆台形を呈する。溝底の北端は南端より30cmほど低い。遺物：埋土から古墳時代前期前葉の小型壺・甕・高坏(第147図9～16)が出土した。時期：出土遺物をもって古墳時代前期前葉と推測する。

3 遺物

(1) 土器

SB 01 (第147図1～8, PL 27・28)

1は壺で、球形を呈する胴部の下部が稜を成して屈曲し、底部に向けてすぼまる器形である。2～4は櫛描文を施す甕である。2は粘土紐貼付あるいは折り返して端部を肥厚した口縁部以下に波状文を施す。波状文は乱れて緻密さを欠く。頸部くびれ部に断続的な横走文がめぐり、籐状文が形骸化したものと理解する。3・4は球形胴部の甕で、口縁部以下に、3は波状文、4は斜走文を横羽状に施す。5～7は高坏で、5は比較的大型で浅い塊状の坏部、6は円形四方透しを有する脚部、7は円形透しをもつ小型の脚部である。8は塊状の鉢である。壺・高坏・鉢すべて赤彩を施していない。

これらの土器は弥生時代後期の様相を残すが、壺・甕の球胴化、櫛描文の粗雑化、無彩化という特徴から、古墳時代前期前葉に位置づくと考えられる。

SD 01 (第147図9～16)

9はやや内彎する口縁部をもつ小型壺で、赤彩を施す。10～14は甕で、10～13は口縁部以下に櫛描文を施す。11は口縁部に波状文、頸部くびれ～胴最上部に籐状文、胴部に斜走文を縦羽状に施す。胴部は球形を呈する。10・12は口縁部に波状文、13は縦・斜走文を施し、いずれも頸部くびれ部に籐状文の一部と考えられる横走文がある。14は底部である。15・16は高坏の脚部である。15は比較的大型で円形四方透しを有する。赤彩はない。16は比較的小型である。表面が磨滅しており、赤彩の有無は不明である。

甕の波状文がやや丁寧であること、赤彩壺の存在という、若干の違いはあるものの、SB 01 とほぼ同じ様相を示しており、同時期に属する土器群と考える。

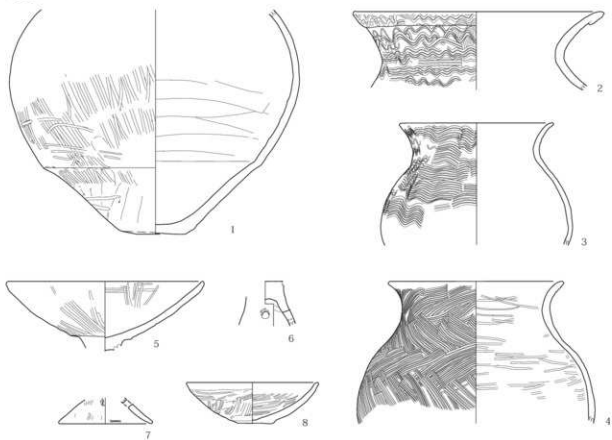
遺構外 (第147図17～19, PL 28)

17は縄文時代中期末葉の深鉢胴部で、縄文Lを縦位に施文する。1区II D 21グリッド検出面の出土である。18は小型壺で、外面・口縁部内面に赤彩を施す。19は塊状の鉢で、口縁端部がわずかに直立する。赤彩はない。18・19は1区の1トレンチの掘削で出土したもので、SB 01 あるいはSD 01 に帰属する可能性が高い。このほか、詳細時期不明の縄文土器、灰軸陶器、内耳土器の小片がごく少量出土している。

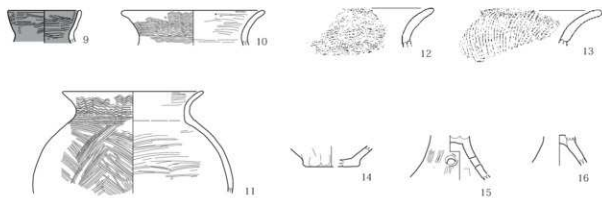
(2) 石器 (第148図1～6)

1はSB 01 床面から出土した扁平大形石である。片方の扁平面がかすかに窪み、そこに磨面が形成されており、石皿的な用方を推測する。2～5は縄文時代に属する可能性が高い。2・3は石鏃で、どちらも黒曜石製の凹基無茎鏃である。4は泥岩を石材とする横刃形石器である。横長剥片を素材とし、打点付近と左右側縁に粗い調整剝離を加えている。背面はほぼ礫面である。刃部となる下縁には使用痕と推測する微細な剝離が連続し、中央部の微細剝離は稜が鈍くなっている。5は黒曜石の剥片で、鋭い縁辺に使用

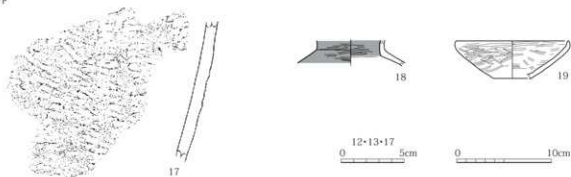
S801



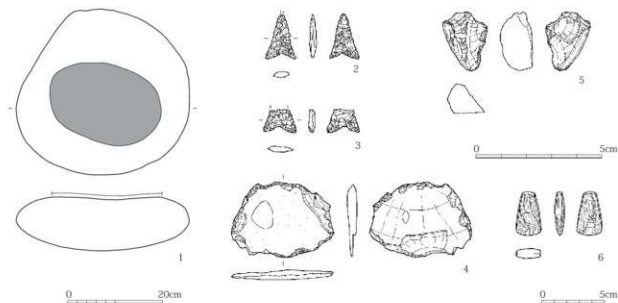
SD01



遺構外



第147図 土器



第148図 石器

痕と推測する微細な刻線が連続する。6は小型の磨製石斧で、石材は透閃石岩である。基部端は丸みを帯び、側面はほぼ平坦に仕上げている。主面・側面・基部端面とも非常に細かい異方向の擦痕が観察できる。2は1区検出面、3～5はS D 01埋土、6は2区検出面で出土した。

第3節 小結

今回の発掘では、7000㎡を超える範囲を調査したが、検出した遺構は古墳時代前期前葉の竪穴建物跡1軒および溝跡1条、時期不明の土坑16基のみである。調査区の北側に続く緩傾斜地に、竪穴建物と同時期の遺構が存在する可能性は否定できないものの、大規模な集落跡を構成する状況は考えにくいだろう。

弥生時代後期には、佐久盆地北部の濁川・湯川流域の台地上に該期の集落が集中し、西近津遺跡群、周防畑遺跡群、北一本柳遺跡などの大規模集落も多い。しかし、古墳時代前期に至ると、集落は小規模化するとともに、分布はより広域に拡散して、弥生時代には開発が及ばなかった土地に営まれるようになり、前代の集住指向から分散化への変化が指摘されている（小山2016）。

佐久盆地南西部に位置する佐久市大沢地区では、これまで古墳時代前期の集落跡は確認されていなかった。今回の調査で検出した竪穴建物跡は、該期において小規模化・分散化する集落動向を示す事例の一つであり、新たな開発地を求めて、この地に來住した小集団が営んだ集落として理解しておきたい。

引用・参考文献

- 小山岳夫 2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落—佐久盆地の集落分布の変遷を中心として—」『専修考古学』15 専修大学考古学会
- 富沢一明 2004「長野県 東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」『専修考古学』10 専修大学考古学会
- 埋文センター 2013「鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群」

第8章 三枚平B遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観 (第149図)

三枚平B遺跡は佐久市大沢地籍に所在し、八ヶ岳連峰北麓から北東に延びる丘陵部の先端付近に位置する。微地形的には、南から北へ下る細い尾根に東西両側を挟まれた谷状地形にあたる。遺跡範囲は東西約130m、南北約290mで、標高は730～760mを測る。弥生時代～古代の遺物散布地とされているものの、これまで発掘調査が行われた経歴はなく、遺跡内容は明確ではない。

谷を下った北側、片貝川沿いの平地部との間には、縄文・古墳・古代の遺物散布地である三枚平A遺跡が広がる。また、尾根を挟んだ西側に前の久保遺跡、東側に滝ノ沢遺跡がある。前者は古墳時代～古代の、後者は平安時代の遺物散布地とされていたが、中部横断道建設に伴う発掘調査により、前の久保遺跡で古墳時代前期の堅穴建物跡(本書報告)が、滝ノ沢遺跡で縄文時代・古代・中世の遺物(埋文センター2019)が検出された。

2 調査の概要

(1) 調査の経過 (第150図、P.L28)

中部横断道用地は、遺跡範囲の北縁部および東縁部にわずかに重複する形で設定されている。調査前の地目は水田、畑地、荒地であった。

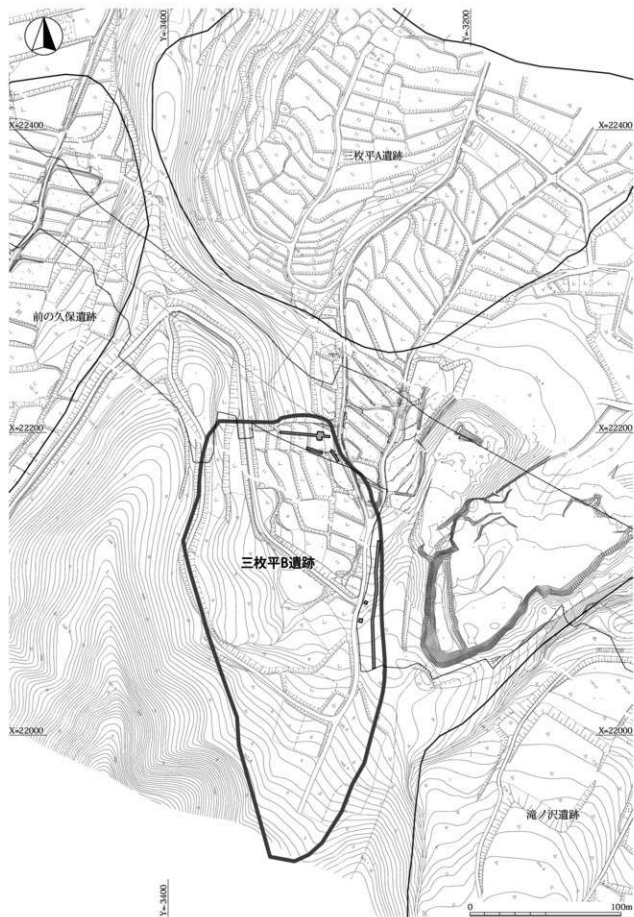
発掘調査は2009年度および2011年度に実施した。2009年度は、遺跡北縁部の水田部でトレンチ調査を行った(1～3T)。表土から遺物が少量出土したのみで、遺構はなかった。2011年度は、東縁部の荒地でトレンチ調査を行った(4～6T)。遺構はなく、遺物も出土しなかった。このため、両年度とも面的調査の必要はないと判断した。2009年度の調査地は佐久市大沢字三枚平1377-1ほか、調査面積は900㎡、期間は7月13日～8月11日である。2011年度の調査地は佐久市大沢字三枚平1360-1ほか、調査面積は900㎡、期間は7月12日～8月26日である。

(2) 基本層序 (第151図、P.L28)

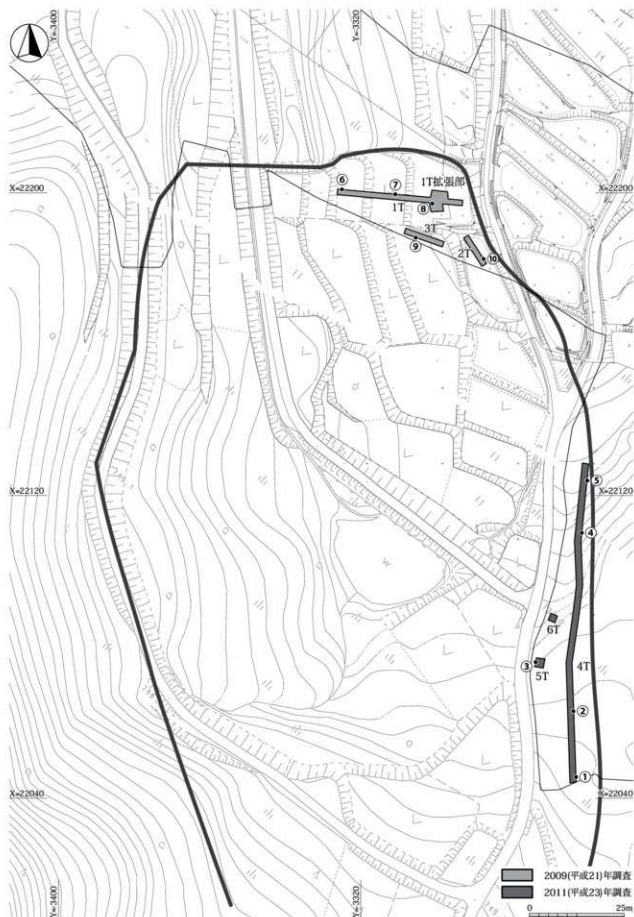
基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる。第Ⅰ層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層は黒色～暗褐色シルトで、畑および水田造成直前の旧表土と判断した。第Ⅲ層は遺跡全体の基盤を成す黄褐色～褐色シルト、第Ⅳ層は礫層である。

(3) 出土遺物 (第152図)

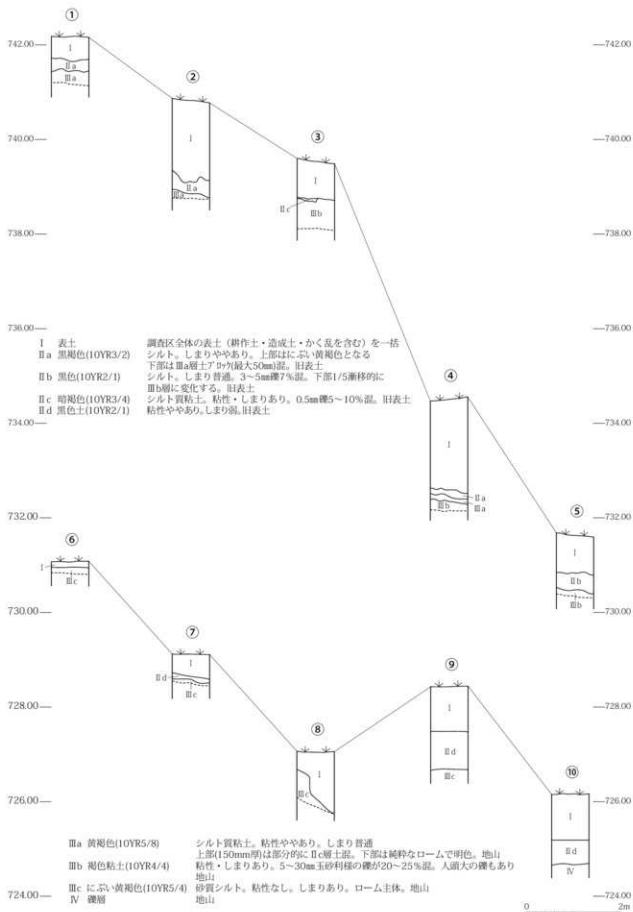
遺物は、表土から少量の土器・磁器片が出土した。1は縄文時代中期後半の深鉢胴部で、横位隆帯の上にやや斜位の平行沈線を施す。2・3は同一個体の可能性が高い薄手の深鉢片である。2は口縁部で、波状となる形勢を示す。外面に横方向のミガキを施す。3は胴部で、外面に縦方向のミガキを施す。時期不明確だが、縄文時代後～晩期と推測する。4は土師器甕で厚い口縁部をもつ。胎土に雲母を多く含み、口縁部および胴部内面に横ハケ、胴部外面に縦ハケが顕著である。こうした特徴からみて、いわゆる甲斐型甕に該当するものと考えられる。年代的には9世紀後半～10世紀前半と推測する。5は龍泉窯系の青磁逆弁



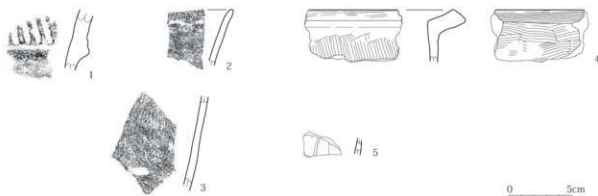
第149図 遺跡範囲・調査区位置図



第150図 トレンチ・調査区配置図



第151図 土層柱状図



第152図 出土遺物

文碗である。このほか、小片のため図示していないが、古代の土師器甕、底部回転糸切りの土師器杯が出土した。

第2節 小結

今回の調査では、遺構は存在せず、縄文時代・平安時代・中世のわずかな遺物が出土したのみである。聞き取り調査によれば、2011年度の調査部分一帯は、東側の尾根頂部から続く斜面を、昭和の初めころに掘削し埋戻して桑畑を造成したという。近現代の畑地や水田の造成により遺跡が消滅したことも考え得るが、今回の調査部分は遺跡北縁部および東縁部のわずかな面積に過ぎない。南方には未調査部分が大きく残っており、今回出土した遺物は、そこに由来する可能性がある。三枚平B遺跡全体の内容は、遺跡内および周辺部のさらなる発掘調査を待って、改めて評価するべきであろう。

わずかな出土遺物のなかに甲斐型甕がある。佐久地域における甲斐型土器の分布は、散在的ながら一定の広がりを見せており、本遺跡の近辺でも、反田遺跡の10世紀前半を中心とした5軒の住居跡、辻遺跡の9世紀前半の住居跡の出土例がある（市教委2008）。今回の調査で出土した甲斐型土器は一片にすぎないが、古代における甲斐と佐久の交流を示す資料として注目しておきたい。

引用・参考文献

市教委 2008 『反田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 149

山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）

埋文センター 2019 『滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 庚申塚 台ヶ坂遺跡 上滝・中滝・下滝遺跡 和田遺跡 和田1号塚 滝遺跡 家浦遺跡 田島塚 水堀塚』

第9章 総括

本報告では佐久市内、千曲川左岸の旧南佐久郡域に位置する、大沢地区の範囲にある5遺跡・1古墳の発掘調査記録を収録した。土地の削平により成果が乏しかった三枚平B遺跡を除き、報告した4遺跡・1古墳は縄文時代から中世にわたり、多彩な内容の成果があった。ここでは時代順にまとめる。

縄文時代

地家遺跡では、早期から後期の遺物が出土し、中期藤内式期の堅穴建物跡を検出した。大沢屋敷遺跡では、上流側から移動してきた後期前半期を主体とする遺物が出土し、微高地から低地への変換点に群在する土坑群を検出した。土坑の形態と湧水の状況から、低地型貯蔵穴の可能性が高い。

弥生時代

地家遺跡では、前期末氷Ⅱ式期の土坑3基と、広範囲から遺物が相当量出土し、一定期間の定住生活を想定できる。丘陵頂部では後期末葉の方形周溝墓1基を確認した。前期古墳と通ずる立地である。

古墳時代

前の久保遺跡では、前期の堅穴建物跡1軒を検出した。集住的な弥生後期集落から、分散居住して新規発地を求めた動向を物語る事例である。兜山古墳は新発見の古墳である。石室には佐久地方の終末期古墳に通有の要素が認められる。石室は、いわゆる疑似両袖石室形態と推定される。副葬品は少数ながら、重執りをもつ平根腸状五角形鏝は、今後、注意すべき資料である。築造時期は7世紀後半と推定した。

古代

兜山古墳では、10世紀前半～中頃の坏・埴がまとまって出土した。平安時代には、横穴石室へ副葬品を伴って埋葬を行う例がある。本古墳では、追葬ではない石室再利用の埋葬が2時期あった。地家遺跡では、8世紀後半～10世紀の集落跡を検出した。9世紀初頭までは住居が集中し、9世紀後半には高所と低地に、居住域が分散化する。この時期、古代の寺院が存在した確証はない。

中世

地家遺跡では、中央低地部の斜面を大きく開削した平坦部に、排水溝が巡る東西3間・南北3間の端正な掘立柱建物跡と、この廃絶後に築いた礎石建物跡がある。付近には、アズキ・アワがまとまって出土した堅穴建物の倉庫跡も確認された。時期は13世紀後半～15世紀と推測する。周囲の斜面部には五輪塔、墓が多数分布する。陶磁器には、青白磁梅瓶など一般集落にはないものがある。蔵骨器には美濃須衛産の四耳壺などがある。このような状況から、掘立柱・礎石建物跡は仏堂と推定され、中世長命寺の伽藍に該当すると判断する。他にも中央低地部と自然流路跡の南岸部には、柱穴規模の土坑が多数分布し、建物跡として組めないが、中心伽藍に付随する建物跡を想定する。自然流路跡からは多数の木製品が出土し、「宗教・祭祀・呪術」、「建築・職能」、「生活用具」の3用途に大別される。比率上少ない宗教等の道具からは、仏教的色彩が濃い活動がうかがえる。また加工材や端材は建築廃材のほか、道具類の製作活動の可能性を示唆する。宗教行為に限らず、中世寺院での様々な活動を物語る資料群は、特筆される発掘成果である。

以上のとおり、今回の調査によって、地域の歴史を物語る埋もれた資料を記録保存できたが、残された課題も多い。今後の地域の歴史研究に、この調査成果が活用されることを願うものである。

調査にあたり、発掘調査に御理解、御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さまに、この場を借りて深く感謝申し上げます。

第11表 地家遺跡 出土人骨一覧表

この表の部位の項には、同定できた骨や歯の名前を載せており、これら以外にも同定できない骨はある。
同定できないものは骨片とした。

骨番号	地区	遺構・グリッド等	取上番号等	遺構種類はか	生骨/焼骨	部位
1	B 6区	NR02 (01)		自然流路跡	焼骨	頭蓋骨片、他不明
2	B 6区	NR01 TP2		自然流路跡	焼骨	骨片
3	B 6区	NR01 TP2		自然流路跡	焼骨	骨片
4	B 6区	NR01 TP2		自然流路跡	焼骨	四肢骨片 1点
5	B 6区	NR01 TP2		自然流路跡	焼骨	頭蓋骨片 1点、不明 4点
6	B 6区	NR01 TP4		自然流路跡	焼骨	不明四肢骨片
7	C 5区	Ⅲ G06 五輪塔集中部		骨出土箇所	焼骨	不明四肢骨片
8	C 5区	SK130		土葬墓	生骨	歯の破片
9	C 5区	SK130		土葬墓	生骨	上腕骨遠位骨幹?
10	C 5区	SK130	骨№ 2	土葬墓	生骨	大腸骨片
11	C 5区	SK130		土葬墓	生骨	四肢骨片
12	C 5区	SK130		土葬墓	生骨	四肢骨片
13	C 5区	SK130		土葬墓	生骨	四肢骨片
14	C 5区	SK130		土葬墓	生骨	不明小骨片
15	B 6区	NR01・02 TP7		自然流路跡	焼骨	骨片
16	B 6区	NR01・02 TP7		自然流路跡	焼骨	骨片
17	C 5区	SK134		火葬管理納ビット	焼骨	細片が多数(頭蓋骨片 11点、歯根 3点、他四肢骨片多数)
18	C 5区	SK134		火葬管理納ビット	焼骨	骨片
19	C 5区	SK134		火葬管理納ビット	焼骨	骨片
20	C 5区	SK134		火葬管理納ビット	焼骨	骨片
21	C 5区	SK134		火葬管理納ビット	不明	骨片
22	C 5区	SK130	歯№ 1	土葬墓	生骨	歯片
23	C 5区	SK130	歯№ 2	土葬墓	不明	歯片
24	C 5区	テラス 1	骨№ 1	骨出土箇所	焼骨	骨片
25	C 5区	SK135		土坑	焼骨	骨片
26	C 5区	テラス 7	骨№ 5	骨出土箇所	焼骨	骨片
27	C 5区	テラス 7	骨№ 6	骨出土箇所	焼骨	不明四肢骨片
28	B12区南	NR01 TP29	骨・歯№ 1	自然流路跡	焼骨	不明
29	B12区南	NR01 TP29		自然流路跡	焼骨	骨片
30	C 5区	テラス 7	骨№ 3	骨出土箇所	焼骨	骨片
31	C 5区	テラス 7	骨№ 4	骨出土箇所	焼骨	骨片(頭蓋骨片を含む)
32	C 5区	テラス 6	埋土	骨出土箇所	焼骨	骨片
33	C 5区	テラス 7	骨№ 7	骨出土箇所	焼骨	骨片
34	C 5区	テラス 7	骨№ 8	骨出土箇所	焼骨	骨片
35	C 5区	テラス 7	骨№ 9	骨出土箇所	焼骨	骨片
36	C 5区	テラス 7	骨№ 10	骨出土箇所	焼骨	大腸骨片(粗線)、他骨片
37	C 5区	テラス 7	骨№ 11	骨出土箇所	焼骨	骨片
38	C 5区	テラス 7	骨№ 12	骨出土箇所	焼骨	骨片
39	C 5区	テラス 7	骨№ 13	骨出土箇所	焼骨	骨片
40	C 5区	テラス 7	骨№ 14	骨出土箇所	焼骨	骨片
41	C 5区	テラス 7	骨№ 15	骨出土箇所	焼骨	骨片
42	C 5区	テラス 7	骨№ 16	骨出土箇所	焼骨	骨片
43	C 5区	テラス 7	骨№ 17	骨出土箇所	焼骨	骨片
44	C 5区	テラス 7	骨№ 18	骨出土箇所	焼骨	骨片
45	C 5区	テラス 7	骨№ 19	骨出土箇所	焼骨	骨片
46	C 5区	テラス 7	骨№ 20	骨出土箇所	焼骨	骨片
47	C 5区	テラス 7	骨№ 21	骨出土箇所	焼骨	骨片
48	C 5区	テラス 7	骨№ 22	骨出土箇所	焼骨	骨片
49	C 5区	テラス 7	骨№ 23	骨出土箇所	焼骨	大腸骨骨幹後面(粗線)
50	C 5区	テラス 7	骨№ 24	骨出土箇所	焼骨	骨片
51	C 5区	テラス 7	骨№ 25	骨出土箇所	焼骨	骨片
52	C 5区	テラス 7	骨№ 26	骨出土箇所	焼骨	骨片

第11表

骨番号	地区	道構・グリッド等	取上番号等	道構種類ほか	生骨/焼骨	部位
53	C5区	テラス7 骨No16～24周辺	骨No10	骨出土箇所	焼骨	大腿骨後面(粗頰)、頭蓋骨片を含む
54	C5区	テラス7 骨No16～24周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
55	C5区	テラス7		骨出土箇所	焼骨	骨片(頭蓋骨片1点を含む)多数
56	C5区	テラス7		骨出土箇所	焼骨	骨片
57	C5区	テラス7 五輪塔テラス7-15より西側	骨No1～5 に帰属	骨出土箇所	焼骨	骨片(頭蓋骨片を含む)
58	C5区	テラス7 五輪塔テラス7-15より東側	骨No6～26 に帰属	骨出土箇所	焼骨	大腿骨遠位骨幹片、上腕骨遠位骨幹片、頭蓋骨片を含む骨片
59	B12区南	NR01 TP22		自然流路跡	焼骨	骨片
60	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	頭蓋骨片、No1と混在
60	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	左尺骨骨幹、肋骨近位部。No1と混在
61	C5区	テラス7	骨No1	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
62	C5区	テラス7	骨No1-1	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
63	C5区	テラス7	骨No1-3	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
64	B12区南	NR01 TP30		自然流路跡	焼骨	不明
65	B12区南	NR01 TP30		自然流路跡	焼骨	動物骨(馬の歯?)
骨66	C5区	テラス7	骨No1-2	火葬骨埋納ビット	焼骨	左上顎第1・第2小白歯歯冠(軽度の欠を受けている)。11歳前後
66	C5区	テラス7	骨No1-2	火葬骨埋納ビット	焼骨	右下顎第2小白歯
66	C5区	テラス7	骨No1-2	火葬骨埋納ビット	焼骨	切歯?・小白歯・大白歯を含む
66	C5区	テラス7	骨No1-2	火葬骨埋納ビット	焼骨	頰頭骨全体
66	C5区	テラス7	骨No1-2	火葬骨埋納ビット	焼骨	大腿骨骨端
66	C5区	テラス7	骨No1-2	火葬骨埋納ビット	焼骨	その他(骨端未化骨の四肢骨片)
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	左側頭骨頰骨弓
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	頰頭骨左露体
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	頭蓋骨
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	上顎骨(歯槽)
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	右下顎枝骨筋突起
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	左下顎骨下顎体後部
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	肩甲棘
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	上腕骨遠位関節
67	C5区	テラス7	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	右上腕骨骨幹、左鎖骨、左大腿骨遠位骨端外側関節部、肋骨、他に頭蓋骨片
68	C5区	Ⅲ G10	骨No1-1	骨出土箇所	焼骨	骨片
69	C5区	Ⅲ G10	骨No2	骨出土箇所	焼骨	骨片
70	B区	NR01 TP24		自然流路跡	焼骨	骨片
71	B12区南	NR01 TP24		自然流路跡	焼骨	骨片
72	B12区南	NR01 TP24		自然流路跡	焼骨	歯
73	C5区	Ⅲ G09	骨No1	骨出土箇所	焼骨	骨片
74	C5区	Ⅲ G09	骨No3	骨出土箇所	焼骨	骨片
75	C5区	Ⅲ G10	骨No3	骨出土箇所	焼骨	骨片
76	C5区	Ⅲ G10	骨No4	骨出土箇所	焼骨	骨片
77	C5区	Ⅲ G09 骨No2	骨No2	火葬骨埋納ビット	焼骨	外後頭隆起部(♂的)、歯突起、頰頭骨露体片、右脛骨近位骨幹後面、右上腕骨近位骨幹、左大腿骨骨幹後面
78	C5区	Ⅲ H11 骨No2	骨No2	骨出土箇所	不明	不明
79	C5区	Ⅲ H11 骨No1	骨No1	火葬骨埋納ビット	焼骨	右尺骨遠位骨幹、左腕骨遠位骨幹、左大腿骨骨幹
80	C5区	Ⅲ H06 骨No1	骨No1	骨出土箇所	焼骨	骨片
81	C5区	テラス8 中央ベルト		骨出土箇所	焼骨	左第2基節骨
82	C5区	Ⅲ H11 骨No3 周辺	骨No3 周辺	骨出土箇所	焼骨	骨片
83	C5区	Ⅲ H11 骨No3	骨No3	骨出土箇所	焼骨	骨片
84	C5区	雑集中		骨出土箇所	焼骨	骨片
85	C5区	Ⅲ G10		骨出土箇所	焼骨	骨片
86	C5区	Ⅲ G15	骨No1	骨出土箇所	焼骨	骨片
87	C5区	Ⅲ G15 骨No1 付近		骨出土箇所	焼骨	骨片

骨番号	地区	遺構・グリッド等	取上番号等	遺構種類ほか	生骨/焼骨	部位
88	C5区	Ⅲ G10 骨No 4 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
89	C5区	五輪塔テラス8-2 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
90	C5区	五輪塔テラス8-2 直下		骨出土箇所	焼骨	骨片
91	B12区南	NR01 TP24		自然流路跡	焼骨	骨片
92	B12区南	SE01		自然流路内水溜施設?	焼骨	骨片
93	C5区	テラス8		骨出土箇所	焼骨	骨片
94	C5区	SK189		火葬施設	焼骨	骨片
95	C5区	Ⅲ G15 骨No 4	骨No 4	骨出土箇所	焼骨	骨片
96	C5区	SK189		火葬施設	焼骨	骨片
97	C6区	SK189		火葬施設	焼骨	骨片
98	C5区	Ⅲ G10	表土	骨出土箇所	焼骨	骨片
99	C5区	Ⅲ G09 骨No 2 の北側周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
100	C5区	Ⅲ G09 骨No 2 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
101	B12区南	NR01 TP29		自然流路跡	焼骨	骨片
102	C5区	SK138		火葬施設	焼骨	骨片
103	C5区	Ⅲ G09 骨No 2	骨No 2	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
104	C5区	Ⅲ G09 骨No 5	骨No 5	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
105	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	指骨
105	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	顔蓋骨左鎌体・右鎌体
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	頭蓋骨、左椀骨近位骨幹、右尺骨骨幹部
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	下顎骨臼歯部歯槽
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	右下顎骨臼歯部
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	右下顎骨関節突起
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	下顎骨
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	指骨
106	C5区	Ⅲ G09 骨No 4	No 4	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
107	B12区南	NR01 TP24		自然流路跡	焼骨	不明
108	C5区	Ⅲ G09 骨No 6	骨No 6	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
109	C6区	Ⅲ G09 骨No 6 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
110	C7区	Ⅲ G09 骨No 6	骨No 6	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
111	C5区	Ⅲ H06 骨No 1 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
112	C5区	Ⅲ G09 骨No 8	骨No 8	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
113	C5区	Ⅲ G09 骨No 7	骨No 7	骨出土箇所	焼骨	骨片
114	C5区	Ⅲ G15 骨No 2	骨No 3	骨出土箇所	焼骨	外後頭隆起部付近、他
115	C5区	Ⅲ G15 骨No 3	骨No 3	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
116	C5区	Ⅲ G15 骨No 3	骨No 3	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
117	C5区	Ⅲ G15 骨No 3	骨No 3	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
118	C5区	Ⅲ G15 骨No 2	骨No 2	骨出土箇所	焼骨	骨片
119	C5区	Ⅲ G10 骨No 1	骨No 1	骨出土箇所	焼骨	骨片
120	C5区	Ⅲ G15 骨No 3	No 3	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
121	C5区	Ⅲ G13	表土	骨出土箇所	焼骨	骨片
122	C5区	テラス8 西端部	攪乱	骨出土箇所	焼骨	骨片
123	C5区	テラス8 骨No 3 の3cm北側周辺	表土	骨出土箇所	焼骨	骨片
124	C5区	テラス8 骨No 2 から東7cm	表土	骨出土箇所	焼骨	骨片
125	C5区	骨No 3 周辺	表土	骨出土箇所	焼骨	骨片
126	C5区	SK209	埋土	土坑	焼骨	骨片
127	C5区	テラス8 西端部	表土	骨出土箇所	焼骨	骨片
128	B区	NR01 TP23	7層	自然流路跡	焼骨	骨片
129	C5区	テラス8	攪乱	骨出土箇所	焼骨	骨片
130	C5区	Ⅲ G10 骨No 5	骨No 5	火葬管理納ビット	焼骨	顔蓋骨鎌体部(左右不明)、不明骨

第11表

骨番号	地区	道構・グリッド等	取上番号等	道構種類ほか	生骨/焼骨	部位
131	C5区	テラス8 中央部		骨出土箇所	焼骨	骨片
132	C5区	テラス7		骨出土箇所	焼骨	骨片
133	C5区	Ⅲ G09骨№1 付近		骨出土箇所	焼骨	頭蓋骨後頭骨外後頭隆起部
134	C5区	テラス8		骨出土箇所	焼骨	骨片
135	C5区	Ⅲ G09骨№1		骨出土箇所	焼骨	骨片
136	C5区	Ⅲ G09骨№2 SP.A 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
137	C5区	Ⅲ G09骨№7 周辺		骨出土箇所	焼骨	骨片
138	C5区	テラス7 西端部		骨出土箇所	焼骨	骨片
139	C5区	テラス7 中央部		骨出土箇所	焼骨	骨片
140	C5区	テラス7 ベルト		骨出土箇所	焼骨	骨片
141	C5区	Ⅲ G08骨№1 外周		骨出土箇所	焼骨	骨片
142	C5区	Ⅲ G09骨№1 北側		骨出土箇所	焼骨	左側頭骨外耳孔部、不明骨
143	C5区	SK217		土坑	焼骨	骨片
144	C5区	テラス7 大形地輪の 前面		骨出土箇所	焼骨	側頭骨錐体部片、骨片
145	C5区	Ⅲ G08骨№1	№1	火葬骨埋納ビット	焼骨	左右側頭骨錐体部片、不明骨
146	C5区	SK220		配石土坑	焼骨	骨片
147	C5区	SK220		配石土坑	焼骨	骨片
148	C5区	テラス8		骨出土箇所	焼骨	骨片
149	C5区	テラス8 Ⅲ -H11～東 へ3m付近		骨出土箇所	焼骨	骨片
150	C5区	テラス8 Ⅲ -H12～西 へ3.2m、南へ2.2m付近		骨出土箇所	焼骨	骨片
151	C5区	Ⅲ G09骨№9	骨№9	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
152	C5区	Ⅲ G09骨№10	骨№10	火葬墓	焼骨	骨片
153	B2区西	テラス12		埋土	骨出土箇所	焼骨 骨片
154	B区	東部		擾乱	骨出土箇所	焼骨 骨片
155	C5区	テラス7 東部		礫集積	骨出土箇所	焼骨 左腕骨遠位骨幹
156	C5区	テラス7 西部		礫集積	骨出土箇所	焼骨 左足第2基節骨骨幹部、腓骨?骨幹部
157	C5区	テラス7 礫集積の限 界		礫集積	骨出土箇所	焼骨 骨片
158	C5区	テラス7		礫集積(黒 色土層)	骨出土箇所	焼骨 足の基節骨(遠位端欠)
159	C5区	テラス7 礫集積の限 界		礫集積	骨出土箇所	焼骨 骨片
160	C5区	テラス7-1 直下		礫集積	骨出土箇所	焼骨 骨片
161	C5区	テラス7-2 直下		礫集積	骨出土箇所	焼骨 骨片
162	C5区	テラス7		3層	骨出土箇所	焼骨 骨片
163	C5区	テラス7 中央部		骨出土箇所	焼骨	骨片
164	C5区	地輪テラス7-1 挟り 込み内の土		骨出土箇所	焼骨	骨片
165	C5区	地輪テラス7-2 挟り 込み内の土		骨出土箇所	焼骨	骨片
166	C5区	SK466		配石土坑	焼骨	骨片
167	C5区	SK466		配石土坑	焼骨	骨片
168	C5区	SK466		配石土坑	焼骨	骨片
169	C5区	SK466		配石土坑	焼骨	骨片
170	C5区	SK466		配石土坑	焼骨	骨片
171	C5区	テラス7		骨出土箇所	焼骨	骨片
172	B13区	SK319		配石毒	焼骨	骨片
173	B13区	SK319		配石土坑	焼骨	骨片
174	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	頭蓋骨片
175	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	頭蓋骨片
176	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	右側頭骨錐体片、外耳道付近
177	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	骨片
178	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	骨片
179	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	骨片

骨番号	地区	遺構・グリッド等	取上番号等	遺構種類ほか	生骨/焼骨	部位
180	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	骨片
181	B13区	SK320		配石土坑	焼骨	骨片
182	B13区	SK507		土坑	焼骨	骨片
183	B13区	SK507		土坑	焼骨	骨片
184	B13区	SK507		土坑	焼骨	骨片
185	B13区	SK508		土坑	焼骨	骨片
186	B13区	SK508		土坑	焼骨	頭蓋骨片・骨片
187	B13区	SK508		土坑	焼骨	骨片
188	B13区	SK515		土坑	焼骨	骨片
189	C8区	SK436		土坑	焼骨	右脛骨骨幹
190	B12区南	NR01 TP27	10層	自然流路跡	焼骨	右大腿骨骨幹
191	B13区	II W07		骨出土箇所	焼骨	骨片
192	B13区	II W07		骨出土箇所	焼骨	骨片
193	B13区	II W13	骨No.1	骨出土箇所	焼骨	骨片
194	B13区	II W13	骨No.2	骨出土箇所	焼骨	頭蓋骨片が主で、他骨片数点
195	B13区	II W13	骨No.3	骨出土箇所	焼骨	骨片
196	B13区	II W13		骨出土箇所	焼骨	骨片
197	B13区	II W13		骨出土箇所	焼骨	骨片
198	B13区	II W13		骨出土箇所	焼骨	骨片
199	C8区	検出面		骨出土箇所	焼骨	骨片
200	B1区	SK02	南No.1	土葬墓	生骨	歯
201	B1区	SK02	南No.2	土葬墓	生骨	歯
202	B1区	SK02	南No.3	土葬墓	生骨	歯
203	B1区	SK02	南No.4	土葬墓	生骨	歯
204	B1区	SK02	南No.5	土葬墓	生骨	歯
205	B1区	SK02	南No.6	土葬墓	生骨	歯
206	B1区	SK02	南No.7	土葬墓	生骨	歯
207	B1区	SK02	南No.8	土葬墓	生骨	歯
208	B1区	SK02	南No.9	土葬墓	生骨	歯
209	B1区	SK02	南No.10	土葬墓	生骨	歯
210	B1区	SK02	南No.11	土葬墓	生骨	歯
211	B1区	SK02	南No.12	土葬墓	生骨	歯
212	B1区	SK02	南No.13	土葬墓	生骨	歯
213	B1区	SK02		土葬墓	生骨	不明
214	B1区	SK04	No.4・5	土葬墓(本棺)	生骨	右脛骨骨幹
215	B1区	SK04	No.6	土葬墓(本棺)	生骨	右大腿骨骨幹
216	B1区	SK04	No.7	土葬墓(本棺)	生骨	骨片
217	B1区	SK04	No.8	土葬墓(本棺)	生骨	骨片
218	B1区	SK04	No.9	土葬墓(本棺)	生骨	骨片
219	B1区	SK04	No.10	土葬墓(本棺)	生骨	骨片
220	B1区	SK04	No.11	土葬墓(本棺)	生骨	頭蓋骨、歯：F顎右C、P1、P2、M1、M2、M3、左P1、P2、M1、M2、上顎右1、I2、C、P1、P2、M1、M2、他に不明大白歯1
221	B1区	SK04	No.12	土葬墓(本棺)	生骨	歯
222	B1区	SK04	No.13	土葬墓(本棺)	生骨	歯
223	B1区	SK04	上層	土葬墓(本棺)	生骨	骨片
224	B1区	SK05 東西ベルト西側	I層	小型堅穴状遺構	焼骨	骨片
225	B1区	SK05	攪乱	小型堅穴状遺構	焼骨	骨片
226	B1区	SK07	埋土	火葬墓	焼骨	骨片
227	B1区	SK07	攪乱	一	焼骨	骨片
228	B1区	SK16	骨No.1	土葬墓	生骨	骨片なし
229	B1区	SK16	骨No.2	土葬墓	生骨	骨片
230	B1区	SK16	骨No.3	土葬墓	生骨	骨片
231	B1区	SK16	骨No.4	土葬墓	生骨	骨片
232	B1区	SK16	骨No.5	土葬墓	生骨	骨片

第11表

骨番号	地区	道構・グリッド等	取上番号等	道構種類ほか	生骨/焼骨	部位
233	B1区	SK16	骨No 6・南 FNo 2・3	土葬墓	生骨	歯:下左 M1、M2、下顎骨片
234	B1区	SK16	骨No 7	土葬墓	生骨	骨片
235	B1区	SK16	骨No 8	土葬墓	生骨	左側頭骨雑体片
236	B1区	SK16	歯上右No 1	土葬墓	生骨	上右 I1 (破損)
237	B1区	SK16	歯上左No 1	土葬墓	生骨	上右 I1 (破損)
238	B1区	SK16	歯下No 1	土葬墓	生骨	下右 P2
239	B1区	SK16	歯上右No 2	土葬墓	生骨	上左 I2
240	B1区	SK16	歯上左No 2	土葬墓	生骨	上右 I2
241	B1区	SK16	歯上右No 3	土葬墓	生骨	下右 C
242	B1区	SK16	歯上左No 3	土葬墓	生骨	右上 C
243	B1区	SK16	歯上右No 4	土葬墓	生骨	上左 P1
244	B1区	SK16	歯上左No 4	土葬墓	生骨	上右 P1
245	B1区	SK16	歯上右No 5	土葬墓	生骨	上左 P2
246	B1区	SK16	歯上左No 5	土葬墓	生骨	上右 P2
247	B1区	SK16	歯上右No 6	土葬墓	生骨	上右
248	B1区	SK16	歯 A	土葬墓	生骨	骨なし
249	B1区	SK16	歯 B	土葬墓	生骨	骨なし
250	B1区	SK16	歯 C	土葬墓	生骨	上右 M3
251	B1区	SK16 東側骨群 (脚分)		土葬墓	生骨	骨片
252	B1区	SK17 骨No 1	骨No 1	火葬骨埋納ビット	焼骨	下顎骨右下顎枝、左側頭骨雑体、上顎骨歯槽部
252	B1区	SK17 骨No 1	骨No 1	火葬骨埋納ビット	焼骨	上顎骨切歯、臼歯歯槽
252	B1区	SK17 骨No 1	骨No 1	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
252	B1区	SK17 骨No 1	骨No 1	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
252	B1区	SK17 骨No 1	骨No 1	火葬骨埋納ビット	焼骨	上顎骨左歯槽、椎骨棘突起片、下顎骨右筋突起付近、大腸骨頭など
252	B1区	SK17 骨No 1	骨No 1	火葬骨埋納ビット	焼骨	左側頭骨雑体、大腸骨頭
253	B1区	SK17 骨No 2	骨No 2	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
253	B1区	SK17 骨No 2	骨No 2	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
253	B1区	SK17 骨No 2	骨No 2	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
254	B1区	SK17 骨No 3	骨No 3	火葬骨埋納ビット	焼骨	大腸骨粗線部、他
254	B1区	SK17 骨No 3	骨No 3	火葬骨埋納ビット	焼骨	左距骨片
255	B1区	SK17 骨No 5	骨No 5	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
256	B1区	SK17 骨No 6	骨No 6	骨出土箇所	焼骨	骨片
257	B1区	SK17 骨No 7	骨No 7	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
257	B1区	SK17 骨No 7	骨No 7	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
257	B1区	SK17 骨No 7	骨No 7	火葬骨埋納ビット	焼骨	左側頭骨雑体、外後頭隆起部付近、上顎骨臼歯歯槽部
258	B1区	SK17 骨No 8	骨No 8	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
258	B1区	SK17 骨No 8	骨No 8	火葬骨埋納ビット	焼骨	頭蓋冠片、頸椎片、骨片
259	B1区	SK17 骨No 9	骨No 9	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
259	B1区	SK17 骨No 9	骨No 9	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
259	B1区	SK17 骨No 9	骨No 9	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
259	B1区	SK17 骨No 9	骨No 9	火葬骨埋納ビット	焼骨	側頭骨後部 (アステリオン部)
259	B1区	SK17 骨No 9	骨No 9	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
259	B1区	SK17 骨No 9	骨No 9	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
260	B1区	SK17 骨No 10	骨No 10	骨出土箇所	焼骨	骨片
261	B1区	SK17 骨No 11	骨No 11	骨出土箇所	焼骨	骨片
261	B1区	SK17 骨No 11	骨No 11	骨出土箇所	焼骨	骨片
262	B1区	SK17 骨No 12	骨No 12	骨出土箇所	焼骨	大腸骨粗線部
263	B1区	SK17 骨No 13	骨No 13	骨出土箇所	焼骨	骨片
264	B1区	SK17 骨No 14	骨No 14	骨出土箇所	焼骨	骨片
265	B1区	SK17 骨No 15	骨No 15	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬骨埋納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬骨埋納ビット	焼骨	前頭骨片

骨番号	地区	遺構・グリッド等	取上番号等	遺構種類ほか	生骨/焼骨	部位
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
266	B1区	SK17 骨No 16	骨No 16	火葬管理納ビット	焼骨	骨片
267	B1区	SK17 骨No 1 と No 6 の間		骨出土箇所	焼骨	骨片
268	B1区	SK17 骨No 1 と No 7 の間		骨出土箇所	焼骨	骨片
268	B1区	SK17 骨No 1 と No 7 の間		骨出土箇所	焼骨	頭蓋骨片 4点
269	B1区	SK17 骨No 1 と No 9 の間		骨出土箇所	焼骨	骨片
270	B1区	SK17 骨No 3 と No 9 の間		骨出土箇所	焼骨	骨片
271	B1区	SK17		骨出土箇所	焼骨	四肢骨片
271	B1区	SK17		骨出土箇所	焼骨	頭蓋骨細片数点
272	B1区	SK17		骨出土箇所	焼骨	頭蓋骨片 1点、四肢骨片数点
273	B1区	SK17 脇		骨出土箇所	焼骨	骨片
274	B1区	SK19	南No 11	土葬墓	生骨	上左 I1
275	B1区	SK19	南No 12	土葬墓	生骨	下左 M2、下左 P2
276	B1区	SK19	骨No 13	土葬墓	生骨	骨片
277	B1区	SK19	南No 14	土葬墓	生骨	骨片
278	B1区	SK19	南No 15	土葬墓	生骨	骨片
279	B1区	SK19	南No 16	土葬墓	生骨	下左 C、上左 C
280	B1区	SK19	南No 17	土葬墓	生骨	下左 P1
281	B1区	SK19	骨No 18	土葬墓	生骨	下左 M1、下左 I1、上左 P2
282	B1区	SK19	骨No 19	土葬墓	生骨	左側頭骨残体片、上顎骨片、上右 I2、上右 C、上右 P2、上右 M1、上左 C、上左 P1、P2、上左 M1、M2、M3、下右 I1、I2、C、下右 P1、P2、下左 M1、M2、M3、下右 M1、M2、M3
283	B1区	SK19		土葬墓	焼骨	骨片
284	B1区	SK19 北壁側	中層	土葬墓	焼骨	骨片
285	B1区	SK31 蔵骨器	0～3cm	火葬墓	焼骨	特定できるものなし（ごく少ない量、下層との境界で検出）
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	下顎切歯（唇側）
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	上顎小白歯（舌側）
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	上顎左大白歯
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	骨片
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	指骨
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	右膝蓋骨
286	B1区	SK31 蔵骨器	3～6cm	火葬墓	焼骨	骨片
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	上顎犬象象牙質
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	上顎左第3大白歯象牙質
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	下顎右第2小白歯歯冠
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	下顎左大白歯歯冠片
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	歯冠片
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	歯根
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	左側頭骨関節？
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	頭の骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	上腕骨？
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	左上腕骨/上腕骨遠位関節
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	腕骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	尺骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	指骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	肋骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	椎骨

第11表

骨番号	地区	道構・グリッド等	取上番号等	道構種類ほか	生骨/焼骨	部位
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	腓骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	趾骨
287	B1区	SK31 蔵骨器	6～9cm	火葬墓	焼骨	骨片
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	歯冠片
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	頭頂骨
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	後頭骨鱗部(12～15cmに接合破片あり)
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	右上顎骨頬骨
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	頭椎
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	椎骨
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	肋骨
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	大腸骨(12～15cmに接合片あり)
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	指骨
288	B1区	SK31 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	骨片
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	下顎左第2小臼歯歯冠
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	特定せず
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	前頭骨
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	右側頭骨関節窩
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	左側頭骨腫体
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	後頭骨舌神経首部
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨融合骨(9～12cmに接合片あり、後頭骨鱗部)
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	下顎骨関節突起
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	肩甲骨基部
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	左尺骨近位端
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	指骨
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	椎骨棘突起
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	肋骨
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	大腸骨?(9～12cmに接合片あり)
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	足の親指基部
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	趾骨
289	B1区	SK31 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	右上顎大白歯歯冠片・他
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	右下顎大白歯歯根
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	歯片
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	下顎骨(正中部、右下顎体～下顎枝、角前切痕あり、歯はすべて生えていた)
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	右頭骨
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	椎骨
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	肋骨
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	仙骨後面(一部)
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	左腓骨遠位端
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	右踵骨
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	指骨
290	B1区	SK31 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	骨片
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	下顎第1小臼歯象牙質
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	歯片
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	右側頭骨腫体
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	第2頸椎歯突起(いわゆるのど仏の一部)
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	椎骨
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	肋骨
291	B1区	SK31 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	骨片
292	B1区	SK32 蔵骨器	0～21cm	火葬墓	焼骨	骨片
293	B1区	SK32 蔵骨器	0～7cm	火葬墓	焼骨	骨片
294	B1区	SK32 蔵骨器	7～12cm	火葬墓	焼骨	骨片

骨番号	地区	遺構・グリッド等	取上番号等	遺構種類ほか	生骨/焼骨	部位
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	骨片
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	第2頸椎前突起(いわゆるのど仏の一部)
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	下顎
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	踵体
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	寛骨臼(骨盤)
295	B1区	SK32 蔵骨器	9～12cm	火葬墓	焼骨	尺骨
295	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
295	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
295	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	右手根骨楔状骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	大腸骨骨幹部
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	大腸骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	足の指骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	肋骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	椎骨の一部
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	上顎大臼歯
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	足根骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	歯
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	胸骨右遠位端
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	中足骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	寛骨?
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	大腸骨遠位端
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	前頭骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	膝蓋骨左
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	手根骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	右手根骨楔状
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	指骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	右上顎骨(大臼歯部)
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	中足骨 or 中手骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	肩甲骨
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
296	B1区	SK32 蔵骨器	12～15cm	火葬墓	焼骨	骨片
296	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	炭化物
296	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	骨片
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	手根骨豆状骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	指骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	右脛骨上部
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	足の指骨(親指) 基節・末節
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	その他
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	尺骨左近位部
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	上顎骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	椎骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	下顎骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	上腕骨骨頭
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	大腸骨骨頭
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	上腕骨右遠位部
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	肩甲骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	上腕骨近位端骨頭
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	頸頭骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	手根骨豆状
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	指骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	趾骨基節末節
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	右脛骨上部

第11表

骨番号	地区	道構・グリッド等	取上番号等	道構種類ほか	生骨/焼骨	部位
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	手根骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	膝蓋骨
297	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	不明
298	B1区	SK32 蔵骨器	15～18cm	火葬墓	焼骨	左下顎骨関節
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	右脛骨栄養孔部
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	その他
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	右脛骨栄養孔
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	大腸骨遠位部
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	顔頭骨左靠体
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	踵骨
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	頭蓋骨
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	尺骨遠位端
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	鎖骨左
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	橈骨近位端
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	肩甲骨肩峰
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	左下顎骨関節
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	椎骨
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	腓骨遠位端
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	骨片
298	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	骨片
299	B1区	SK32 蔵骨器	18～21cm	火葬墓	焼骨	骨片
299	B1区	SK32 蔵骨器	21～24cm	火葬墓	焼骨	距骨左
299	B1区	SK32 蔵骨器	21～24cm	火葬墓	焼骨	大腸骨骨頭
299	B1区	SK32 蔵骨器	21～24cm	火葬墓	焼骨	踵骨
299	B1区	SK32 蔵骨器	21～24cm	火葬墓	焼骨	骨片
299	B1区	SK32 蔵骨器	21～24cm	火葬墓	焼骨	骨片
299	B1区	SK32 蔵骨器	21～24cm	火葬墓	焼骨	骨片
300	B1区	SK32 蔵骨器	0～24cm	火葬墓	焼骨	骨片
301	B1区	SK40		火葬墓	焼骨	骨片
302	B1区	SK40		火葬墓	焼骨	骨片
302	B1区	SK40		火葬墓	焼骨	骨片
303	B1区	SK42	骨No 1	土坑	焼骨	骨片
303	B1区	SK42	骨No 2	土坑	焼骨	骨片
303	B1区	SK42		土坑	焼骨	骨片
303	B1区	SK42		土坑	焼骨	骨片
304	B11区	SK80	骨No 1	火葬墓	焼骨	骨片
305	B11区	SK80	骨No 2	火葬墓	焼骨	骨片
306	B11区	SK80	骨No 3	火葬墓	焼骨	骨片
307	B11区	SK80		火葬墓	焼骨	骨片
308	B11区	SK80		火葬墓	焼骨	骨片
309	B11区	SK81	骨No 1	土葬墓	生骨	左側頭骨靠体片、前頭骨片、歯(12本)
309	B11区	SK81	骨No 1	土葬墓	生骨	歯(13点)、他骨片
309	B11区	SK81	骨No 1	土葬墓	生骨	右側頭骨靠体片
310	B11区	SK81	骨No 2	土葬墓	焼骨	骨片
311	B11区	SK81		土葬墓	焼骨	骨片
312	B11区	SK81		土葬墓	焼骨	骨片
313	B11区	SK81		土葬墓	焼骨	骨片
314	B11区	SK81	骨一括	土葬墓	焼骨	骨片
315	B11区	SK81 周辺	検出	骨出土箇所	焼骨	骨片
316	A10区	SK83		土葬墓	生骨	右大腸骨近位1/3ほど。
317	A10区	SK83		土葬墓	生骨	左寛骨(耳状面から寛骨臼部)
318	A10区	SK83		土葬墓	生骨	右寛骨臼部
319	A10区	SK83		土葬墓	生骨	右大腸骨遠位部が1/3ほど欠。
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	左下顎骨体、右II、左I1-P1、M1、M2、他に上右II、C、上左I2
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	不明
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	下右C

骨番号	地区	遺構・グリッド等	取上番号等	遺構種類はか	生骨/焼骨	部位
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	下右P1
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	不明の歯
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	下顎骨片
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	歯の破片
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	不明の骨
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	矮小歯(歯種不明)
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	下右I2
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	頭蓋骨骨片
320	A10区	SK83		土葬墓	生骨	上右I2、上右M1、上左M1、M2、下左C?
321	A10区	SK85		土葬墓	生骨	左大腿骨骨幹
322	A10区	SK85		土葬墓	生骨	左脛骨骨幹
323	A10区	SK85		土葬墓	生骨	腓骨片他
324	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右脛骨骨幹
325	A10区	SK85		土葬墓	生骨	腓骨片
326	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右鎖骨中央部
327	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右寛骨の大坐骨切痕部
328	A10区	SK85		土葬墓	生骨	中手あるいは中足骨骨幹
329	A10区	SK85		土葬墓	生骨	四肢骨片
330	A10区	SK85		土葬墓	生骨	左前腕(桡骨・尺骨の近位部骨幹)
331	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右大腿骨骨幹、遠位関節面の一部
332	A10区	SK85		土葬墓	生骨	左寛骨大坐骨切痕部
333	A10区	SK85		土葬墓	生骨	左上腕骨骨幹
334	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右上腕骨
335	A10区	SK85		土葬墓	生骨	頭蓋骨
336	A10区	SK85		土葬墓	生骨	手指骨
337	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右前腕骨
338	A10区	SK85		土葬墓	生骨	右前腕骨
339	A10区	SK85		土葬墓	生骨	顔骨?
340	A10区	SK85		土葬墓	生骨	脊椎
341	A10区	SK85		土葬墓	生骨	肋骨
342	A10区	SK85		土葬墓	生骨	破片
343	A10区	SK85		土葬墓	生骨	頭部破片
344	A10区	SK85		土葬墓	生骨	肋骨破片
345	A10区	SK85		土葬墓	生骨	肋骨破片
346	A10区	SK85		土葬墓	生骨	背骨
347	A10区	SK85		土葬墓	生骨	背骨
348	A10区	SK85		土葬墓	生骨	腰破片
349	A10区	SK85		土葬墓	生骨	手部
350	A10区	SK85		土葬墓	生骨	骨片
351	B2区西	SK89		火葬墓	焼骨	骨片
352	B2区西	SK89		火葬墓	焼骨	骨片
353	B2区西	SK89		火葬墓	焼骨	骨片
354	B2区西	SK89		火葬墓	焼骨	骨片
355	B2区西	SK89		火葬墓	焼骨	骨片
356	B2区西	SK89		火葬墓	焼骨	骨片
357	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
358	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
359	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
360	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
361	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
362	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
363	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
364	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
365	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
365	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
366	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片

第11表

骨番号	地区	道構・グリッド等	取上番号等	道構種類ほか	生骨/焼骨	部位
367	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	頭蓋骨
368	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
369	B3区	SK103		火葬施設	焼骨	骨片
370	B1区	SK04・05・06北西区		骨出土箇所	焼骨	骨片
371	B1区	SM01上面 SK17付近		骨出土箇所	焼骨	骨片
372	B1区	SM01を切る攪乱		骨出土箇所	焼骨	骨片
373	B1区	II K22-11		骨出土箇所	焼骨	骨片
374	B1区	II P02		骨出土箇所	焼骨	骨片
375	B1区	北郷尾根頂部 II P03		骨出土箇所	焼骨	骨片
376	B1区	II P17-15		骨出土箇所	焼骨	骨片
377	B4区西	II U10		骨出土箇所	焼骨	骨片
378	B1区		横出面	骨出土箇所	焼骨	骨片
379	B6区			骨出土箇所	焼骨	骨片
380	B11区	プレハブ西トレンチ内		骨出土箇所	焼骨	骨片
381	B12区			骨出土箇所	焼骨	骨片
382	B11区	表土		骨出土箇所	焼骨	骨片
383	B1区	SK106		火葬墓	焼骨	骨片
384	B1区	SK106		火葬墓	焼骨	骨片
385	B1区	SK106		火葬墓	焼骨	骨片
386	B4区	SK111		土葬墓(木棺?)	焼骨	骨片
387	B6区	NR01 1TR		自然流路跡	焼骨	骨片
388	A10区	SK85		土葬墓	生骨	骨片
389	B1区	II P16-10	骨No 1	骨出土箇所	焼骨	骨片
390	B1区	II P16-10	骨No 2	骨出土箇所	焼骨	骨片
391	B1区	II P16-17		骨出土箇所	焼骨	骨片
392	B1区	北郷尾根頂部		骨出土箇所	焼骨	骨片
393				骨出土箇所	生骨	骨片
394	B12区南			骨出土箇所	生骨	骨片
395	B12区南			骨出土箇所	生骨	不明四肢骨
396	B4区	SK111		土葬墓(木棺?)	生骨	下左 M1
397	A10区	SK83	No 1	土葬墓	生骨	左足根骨(距骨、踵骨)
397	A10区	SK83	No 2	土葬墓	生骨	大腸骨頭(左右不明)、他四肢骨片
397	A10区	SK83	No 3	土葬墓	生骨	骨片(不明)
397	A10区	SK83	No 4	土葬墓	生骨	骨片(不明)
397	A10区	SK83	No 5	土葬墓	生骨	骨片(不明)

第12表 地家遺跡 出土人骨の骨の計測表

① 上顎歯の計測値と比較資料 (単位はmm)

遺跡名	No	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3			
		m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l		
地家遺跡 (中座)	SK02	右	9.6	6.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.1	11.4	
		左	9.5	6.4	7.3	5.7	8.2	7.5	7.7	9.1	7.2	9.0	11.3	11.8	-	-	9.4	11.7	
	SK04	右	8.5	7.5	-	-	7.8	8.2	7.2	10.4	6.5	10.0	10.5	11.9	-	-	7.2	10.0	
		左	-	-	-	-	7.6	8.3	7.3	10.3	6.9	10.0	-	-	9.6	13.0	7.5	10.4	
	SK16	右	-	-	6.8	6.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		左	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.3	9.8
SK19	右	-	-	8.1	7.3	8.3	9.0	7.6	10.1	7.1	9.4	10.9	12.4	10.7	12.5	9.4	11.2		
	左	8.6	-	-	-	8.2	8.8	-	-	7.1	9.9	10.8	12.6	-	-	-	-		
SK81	右	-	-	-	-	7.5	-	7.3	9.3	6.4	8.8	-	11.6	-	-	-	-		
	左	-	-	-	-	-	-	-	-	6.4	8.9	10.4	12.1	-	-	-	-		
現代日本人 (藤田, 1959)	♂	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.58	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79		
	♀	8.35	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.57	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50		

② 下顎歯の計測値と比較資料 (単位はmm)

遺跡名	No	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		
		m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	
地家遺跡 (中座)	SK02	左	-	-	-	-	-	-	7.3	7.2	7.8	8.4	12.2	11.0	11.8	10.7	10.2	10.8
		右	-	-	7.8	8.6	6.7	8.6	7.2	8.7	11.0	10.6	11.5	11.3	-	-	-	-
	SK04	左	-	-	-	-	-	-	7.0	8.9	7.0	8.8	-	10.7	-	-	-	-
		右	-	-	7.4	8.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	SK16	左	-	-	-	-	-	-	-	-	7.1	8.7	11.0	10.7	10.9	9.7	-	-
		右	6.2	5.8	6.6	6.5	7.6	8.7	7.4	9.1	8.1	9.5	11.6	12.0	11.8	11.8	11.7	10.8
SK19	左	6.1	6.1	-	-	7.5	8.5	7.7	8.6	8.9	9.1	11.8	11.9	11.5	11.5	11.6	10.8	
	右	5.5	6.0	5.9	6.1	-	7.3	7.0	8.1	7.3	8.3	11.5	10.3	10.7	9.7	10.1	10.1	
SK81	左	5.4	5.5	6.0	6.2	-	-	-	7.3	7.6	8.3	-	-	10.5	9.7	10.4	10.7	
	右	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28	
現代日本人 (藤田, 1959)	♂	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02	
	♀	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第13表

第13表 兜山古墳 出土人骨一覧表

骨番号	出土位置	取上番号ほか	出土層位	部位など	
骨1		B1	2・3層界付近	右上腕骨骨幹遠位部。細い	
骨2	石室内1区	B2	2・3層界付近	右橈骨骨幹の一部。細い	
骨3	石室内1区	B3	2・3層界付近	左橈骨骨幹の一部	最発達部径14.3
骨4	石室内1区	B4	2・3層界付近	右大腿骨骨幹近位部。殿筋隆起あり	
骨5	石室内1区	B4	2・3層界付近	右大腿骨骨幹遠位部寄り	年代測定試料
骨6	石室内2区	B5	3層(石室内トレンチ)	右側頭部の岩様部	
骨7	石室内2区	B5-1	上床直上	不明	
骨8	石室内2区	B5-2	上床直上	不明(骨はない)	
骨9	石室内2区	B5-3	上床直上	不明	
骨10	石室内2区	B5-4	上床直上	右側頭部の一部	
骨11	石室内2区	B5-5	上床直上	不明	
骨12	石室内2区	B5-6	上床直上	不明	
骨13	石室内2区	B5-7	上床直上	頭蓋骨片	
骨14	石室内2区	B6	3層(石室内トレンチ)	不明	
骨15	石室内2区	B6	3層	不明	
骨16	石室内2区	B6		四肢骨片	
骨17	石室内2区	B7	3層	不明	
骨18	石室内4区	B8		不明	
骨19	石室内4区	B8		大腿骨骨幹。左右不明。扁平	
骨20	石室内4区	B9		不明	
骨21	石室内4区	B9	3層	不明	
骨22	石室内4区	B9		不明	
骨23	石室内4区	B9	4層(上床確間隙)	不明	
骨24	石室内4区	B9	4層(上床確間隙)	不明	
骨25	石室内2区	B10		不明	
骨26	石室内1区	B11	3層	不明	
骨27	石室内2区	B12	3層	不明	
骨28	石室内2区	B12		不明	
骨29	石室内4区	B13		不明	
骨30	石室内4区	B13		不明	
骨31	石室内4区	B14		四肢骨片	
骨32	石室内4区	B14		不明	
骨33	石室内4区	B15		四肢骨片	
骨34	石室内4区	B15		不明	
骨35	石室内1区	B16		不明	
骨36	石室内1区	B16		不明	
骨37	石室内4区	B17		不明	
骨38	石室内4区	B17		四肢骨。部位不明	
骨39	石室内4区	B17		不明	
骨40	石室内4区	B18		不明	
骨41	石室内4区	B18		右大腿骨骨幹(粗線)	
骨42	石室内2区	B19		右下顎体後部・大白歯部・咬筋部	第3大白歯脱落。多分第2大白歯も脱落している。さほど若くない成人のものと思われる。
骨43	石室内3区	B20	上床直上	不明	
骨44	石室内3区	B21	上床直上	不明	
骨45	石室内3区	B21	上床直上	不明	
骨46	石室内3区	B21		不明	
骨47	石室内3区	B22	上床直上	不明	
骨48	石室内4区	B23	4層(上床確間隙)	不明	
骨49	石室内4区	B24	4層(上床確間隙)	不明	
骨50	石室内4区		1層	不明(骨かどうか?)	
骨51	石室内1区		3層	不明	
骨52	石室内4区		3層	不明	

骨番号	出土位置	取上番号はか	出土層位	部位など	
骨53	石室内2区		3層	不明	
骨54	石室内4区		上床直上	不明	
骨55	石室内4区		上床直上	不明	
骨56	石室内2区		上床直上	不明	
骨57	石室内1区			不明	
骨58	A-4 グリッド左 側壁		1層	不明	
骨59	A-4 グリッド石 室西前面		崩落土中	不明	
骨60	石室内6区	水洗選別	3層	モグラの左右上腕骨	
骨61	石室内1区	水洗選別	3層 20～30cm	不明	
骨62	石室内1区	水洗選別	3層	不明	
骨63	石室内2区	水洗選別	3層	不明	
骨64	石室内2区	水洗選別	3層	不明	
骨65	石室内1区	水洗選別	上床直上	不明	
骨66	石室内4区	水洗選別	上床直上	不明	
骨67	石室内1区	水洗選別	3層 20cm～	不明	
骨68	石室内2区	水洗選別	3層 20cm	不明	
骨69	石室内4区	水洗選別	3層 10cm	不明	
骨70	石室内4区	水洗選別	3層 10cm～	不明	
骨71	石室内2区	水洗選別	3層 20cm～	不明	
骨72	石室内4区	水洗選別	3層 10cm～	不明	
骨73	石室内1区	水洗選別	3層 20cm～	不明	
骨74	石室内4区	水洗選別	4層(上床礫間隙)	不明	焼けている
骨75	石室内2区	水洗選別	上床直上	不明	
骨76	石室内1区	水洗選別	3層 20cm～	不明	
骨77	石室内1区	水洗選別	4層(上床礫間隙)	不明	
歯1	石室内2区	T1	3層	下左 P2	頬舌径 8.9
歯2	石室内1区	T2	3層	不明	
歯3	石室内2区	T3		不明(ヒトの歯の破片)	
歯4	石室内2区	T4		上右 M2?	ある程度すり減りが進んだもの(モルナーの3)
歯5	石室内2区	T5	4層(上床礫間隙)	下右 P1 か P2	頬舌径 7.3
歯6	石室内2区	T	3層	不明(ヒトの歯の破片)	
歯7	石室内1区	水洗選別	3層 20～30cm	下右 P2 下左 M3?	すり減り少ない。 P2:近遠心径7.1、頬舌径:8.5
歯8	石室内2区	水洗選別	3層	上右 I2	すり減り少ない。 近遠心径6.8、頬舌径6.5
歯9	石室内2区	水洗選別	3層トレンチ	不明(ヒトの歯の破片)	
歯10	石室内1区	水洗選別	上床直上	不明(ヒトの歯の破片)	
歯11	石室内1区	水洗選別	上床直上	不明(ヒトの歯の破片)	
歯12	石室内2区	水洗選別	上床直上	不明(ヒトの歯の破片)	
歯13	石室内5区	水洗選別	3層	小型のネズミの臼歯	
歯14	石室内2区	骨クリーニング		下右 M2	ある程度すり減りが進んだもの(モルナーの3)。遠心歯頸部に齧痕あり。頬舌径 11.3
歯15	石室内1区	水洗選別	3層 20cm～	下右? 大白歯の一部	すり減り少ない
歯16	石室内2区	水洗選別	4層(上床礫間隙)	不明(ヒトの歯の破片)	
歯17	石室内2区	水洗選別	4層(上床礫間隙)	不明(ヒトの歯の破片)	
歯18	石室内2区	水洗選別	4層(上床礫間隙)	不明(ヒトの歯の破片)	
歯19	石室内4区	水洗選別	上床直上	不明(ヒトの歯の破片)	
歯20	石室内2区	水洗選別	3層 10cm	不明(ヒトの歯の破片)	
歯21	石室内3区	水洗選別	上床直上	不明(ヒトの歯の破片)	
歯22	石室内2区	水洗選別	上床直上	不明(ヒトの歯の破片)	
歯23	石室内2区	水洗選別	3層 10cm～	不明(上顎 M1 遠心舌側咬頭?)	
歯24	石室内1区	水洗選別	4層(上床礫間隙)	不明	



遺跡全景（東から）



2010年度 調査区全景（東から）



SB03 土器埋設炉 (北東から)



SK25 遺物出土状況 (北から)



SK38 遺物出土状況 (北から)



SM01 全景 (西から)



SB02 完掘 (西から)



SB04 完掘 (南から)



SB08 カマド (南西から)



SB16 完掘 (南西から)



中央低地部 全景 (東から)



SB11 焼土・炭化材出土状況 (東から)



SB11 完掘 (南から)



SB11 炭化アズキ類出土状況 (南東から)



ST01 全景 (西から)



ST01 礎石 P9 十字線刻



ST02 全景 (西から)



ST02 全景 (北から)



SK04 人骨出土状況 (南東から)



SK16 人骨出土状況 (東から)



SK85 人骨出土状況 (南から)



SK31・32 蔵骨器出土状況 (南から)



SK31 蔵骨器出土状況 (南西から)



SK32 蔵骨器出土状況 (南から)



SK17 火葬骨出土状況 (南から)



SK103 石敷 (南東から)



南尾根北斜面部 テラス群全景（北西から）



テラス7 五輪塔・露出土状況（北から）



テラス7 石敷と五輪塔 (西から)



テラス7 地輪西面 (西から)



テラス7 地輪東・南面 (南東から)



テラス7 石敷区画石列とSK466 (西から)



テラス7 釘隠し出土状況 (南東から)



テラス7 西端部 骨No.1・2 出土状況 (北から)



テラス4 五輪塔・露出土状況 (北西から)



テラス6 五輪塔・露出土状況 (北西から)



中央低地部とNR01 (西から)



NR01 斗束出土状況 (南から)



NR01 木簡出土状況 (南から)



NR01 人形出土状況 (北から)



NR01 塗箸出土状況 (北から)



NR01 杭列 (北西から)



ST04P1 柱・礎板出土状況 (東から)



SF04 炭化オオムギ出土状況 (南東から)

SB03



SK25



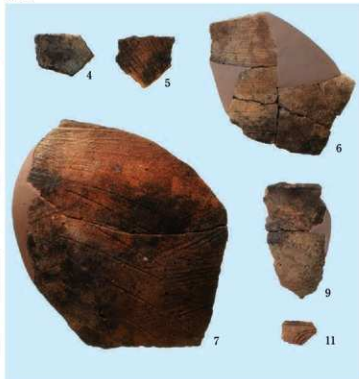
SK38



SK21



SK25



遺構外



49



51



46

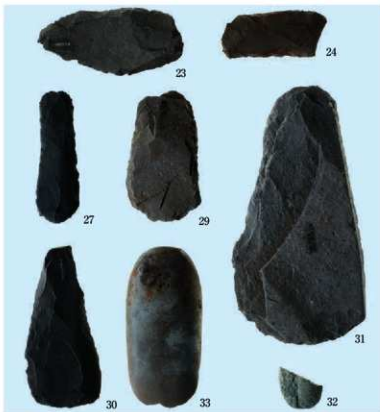
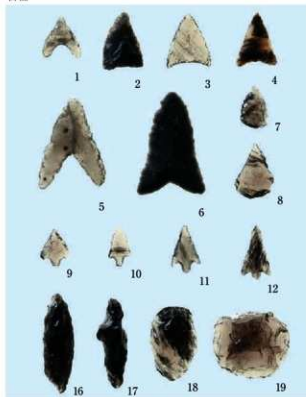


縄文~弥生時代前期土器(2)

SM01



石器



弥生時代後期土器、石器

SB02



2

SB04



14

SB04



10



9



15

SB05



17



SB06



25



24



18



20

SB09



42

SB08



35



41

SB10



44



40



45



51

SB12



52



53

NR01



88

遺構外

SB19



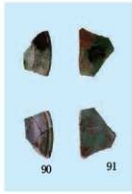
74



73



89



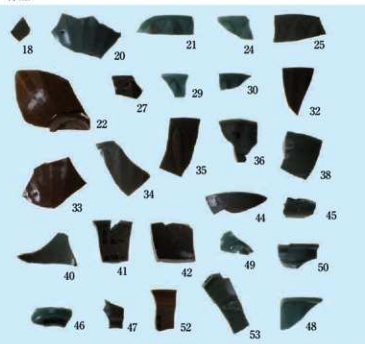
90

91

白磁、青白磁、天目、褐釉



青磁



美濃須衛



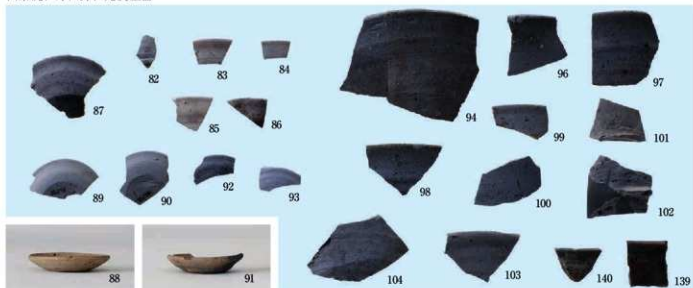
古瀬戸



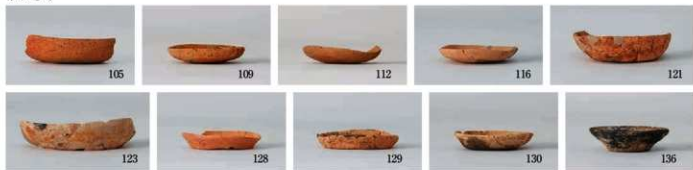
常滑、珠洲



山茶碗、片口鉢、瓦質土器



かわらけ



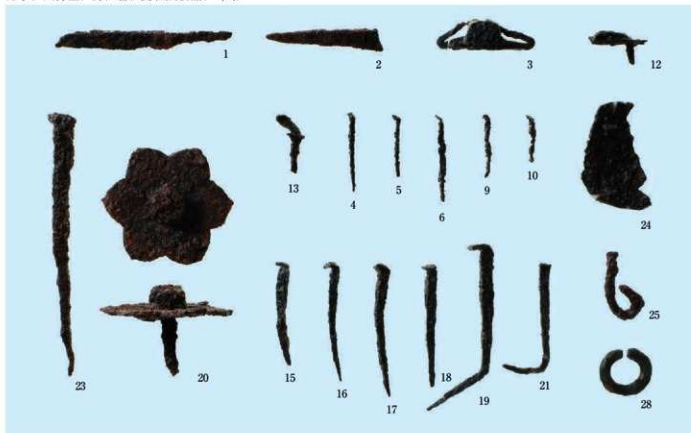
砥石、硯、石鍋、火打石、ガラス小玉



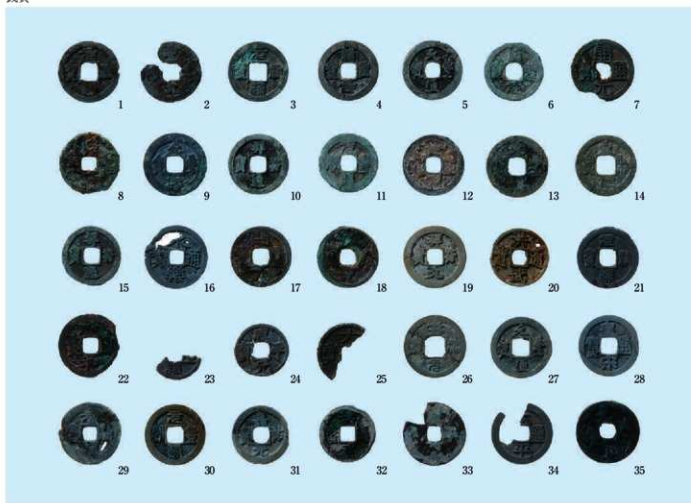
中世陶磁器・土器、石器、石製品、ガラス小玉

PL14 地家遺跡

刀子、火打金、釘、簪、鉤狀鐵製品、耳環



錢貨



鉄製品・錢貨



木製品 (1)



木製品 (2)



木製品 (3)

板碑



宝篋印塔



板碑、宝篋印塔

空風輪



火輪

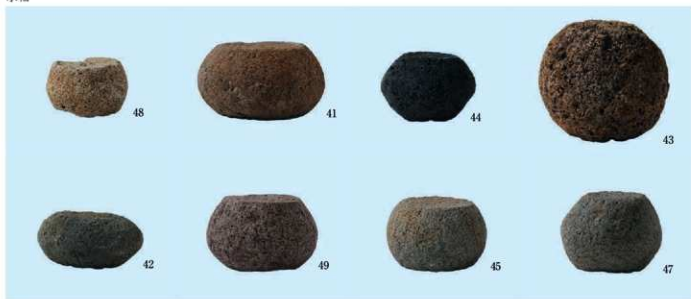


五輪塔 (1)

火輪



水輪



地輪





兜山遺跡 全景（西から）



兜山遺跡 13・14トレンチ掘削状況（北から）



兜山古墳 発見状況（東から）



兜山古墳 石室全景（女室床上部）（南から）



兜山古墳 石室全景(玄室床下部)(南から)



兜山古墳 玄室奥壁(南から)



兜山古墳 石室左側壁(東から)



兜山古墳 玄室右側壁(西から)



兜山古墳 石室楣石(南から)



兜山古墳 玄室右側壁体外面(東から)



兜山古墳 石室裏込め(南東から)



兜山古墳 石室裏込め断面(北から)



兜山古墳 石室壁体第1段と掘方(南から)



兜山古墳 玄室4区 鉄鎌(2)出土状況(南西から)

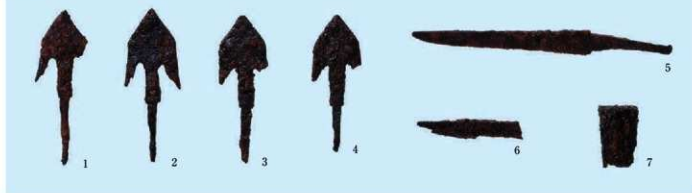


兜山古墳 玄室1・2区 平安時代遺物出土状況(南から)



兜山古墳 玄室1区 骨1～5出土状況(南東から)

鉄製品



平安時代 土器



兜山古墳 出土遺物



ST01 完掘 (南西から)



SK37 完掘 (東から)



SK43 完掘 (北東から)



SK44・47 完掘 (北東から)



SK07 完掘 (北から)



SK56 完掘 (南西から)



SK65 完掘 (南西から)



SK68 完掘 (南西から)



1区 南西壁断面 (SD01部分) (北東から)



出土石器



出土土器



前の久保遺跡 遠景 (北西から)



前の久保遺跡 1・3区 全景 (南西から)



前の久保遺跡 1区 全景 (東から)



前の久保遺跡 SB01 完掘 (南から)



前の久保遺跡 SB01 南西部遺物出土状況 (南から)



前の久保遺跡 SB01 遺物出土状況全景 (南から)



前の久保遺跡 SB01 遺物出土状況 (南から)



前の久保遺跡 出土遺物



前の久保遺跡 出土遺物



三枚平B遺跡 2009年度調査地 (南西から)



三枚平B遺跡 2011年度調査地 (南西から)



三枚平B遺跡 1T断面 (柱状図⑦) (南西から)



三枚平B遺跡 4T掘削状況 (南から)

報告書抄録

ふりがな	けいせいせき	かふとやまいせき	かふとやまこふん	おおさわやしきいせき	まえのくはいせき	さんまいびらびーいせき			
書名	地家遺跡 兜山遺跡 兜山古墳 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 三枚平B遺跡								
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8 - 佐久市 8 -								
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	123								
著者名	平林 彰、岡村秀雄、綿田弘次、数田 明、水澤教子、若林 卓								
編集機関	一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター								
所在地	〒388-8007 長野県長野市藤ノ井布施高田963-4 TEL.026-293-5926								
発行年月日	2020年3月19日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
地家遺跡	長野県佐久市大沢	20217	480	36° 12' 45"	138° 32' 35"	2009.04.13 ~ 2009.12.21 2010.04.05 ~ 2010.12.24 2011.11.07 ~ 2011.11.22 2013.11.20 ~ 2013.11.20 2014.07.07 ~ 2014.07.31	6,300 10,472 28 170 80	中部横断 自動車道 建設に伴 う記録保 存調査	
兜山遺跡	長野県佐久市大沢		481	36° 12' 33"	138° 32' 28"	2008.11.10 ~ 2008.12.16 (確認調査)	4,000		
兜山古墳	長野県佐久市大沢		1163	36° 12' 33"	138° 32' 28"	2011.10.04 ~ 2011.11.21 2012.05.15 ~ 2012.08.28	340 30		
大沢屋敷遺跡	長野県佐久市大沢		483	36° 12' 27"	138° 32' 21"	2011.09.12 ~ 2011.11.28 2012.08.28 ~ 2012.09.21 2013.11.07 ~ 2013.11.15 2014.04.09 ~ 2014.11.25	1,880 582 100 2,218		
前の久保遺跡	長野県佐久市大沢		523	36° 12' 16"	138° 32' 08"	2008.11.25 ~ 2008.12.16 (確認調査) 2011.04.05 ~ 2011.07.27 2012.11.01 ~ 2012.11.06	3,000 5,910 530		
三枚平B遺跡	長野県佐久市大沢		525	36° 12' 11"	138° 32' 01"	2009.07.13 ~ 2009.08.11 2011.07.12 ~ 2011.08.26 (確認調査)	900 900		
所収遺跡名	種別		主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
地家遺跡	集落跡、寺院跡、墓跡		縄文中期 弥生前・後期 古代 中世	縄文：中期竪穴建物跡1、弥生：前期土坑3・後期方形周溝墓1、古代：竪穴建物跡15、中世：能柱建物跡1、礎石建物跡1、竪穴建物跡1、土葬墓、火葬墓、自然流路跡		縄文：早期～後期土器、弥生：前期・後期土器・石器、古代：土器、土製品、金属製品、中世：陶磁器・土器、石製品、金属製品、木製品（「宗教・祭祀・呪術」、「建築・職能」、「生活用具」）、石造物（板碑、宝篋印塔、五輪塔）、人骨、種実			13世紀前半～15世紀の仏堂ほかの中世建物群、周囲斜面部の墓跡と石造物、蔵骨器、自然流路跡出土の多量の木製品は、中世寺院周辺の多様な土地利用と諸活動を物語る
兜山遺跡	散布地	縄文早・後期	なし		縄文早期・後期土器、石器				
兜山古墳	古墳	古墳終末期	小型の横穴式石室を内部主体とする終末期古墳		重挟りを持つ平根輪状五角形甕、刀子、古代土器		7世紀後半の築造。平安時代以降に2回石室再利用埋葬		
大沢屋敷遺跡	集落跡	縄文後期	円形土坑列1、土坑35、自然流路跡		縄文早期～後期土器、石器		縄文後期前半の低地型貯蔵穴群の可能性		
前の久保遺跡	集落跡	古墳前期	古墳前期前葉竪穴建物跡1、溝跡1、土坑16		縄文中期土器、古墳前期前葉土器		古墳時代前期前葉の分散居住型の集落跡		
三枚平B遺跡	散布地	縄文、古代	なし		縄文中期土器、古代土器（甲斐型壺）、中世磁器		昭和初期に掘削し燐を造成		

令和2（2020）年3月19日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 123

**地家遺跡 兜山遺跡 兜山古墳
大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 三枚平B遺跡**

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8

一佐久市内 8—

発行者 国土交通省 関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 葛友印刷株式会社
長野県長野市平林一丁目 34-43
Tel 026-243-2351 Fax 026-251-0001